
灰色のバックソード

Hegira

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰色のバックソード

【Nコード】

N1507J

【作者名】

H e g g i r a

【あらすじ】

（二十万文字突破。ニヤー）高校二年となつて少し経つたある日、ある個人的な理由？でナイフを持つ四手統那は、どこかで聞いたような特徴を持つ『彼女』と出会い、今まで知らなかった世界を知ることになった。それは圧倒的に『色』のない世界でどこまでも二番煎じな学園ファンタジー、現在第七章終了。なにやら前書きやら後書きやら落書きやらわからんもんと一緒にどうぞ。

序章モノローグ

新学期。四月の始め。

高校二年生になって一週間、僕こと四手統那はおよそ平凡と言って差し支えないであろう平穏な生活を送っていた。

家は母方の祖父母の代からある、築四十年の一戸建て。家族構成。

変な名前の典型的な企業戦士で、普段は朝早く、夜遅い父と、自分で褒めるとなんか言われそうだけど、凛々しい容姿ながらも、やさしい雰囲気を持った専業主婦の母、あと、今年から中学生になる義理の妹……じゃなく、家族で面倒を見ている小動物のような居候の四人暮らしだ。

立地の良いこちらは両親に譲って、じいちゃんばあちゃんは僕が小学生のときに田舎に隠居した。

成績。

あまり言いたくないな……。

中学からそこそこのこというか、中のちよつと上をキープ。これは単に赤点を回避するのをいつも目標にしていたからだ。

クラスでの人間関係。

……ここに言う他にも普段から雑談する人はいるけど、特に話す友人をここで挙げておく。

一年からのクラスメイトである麻倉打葉、小学校からの腐れ縁の不知火筑紫、その二人などがよく話す友達だ（前者が男で後者は女）。今の所、特に誰と上手くつき合えない、そりが合わない、ということはない。

むしろ、ここでは彼女という存在は生まれてこの方いたことがないってことの方がむしろ大事だろうか？ まあ、この辺は前の席に座っている獅子島朱夏なんかきつととつくに彼氏持ちなんだろうな、と勝手に妄想することぐらいしか僕にはできない。

そんな風に僕という人間は、適当に周りに合わせて、なんとなく周りに流される。そういう生活を繰り返してきた訳で。

他人と違うところはあったけど。

でもそれは個性と言えるだろう。

そんな事で、日常は揺らがない。

信じてないが、そう思っていた。

そう、あの頃の僕は他人と違うところはあるけれども、それは些細なものであって、そんなもの、平穏な人生の道から逸れるものではないと、思っていた。

信じてはいなかったけれど。

そして、その日、

僕は至って普通に帰宅しようとしていた。

明日は何をしようか、あの授業は先生が厳しいから眠れないな、春休みにゲームをほとんど消化してしまった、そういうばマンガの新刊を買っていなかった。

夕方にさしかかるにはちょっと早い時刻、僕はその内のどれだったかとも思い出せないようなことで呆然と歩いていた。

その時、

その瞬間に、

日常が、当たり前だと思いついていた日常が、鮮やかに、あまりにも無機質に塗り変えられた。

いや、

塗り潰された。と、言うべきか。

白黒コンフュージョン

跡路市に住む高校生、まあ、僕こと四手統那は授業を終え、いつも通りに帰ろうと、大通りをのんきに歩いていた。そのわずかな時間に、命を失いつつあるとも知らずに。

突然、周囲から、人が消えた。

街道沿い、両脇に雑多な店が並ぶ、大通り。

決して人の絶えることのないここで、夕方にさしかかり帰宅をする人がそれなりに増えるのに、まるで人気がない。

そんな、命の見えない灰色の風景の中で僕は当然、

「え……」

と、そんな言葉しか出せなかった。

ゆっくりと、周囲を見回す。

やはり、大通りの片側、そしてそれと交差する路線の駅、その高架下で僕だけが、建物と樹木とそのほかの動かないもので埋め尽くされた世界に存在していた。

もちろん、訳が分からない。

「……………?」

しばらくして改めて、というか今更に、奇妙なことに気付いた。

僕の周りの物すべてが 地面、建物、街路樹、先ほどまで青の中に白を浮かべていた空に至るまですべてが 『色』を失っていた。

白黒の、無機質な、何も動かない世界。

もちろん、そんなものは、いつか、戦災にみまわれた場所の喩えでしか聞いたことがない世界だった。

そんなようにして呆然として、また遅れた発見をした。

「あれ……？」

僕は自分の違和感に気づいて、左手で目を片方、覆ってみた。当然暗かった。

それがまるで、当然のように、真っ暗だった。

だけれど。

何だ、これは。

僕は、なんだ。

とても、怖い。

「……誰か、」

そして、全く言語の通じない場所に飛ばされたみたいに困惑して他の存在を求める僕の前に、突然。

「お……？ お前は……」

いつの間にか人影　これは色を失ってはいない、むしろ……
が現れていた。

そのとき、僕はあまりの非現実にとらわれていて、その事を認識したときには、十分に異物感を含んだそいつの接近を許してしまっていた。

逃げようと思えば逃げられたはずなのに。

その人影　体型からして男だろうと推測できる　は近づいてきてまじまじと僕の全身を見定めるように視線でねめまわし（僕には見られて悦ぶ趣味は無い）、大声を発した。

「おおおおつ！ お前、この中で動けるのか！？」

その稚気に満ちた喋り方をする声は飢えているみたいに枯れていて、渴いていた。

男はその渴きに反して二十代後半に見え、何故か上半身は裸だった。なんてワイルドだ。

また、下の格好から察するに、土木関係の仕事をしていそうに見える。ますますワイルドだった。

ただ、汚れたズボンだけがそうと、言えるだけで、他は、髪といい、肌の荒れようといい、手入れのまるで行き届いていない、野生児と言うにもあまりにお粗末な格好だった。

ただ、裸の上半身に骨張った部分は見られない。筋骨隆々とまではいかないが、漲っている何かは感じられる。

だけど僕にとって何より不思議だったのは、その格好ではなかった。

その男の周辺にだけ、灯りみたいな輝きを放つ、しかしどれだけ見ても眩しくない光……いや、少し違う　色、が見えた。

「黄……いや、狐色？」

遠目では放つ光みたいなものもあって、最初黄色だと思ったが、よく見れば、きつねうどんとかそばでよく見る、お揚げのそれだった。

男は僕の言葉に首を傾げたが、あまり気にしたようでもなく、自分の話を持ち出してきた。

僕の言葉なんて初めから聞いていない。

話すときに僕の目を見ていない。

こつちが男から視線を反らせないのにこの男は余裕でそれをやってのけた。

僕よりシャイ……な訳ではないのであるということとは当然分かる。

単に、この状況に対する緊張感の違いなのだと思った。

男は経験があり、僕は自分のことで手一杯だった。その違い。

そんな僕は情けないことに、

「んんーん？　何の事だ？　……まあいいよな、どうでも。……さて、あいつは撒けたみたいだな」

情けないことに、先程から打ち寄せてくる男の異様な雰囲気

見た目ではない黒さ、暗さ　に、ビビってしまった動けなかった。

男が周りに目を向けた。

いきなりだった。

さらなる怖気が僕を襲った。

何かこれからよくないことが起こる。

男が醸し出しているのは、そんな暗さだった。

僕が何も言わずにいるのは、不意に男が横に目を向けた。そこに大通りを歩く人の姿が現れた。こちらも『独特』な色を、薄く光らせている。男ほど、強くは無い。淡い色だった。

おそらく、大多数の人と同じく駅へ向かうのだろうと、地元民の僕は非現実な光景の中で、真つ当な、間抜けな予想をしていた。

だから、男の行動は僕にとって、『予想外』だった。

『不可解』ではなかったが。

……それこそ不可解だったのだけれど。

「さーて、じっくり頂きますか」

そして男はその頭を掴み、

余りにも呆気なく無情に、

唐突に確実にゆっくりと、

手を根っこにするように、

栄養を吸うみたいにして、

その人の『色』を抜いた。

僕はそれを見てしまった。

何を、でも何が、でもなく、見た。

見たその時から、逃げることは許されなくなったのだろう。

「あ……」

思わず、そんな声が漏れていた。

ぎらり、と男の視線が僕に向けられた。

「う、う……」

「さて、その反応だと、どうやら殺さねえといけないようだな」

言つなり、男はその存在感　圧力を、こちらに向け、突進してきた。

その動きに、僕はその男が『人間と同じ人間』だとは、とても思えなかった。

「うわあああああ！」
今更な叫びを上げる僕。

本能的な恐怖からか、左手でブレザーの腹の辺りをひつつかんだが、それだけだった。

最初は、そんなものだった。

「それじゃあ、イタダキマースつとお！」

そのまま、なにやら不気味な光を持った、黒を鈍く光らせる手で、恐らく何人も人間を殺めてきたような、慣れた感覚で僕の胸を鋭く穿った。

「……うつつ！ かはっ！」

左手で信じられない痛みの信号を送ってくる胸を痛みごと押さえつけて、僕は生にしがみつく。生を離すまいとしめつける。

だが実際には、それ以上のことは何も出来ず、ただ仰向け、苦しそうに呻いて倒れていただけだった。

その後、僕に多大な影響をもたらす『彼女』が現れたのは、まさにそんなとき、だった。

呆気ない様を見せている僕の目に、不思議な光景が飛び込んでくる。

それは僕の後ろ　今は倒れているので上と言つべきかもしれない　からこちらに向かつて、見たことのない速さで走り、僕を通り過ぎてから、そのあり得ない速度を一步で止めた。

そして、それを見た。

僕と同年代の少女だった。

ブレザーの制服に包まれた肢体は平均より高い僕をして十分に小柄、だが、そのものの持つ、意志、というか信念というか　正義というか　その強さが、迫力が、見た目の可憐さよりも先だって周囲に畏怖の念を抱かせる。

『普段』は後ろで束ねられているしなやかで漆塗りのように黒い艶のある髪は今、解かれて腰まで線を流し、その線を紅蓮と橙、双方の加減が炎の揺らめく様そのままにたゆたう。

まるで、闇を遍く照らし煌めく、本物の炎をそこにだけ切り取り、映し出したようだった。

もちろん、彼女はこんな不思議な色合いの髪では無い、はずだ。

まるで知らない人に見えた。

ろくに知りもしないくせに。

授業の始終ずっと結ばれている唇は走ったためか、少しだけ開き、

その呼吸を助けている。

その口が、開かれた。

「許さない……！」

そこにいたのは、同じクラスの、前の席。

名前は、獅子島朱夏。

駅前フレーム（前書き）

前の2話が改されましたが、投稿した後に、ちょっと思うことがあったので、一字下げにさせてもらっただけです。ほとんど変わってありません。あ、この文頭下げない……。

さらに追記（2010/09/05）。

本格的に改稿（むしろ気分転換）しています。思いの外修正したくなる箇所が多くて早くも挫折気味ですが、読みやすいようにするつもりなのでどうかお付き合い下さい（まあ、ほとんどご新規さんだと思えますが）。

駅前フレイム

朱夏が普段と違う姿、いわゆる、炎みたいな髪　いくら二番煎じでもこれはひどいな……　で現れたことに驚いた僕だったが、対して僕を襲った男は朱夏を認めても、平然そのままの態度で対峙していた。

「おーおーよくこんなしつこく追いかけてくるなあ美少女ちゃん。惜しいのは大人の俺がロリコンじゃあないって所ぐらいだ」

男は上半身裸のまま、そんなことを口にした。

しかしただならぬ怒気　そんな感情、僕は今まで見たことがない　を発した朱夏は芯の通った声を出す。

僕は自分が胸に致命傷を負ったのもすっかり忘れて　後から思えばどつちでも構わなかったのだが、倒れたままその様子を見ていた。

「そんなことはどうでもいい！」

さらにその怒気に呼応して彼女から熱気が溢れた。

その、実在する気迫は僕にまで及ぶ。

いつしか、燃え盛る火を切り取ったようなその髪と同じ色の炎がどこからか現れ彼女に纏い、練り上げられていく。

「はあぁっ！」

手に集められた炎がさながら息吹となって男を包み込んだ。

その躊躇ためらいのない『殺せる』攻撃に、僕は場違いにも、止めようと身を起こしかけたが、間に合わない。

僕がそれを認識したときには男はもう、火の中だった。

無理だ……火だるまになって生きられるはずがない。

と、真つ当な人間であるつもりは僕はそう思っていた。

しかし、十数秒続いたその放射に晒され、過ぎ去り　しかし男は平然としていた。

「おいおい……いきなりとんでもねえことしてくれんじゃねえか」

そう言う男の前面は、黒く焦げた『ウロコ』のような物がびつしりと張り付いていて、拳動、言動によってぼろぼろと、ぱりぱりと表面から剥がれ落ちる。

そして、続ける。

「俺も暇つてわけじゃあねえんだ。ほんじゃま、そついつことで、帰らせてもらうぜ」

先程の朱夏に匹敵する速さで走り、跳躍。

垂直なはずのビルの壁をその両足だけで飛び登る。ついにその姿は建物の裏に隠れて見えなくなった。

朱夏はただ、焼け焦げた残りのかす……男がいた位置を見つめていた。

追わなかった。

それがどうしてなのかは僕には分からなかった。

……というか、誰か僕にこの状況を説明してほしい。

ああ……その前に、僕は胸のどこかを貫かれていたんだっけ……まずいな……死ぬのか？

「……………」

そんな風に朱夏を見ながら僕はぼんやりと意識が薄れ、なかつた。

世界は、相変わらずモノクロだった。

「いつまで寝っ転がってるの」

「……………えっ？ あれ？」

呼びかけられ、目を開けると朱夏が不遜な（という表現をする僕こそ不遜か？）態度で見下ろしていた。

その瞳は紅く、吸い込まれそうな炎の色だった。

いきなりパクリだよな……大丈夫かこの物語？

そんな心配をする僕に、朱夏が鼻を鳴らした。

「そのナイフじゃないの？」

あの男に挟られたあたりを確認すると、胸ポケットがさらけ出され、その中に確かに家から持ち出した刃渡り7センチのナイフが刃

こぼれ一つ無いまま、革製のベルトでグルグル巻きにされた鞆
さすがにこっちは裂けていたが　にくるまれていた。

……。
「でたらめな助かり方だ……」

どうやら、心臓の手前で盾になっていたらしい。

映画とかでよくある、形見の品が胸の前で銃弾を受け止めるシー
ンを思い出し、自分もその一人になったことになんだか普通に生き
ていないような気がして悲しくなった。

なんとか、命を繋いだらしい……。

人生二度目の命の危機を脱したことに（一度目は交通事故で車に
跳ねられたときだった。以来左折する車にはめいっばい気をつけて
いる）ほっとしていると、朱夏が周りを見て、また僕の方を向いた。
「あと、そろそろ元に戻るから変な目で見られないように気をつけ
てね」

「え……？」

聞き返したときには、すでに朱夏は何事もなかったように歩き出
していた。

すると今までの殺伐、静寂、くすんだ世界が、ぱっと嘘のように
元に戻った。

元通り、人がそれなりに通る、鮮やかな駅前の大通り。

希薄な人間関係しかない人の声より道路から唸る音の方が大きい、
いつもの風景。

……誰も気付いていないのか？

よくよく考えれば、今のことがあったのに、何のパニックも起き
ていない。それが僕の疑問に対する状況証拠だった。

だとしたら、何で僕がこんなことに。

その答えが、近くにいます。

「ま……待てよ！」

しかし、遠くではあったが聞こえていたはずの朱夏は、決して振
り返らなかった。

場違いに大きな声を出したことで、一時衆目を集めたが、そんなことに大して構ってはいられない。

僕はすぐに追いかけたのだが、一発目の曲がり角で振り切られ、初手からすっかり見失ってしまった。

……よくあるよな、こういうパターン。

「なん、だったん、だ……？」

獅子島朱夏のことも含めて、あまりに荒唐無稽なそれらの光景は、しかし僕にとって、すっかり、認めがたい現実となってしまった。

平和ルーティン

獅子島朱夏について、僕の知っていることはと言えば、クラスメイトで前の席、正義と言えるまでの道徳観念、他人との壁を必要以上に築いていること、少なくとも学校で分かることに関しては、本当にそれだけだった。

あとは

僕はあることがあった次の日、大胆に引きこもるわけにもいかず、学校で呼吸していた。

心臓も鼓動している。トイレにも行くし購買のパンも食べる。真面目に授業も受けている。

普段、色々と互いに面白そうだと思った事を話す、友人の麻倉打葉は、今日は欠席している。

あとは……、

「シデンのとーなん君、とーなん君とーなんくんとおーなあーんくうん。ほらほらその君だよナイフガイ」

「……僕はそんな変な名字じゃないし切れた異名も持っていない」

っていつか何でそんなストライクゾーンを選ぶ？

自他共に認める『つまらない人間』　少なくとも中学までは大半のイメージが悪く、近寄り難かったらしい僕　に話しかけてきたのは数少ない友達、不知火筑紫だった。

ちなみに、僕との会話は、ほとんどが　打葉とのそれが面白そうだと思っただことを互いに意見交換みたいにして話し合うのに対し僕達二人で面白くなるように掛け合いをするものだ。

まあ、それにしたって周りが面白いかどうかは全く保証できない
というか、むしろ何か謝罪とかで補償したくなる。

そういえば、今みたいな僕の妙な言葉遣いは全くの外連味けれんみであり、
伊達や恰好付け、はったり、見栄だったりするので、見苦しくても、
見逃してほしい。

「いや、偶然の書き損じ。そーして今日の遅刻にはダウンな言い訳
をもっているん？」

「書き損じでたまるか。……それにダウンってどっかの通貨みたい
だな」

いや、『ウ』がない通貨があるんだから当然か。

ちなみに、僕は今日遅刻してきたのだ。敢えて原因を語るとすれ
ば、校門前で例によって荷物検査があった。ほんのそれだけで僕は
遅刻魔の業を背負う事になる。

……なんてかっこいいことを言っても、ただの不真面目な生徒で
あることに変わりはないけど。

「んー？ シデン君元気ないね。キレが感じられないよ。いや、い
つものことか。じゃあ……ほら、頑張ったらスカートめくつてもい
いよ」

「のっけから人を変態に仕立て上げるな！」

僕はその程度の欲求も抑えられないようなやつとは違う！ 多少
はあるが！

……先が思いやられる。

「……え、そんなに見たいの？ えっと、今誘ったあたしも悪いん
だけど、そんな激しい突っ込みを入れられたらあたし困る」

じゃあどうしろって言うんだ。無視しろってか。

「公共の場でそんな振りをしたお前が悪いんだからな！」

「えっ、フリル？」

「そんな聞き間違えはない！ それにウチの制服にそんなのは付いていない！」

ちなみにこの学校の女子の制服はブレザーにプリーツスカート。普通の、というか地味の域だ。勿論男子の制服は殺伐としている。かつこよくもなく、かといって不満が出るデザインでもない。

「やだなあとーなん、そこは黙秘で行かなきゃ。盗聴している人がいたらこの会話って胸があるよ。夢ドキだよ？」

「夢と胸が入れ替わってる！ 何で盗聴犯悶えさせる必要があるんだ！？ そしてとーなん止める！ 僕は東アジアから一步も出たことではない！」

何で東南^{とーなん}って名前にしないといけないんだ。
というか自爆していた。

「とーなん、今のはさすがに腹に据えかねた。今から東南アジアに謝れ！」

透かさず揚げ足を取られた。

というか僕の名前を各人の判断で勝手に国際問題にするな。

「お前が謝れ！」

「四手統那がいつもご迷惑おかけしています！ すいませんでした完了！」

「ホントに謝った！ ってそんな言い方しても過去完了形にはなら

ないし意味が分からない！」

おととい来やがれってか？

「おっ、いつもの調子に戻ったね。じゃあ今からトナーと名乗りなさい」

「何色の！？」

僕はプリンターのインクなのか！？

「ペールオレンジ」

「そんなのあつたな……」

図工の時間に使った覚えがある。

確か文句を言われる時期の丁度だったから、最初は『はだいろ』って言ってたけど……。

と、そんな莫迦な会話をして、昼休みを過ごしていた。

さて、件の朱夏　やはり目と髪は打ち終えた刀のように黒かった　は僕の前の席でいつも通り、一人で孤高というか、周りを拒絶している（るように見え）て、前にいるせい（か顔を見られる（可能））ことも、まして見られる（受身（））ことも無かった。

その微妙な距離感のせいで、僕はついぞ朝のことは聞けず仕舞いだった。

一回だけすれ違うようなタイミングでこちらに視線を向けたような気もしたが、それだけで見られたと感じるのは自意識過剰もいところだろうと、それきり無闇な思考を打ち切った。

そしてそのまま何事もなく、当然の如く帰宅部の僕は学校から直帰した。

義理の妹……嘘。居候の飛びかかりをひらりと躲し、そのまま二階の自分の部屋へと駆け込んだ。

「今日は何もなかった、か……」

扉に鍵をかけ、そのまま背中を扉に押しつけるように座り込んで一段落。

遊びたい盛りらしいもう……居候の気配が遠ざかったことを確認し、ようやく着替えることが出来た。

そして、普通のスタンド（普通でないスタンドなんて知らないが）以外何も乗っていない机の上に、ブレザーに納めていたナイフをズボンのポケットに入れ直し、引き出しに仕舞っていたゲームを取り出してベッドに寝転がって遊んでいたときだった。

窓が鈍い音を二回鳴らした……という表現は当前、いや当然ながら不適切で、外で誰かが窓を叩いていた。

……確かに僕の部屋の外にはベランダがあつてそこに立つことは出来るんだけど、

僕は、寝ながら息を吸い、

「どっから入った!？」

飛び跳ね起きた。

跳ね起きるの上級。

「……………」

黙って僕を見ていた。

そこには、獅子島朱夏がいた。

僕は一旦、精神を落ち着ける。

「びつくりするなあ……………」

僕が気づいたのを確認すると、再び窓を叩いた。

その表情は、少なくとも笑顔ではなく、さらに言えば友好的でもなかった。

「まあ、当たり前と言えば、当たり前か……………」

相当、時間があつたからな……………。

打葉、または筑紫とのペアでやっているモンハンをスリープさせて、僕はベランダの窓を開けた。

「ふーん、片付いているんだ」

単に『思い出』と呼べるものを全て捨てるなり売るなりしてしまっただけで、物が極端に無いだけなのだが。

「え、っと……………どうして」

どうして、二階のベランダにたどり着いたのか、どうして、二階に来たのか、それぞれを聞こうとしたところで、

「おにい、隙ありー！　って……………」

い……………そうろう（無理矢理に言い直す僕）、の桐きりな片かた那ながノックしながら入ってきた。

「あ……………」

「おにい……………」

「……………」

信じられないかもしれないが、僕はこの時三通りのこの状況を切り抜ける手段を考えていた。

……………案外普通か。

だが、それを実行する時間が無かった。

「あのな片那、これはだな……………」

「おお　　かぁーさん！」

気づいたときにはドップラー効果が出るほどのダツシユで『お』の発音が引き伸ばされていた。

一軒家イラストレーション(前書き)

イラストレーション 噴火(eruption)

……ひねた作者ですいません。

一軒家イラプション

勝手な侵入者、片那に逃げられて僕と朱夏は取り残された。

「どうすんだ、この状況……」

「おにいつて……ぷっ」

「そこか!？」

「だって子供っぽい……っ」

確かに恥ずかしい呼び名ではあるが！

……恥ずかしい。

「とうくん！二人で降りて来なさい！」

階下から母親の声が響いた。しかも追爆してきた。

「はいはい分かったから今降りるから！」

「とうくん……ぷっ」

「笑うな！」

やりにくい。

何故か、母親・せせらぎは朱夏をにこにこ顔で僕たちを いや
朱夏を、迎えた。僕のことには気に留めていない。

「折角うちに来ていたのに大したおもてなしも出来なくてごめんな
さいねえ」

と言いつつほづじ茶から賞味期限が当日の大福まできっちり用意しているのは僕にとって神業としか思えなかった。
片那は母さんの隣に座って幸せそうに大福を頬張っている。
ということは、僕と朱夏がテーブルの一端を二人占めしていて、

「……………」

いつもの空間に別人がいるだけで僕はなんだか変な居心地だった。
……やっぱりやづらい。

「別に……そんな気にしなくてもいいです」

これまた何故か、朱夏はやりにくそうだった。

僕の頭に残らないような内容の雑談の中、

「それにしても……もうそんな年頃なのね」

そんなお決まりの台詞を言った僕の母。

……母さんは、何かを誤解していた。

「いや、違……………」

僕の弁解が展開されようとしたところで母さんは部屋の時計を見た。

「ああ、そうね、時間も丁度良いし、今日はうちで夕食、食べてい

きなさいな」

まだ五時にもなっていないけど、きつと何か思惑　それも僕にとつて、よからぬ種類の思惑があるのだろう。

全くの誤解だった。

「いや、家でもう人数分のが用意されていると思うので、折角ですけど……」

「うーん、残念ね」

朱夏は冷静で、丁重だった。

……らしくもない。

さっきはやりづらかったが、これはそれよりも、なんとというか出過ぎた真似というか……いや、そんな資格はないだろう。

と、そんな僕の心情はさておき、しばらく雑談をして過ごしていると、おもむろに母さんは立ち上がり、片那と二人で僕と朱夏を元いた場所へと押し出し始めた。

「さあさあ後は若いお二人で」

「だから何でそうなって……」

「おふたりでー」

「良い子はそんなこと言わない！」

「……………」

朱夏、もう少し何か否定の言葉を喋ってくれ！

あまりの、物理的でない勢いに僕は大した抵抗も出来ず、階段にぶつかるわけにもいかないので押されるがままに上っていった。

ちなみに僕は片那に押され、朱夏は母さんに押されていた。

それで、再び僕の部屋に戻ってきた訳なのだが……、

「えー、と……」

「……………」

「気まずい！」

何が気まずいって、家族の二人にこの状況を認知されている中で
同年代の女子を自分の部屋に入れているのが気まずい！

「今日はいい天気だな」

「そうだね」

あれ！？ あの万能の切り出しで行ったのに、晴れだったのに終了した！？ …… ああ、僕が続けないせいだった。しかも午後にさしかかって今更感のある話題だったことに気づいた。

床に座して向かい合う僕と朱夏。

一方的に仕組まれたお見合いみたいな光景……か？ もちろん僕は実際にやったことないから想像がつかないけれど、朱夏から拒絶の雰囲気を感じ取れる。気がする。

「……………」

「……………」

…………… もしや今のは話題選択を間違ったのか！？

新たに僕が話題を（具体的には『綺麗だけど化粧でもしてんの？』的な事を）持ち出そうとしていたところに被せるようにして朱夏が口を開いた。

「ずいぶんときれ」

「今日私がここに来たのは …… って何か言った？」

「い、いや……焦るほどの事じゃない」

焦ってるのは僕だった。何だこの浮ついたふわふわは。そんな哀れな僕の弁解を汲んでくれたのか無視したのか、朱夏は続けた。

「……今日来たのは、昨日の事があったから、っていうのは分かってる？」

「あ、ああ。勿論。僕にはその程度の事お見落としさ」
「……………」

お見通し、の言い間違いは通用しなかったようで、しかも、案外ズバリ、僕の状態そのものだった。

やはり、僕はボケに向いていないのだろうか……。
ストレス溜まりそうだな……。ああ、今の内に発散する方法でも考えておくべきなのかな……。

それより、今はこっちの話だよな。

「とにかく、そういう話なら、ちょっと待っててくれ」
「？」

小首を傾げる朱夏を尻目に僕は扉を開けた。
気圧の変化で窓が鳴るのが聞こえる。

「やっぱり……………」

「や、やっぴー、おにい」

そこにいた我が愛すべきホイコーロー…………いや、居候（僕は馬鹿か？）を見て、思わず溜め息が出る。

「帰れ、自分の部屋に」
「しゅん……」

罪悪感に責められながらも僕は年長者の厳しさでもって片那という張り込みを排除した。

しかも『しゅん……』って。自分で言うやつ初めて見たぞ。さらにその前の『やつぴー』。挨拶じゃないだろ、それ。

ドアを閉め、元の場所に戻ろうと振り返る。

「全く……プライバシーに関してあいつはホントに油断ならぬ……」

話す言葉もそうだが一体どういった理由でこういう事が出来るのか。全く遺憾だ

「……あつ!？」

と、どうしてこうなのか、僕はたまに何も無いところでこける程度にはドジらしく(小学校の一時期、筑紫に『どじっこだ』どじっこだとうな)といじめ……なじられたものだ)、それがこのタイミングで起こった。

さらに悪いことに、一歩、二歩とよろけながらとある距離を稼いでしまった。

朱夏までの距離。

物理的、彼我の差。

既に僕の角度は四十五度を突破していた。超前傾姿勢。縮地は……出来そうもない。

いや、そんなことより。これはやばい……世に言う『押した押す』

……というヤヴァンな状況ではなかるうか。
だとしたら、僕は有象無象の　犬というレッテルをこの朱夏サ
ンにはつつけられるのか。

いやだ！　僕の輝かしい過去が穢れる！　現在も、未来も！　…
全部じゃないか！

しかし、そんな僕の間抜けな予測は杞憂に終わった。

こちらに向いた朱夏の目が見開かれ、その凜とした目に僕は不覚
にも気を取られたが、それも一瞬。

「……！」

朱夏はそのまま僕の胸ぐらを掴んで、勢いを後ろに流し、

「え、うわっ！」

片足を僕の下腹部に当てて、軽やかに丸く、後転した。

「ていつ！」

「うがふっ！？」

結果、巴投げした朱夏と、巴投げされた僕の出来上がり。

押入れの戸にぶつかった踵かかとが妙に、絶妙に痛い。

「いきなり何するの？　びっくりした……」

「僕の方がびっくりしたんだけど……」

なんて奴だ獅子島朱夏。僕が名付け親だったら大河たいがと名付けてい
るところだ。……究極のネコ科生物かよ。

と、仰向けになっっている僕が上の方……つまり朱夏の足下の方の
向こうを見ると、ドアが開いていた。

その陰から覗く頭が二つ。

何のことはない、母さんと居候、せせらぎと片那だった。

「あらあら、とうくん楽しそうね」

「おにい、かつこわるい……」

大人の解釈と子供の解釈の二つ。

僕を観測した結果は絶対に一つ、ではないらしい。

「それじゃあかたちちゃん、邪魔しちゃ悪いから私達は下に降りてましようね」

「じゃあねー、おにい」

それだけ言つて、ドアを閉められた。

「え、待つ……」

僕は誤解を解かないといけないのにそこで立ち去られるのか！？
そうは問屋が卸さないぜ！

だが、朱夏がしゃがんできて手のひらで僕の口を塞いだ。

「……むがつ！？」

……柔らかい、というかあつたかい。それに何だこの香りは。噂のラベンダーだろうか。

不幸にもアロマの何たるかを知らない僕に、これは永久の謎としてのしかかることになった。

そもそもこの手はどういう意図で。まさか……、

「しつ。他人に聞かれないならその方が都合がいいから」

「……………」

……僕は何か変な思考を働かせていたらしい。
かなり反省。つまり、猛省。

そうでないと真面目に事を考えている朱夏に失礼な気がしたのだ。
僕なりに。

足音が遠ざかると朱夏の手があっさり口から離れた。

……ぜ、全然惜しくないぞ？ 本当だ。だって無実だろう？

僕は起き上がって、そのまま腰を据え、気持ちを切り替え……て、
朱夏の話を書くことにした。

初更グラフィティ（前書き）

固有名詞説明の回。

初更グラフィティ

「じゃあ何から聞けば……、そうだ、あの白黒な世界は何だったんだ？」

ようやくというか、本題に入ることが出来た。

朱夏は僕の質問に淀み無く答えた。

そのことが朱夏の断絶というか逸脱というか、違いを感じさせられる。

「あの『場』は？封陣ふうじん？と言って、『昨日みたいな奴ら』が普通ではない悪さをするときに出す、『結界のようなもの』だと私は思ってる」

結界……要するに、秘密の世界、ってところか？

……世の中つてのは便利なもんだ。こんなに簡単に隠し事がまかり通るんだから。

そこから僕は、必要な知識を出来るだけ得ようと、細かく質問することにした。

ただ、会話をしながら質問を考えるために、どうしても僕の言葉は対照的に淀んだ。

「やっぱり、その封陣……に現れない、普通の人には、その……何が起こっているのか分からないのか？」

僕のその淀みは、無性に朱夏との差を感じさせられた。理不尽にも、自分で作った淀みなのに。

それで仕方ないと思いながらも、どこかでそれを否定したい自分がある。

「そうなるね。あいつは、私に来る前に何かしていた？」

言われて、僕はゆっくりと正確に思い出す。
確か……そうだ、

「通行人を『捕らえて』、色を抜いていた」

「『色を抜いていた』……？」

朱夏の目が据わった。

……ん？ その表現はまずかったのか？

「『何か白いもやのようなもの』を吸い取っていた、とかじゃなくて？」

白い霧のようなもの……？

確かにそこに白黒のフィルタをかければ、そう見えるのかもしれない。

「あ、ああ……おかしいのか？」

そう聞くと、朱夏は意外な返事をした。

「いや、私もそう見える……」

朱夏が帰った後、僕は、ベッドに寝転がってさっきまでの説明を反芻していた。

「軽い気持ちだったけど、これ、ちょっと情報量が多すぎるな……整理するか」

彼女、獅子島朱夏曰く

昨日、周囲から『僕達が外れた空間』は、？封陣？と言っらしい。

「まず、封陣、と……」

僕は試しに、下敷きの上に敷いた白紙に、ドーム、簡単な半球を書いてみた（その中に『封陣』の文字を書き込んだ）。その中で棒人間が諸手を挙げている。

……救いようのない、下手くそな絵だった。

「自分の首を絞めたかな……」

いや、他人に見せないからいいだろう。

僕はさっさと続きに取りかかった。

曰く、封陣は普通の人には認識されないらしい。そのうえ、封陣からは干渉される、とか。

描いた『封陣』の中で、点線で描かれた棒人間がわらわらとして
いる。外には、普通の棒人間がちらほらと。

「この点線の人間が、『向こう』からは自由にされるって事か……」

曰く、そんな世界を認識できた僕なんかは『普通ではない』存在、らしい。

「……………」

『封陣』の中に、『統那』と書いた名札を書いて、それを新たに書き入れた棒人間。それに、自分で気づいたある要素を混ぜている。に、くるっと一回転した線で結んだ。タグ付きの棒人間。

曰く、封陣で動ける存在を、一般に？色採しきさい？と呼ぶらしい。

タグ付きの棒人間、朱夏バージョンを作って、その輪郭に赤ボールペンで色を付け足す。

「これ……朱夏には見せられないな……………」

ちなみに、『一般に』という表現は、朱夏が『違う呼び方をする人もいるけど』と言っていたからで、それ以外の他意は全くない。

角柱を適当に作図して（極めてシステムティックなビルディングのつもりだ）、その一部を黒く塗りつぶす。しかしそれをまた消しゴムで消して、また角柱を描く（一回目は線がゆがんでしまい、気に入らなかったので二回目は定規を使った）。

対して、点線人間の一つを、消しゴムで軽くこすった。消し切れていないが、これはこれでいいのでそのまま放っておく。

曰く、封陣の中では物理的損壊は回復するらしい…………いや、これは朱夏が焦がした物が直ったのを自分の目で確認できたから伝聞の情報ではない。

ホント、便利だよなあ…………。

「…………で、あの男、ね……………」

角柱のビルの足下にぐちゃぐちゃ、ぐるぐるした線を書き込む。点線人間は驚かないが、棒人間にはふきだしを足して、中に『!』を書き入れた。

「ん……これは一つの図だと説明しきれないか……？」

『封陣』の真ん中にいた棒人間に『尖刃』のタグを付けた。ついでにわざと平仮名で『きつね色』と書いてやる。

昨日の男の名前は八木尖刃やと言うらしい。……名付け親、グツジヨブ。

僕からすればあの息子なら両親が『そういう系』なのだろうという簡単な推測でしかないのだが、納得のいく話ではあった。

まあ、人のことを言えた名前でも、全然ないのだけれど。本当に、ひねくれてストレートな名前だ。

さて、この八木尖刃、もちろん色採とのこと。ただこれが最近事件になった宝石店での盗難事件の真犯人で、その時も封陣を使って行われたらしいというのは、一般市民として恐ろしいと感じる。

異常を経験した今の僕でさえも。

『勿論私としては人の色……？存在？を抜き取っていることの方が許せないけど』

僕……と、朱夏の認識で言うところの、『色』を抜き取られた人は、死ぬことはないが、あらゆる『個性』というものが無くなるらしい。

『私は一回見たことあるけど、……酷かった』

ここで、中途半端に消して、かすれた点線人間に焦点を当てる。これに、狐色に近い色の、『琥珀色』のタグを付ける。

そうした、『何もしようとしなくなる、人との関係を築かなくなつた』状態になった者を、？虚白？こはくと言つらしい。

「名称、ほとんどそのまんま……」

まあ、名前はどうでもよかった。

既に色採のこともあるし……。

色彩。

朱夏の言うには、それは死んでいないが、生きてもないような状態らしい。つまり、無気力の最端、だろうか。

「……………」

最後に、『統那』に、『灰色』と書き込んだ。

その『灰色』には、右の腕が ない。

まあ…… 比喻のようなものだけだ。

それは今はさておくとして。

曰く、朱夏が紅いように、僕はそういう色なのだから。果たしてそれが薄鈍うすにびなのか、本当の灰色なのか、もしくは蠟色ろうしきなのかは分からないけれど。

多分自分で確かめれば分かったのだろうが、あの時の僕にはそん

な自分のことに気を回す余裕は無かった。

「ふう、こんなもんか……？」

僕は完成図を眺めた。

……まさに、落書きだった。

「……上手く情報を暗号化、隠蔽できたと考えよう。うん、なんて前向きなんだ僕ってやつは」

いっててむなしかった。かんにへんかんするのもむなしくなるくらい。

とまあこうして僕は現状認識をようやく終え、眠ることが出来た。

次の日、さらに日常が塗り潰されるとも知らないで。

再来コラプス

次の日。

僕が八木という奴におそわれて二日後の、今日。

僕はまたしても遅刻した。

あえて言うほどのことではないのだが、まして繰り返すほどのことでもないのだが、荷物検査があるのだ。

ただ間抜けなことに、この荷物検査、遅刻者には行われないので、僕はそれを利用して一時間目を休ませていただいていたのだった。

検査が行われない理由は知らないし、聞きたいわけでもないのだからいけないけど、ありがたいことだった。

昼休み、僕は何だか久しぶりな気がする打葉つっぱと会話していた。

この打葉、眼鏡をかけているのだが、それが似合いすぎているのだ。

とりあえず女子代表として筑紫の言を借りれば、『眼鏡をかけてもイケメン！ 外してもイケメン！』らしい。僕に言わせれば、シヤープな目とすつきりおさまった鼻梁と女子の化粧顔負けの整った肌と顔と……まあ、パツと見でイケメンと分類されるぐらいには面はいい……と表現するところだろう。

筑紫の時とは違い、僕と打葉が会話するときは、趣味の話や面白そうな事を会話の中で探っていくのがいつからか、基本のスタイルになっていた。

共通するのは、ゲームの話題とか。

意外と筑紫も、この辺にかなり付いてこれる（モンハンやってるぐらいだし）。

「おつす、久しぶりだな四手」

向こうも久しぶりだったらしい。
奇妙な一致だ。

「いや、おまえそれは不一致の方が変だろう」

「やっぱり無闇に賢明ぶるのはやめた方がいい……か」

「おまえ、探偵でも志望してるのか？」

「いや、全然そんなことは」

それにしても、無『闇』な賢『明』、面白い対比だよな……。

「だからそぐわないんだろ」

「闇と光の対立ってよくあるけど、あれって最近どっちが良いのか悪いのか分からないよな」

天使って名乗る奴が残酷だったり、闇が被害者だったとか。

「あー、逆に固定観念だったりするよな。何か読んでくとさあ、
あ、コイツ後で敵になるな」みたいな」

「そうそう、なんか腹に一物持つてるのが見え見えというか」

「……ところで、最近思うんだけど、おまえって荷物検査のとき、
いつも遅刻するよな」

そういえば、もう一年の付き合いになるんだから、気づいてもない頃か。

「色々ど、ね……」

本当に、色々。

「そついや、そつちは昨日休んだみたいだけど、どうしたんだ？」
「俺も、色々だな……本当は今日も来るつもりはなかった」
「……………」

お互い、事情があるみたいだ。

「そんなだから、浮いてるんだよな。俺ら」
「いや、おまえはモテるだろ？」

そのイケメン、誰かに告られるぐらい、少なくともないと言つこ
とは無さそうなものだが。

「ある意味、な……………」
「……………？何か含みがあるな」

ある意味、と言つた打葉の表情が複雑っぽいのでそれ以上追及し
てやることもないだろうと、僕はそれきり、黙つた。

「まあ、次はないけどな……………」
「次……………」

その面は、さらりと窓の外を見ていた。
……………様になつてる。打葉様と敬称をつけたくなるぐらいに。

「おまえ、何気に寒いこと言うのな」
「何を言うか。僕は最近、箸が転げただけじゃあ笑わないんだぞ」
「いや、全く凄くねえぞ」

しかもこのやりとり、全然面白くなかつた。

何と言つか、この時間はのんびりするるのが目的だったりするので（それこそ雲を眺めるようなまったりっぷりだ）、これはこれで、僕は構わないんだけど。

見ている人に見れば、退屈だっただろう。

まあ、すぐに退屈じゃなくなると思っただけだ。

「よー、また会ったな」

その日の帰り道、昨日と同じように一人で歩いていた。

しかし、その結果が、昨日と同じであるとは限らない。

だからって、一昨日と違うとも完全には言い切れない。

再び周りから人がいなくなり、世界は白と黒と灰色に。

「いやー、よーくな、考えたらよー、ケーサツに通報とかされたらまずいわけよ俺。別に捕まったりはしないけどな、社会的に生活できねーよコレ、って気づいたし」

狐色、八木尖刃。

服は上下ともに着用している。さすがにそこまで突き抜けた質ではなかったようだ。

「ところでおまえはよー、この世界をどこまで知っているんだ？」

「……………」

急にそんなことを問いかけてくる八木。
僕が答えるのを、待っていた。
試されている、らしい。

「この空間は封陣で、あんたは色探、僕達は外れた存在……とりあえず、そのくらい」

それを聞いて、八木は短絡的に落胆した声を出した。
どうやら素晴らしいことに、僕はこの気に入らない男の眼鏡にかなわなかったようだ。

「ダメだなあ。そんなんじゃダメだ」

ありがとう、あんたからならそれは最上の誉め言葉になる。

……と、かつこよくつらつらと並べているけど、正直、まだ怖い。
脚はかちこちだし、頭も上手く回らない。
目の前の異常に、勝てる気がしない。

「『俺達』はな、こういうことが出来るって見せてやったよな？」

八木は、再び『通りすがりの人』を捕まえた。

その人は、スーツ姿で、営業のサラリーマンらしかった。少なくとも僕にはそう見えた。

……ちょうど良いから、ここでひどく個人的な語り手、つまり僕に関する説明がある。

今、僕は『らしかった』とか『少なくとも僕にはそう見えた』と言った。いや、書いた、だろうか？ ……どっちでもいいか。

そこでだ、……クオリアとか、そんな簡単な言葉で説明したくないのだが、僕はその人が『僕にとって』サラリーマンに見えるから

と言って、また、その人が本当にサラリーマンだとしても、『他の誰か』の視点からは失業者や利権者、変装した刑事、『こつち』とは別の裏の世界の住人、果ては男装趣味の女性に見えるという可能性を否定したくはない（でも、少なくとも最後のやつだったら僕はとても悲しい）。

なぜなら、だったら、そうしないと、僕の見ている世界も信じてもらえないだろう？

こうして僕の『見える』世界を語っているけれど、他の人からは違うかもしれない。そんな可能性ぐらいは残しておきたい。

さて、そういう僕の主義を聞いてもらったところで、今後困ることはないけれど（ないのかよ！と自分でも突っ込みは入れた）、話を戻そう。

八木はそのサラリーマンに見える人を脱色した。人から色を抜くその顔は、恍惚そのもので、さらに、ぽっと息を吐いた。

色を抜かれたそいつは、さっきまでの青系統の　それ以上詳しくは、どんなだったかとも思い出せないが　色とは違い、『見るも無惨な』琥珀色を浮かび上がらせ、八木の手から離れ、二三歩くと消えて見えなくなった。

まるで世界から脱落するように、うつすらと、僕の視界から消えて無くなった。

「おつと最後まで、そして最期まで見てみるよ」

封陣が、解かれた。

世界が色を取り戻し、人から色が見えなくなる。

スーツはスーツを呼ぶのか、さっきの男……が混ざっているだろう集団を、僕は見つけだすことが出来た。そして、僕は外見の、身体的特徴以外の要素で、色を抜かれたスーツを見つけ出してしまった。

曰く、虚白は、個性、存在感、気力、感情、人格の特徴、その他人としてのプラスもマイナスをも最小限にした、『死んだ生き者』であるとのこと。

その事が一目で理解できた。

百聞は一見に如かず。

ましてや一聞。

大差だ。

そいつは、スーツの集団の中で、息をしているだけだった。

それはもう見るも無惨聞くも残酷な光景で、これ以上の説明は、ただの飾りでしかないのかもしれない。

話しかけもしないし、話しかけられもしない。見もしないし、見られもしない。ただ、後ろについているだけ。

僕は今、なんて外れたところにいるんだ。

『それ』を認識できることが証拠だった。

周囲からの脱落と逸脱と脱却と……虚脱。

八木が、再び『僕らだけの世界』を築く。

「おまえも、そういうことが、出来るんだぞ？」

僕は再び、色を抜いて、人を、無為にした八木を見る。

二度目の、それ以上に初めての光景は、さらに全身に拒絶の心理をもたらしした。

呼吸は浅く乱れ、汗は滲んで粟立つ皮膚を滴り、四肢は力が入らず、僕はすでに常ではいられなかった。

あるいは、これが常になるのか。
僕は縋るように、左手を動かす。
僕にはもう、これしかないのだ。
左手が胸に達する、直前だった。
八木がにやにやと僕を静観する。
そんな、抜き差しならない状況。

「ふっふっふー困ってるねー。そんなきみに、こちとらのとーじよ
」

覚悟を決められない僕に、都合よく、救いの手が現れた。

ただし、それはあの凜とした少女ではなかった。

僕の後ろから現れたのは、見た目八歳ぐらいの、失礼ながら、
んでもなく幼女に見える女の子だった。

無地の淡い色のワンピースに白の長袖を羽織り、赤いリボンが一
回りしてちょうちょ結びされている、鰐広で雪のような質感を持つ
帽子をかぶったその子は、ちょうど僕の目線の高さにある青い風船
を持っていた。

その、僕の半分も生きていないらしい女の子は、いかにも子供ら
しく、にこにここと、しかし大人びたさわやかな笑顔で僕と八木を見
つめていた。

そして

晴れ渡る蒼穹の如き、空色だった。

風船ライアー（前書き）

ライアーは嘘吐き。という嘘。

風船ライアー

「んんーんん？ またなんか来たな」

八歳の少女に向かってそんな事を言う八木。
僕への注意が一気に失せた。

「なんかってこれまた随分なご挨拶だねー」

そうして、周りのグレーな空気を快晴の空色に染め上げる少女は、風船を遊ばせながら、ゆったりと、ふわふわと僕の後ろから回り込んで、僕と八木の間に入った。

「こちとらそっちに迷惑しているんだから、謝って欲しいよ、こちとらとしては」

ん？ 『こちとら』って、一人称か？ なんか面白い響きだけど……。いや、僕なんかが気にすることでもないか。
その、こちとら少女に、八木は『悪びれたように』見せた。

「あーそうなの？ ゴメンなあー、悪気は一切ないんだよー。これでおっけ？」

八木はおざなりに頭を下げ、軽薄な顔を上げた。
しかし風船少女は、それをさらに無視していた。
僕の方を向いて、晴れやかな笑顔を見せていた。

こっちの方がまるで悪びれているようだ。

無視。

「いやー、こちららも大変だけどもきみも大変だね。四手統那くん」

どうして僕はこう有名なのか……はさておいて。

どうせ主人公だからとかそんなところに決まってるじゃないか！

「ていうかちょっと待って危ないから！」

その後ろには殺人……殺したのを見たことはないが、それくらい平然とやっつてのける奴なんだぞ！

「何が？もしかして後ろの？形取り？が？　　ないない、そんなこと天地神明が無いって言ってるよ」

「……象り？」

何かの象徴か？

「あー違う違う、『形を取る』って書いて『かたどり』。あいつの称号みたいなのやつ。漢字って意味が二重以上になる事が多いから、『ぞつ』って書く『かたどり』だとほら、きみみたいに『象徴』みたいな誤解をするんだよ」

「………？」

僕はどうやら違いの分からない男らしい。字面はともかく。

そんな僕たちを、八木は黙って見ていた。

というより、驚いているようにも見えた。

「……あーん？　おまえ何だ……？　　ただの小学生じゃねえってか？」

これまでの、ゲームで言うところの、チートや隠しコマンドを使って序盤の敵をいたぶって遊ぶような奴、の印象だった八木（なんて比喻だ……）の雰囲気は初めて変わった。
今はただ、油断無い目をしながら探るようなそれだった。

「今時普通な小学生の方がレアだよ？」

「いや、それはどうかと思う……」

皆が魔法少女だったら僕は間違いなく自殺する。

……なんて勢いで考えたけど理由は全く不明だ。

「さーて形取りさん、おーにげーなさい」

「……え？」

今、『逃げる』って言ったのか？

普通『かかって来い』とかじゃないのか？

いや、そもそも戦う気満々な相手が逃げる訳ない。

もちろん、八木は一介の高校生とその半分の年齢の少女を前にして、それを承諾することはしなかった。

最初は。

「逃げる言われて逃げるバカがどこにいるんだバーカ」

そう言っつて八木は肩の高さに持ってきた手を凶悪そうに、いつかの五本の鉤爪にし、僕たちの方を焼き尽くすように睨み、鉤爪を蠢かせて、それから

「んーん〜 どうしたのかな〜」

「……ちっ!」

それから、後ろを振り返り 逃げた。
本当に。

「ね？ だから言ったでしょ？ 形取りのレベルなんてこちらのブラジルぐらいだから」

「それはまた……」

足下を遙か通り越して地球の裏側、か。これまた大胆に出たな。

まあ、ブラジルからすれば東アジアがめっちゃ下の存在なんだけど。

「あなたは……誰ですか？」

話の流れ的に、このワンピース少女が見た目通りの存在でない、のだろうと思うので、僕は僕なりの丁寧さで質問する。

「あ、そうそう、別にこちららは偉くないから普通に喋っていいよ、やりづらいし」

「……分かった」

「それでこちららの名前だっけ？ 名前はね、川井窓^{かわいまどわく}粹。三本線の川に、井戸の井で川井、窓の周りの粹って言えば分かる？」

「あ……ああ」

言いたい字画は一発で僕に伝わった。ただ、僕の記憶が薄弱なせいで『粹』という字を僕はそらんずる事が出来なかった。

この時はあるうことか『粹』などと、窓をすごいことにしていたのだが、これは前もって墓に埋めておこう。

粹^{いさい}な窓。

「窓枠って呼んでちょうだい？」
「もちろん！」

多分この時、僕の目は時価にしてどんな宝石よりも高かったこと
だろうと思う輝きを放っていただろう。

「……かなりいい返事だね」

「いや、こういうテンションで行くべきかな、と……」

かわいい女の子のお願いを断れない男子、みたいな感じで。
ほら、僕も一応、男子だから。

「僕も自己紹介した方がいいのか？」

「うん、いいよ。自己紹介は大事だからね」

「じゃあ、僕は四手統那。漢数字の四に、右手左手の手で四手、統
計学の統に旦那とか那覇の那で統那」

「うんうん。よく分かるよ。じゃあ四手くん、本題に行こう」

「……僕に何か用事があったみたいない方、だね」

結局、語尾に迷う僕だった。

「そうだね、味方は多い方がいいからね」

「味方……」

まるで敵がいるような言葉だ。

封陣の中、窓枠は『風船にぶら下がっていた』。

「こちとらはこの世界が好きだから、虚白を作らせたくないんだ
よ。だから、そういったことをする色採を止めないといけないんだ
だけど、こちとらが今の所出来るのは、実際、今みたいな撃退だけ

なんだ」

「撃退？」

十分すごいと思うけど、それではダメなのか。

「今、あの八木って奴を追っ払ったけど、どうせ別の場所で同じ事をやるのは、想像付くよね？」

「ああ……」

また、色を抜くのだろう。

「そういえば、何であの形取りが人を虚白にするか、分かる？」
「……？」

そういえば、考えていなかった。

酷いことをする非道いことをするとは思っていたけど、その理由は分かるうともしなかった。

「ああ、いやね、うん、えーっと、別に悪いことじゃないんだよ。朱夏ちゃんなつくまで大変だからなあ」

「え？ 朱夏？ 獅子島？」

思わず聞き返していた。

この状況って、朱夏が絡んでいるのか？ ……益々話が難しくなるな。僕はどうすればいいんだろう……。それに、まだ僕の中で重大な問題が解決できていない。

そんな僕の思考が読めているのか、窓枠は朱夏についての話を始めた。

「うん、そうだね、その朱夏ちゃん。こちららの味方というか、仲

間というか……うん、目的は同じだから、こちとらとは間違っても戦わないよ」

「戦うって……」

「駅前で最初に、朱夏ちゃん戦ってたでしょ。相性が悪いから勝ち目はなかったけど」

押し付けるように、僕にその言葉を叩きつける窓枠は、真顔で僕を見ていた。

その子供の顔のどこにあるのか分からないが、窓枠は簡素な言葉と表情で、どんな言い訳も許さない、峻厳な事実だけを僕に告げる。だけど、僕はそれに押されるわけにはいかない。

「それじゃあ、その言い方だとおまえが朱夏を戦わせているみたいじゃないか」

虚白を作らせない、というのは僕も（事情をまだ深く理解していないとはいえ）賛成するところだが、他人を勝手に巻き込んでいいということにはならないだろう。

僕は、いつの間にか、返答次第ではこの八歳の少女に対して『ナイフ以上の何か』を突きつけようかという心境まで至っていた。

多分、朱夏を利用しているんじゃないか、と思った辺りで、だった。

そのとき僕は、自分で自分を制する自信を、十六歳にもなって失いかけていた。

そんな僕の何かを察したのか、窓枠は地に足を着け、風船を掴んだ片手はそのままに、もう片手で否定を示した。

「ああ、待つて待つて。別に『私』も好きでやってる訳じゃないの。危ないなあ」

「……危ない？ 僕が？」

「そうだよ。今にも襲いかかってきそうだったよ」

それは朱夏のことだろう

と思ったのだが、窓枠の言葉を聞いている内に、その理由は忘れた。

……覚えていたら僕はこの先どれだけマシなことになっていたかと、後になってみれば、思わずにはいられない。

「ふう、きみはまだ自分のことに気づいていないみたいだから、こちらが気づいたことを教えるよ」

「気づいたこと？」

「そう、気づいたこと」

窓枠は、また風船にぶら下がり、今度はゆらゆらと揺れた。僕の脳裏には、こんな事をしていてカラスに襲われないのだろうかなどと、場違いな疑問が浮かんだ。

「今、形取りと対峙したときだけど、胸の『それ』に手を近づけようとしていたけど、何をするつもりだったのかな？」

それは 本人にそんな意図が無くても、僕にとって最後の崩壊だったと思う。

僕は、意識をブレザーの上着、胸の内側に常に収まっている『それ』に向けた。

多分、『それ』が僕の本質に関わるということは一昨日から薄々感じていた。

僕、封陣、欠損、狐色、色採、虚白、緋色、ナイフ、灰色、もしかしたら。

僕は

「……………」
「何もしなかったらどんなつもりがあっても意味なんて無いんだよ。統那くん。きみはまだ、『やる気しか』出していないんだから。朱夏ちゃんについて言うならそのあとだよ」

そう言つて、窓枠は笑つた。

僕は、震える左手を握りしめた。

次に八木尖刃と会つたら、必ず戦う。

目的は、守る。

日常を、

みんなを、

自分の事も、

勿論、朱夏も。

……………まだ自信は出ないけど。

吃驚インターチェンジ

その後、封陣が解ける前に窓枠はどこかへと去っていき、日常に戻ってきた僕は、

突然後ろから襟を掴まれた。

「ぐえっ！」

「なにがあつたの!？」

数回揺すられた後、解放された僕はむせ込んで後ろを見る。窒息しそうになつたんだよ！ と言うのをはばかり、目の前の朱夏を恨みがましい目で見える。

「ねえ、さつき封陣が出ていたみたいだけど、どうなつたの!？」

「奴が襲ってきたんだけど、後から来た小学校低学年の方に追いつてもらつた……」

「……え？」

朱夏は意外そうに僕を見た。なぜか自然と見つめ合うような形になつたのだが、これは僕の自意識過剰さが招いた表現か。

やがて、朱夏は一つの単語を口にした。

「……川井、窓枠？」

「ああ、多分その窓枠だと思う。風船持つてて、爽やかすぎる少女だった」

「ふうん……」

「知り合い、なんだろ？」

「……そうだね」

……なんだ？ 齒切れが悪いぞ。

どうでもいいことだが、僕は切れには敏感だ。ひげ剃りにも電動などと言う邪道は使わず、剃刀を使う派。……年二回しか使わないぐらいに伸びが悪いのだけれど。

さらに僕について語っておくならば、情けないことに、本当に情けないと思っっているのだが、僕は床屋や美容院、ましてや千円カットで髪を切ってもらった事がないのだ。……つまり家で切ってもらっている。これにはひどく個人的な理由があるのだが、恥ずかしいことに変わりはない。

そういえば、さつきから人の往来の中、僕ら二人は騒がしくしており、周りの人になんとなく見られているのだが、それをこの人は感じないのだろうか、いや、感じないのだろう。これがきつと反語の正しい使い方だろうか、いや、そうではないのだろう。

……かなりどうでもよかった。

「分かった。じゃあ帰ってて」

「帰っててって……」

僕が何か呼び止める間もなく、朱夏はそのまま走り去っていった。どういう意図で発されたのかよく分からない日本語だったが、僕はそれに抗う術を持ってはいても資格はないようであったので、これ以上の寄り道はせずに帰宅部を全うした。

家に帰ると、僕は居候のボディプレス（としか僕には思えない）に毎回の如く見舞われるのだが、今回の例で言えば、僕の体がぐしやりという音を出せることに嫌々ながら気づいてしまったりと、毎回それなりにただでは済まない思いをしながら階段を上り、自室の戸をだらりと開けるのだが、

ばんばん。

僕は早速こけて、覚えた効果音、『ぐしゃり』を使ってみた。
前のめりに倒れ（この状況では死ねないぜよ！）、その後顔を上げて、

「なぜその方法にこだわる!？」

僕の部屋の窓は『ご用の方はこちらまでどうぞ』と案内されているのか、すでに朱夏専用の窓口になっていた。……あなた、不法侵入ですよ？

とはいえ開けないことには進まないの、僕は慌てながら朱夏を招き入れた。

……一体僕はどついう風の吹き回しなんだ？ この反応の良さ。

「遅かったね」

「なんでこんなまどろっこしい方法を何回も……」

「その方が手間が少なくて済むから」

「僕の寿命が縮むからやめてくれよ……」

火を吹いた。

「うわあっ!」

短絡的な表現を避ければ、朱夏の手から僕の視界いっぱい火の手が延びたのだった。

そして僕は定番のようにマトリックスに挑戦する！

目指せハリウッド！

「うおおおお!」

しかし、中途半端に腕を回転させたせいで、ブリッジの姿勢で床に頭突きしてしまった。

以下、僕の偽らざる感想。

『首が痛い！　そして、壁が焦げちゃう！』

実際は手加減してくれたのか、空中で留まって立ち消えた。ありがたい。

「ぶつ、くくく……っ！」

朱夏は抱腹絶倒していた。

……前言撤回。ありがちだ。

有り難い、ではなかった。決して。

「いつ、てええええ……！」

僕は痛みに悶え、七転八倒していた。

総じて、二人して倒れていた。

「ひひひっ……ひい……鈍くさい」

「言っな！　元はと言えばおまえのせいだろ！」

どうしてこう……やりづらい。

それに、なんだ

ちゃんと普通じゃないか。

てつきり僕は、全くの別人になったのかと

「ああ……面白かった。じゃあ、早速で悪いんだけど、見せて」

「……何を？」

……やっぱり、変わるところは変わっているらしい。
朱夏はいつの間にか起き上がり、姿勢を正していた。

「今、私は何をしたでしょうか？」

「何って……炎を出したんだろ？」

一応、この間も見たので、その事自体には驚かなかったが。

「そう。じゃあ何で今ここで見せたんでしょうか？」

「……」

倒れたまま考えて、結局分からなかった。

朱夏が僕の脳天シヨックブリッジを見たかったわけではないの
ら、僕の方に答えはない。

「……分かんない？」

「ああ、しつぽり」

「しつぽり？」

「あ、いや、さっぱり」

ヤバい。分からなくてしつぽり濡れるって何なんだよ。これはバ
カだろうボク。馬鹿だろうぼく。莫迦だろう僕。

……段々と難しい漢字にレベルを上げてても一向に僕の頭の悪さが
強調されるという、それはもう悲惨な結果だった。

朱夏はやはり、僕の捨て身の（不意の事故だったが）ボケには構
わない。

彼女は結構なボケ殺しのようだ。

「統那にも、何かそういう能力があるはずだと思ったから」

「僕が突っ込み担当だというのはスキルの一端ではないのか？」

「じゃあ明日の朝刊の折り込みチラシ見て申し込めば？」

「突っ込みって資格講座なのか！？ …… って話がそれてる！」

通信教育でどう身につけるんだ、あの対応力。

それともやっぱり現地おおさかで身につけるものなのか？

なんでやねん。

「だから、統那にも『普通ではない何か』があるはずなんだって…

…。まさか、隠したりしてないよね？」

ずい、と朱夏が僕の目をのぞき込むようにして、未だ倒れている

僕の方にしなだれかかってきた。

夕方スプレッド（前書き）

残念ながらクイーンテットではございません。

夕方スブレット

続き。

「まさか、隠したりしてないよね？」

ずい、と朱夏が僕の目をのぞき込むようにして、未だ倒れている僕の方にしなだれかかってきた。

待て……しなだれかかってきた！？ ……近い！ 近いぞ朱夏さん！

特に無駄な肉の付いてない、陶磁のような印象すら持たせる手を持つ腕が僕の顔の右横で自身を支えていて、それが最後の守りとなっているようだった。

今更ながら確認する服装を説明すると、胸の辺りに風流な絵と『勸善懲悪』と達筆な文字の書かれた（………、）白のTシャツ（厳密には違うのかもしれないが僕には服飾の違いが分からない）の上に赤系統の上着を羽織っていて、下の服装は今の僕の視界では確認できないが、確か上着に近い色をしたスカート（もう一度言うが僕は違いの分からない男だから、毎日のように同じものを見かける制服はともかく、単発でくる物までは分からない）に、黒のストッキングだったように思う。

言動の割にはオトナなんだなあと僕は思った。というかまあ、『勸善懲悪』を見ているようで僕の視線は……も、黙秘で許して。

それにしても……僕は何をしているんだ？ BかCかで悩んだり（自爆）。

……さあて本題に戻ろうかなっ！

果てしなく動揺していた僕は、後ずさりながら答える。

「か、隠すって……」

僕の場合、やっぱりあるとしたら『これ』なんだろうけれど……
いまいち、自信がない。

勿論、隠しているつもりはない。

いかんいかん、さっき決意したばかりじゃないか。ええい、ものは試し！ 儘よ！

と、決意したところで、

また、視界が、一部の例外を除いて、あらゆる色の浮いた世界へと、変貌した。

封陣。

「また!？」

と朱夏は言つて、髪と目の色を赤と朱の混在する炎に煌めかせた。
というよりは、それぞれが勝手に煌めいたのかもしれない。
と僕は思った。

だって、僕自身が、既に変わっているのだから。

その僕は体を支えながら起き上がるのに失敗して、今度は背中を
バネにして起き上がった。

「どうするんだ!？」

そして、慌てて朱夏に聞いた。

「こんなところで戦ったら巻き込むかもしれない」

朱夏は僕が慌てているせいで逆に落ち着いているようだった。

「でも、離れたらここが狙われたとき」

どうするんだと、言いかけて、

「その可能性もあるけど、この間隔で、さっき窓枠に突っ返されたなら、再戦希望じゃないの？ 元々統那を狙ってたんでしょ？」

「とにかく、家からは出た方が吉、なのか!？」

「そう!」

朱夏は窓を乱暴に開け、蹴り飛ばすんじゃないかという勢いでスニーカーを履き、ベランダから飛び降りた。

僕は真似するわけにもいかないの、出し得る限りの速度で玄関から飛び出した。

その途中で気がついたのだが、どうやら封陣の中では、電気系統が麻痺するらしく、下りるときには気をつけていないと『池田屋る

(動詞)』 一応、僕と片那で考えた有名すぎるアレの動詞化

ので、いつもつける階段の電気がつかなかった。お陰でいつもよ

り注意を払ってしまい、全力は出したのだが、最速で下りたとは言えなかった。

……これ、ただの言い訳だった……。

そして、玄関から出た僕は、『今度は取り出せるように』ズボンの左ポケットに入れたナイフを、出して持つ。

朱夏は一応、待っていた。玄関から見えるギリギリの所で今か今かと、という修飾表現を間に入れるのは避けられないが。

「よし、ゴー!」

「ちよっと待つ、……って、速っ!」

朱夏が、という意味では必ずしもない。

言う間に追いかけてようと、踏み出した僕の足取りがおかしなまでに軽かったのだ。踏み込んだ喻えで言うなら、ブラックゴーストに改造されたような感じだった。……奥歯に何かがある感触は無い。良かった。

しかしこれは都合がいい。

これが、色採の身体能力というものらしい。

ますますお決まりだった。

程なくして、僕は朱夏に追いついた。

「で、どこに行くんだ!？」

「とりあえず、人の集まりそうな所!」

「って言うつと……駅前か!？」

「一番はそこだね! 次は商店街とか!」

そんな一連の会話と、風景を見て僕は一つの疑問が湧いてきた。

「なあ朱夏」

「なに?」

お互い、人としておかしなペースで走りながら言葉を交わし合う。

「思ったんだけど……封陣って、どんぐりでかいんだ?」

「人によって全然違う。八木は普段から大きく作ってるけど、これはかなり大きい方だと思う」

「軽く町一つ覆ってそうだな……!」

「でも行動範囲は変わらないし、『あれ』が出来るのも手の届く範囲だから、言い換えれば封陣は色採同士にしてみれば、こっからは自分の空気だつて言ってることぐらいにしかならないの」

「成程……」

僕は、ナイフの柄を握り、走ることに集中した。

数分も経たない内に、僕たちは駅前にたどり着いた。

「さーて、おびき寄せることにも成功したし、いっちょ再び、始めるとするか」

そこには、八木尖刃がいて、両手に虚白を握っていた。

色採アブソーバー

両腕に虚白を握んだまま、八木はにたりと笑う。にたにたと笑う、でもいい。したり顔は……語感に近いんだけど、外していた。

「よー、やーっと来たか。さっきの邪魔者も居ねえみてえだしよ……ちよっと話そうや。その女子高生じゃない方」

……八木のカテゴリでは僕は部分集合なのか？

とりあえずそれは置いといて、無難に僕は身構えながら次を待つ。やがて八木は片手を自由にし、僕を指さした。

放された虚白は、元の色を失い、偽られた色で、歩きだし、見えなくなる。

もしここでこんな目に遭わなかったら、その先にどんな事が待っていただろうか。そのことを思うと、ぞっとするより先に、切なくなつた。

「……………」

今度は大丈夫だ。

もう僕の精神は畏れたりしない。

……一人じゃないからだろうか？

まあ、それでもいい。悪くない……よな？

「おまえも『そう』なんだろう？」

『そう』とは、色採の事を言っているのだろうか。

そう分かっていて、僕はしかし反発する。

誰がこんな奴と、同じなものか。

「……少なくとも僕はそつちと一緒ににはされたくないね」
「……あーあー。全く、連れねえなあ」

そう言って、もう片方の手をぱっ、と放した。

「おまえ、何で俺がこんな事してるか、分かるか？」
「……！」

その言葉に 朱夏が反応した。僕が分からないという表情を作る前に。

「おつと睨むなよ女子高生。まさか何も知らないなんてのは、とても可哀想だろ？ その点、俺は親切だから教えてやんのよ。アーユーアンダスタン？」

その英語、日本ではバツが付くぜ。そう心で付け加えて置いた。僕は野暮ではない。

さーて、と八木は前置いた。

「『俺ら』が何でそんな事をするのかは、分かってねえな？」
「……それがどうした？」

まあ、怨恨の線は薄いだろう。

「おーいー、そう急ぐなよ。結論なんてのはすぐに出んだからよ。俺はな、こいつらを『食ってる』のさ」

さらりと事実を述べた。

僕は、衝撃を受けた。

食うという表現に。

この男は言った。

人を食べると。

自分の為に。

食うとは、

つまり、

採取？

色。

……色採とは、そういう意味なのか？

畜生、なんてネーミングだ。

僕は不覚にも思考を少し止めてしまった。

「食うのは気持ちいいぜ。力が溢れてもう、しょうがないったらねえ」

そう言う八木の全身から、依然として、いや、以前よりも光のよ
うな狐色が漲る。

間違っても、後光のような神々しさ、まして禍々しさもないのだ
が、圧倒的な雰囲気は、感じられる。

「食つって……」

「ああそうだ。食つてんだよ、コレ。つっても俺が勝手にそう言い表しているだけでだ、まあ、かなり強くなれんのよ」

八木は、遊びなのか、力こぶを作った。

……そんなことの為に、こいつは、人に迷惑をかけるのか。

そんな奴の為に、僕は命を狙われているのか。

僕は、絶対に、自分の都合だけで他人を害するこいつを許容する気にはなれない。そして許容する奴は僕が許さない。

今決めた。未来にも決めた。

若い思想でも構わない。うらぶれるまでは突っ切ってやる。それでナンボだろ？ 若さって奴は。

「こうしていると、腹も減らねえし、そこらの店から金銀財宝ぞつぐざくだし、やりたい放題ですよ。もうつまらないくらいに面白えぞ」

説明しながら、満ち溢れる自分の力を見せつける八木。

仮物で、借り物な力で、人の存在をぞんざいに扱つ。

まあ、その事自体に怒るのは、僕ではなく 勿論僕も許さないが、隣の、獅子島朱夏だ。

僕のスタンスなど、朱夏に比べればきつと甘つちよろい掬いのよ
うな救いだらう。

朱夏の道徳は、こんな事が存在する事そのものを許しはしない。

「ふ、ざ、ける、なあああああ！」

揺らめく紅蓮の髪を、火の粉と共に煌めかせる朱夏は、掌を八木に向け、そこから炎を奔流の勢いに乗せて走らせ、八木の上半身を焼き包んだ。

しかしこれが効かないのは、僕も既に目撃済みだった。

一秒、数秒、十数秒と炎が過ぎ、ようやく橙のぶちまけられた画は元のグレーゾーンに戻り、上半身が裸の黒こげになった状態で、八木が姿を見せる。

「……最初っから無駄だっけってんのに、分かんねえのか？ 女子高生」

また、ウロコが八木を守り、ぼろぼろと散った。

改めて見ると、ウロコはびっしりと八木を包んでおり、その様は鳥の羽毛の並びのようにも見える。

……成程。こうやって僕の前に出てきたときはワイルドだったわけか。

「……………」

「もう俺が形取りって名乗ってるのは分かってるんだろ？ だって俺の？ 竜鱗？ を破れないって、いい加減認めたらどうだ？」

顔に付いた（自称）竜鱗を手でぱりぱりと払い、細かに落とし損ねながらも元通りの顔を見せた。

朱夏はそれを見て、

「別に無限だとは決まっていらないんだから、無駄じゃあない」

諦めていなかった。

……昔っからだよなあ。挫けないの。

しかし、だからといって常勝無敗という法則は、ないのだ。

八木は、余裕を崩さず、肩を鳴らした。

「確かに無限だと言った覚えはないがなあ、今、俺は『食後』だ」

……つまり、お腹は一杯である、と言いたいらしい。

「『腹が減った時』なら分からねえけど、まずスタミナは比べ物にならないよな、っと！」

地面を罅割り、台詞のかけ声そのままに八木は踏み出した。

鳴らした肩の先、黒光りする手が朱夏まで届く、二メートル。

すなわち、僕の出番だ。

刀七アサンダー（前書き）

直接的な描写は避けたつもりですが、怪我します。

刀七アサンダー

僕は未だに竦む体を、無理矢理に利かせた。

「うおっ、とお」

「ぐっ！」

「……！」

僕は朱夏の前へと色採としての速度で駆け、まっすぐに進む八木の手を、左手に握ったナイフを僕の顔の前に据えて防いだ。

僕のナイフ（名前はまだ無い）が八木の黒い手を少し裂いたが、その内側、骨にも当たらない部分で、僕の経験上今までにない硬さで、弾き返された。

八木は自分の皮膚（？）を裂かれた事で、僕は弾かれたことで互いに後ろに一歩下がる。

「おお、なんだ危ねえな。なんだその法律違反？ 実は不良だったのか？」

「さあ、ね！」

僕は間髪入れずに切りかかる。

八木は歯を剥き出しにして笑い、鈍い黒で妖しく光らせた両手で応戦した。

僕の右からの袈裟切りを八木は胸の辺り、両手で軽々と受けて弾き、そのまま両手で同時に黒光りする、尖った五指を曲げた掌底を目一杯繰り出す。それを僕はしゃがんで避け、そのまま足を狙って腕を弾けるように伸ばして刺突。

ガキンッ!

「!?!」

服を突き破り、皮膚どころか、脛毛すら切った感触があったのにしかし、嘘のような硬度でまた逸らされる。

「どらよつとあー!」

ズボンが切られていない方の足、八木の左足に晒された僕の頭に、蹴り上げによる回避無用の爪先が初速ゼロにも関わらず、額に、脳に重く響いた。

「かあつ……!」

「ほれもういつちよ、つとなあ!」

そして、『蹴り上げの勢いだけで』立った僕に、瞬く間の回し蹴りを脇腹から叩き込んだ。

「ぐはあつ、……ああああああ!」

僕は、放物線を見捨て、道路を挟んで十数メートル以上は飛ばされた。目指す先は、

「オラア! ショーウィンドウのメスマネキンとキスでもしてるや!」

入り口から、奥に通路を覗かせるカウンターまでが一望出来る、ガラス張りのファッションショップ。その展示スペースに、僕は全身を強く打ち付けながら盛大にガラスを割り、転がり込んだ。

それは、僕がそつだと認識する、一秒前の出来事だった。
故に、反応が鈍った。

「うあつ……ッ!？」

最悪なことに、そのショーウィンドウは文字通りの全面ガラス張り
りで、店の前後左右だけではなく、上も、下も、本来の天井、床か
ら数センチ離れた造りになっていた。つまり、六つの面すべてがガ
ラス面……いや、違った。五つの面だった。後ろは強度を確保する
ためか堅く、展示スペースと店内を仕切る面にあたるそこだけがア
クリルのようなだった。まあ、アクリルかどうかはともかく、そこが
異様な硬度を持っていたため、僕はそこに頭をぶつけて朦朧としな
がら透明な刃の、衝撃で崩れたガラスの礫つぶての中に身を晒すことにな
った。

ばりいん、

がらがら、

がっしやあああ、

ガラスが崩れ、

どすっ、

ざくっ、

ぐさっ、

それが刺さったり切り裂いたりして、

ぶしゃっ、

どくどく、

どろどろ。

もうどこがどうとか全てを表しきれないくらいに様々な部位から
出血。

いたい。

踏む。切る。

降る。刺さる。

碎ける。裂ける。

ガラスと僕の、関係。

痛い。

「いつ、あああああああ！」

僕は、経験したことの無い、全身を切り裂き刺し貫く痛みを骨身にまで実感し、愚かしく更なる痛みを貰うように破片の散らばる床をのたうち回ろうかと至ったところで、

治まった。

「……………え？」

見れば、無数とも思えるぐらいに、そこに在った傷が、全て嘘のように　つまり在ったことは本当なのだが　消えて無くなって
いた。

「……………」

もちろん、着ていた服（なんと、替えのない制服！）にはガラス片相応に破けた穴が数えられないほどに空いている。そこで、僕は一つの疑問にぶち当たる。

パンツ、破けてないよな……裂けてないよな……！？

……いやいや、だってそれだけはしっかりしておかないと締まらないだろう！？ ……ごほん。失言だった。

それにしても、色採ってのは……回復力まで普通じゃなくなるのか……。まさか何でもありって訳じゃないだろうな……？

超が付くほど気を取り直し、僕は一人取り残された朱夏を案じて店から飛び出す（シースルーな店にも関わらず女性の下着まで売っていてそれがマネキンにすら上着の下に装着済みという視覚破壊兵器っぷりだったのでその空気に耐えられなくなったこともあるが！）。

……僕、半角丸括弧の使い方間違えていないよな？

いや、それより、無事だろうな……？

果たして、

朱夏は、無事でした。

ただし、追い込まれていた。

断続的に火炎放射を放ち、自身は付かず離れずの距離を保ちつつ、バス停の屋根、交番の屋上、または猿のように街路樹の下枝などを跳び回りながら、ヒット&アウェイを繰り返していた。対して八木は降り懸かる火を振り払いながら、鬼ごっこを楽しむかのように、

時折何かを軽薄に喚きながら地を駆けており、次々とそれらの建物などをその手でぶち壊しながら 朱夏の足場を奪いながら 追いつめていた。

僕は、思わず……ということはないが、叫んだ。

「朱夏っ！」

「統那！？ 大丈夫なの！？」

「んんーん？ 思ったより回復が早かったな……後でゆっくりバテラして食ってやろうかってな具合に思ってたのによ」

追いかけてつこをしていた二人の注意が、僕に向けられた。

注目されたことで再び僕は、僕自身に意識が向いた。

最初に注意が向いたのは、僕の左手。

あんな目に遭っても、僕の手には、ナイフがしっかりと握られていた。

……どうやら僕は、こんなことになっても『刃物』を手放さない、奇特な人間のようなのだ。

まあ普段からその認識だけは既得していて、社会的に危篤なまでに奇特なただけれど。

「八木、尖刃……おまえの相手は」

切って切って切り続ける物。

切っても切れない体、それでいて切る者。

おまえの性質は僕に似ていて、僕の本質はおまえと相似なのか？

答えは、無い。

僕は灰色らしいけれど、それはおまえらの色なのか？

応えも、無い。

僕は、だから『とうな』なのか。

けど、分かった。

切っても、無理矢理くつつく。

名前は、大事だったようだ。

知らない内に、裏の意味 いや、別の意味 が込められる可能性を、否定出来ない。

……オーケー理解した。

僕はほんの一部ではあるが、僕をすっかり理解出来た。己を理解すると、竦んでいた体は内なる激越に震えた。覚悟は終わり、後は『それ』を使いこなせるかどうか。

「四手統那……この、僕だあああああ！」

僕は、切る。

切れる。

刀七アサンダー（後書き）

この主人公、緊張感があつたり無かつたりしますが、そういう人です。気持ちにだけは余裕を持っています。

欠落ライト

「この、僕だあああああ！」

叫んだ僕は、今以上の力で柄を握りしめた。刃から力を引き出そうとするかのように。すると、僕の中からではなく、握った手の先から、

「……！？ 本当に何か湧いてくる……？」

それは、色採として（？）増強された体力のような、動きに直接関わるようなものではなく、目に見えるものでもなかった。

カン・技術・境地・思考・流れ・方法。それらをこった混ぜにしたような、『戦い方』とでも言うべきなのか、奇妙な知識だった。それが『流れ込んで』くるのが、分かった。

それは紛うことのない不思議だったのだが、今の僕に余計なことを考える時間も、余裕も無い。

「……おまえが先か。まー、どっちも同じか。……さて、じゃあ希望にお応えして今度はどこに吹っ飛ばしてやるうかなあつと、つよ！」

八木は最初の加速で後塵を巻き上げながら僕へその勢いのまま迫り、僕の右側から、つまり左腕の指を鉤爪にした掌底をかちあげるように僕に送り込む。

僕は というより体が勝手に それを左へ避けながらナイフを逆手に持ち上から突き刺す勢いで下ろした。狙いは右腕。とりあえず当たればいい、という一撃。そして、そのまま当たった。

だが、またしても表面で受け止め、逸らされ、弾かれた。その後の左腕による反撃をなんとかバックステップでかわして距離を取る。その瞬間、見た。

腕が水晶のよう……いや、もっと複雑な輝きをしている。

「ダイヤモンド、か……？」

僕の問いに八木は、

「おー、当つたりい」

などと『大当たり』なのか、『感心した声 当たり』なのか分からない返答が返ってきた。

「それが『形取り』の異能、って事か？」

「あー？ 知らなかったのか？ おまえ……いや、シデ君だったなあ、予習しろっての、そんなぐらい」

こつちは暇じゃなかったんだよ、とは言っても聞いては貰えないだろう。

しかもおまえは教育課程には含まれていないはずだ。歴史の教科書に載っているのか。

それにしても……ダイヤモンド、か。

かなり、いや、一番相性が悪いかもしれない。

「というわけでおまえに俺は切れねえ。……と悪役っぽく言ったら途端に切れそうな気がしてきたな……やっぱ撤回だ。ほらほら、頑張ったら切れるかもしれないから、コンティニューはまだ出来るぜ？」

ダイヤモンドというのは、言うまでもなく天然の鉱物では世界で一番硬いと言われる石の事で、しかし金槌を振り下ろしただけで碎ける事もあるなど、意外と簡単に壊れたりする馬鹿みたいな石のこどももある。

ここで重要なのは引つ掻きに対する耐性の方で、ダイヤモンドの硬さの神話は『刃物』に対して、今も昔もかなりの力強さを持っているという事だ。

つまり、ナイフの切れ味では切れない。

それこそ、ダイヤモンドカッターでもない研磨すら怪しい所だ。

「ハイそれじゃあ再開だ！」

言動の派手さに反して、今度は忍び寄るように音のない動きで八木はまた僕の右にずれて襲いかかってくる。僕はさっきまでなら普通の避け方をする所だったが、やはり体が勝手に動き、

「ふっ、と」

自然すぎる動き　しかし今までの度を越して速いわけではないで八木の背後を取り、八木が反応しきる前に右上にナイフ持つて、背中をバツ字に切りつけ、最後に唐竹割りで頭を叩いていた。驚いたのは、むしろ僕だった。いきなりこんな動きになるとは思いもしなかった。

エイリアンハンド・シンドロームか！？　……かなり嫌だなあ…

…それ。

「つつあ……あつぶねえなオイ！」

それでも八木はその全てを硬く凌ぎ、不規則に角張った皮膚を輝かせるだけだった。

新たな箇所を切りつける度にそれは増えていく。穴埋めしていくゲームみたいだった。

「これは……いけるか？」

僕は再び動き出した。今度は正面から。

容赦なく浴びせられる八木の両手をすり抜けるように、流れるように、浮くような足捌きで右へ左へ、さらには膝の力を瞬間で抜いて下にもかわしながらその度に腕に脇腹に脚にとナイフを切り刻んでいく。

向こうの攻撃は当たらず、こちらの攻撃は当たるって……僕は何の達人だ？ いや、こちらの攻撃は通じていないんだけど。

「つくそ！ 何だよてめえ！ スルスル抜けやがって、ウナギかよ！」

僕にとっては最早大雑把でしかない動きで両腕をぶん回しながら八木は徐々に焦りの様相を見せた。勝てるはずと見た相手にここまです、見た目だけでも押されているのだから。

その質問、逆に聞けば、おまえは『人間』なのか？

と僕は変なことを思った、と同時に聞いていた。

「なあ、やめる気は、無いのか？」

人を食うことを、である。

「はあ？ やめるわけねえだろ！ これのお陰で俺は、それまでの人生逆転できたんだからな！」

「逆転、だって？」

つまり、負け犬の思いをしたことがある、ということだろう。

……これは深読みだろうか？ 僕は今の所、周囲に対する負の感情というものは、劣等感ぐらいで済んでいるが、この男ぐらいになつたときにそれ以上の事があるかもしれない……などという事を考えるのは。

「まあ、ここで語る必要もねえよつと！ おまえは俺に理由があることだけ分かつてりゃ……いや、それ以前にここで終わらせてやるから分かる必要もねえな」

僕と八木は、そんなやりとりをしながら切り合い殴り合いをしていた。

八木尖刃、おまえは、間違いなく、人間だと思う。

僕がそう認めたとき、八木は僕の一部にようやく、改めて注目した。

それは、僕の右腕。

「おまえ、まさかその右手……使えないって言うんじゃないやねえよな？」

ああ、ついに気づかれた。

最初から、そうだったのだ。封陣に巻き込まれたとき、僕は左手だけで物を掴む、動かすの動作をしていた。

何故なら、右腕が動かないから。

最初、それも怖かった。

「お前なんか、左手で十分だ……」

僕が精一杯の虚勢を張ると、八木はそれまでの態度をさらに崩し、笑った。

「ふっ……フハハハハハハハ　　っじゃねえ！　全然笑えねえ！
スカしてんじゃねえ、カスが！」

八木はそれまでの勢いをさらに増し、一撃一撃に必殺の威力を乗せて僕に襲いかかった。僕は内心冷や汗をかきながらも、スレスレの安心感を持つて避けと反撃を繰り返していた。その反撃も、やはり弾かれる。

ああ、戦えるのはいいけど、どうすりゃ決着になるんだよ！？

キレル八木、切れる僕。結局意味は同じなのかもしれない。
切り合い殴り合い、互いにスタミナを消耗していく。
相手の呼吸音すら聞こえてくるようだった。

しかし、拮抗は脆く崩れる。

「いい加減、終われよ、オイてめえ」

「出来るわけ、無いだろっ……！」

びしっ。

その音は、八木を打った僕のナイフから出たものだった。
八木から距離を取って確認すれば、刃先はボロボロで、罅ひびが走っていた。

「ハッハア勝負あつたかあ！？」

「はあ……はあっ」

そういう八木も僕も一旦、相手の足下にまで視線を落とす。

僕自身、ここまで立ち回るといふ初めての経験だからか、立って

いられるのがやつとの状態になっていた。

八木は、僕に遅れて顔を上げ、自分を睨んだ『一つの目』と、『もう一つ』を見ながら、それまでの戦いからでしか分からない答えを導き出した。

ずつと僕の右を狙った後、たまにフェイントとして左側から攻撃することがあったのだが、僕はそれに対しては、いち早く反応した。それは、単なる右腕の使用不可能では説明できない。

「お前……まさか右目も見えていないのか!？」

「……ノーコメント」

もう一つ怖かったのは、こっちの方だ。

まさか『左目だけ隠しただけで視界が全て暗くなる』なんて。

世界が変わったことも大分恐れたけど、いきなり自分が欠損していた事も、恐ろしく恐ろしい。

失うというのは、無い事よりもむなしなものだ。

持つ者と無い者の差はその程度でしかない、というのは、僕の持論。

と、前触れ　少し、空気がピリツとするぐらいのだったががして、

瞬間、八木がその場で炎に包まれた。

「取り込み中悪いけどー！　誰か忘れてない!？」

離れた所から、大きく響かせた声があった。

「『炎技・離火』……その状態なら、燃えるんじゃない?」

終章リユニオン

「その竜鱗、だっけ……それがなければ私にも勝ちの目は出るよね？」

朱夏の言うところの「離火^{はなび}」（ちなみに僕は「名前のわりに派手じゃないな」と、明らかに花火と勘違いしていた）が八木を焼いた。

これまでの炎と違い、手元や足元から直接出るのではなく、何か石火みたいな光が空気を伝い、対象に達した所で発火したのだった。ダイヤモンドは純粹に炭素で出来ている。だからこそ、燃える。今時中学生でも知っているかもしれない。

不意打ちでこれをやられては回避は不可能、大人しく焼かれるしかない。はずだったのだが、

「だからどうしたって!? ああ!? 皮一枚剥けたじゃねえか!?!」

どんな早業なのか、一瞬の間に八木は竜鱗を身に纏っていた。

炎を打ち消すウロコ。

八木は呻りながらまとわりつく炎を打ち消し、遠く朱夏にまで聞こえる声で恫喝した。

既にその表情に余裕は見えなかった。いや、その前に表情を竜鱗で覆っていたので、見える見えないも無いのだが。

八木は、朱夏のいる方、道路の百メートル以上先を睨んだ。

「折角取っておいてやったのよ……あー分かった。そんなに死に

てえなら先に始末してやらあ！」

そうはさせるか！

八木が走り出すその前に、僕が動いた。自分ではつきりと疲労が溜まっているのが分かるが、取り合えず動きに問題は無い。

「ダイヤモンドが燃えるんなら」

八木の剥き出しの胴を、背後から僕が全力を乗せたナイフを、裏拳の要領で斜め上から切りつけた。

「！？」

「逆パターンも、あるんだろ！？」

「……っ！」

皮膚が『最硬でない』今なら、切れる。

その目論見通り、僕の欠けたナイフは竜鱗を裂き、

センチの単位だけ食い込んだところで、脇腹を　切れなくなっ
た。

「な！？」

「てめえらいちいちうつとおしいんだよ！　勝てねえって分かって挑んでくる奴とか、右目右手が使えないのにいつちよ前に戦う奴とかなあ！　そんな奴らが俺に勝てると思うこと自体が馬鹿なんだってんだよ！」

考えるべきだった。どこかで焦っていたのかもしれない。

体の構成を変化できる能力が『目に見える所だけ』だとは言い切

れない。こんな簡単なミスをここ一番で犯すとは。

内蔵は、さっきの皮膚と同じく、とても硬くなっているのだろう。さらに色採が致命傷でもない限り回復するのは、身を以て実証済みだった。よってここから朱夏と上手く連携して攻撃を重ねるのもダメだろう。何より僕のナイフがもたない。今も欠片をこぼした。

手詰まり、か。

僕が諦めかけたその時、僕の中で時間が止まった。走馬灯かと思っただが、違う。

まだだ。諦めるのは早い。

声がした。

頭の中で。

俺を殺せ。そうすればおまえは生きられる。

誰だろう。

いや、何だろう。

そうではない、何故だ。

もうかれこれ十年近い付き合いだからな。良い使い手に会えて、俺はもう十分だ。

じゃあ何で、今なんだ。さっきだったらだめなのか。

今のおまえじゃあ、最期の瞬間しか話せないんだ。じゃあな。殺刃師さつじんし。これからも頑張れよ。

そう言つて、名も無きナイフの『意志』は、まさに神出鬼没を果たしたのだつた。

……なんだつてこう、文脈を無視して出てくるんだ。しかも新しいキーワードつて。

いや、純粹に心強かつたけれど。

また、僕の認識する世界に動きが戻つてきた。

「ハツハア惜しかったなあ!? 逃げられねえ今の内にさつさと始末しとこうかあ!？」

「くっ、はあああああああああ!」

八木の金属化した腕が振り下ろされかけた、その時。

中途半端に刺さつて抜けなくなっていたナイフが、発光した。そしてその輝きの中、伸びた。

「何!？」

華麗に光り輝く刀の形になつて。

刃先は白くて峰はそのまま灰色。

長さにして二尺五寸の反り返し。

不思議な淡さと色を持った刀が、

硬さをするりと緩やかに抜けて、

迫力の一切をすっかり切り捨て、

切れないダイヤを二つに分けた。

そのまま僕は胴を斜めに切った。

「うあ、おおおおおおおおあああああああああ
！」

まさしく断末魔の雄叫びを上げて、八木は切られた断面からずれ、『狐色』ではない、色の淡い、それこそかなり種類のある色のおそらくこれまでに『食った』人のものだろう、雪みたいな粒子を飛び散らせた。

その死に様はしかし、人間のそれではなかった。

死んだと言うにはあまりに幻想的過ぎて、まだ生きていると言うにはあまりに儂い。

「はあ……ああ……、いたっ」

そんな光景を見ながら、僕は振り抜いた腕に回されるようにして、独楽みたいな倒れ方で仰向けになった。

僕のナイフは、僕の手元で葉の散るように崩れ、形を失った。

僕は、そのまま鈍る頭で考える。

刃が、死んだ。

僕が消費した物。

あるいは殺した物。

生き物では無いが、意志はあった。

意思を、感じ取れた。

それ以前に、長年の愛着というものがあるのだが、それはそれ。

僕、だいぶ社会から外れてきたな……。

そんな事を考えていた僕の視界に入るようにして、朱夏がやってきた。

「統那」

「どうも僕も朱夏みたいにな、そういう能力があったみたいだねえぐっ!?!」

蹴られた。

……これいかに。

「人が、どれだけ、心配したと思ってるの!?!」

「えふっ! 僕はっ! 戦ったらダメだったのかはあっ!?!」

連続蹴り。蹴る毎に威力が上昇している! どっかで聞いたことがある気がする!

……これ、あいつに使ったら余裕で勝ってたんじゃないのか!?! いや、洒落にならないってこの威力! 貴重なアバラが一本逝ってます朱夏サン!

「何でそこまでいきなり命懸けられるの!?!」

え、心配してくれていたのか……? な、なんだ? ちょっと嬉しい……場合じゃない!

「待った! 折角生き残ったのにここで僕の命ラストベガスだから!」

意識：命を賭けた最後の賭博。

「ここで一句。」

僕は今　ここで死んじゃう　かもしれない。

字余り。

「……はあ」

呆れたのか、朱夏は蹴りをやめてくれた。

……僕が弱いのか、朱夏が強いのか……きつと両方だ。
何だこの力関係？　じゃんけんみたいだな……。

「それにしても、」

僕は、一連の感想、というか呟きを口にした。

「こんな世界があるのか……」

「何で最近になるまで知らなかったんだろうね」

封陣の中を未だに淡雪のように拡散し続け、えも言われぬ幻想的な風景の中、朱夏は呟いた。

「もしかしたら知らないままだったのかも、な」

「……知らない方が良かった？」

少し、間を置いて朱夏がそんなことを聞いてきた。

「いや……分からない」

「そう……」

その答えに朱夏は安心したような、微妙な反応をした。
ちなみに、僕は相変わらずボロ雑巾（進行形）で天を仰ぎ、朱夏は屹立きつりつしたままだ。

「まだ、誰かあいつみたいな奴がいるのか？」
「そうだね」

そいつらが現れる度に、こんな死ぬ気の思いをするのか。
いや、こんな思いをしてきたのか、朱夏は。

「うん、頑張らないとな」
「……ぷっ」

笑われた。まあ、悪い気はしないのだけれど。
だって学校では朱夏、全く笑わないのだ。というか、会話をしない。もちろん蹴ってくる事もないのだが。
ちょっととした嬉しさを隠しながら、僕は朱夏を睨む。

「何だよ」
「だって、努力が嫌いだって言っていたのに」

そう、僕は大体そんな感じの奴なのだ。

「僕は出来ないことは最初からやらないっていうポリシーであって、
そういう何でもかんでもやらないのとは違うから」
「へえ……じゃあ、まずは起きあがらないとね」

真つ当な意見だ、が。

「いや、それが……」

「？」

恥ずかしさをこらえて、僕は最小限の声で囁いた。

「……もう全然力が出ないんだ」

「ぶっ……くく」

「そう思うと思ったよ」

こつ何度も笑われては威厳も何もあるまい。

「ひー苦しい……はい」

そつと、朱夏が左手を伸ばした。

その手を僕は掴んで立ち上がった。

そして、ふらついてこけた。

ボロボロの体で帰宅した僕を、母さんは本気で心配し、さらに『喧嘩に巻き込まれた』という言い訳をも簡単に信じ込んだことに僕は少なからず罪悪の心地だったが、これ以上特に良策も浮かばなかったので、心中でひっきりなしに謝っていた。

さらに翌朝、起きて朝食を食べ終わり、部屋のハンガーにぴつちり掛けられた制服を見て僕はびっくりした。なんとたった一晩で、制服の破けた穴という穴が修繕されていたのだ。しかもほとんど目立たない状態で。

出かけるときに、我が敬畏の対象となった母の表情、特に目の下に隈が出来ていないかを窺ったのだが、それらしきものは見えなかった。それどころか僕を見て微笑んでくるもんだからもうこれは驚嘆するしかない。

僕は長年愛用してきたナイフを失った代わりに今、カッターナイフを持っている。質は全く違うのだが代用としてはこれで十分。こうしているのとしていないのではまるっきり違う。だから僕は体育が嫌いなんだ。

そして、一戸建ての家を出る。

時間に余裕があるので、壁に背を預けていると、向かいの家から朱夏が出てきた。

幼馴染み。ただし小学校の途中から交流は無い。

それが、僕らの関係だった。

「おはよう」

「……おはよう」

こうして、僕は日常の中で、非日常へと踏み出した。

終章リユニオン（後書き）

こ（んなど）こ（ろ）まで読んでくださった方、本当にありがとうございます。
ございます。

ここでこれから（2010年1月現在）のこの小説と作者について
連絡しておきます。

元々1章に当たる部分だけ投稿してみると（勝手に）決めていたの
で、一旦、この話はここでお休みです。ちなみに最終回ではありません
せん（終章って銘打ってますが……）。感想・評価、早く続きを讀
ませろ、あるいはこの箇所は色々と（特にパロディの取扱いが）マ
ズいだろうといったことがありますらご連絡下さい。

さて、作者のことですが（Hegiraなんてこれっぽっちも興味
ないぜとか言っても良いですが……）、ぶっちゃけ、学年末試験が
迫っていてもう片方の更新で手一杯です（結局続けるのかよ）。え
え、更新に関しては嘘をつきませんよHegiraは。そこだけは
売りです（ここだけの話）。というわけでこの小説の第2章は2月
に出すことになると思います。この調子でひと月に一章更新出来れ
ば数字が丁度いいのですが、そこまでの約束は今の所、控えておき
ます。……こ、これでは更新ペースまでパロディに!?

長々と書きましたが、これからもバックソード（和訳：刀）と、丸
括弧の多い作者をよろしく願います。

序章 インストラクション（前書き）

最初から拝見なさっておられる方、お久しぶりです。

序章 インストラクション

今回の話は前の話よりも肩の力を抜いて、見てほしい。

というのもこれは重要な事柄だけを言葉にすれば一行で完結してしまうほど中身のない、本来見向きもされないような内容の小さな緊張感のない話で、逆に言えば僕と一人の友達にだけ、重要な話だ。しかも何のオチもどんでん返しも無い、ハッピーエンドでもバッドエンドでもない、お話としてはひどく失格モノだからなおのこと質が悪い。

だから今これを見ている人は、むしろ眺めるように、難しいことを考えずに、言ったことはそのまま、吟味せず、邪推せず、絵のない絵本でも読むように気軽に構えてもらって構わない。多分今回は前回以上に驚きがない（と言っては八木の奴に失礼なのだろうけれど）。

本当に今回は舞台そのままの、ただのスクールライフの延長ではない。

だから本来は墓に持っていくような話なんだろうけど、しかしそれではこの後の辻褄が合わないもんだから、僕はあえてここで語るしかない。

さて、これだけ言ったんだから、青春のページというやつをそろそろ語って……騙ってでもいいか。

……そうだ、僕の話など偽物と言っておく方が大分気が楽だ。

つまり、これが本物の青春なのか、とかは僕の視点ではわからないということだ。もう僕が普通である保証　つまり世間一般における本物であるということなのだ　は今のところ住民票と戸籍謄本ぐらいのものだろう（あと学生証とかこまごましたものは結構あるけど）。

まあ、僕は生まれてこの方完全に周囲から外れた存在という意味での『にせもの』を見てきたことがないのだからこの事については

判じようがない。

偽を極めた奴ぐらいはいるかもしれないとは思っているけれど。

って、ああ……早速脱線した。……やっぱり僕にシリアスは似合わないな。病気か？

つまり、僕という存在の言うことを真実であるとか、また僕の行動が思春期や青春のそれと一致しているとか、そんな風に鵜呑みにしたらいけないと言いたかっただけで、他意はない。

じゃあどうしろと言う人がいるかもしれないけど、別にこの話は読解に値するような高尚なものじゃないから、やっぱり、たださっさと読んでくれればいい。

というわけで、以下、プロローグ。

ちなみに以上は取扱説明。無駄が結構垣間見えるところとか、いかにもそんな感じだ。

さて、今回のプロローグ。

麻倉打葉。

僕こと四手統那の、不知火筑紫に次ぐ、中学以来の友達。

ゲームが好き。特にRPG……だったか。

眼鏡に左右されないイケメン。

確か僕より成績が良い。というか飛び抜けて頭が良い……いや、そうじゃない。理解が早い。

僕と同じく集団に馴染まない質で帰宅部。

まあ、他にも語るべきことと語れることはきっと沢山あるだろうけれど、これ以上長々と僕の友達の男のことを述べたところで大して面白くもない……よな？

まさか男同士の友情を越えた関係になれと……？

なんとおぞましい考え方を！

……ゴホン。

まったく、僕のテンションは弛みっぱなしだな。

さて今後の展開を考えると、もしかしたらここで真実をさらっと言ってしまうのが正しいのかもしれない。

間違っているかもしれないけど。

というわけで、僕はここであえてある程度だが暴露してみる。

勿論、現在形の僕　むしろ過去形かも知れない　は知らないことだ。

語り部としての僕曰く、

色採には二つの共通点が必要と断言していいほどある。

一つ、そいつには色採のような存在との関係がある。

もう一つ、そいつは何らかの形で人生から脱落した。

つまり、この時点で麻倉打葉は条件を満たしていた。

逆に言えば、既になっけていてもおかしくはなかつた。
もう一つ逆に言えば、さらに核心に触れる事になる。
そして、

今回の話は、一方通行の山無し落ち無しストーリー。
筋書きだけならごまんとありそうなありふれた展開。
エンターテイメントは乏しく、カタルシスも微妙な、
他の誰にも何ももたらさない、僕と一人の友達の話。
それこそ後の為の繋ぎ・用意みたいな、まるで閑話。
……文章が一話分に相当する所で能書きは止めよう。
さあ、始まり始まり。

序章 インストラクション (後書き)

どうしようもなく学園バトルですね。

登校ネイバーフッド（前書き）

字数多めですが、多分さつと読めます。

登校ネイバーフッド

何かの気まぐれで、僕こと四手統那・高校二年生は、八木尖刃・土木関係の仕事人（推測）との事があつた次の日、向かいの玄関から、獅子島朱夏・高校二年生が出てくるのを待っていた。

そして、おはようと挨拶を交わし、

「……………」

……………」。

それから、『…………』の、百倍ぐらい時間が過ぎた。

しかも何故か決闘のような空気の中で見つめ合つて、というか、互いの視線を合わせてそつから目を逸らしたら負けという精神耐久ゲームをやっているようだった。ただし欠片もロマンがない。

正直な所を言えば、こつからどうやって自然な流れに持つてこようかとかその辺の会話運びを全然考えてなかった。

初手：エラー。

どうしようもなくしくじった。ああしくじったさ！

なんかもうこのまま朱夏にスルーされるんじゃないかって所まで沈黙が続いた。というか僕が声をかけないといけないんだっけ、こつというとき。

ここにきてようやく僕は動きだそうとしていた。

しかし次の一手は、朱夏とは別の所からきた。

「おつと、統那じゃないか」

僕と朱夏は、同時に僕から見て左方向へと振り向いた。

慣れ慣れと僕の名前をいかにも適当というかフランクに口に出し

たのは、

「浪雅ろっが……」

彼女……そう、名前からは想像もつかないが、彼女は夜天やてん浪雅・フリーター。

その格好いい名前の彼女は僕の通っている高校のOGらしく、どこかの体育大学を卒業したらしい。

今日も今日とて質の良さそうな、しかし刻々と時刻を刻み続けてすっかり貫禄の出たジャージを身につけて、今はジョギング……などと健康愛好家みたいな事をしていたらいいんだけど、僕は不幸にもそんな姿を見たことがない。

つまり、いつも右手に携帯左手にビニール袋のコンビニ帰りという出で立ちで僕の前に現れるということだ。

ちなみにジャージは上下で数万はしたらしい。ぼったくりじゃないのかとか色々と思うところはあるんだけど、僕にそんな口出しができればいいでもない。

できたからといってあまりする気もないけど。

その浪雅は「んー」と何事かを考え、

「いきなり呼び捨てとはご挨拶じゃないか」

「失礼しました夜天さん」

僕の最上級の営業スマイルが炸裂。

カウント、ノーダメージ。

「本当にご挨拶だな。さて、どうしたものか……」

いきなり僕の生殺与奪が決められようとしていた。

というかこうやって彼女のコンプレックス（はつきり言って武士

っばい。男っばいとか以前に)を突つつくぐらいしか僕の彼女に対する抵抗手段はないのでこれくらいは許してほしいと思う。
それ以外では僕の分が悪いんだから。

「そつだ、挨拶がまだだろう。ほら」

「ほら、って……」

確かに、最初から名前だけというのは失礼なのかもしれない。僕は最低限のことぐらいはするべきか、ときこちなく首だけで軽くお辞儀した。

「……おはようございます」

「おはよう」

それを期待されていたのか、にこりと挨拶をしながら微笑んだ。そして浪雅はおもむろに朱夏を見た。なんか得意そうにフンとしながら。

それに対してなんと朱夏は怪しむような視線を……僕に向けた!?
何で僕なんだ!?

「……ふーん? これは私に対する当て付けて事でもいいのかな?」

「どういうことだ!??」

挨拶が!?

おまえにはちゃんと最初からやっただろう!? ミスったけど! 悪いが全くもって僕には分からない、というか当て付けてなんだ!?

「おお? うーん、……成程。結論として、統那は隅に置けないってことか?」

「一体僕が何をした!？」

「挨拶か!？」

「挨拶なのか!？」

「というか隅に置けないって何かの決まり文句だったような……なんだっけ？」

そして浪雅の奴は僕を見て、鼻を鳴らした。見る間に僕の状況だけ悪くなっている気がする。しかも僕だけがわかっていないっぽい。

「それに何だその顔は。鳩が食らった豆鉄砲みたいな顔をして」

「どんな変顔だ!？」

豆鉄砲みたいな顔ってひょつとこぐらいしか思い浮かばない。銃口をイメージした感じの。

ちなみに、僕の変顔レパートリーはひょつとこ、般若、悪尉に三日月……ちなみにとんでもない嘘だから信じないでほしい。僕なんかにジャパンの伝統芸能・能が出るはずもないじゃないか。

「ああ、鳩が豆鉄砲を食らった、だったかな、そういえば」

「うつとおしいから鳩から離れる!」

それに現代っ子は豆鉄砲を知らないんだから図解してくれないと話にならない、ってこれ論点からズレてるよな……などと、僕は地の文なら多少ピンボケしても全然良いや、などと平気でそんなことを思っているらしい。

「む、鳩が違ったか……となると、九官鳥か？」

「僕が言ったのはクイズのヒントじゃない!」

鳩から九官鳥。随分な変化だった。

「ふう、甘いな統那。どうしてそこで鳩と九官鳥が似ていると気付かない。私は悲しいぞ」

「どういふ事だよ……あ」

よく考えると『鳩』の間に『官』を詰めると『九官鳥』だった。

……こいつ、空そらでそんなこと考えられる程に偏差値高かったのか？

「いけないなあ。いくらフリーターで普段はこんな……まあサラリーマンには似合わない格好をしているからと言って、私を見限るのはいけないな」

「そこまでは諦めてない！」

いくら僕でも、少なくとも自立できているのを認めることぐらいは出来る。

本当、僕に出来るのは自律ぐらいで、いつまで経っても自立できないんだからもうここだけは他人を尊敬するところだ。

と、僕が感心していると、

「あ、違ったか。見くびるのはいけない、だ」

「やっぱおまえ頭悪かったな！」

ああ、僕の錯覚は幻だった。

そしてすぐに錯覚と幻、どっちでもいいことに気付く僕。

それと今の内に言っておくと、僕はこの年上に対してはなんとも酷い言葉遣いをしているが、これはまあ、初対面の頃ぐらい、過去の僕が他人に対して何の思慮も持てないような、自己中小学生だった頃の 名残なので、今更改められないだけなんだ。

自己中の中学生にはならなかったけど。

「何を言うか。私の卒業した大学は……あれ、どこだったか」

「おまえは近くの体育大学だよ！ 頼むからこれ以上後輩を失望させるな！」

「全く、ろくなもんじゃないな。私の人生は」

「まさか母校を忘れるなんてそうそうない人生だろ……」

一番最近まで通っていた教育機関を忘れるって、履歴書に合わせる顔がないぞ、それ。

僕ぐらいのどうでもいい奴に合わせる顔はあるけど。

何か話題が、僕の個人的興味の領域からしてどうでも良い方面に行きつつあるので僕は切り上げるタイミングを探した。

切り上げるのは、多分得意だ。

「さあ、学歴なんて詐称してしまおう」

「捕まる！」

「では査証」

「いや、どこどこを卒業したからあなたにはこんな特権が実は、とかないから今から調べても無駄というか」

自分の読解力に感心しきりだった。

それよりも、なんと僕は切り上げることができていない。

「ふむ、やはり学歴なんてものは些少だったと」

「結局それが言いたかったただけだろ！」

なんと彼女は駄洒落が大好きだった。

案外筑紫と気が合うかもしれない。

「さあ少年、そんな制服とはおさらばして一緒に働こうではないか！ 私の方は既に君を受け入れる準備が整っている！」

「今時何の取り柄もない奴の高校中退がどれだけ就職危ないか知ってるか!? とうか僕は独立出来ないのか!?」

そして『そんな制服』とか言うな!

これは僕の母さんが一晩で直してくれた大切なものだ!

……いや、純粹に感謝の気持ちだ。マザコンではないぞ僕は。

それにしても、最近どの方向も行き過ぎが掘り尽くされた感があるからなあ。今更マザコンもどうだろう。

「まあまあ、よいではないか」

「あゝれゝ、つてうちの制服に帯は付いてねえ!」

二人で寸劇を披露して、それを僕が断ち切った。

僕の人生では結構レアなノリ突っ込み。こんな所で披露してしまった。

どうやってか、いつの間にやら剥ぎ取られた制服の上着を僕が取り返していると、浪雅（やっぱり女子の名前にしては格好良すぎる）は周囲を見回した。

「 と言っている間に彼女はどっか行っちゃったな」

「いきなりなんだ って本当にいなくなってる」

朱夏の姿は忽然と消えていた。どうやら愛想を尽かされたらしい。

……さ、寂しくなんかないぜ? 僕はMr・ダット（＝脱兎）と言われたことがあるけど（当然流行らずにすぐ下火になった）寂しさでは死なないぜ……。

と、またしても自爆。

本当に僕は地の文で自由だな……翼でも生えてんのか?

「おー、振られたかな?」

「何かを誤解している!？」

「ん？ 付き合っていないのか？」

「そんなこと身持ちが素晴らしく素晴らしい浪雅さんに言われたく

……いえ全くの誤解にして何でもないです僕は戦争反対です」

後半は（誰にとは言えないが）言わされた台詞だ。その台詞を聞いて浪雅は、

「うむ、良い心がけだ。まあしかし結局、君は私を求めずにはいられなくなるから、その辺の覚悟だけはしておくといい。では、機会があつたらまた会おう」

「昔からそう言うけど、何なんだその自分自信な台詞」

「おお、なかなか上手いこと言うな。そう、私には自信があるんだよ。だから生涯フリーターなのさ」

「嫁いで養ってもらう気満々かよ!」

「そうとも言う」

「頼むから僕以外にしろ!」

「まあ、考えておいてくれ」

そして、来た方とは逆の方に通り過ぎていった。

……しかし、僕はおそらく未来永劫、彼女には萌えないだろうな、と溜め息をついた。

教室トーマント

登校直後、教室に入った僕はいきなり、見たくもないものを見た。
麻倉打葉・高校二年生。

……いや、そういう風に言ったが、打葉が見たくないわけではない、その周りの状況が、だ。

打葉が別のクラスの生徒に、殴られていた。

それは僕が初めて見る光景と言うわけではなく、たまに見かけることはあるのだ。僕の目が離れている時に 逆に言えば僕なんかが近くにいる時は起こらないのだが 打葉はこんな目に遭うことがある。

一応断っておくが、僕は能動的な干渉や深入りは絶対にしない主義の人間なので（へたれ、に近いかもしれないけど）、打葉が自発的にでも話してくれない限り事態を把握することはない。つまり、打葉が話さないので、僕はこの件に関して打葉が一人で抱え込んでいる内は無駄に干渉しない、ということだ。

本当にまずいなら助けを求めてくれればいいのだ、と僕はある種の楽天的な考えでこの事態を見てきた。

言い訳みたいと言うか、言い訳そのものなのだが、僕は決して見過ごしてきたわけではない。待ちではなく、常に受け身の姿勢でいたのだ。換言すれば、僕は降り懸かる火の粉を払う事ぐらいはやっていただけ、消火活動にはあたらなかった。

だから、この時僕がやったのもそれに準ずる形で、あまり積極的とは言い難いものだった。

「おい、何やってんだ」

年相応の、安っぽい喧嘩腰の声を出して、自分の存在を示す。
打葉を囲んだ四人の男子の全員が僕の方を向き、

「ちっ、『時間切れ』か……行くぞ」

立ち去る。

どいつもこいつも僕に××××××（これを言うと当時の僕の担任……というかPTAあたりがヒステリックになるから伏せ字）をやられた記憶を思い出しながらというか、思い出してるくせに、僕が深追いしないのを良いことに悠々と引き上げた。

何というか、自適だなあ、と思う。

自己中、とも言う。

それと、××××××は誰でも知っているような単語で×××××××に大した意味はない。強いて言えば、痛めつける部類で、多分みんな知っている。ドキュメントで扱われているのを見たことがある。カタカナ六文字。僕はこれでも結構黒い。

いや、灰色 だったか。

それにしても奴らは見ていて、というか描写していて気持ちいい存在ではないので、僕は打葉の方を向く。

打葉は丁度起き上がるところで、その顔を僕に向けた。……案外顔が無事だった事に僕は感心した。

その面、大事にしておくのと良いことがあるぞ……っと、矛盾しているんだった。それは。

「いやあ、悪いな、いつも」

「そりゃあ目の前であんなことやってたら放っておけないって」

一回あいつらが刃向かってきた時 本当、言葉通りというか文字通り、全く僕に敵いつこない表現だな 僕はそれを当然、ねじ伏せたのだ。

だけどそれ以降は、僕はまるでパトロールの警官扱いだった。

僕はそれでもいいんだけど、それより問題なのは、打葉はなんだった『何もしない』のかということだ。

どうして抵抗しない？

そんな僕の心情を余所に、打葉は僕の『放っておけない』発言に何かを感じたのか、

「良い奴だな、お前は」

などと、今の僕にはとても重い言葉を言った。

「……………」

僕はしばし、黙ることしかできなかった。

以下、ちよつとシリアル…………いや、シリアス。あれ、シニカルだっけ？

ゴメン忘れて！

…………ゴホン。

僕は、打葉の台詞に対し、思う。

違う。僕は絶対に良い奴なんかではないんだ、と。

僕はただやりたいようにやっているだけで、ましてや昨日の僕は人生最悪の僕だった。

なんたって、これでも、簡単に、言うけど、ついに、もう、人殺しに、なったんだぜ。

もう僕は、何時何処で誰に何にどうやってどんな理由で殺されても、文句を言う筋合いは無い。

…………なんて、そんな覚悟、昨日の内に固めたけど、こんなちつぽけで当たり前の事、それこそ何時何処でも誰にも何にもどうやってもどんな理由でも、言えない。

殺人。殺刃ではなく、殺人。

さすがに、そこだけは、それこそ、真剣に、考えておかないといけない。

僕は他人の事をよく真似るのだが、本当に取り返しの付かないような都合の悪いことから目を逸らすような人の真似だけはしたくない。

罪は詰み、罰はバツ。巻き戻しは無いらし、烙印も消えない。これも当たり前のことだ。言うまでも、言われるまでもなく。

だから、僕はそれを軽んじた八木を憎み、立場を追いやった。あたかも罪も罰もないように振る舞うあいつから場所を奪い、自覚を持ってそこに座り込んだ。

罪とか罰とかそれ以前に、そこに法があるかどうかは、また別問題だけど、僕はそこまで考えが良くないのでこの辺で勘弁。

とまあそんな訳で、僕は既に良い人ではなく、ただの正義なのだと思う。しかも酷く個人的で矮小な、そして誰かにとっては悪となる、正義だ。

だって最終的な所は　　ああ、そうだ、今回のサブテーマは『正義』だからそこるところ、よろしく。

とまあいい感じに僕の言語が崩壊してきたところで、僕のこれ以上無いくらいに不真面目に真面目な話は一旦、中断。

僕が打葉に返事をしたところから話を再開する。

「まさか、普通だつて。それよか、大丈夫なのか？」

「まー、大丈夫なんじゃねーの」

僕は本当に、力を加えれば加えるほど反発する、抵抗力のようにむしろ力を加えるほど傷つける、剥き出しの日本刀のような感じかもしれないけど　　追い払うだけなので、この辺はあまり深く追求しない。

事実、打葉はこういつたいじめで骨折などの入院ものの怪我をし

たことは無いし、不登校になったこともない。実際、今もけろりとしたように僕の目には見えている。

僕はしてほしいと言われないと、してやらないんだ。

そんなお節介の反対の僕に、打葉はこう付け加えた。

「ホント、これ以上はいい。一人で大丈夫だ」

「……………え？」

初めて、拒絶された。

その真意に気付くのは、その日の昼休みだった。

教室トーマント（後書き）

真面目に不真面目と不真面目に真面目、どっちがマシなんでしょう。前者は『おっはー』の人が声優をやったキャラクターのもですが。

教室トークキング(前書き)

今回は、不発弾をかき集めたような話ですので、ご了承ください。

教室トークング

僕は授業の合間の時間、不知火筑紫に絡まれていた。

いや、これはまあ間々（まま）あることで、僕も逃げようと思えばいつでも逃げられるのだから、この場合筑紫に絡まれたという表現は不適切だろう。それに、僕としてもこの一時はやぶさかではない。

というか大歓迎。何を話しても良いというのが特にいい点だ。

ここでちょっとだけ脱線。

文句が言いたい。クレーム。

浪雅と言いコイツと言い、名前がカツコ良すぎるんだよ。しかもそれなりに品があるし。

で、品と言えば、口が三つの漢字だけど、そんなマナー的な意味になるとは僕にとっては結構意外だ。むしろ『品』で『やかましい』という意味も付け加えてはもらえないだろうか。

例文：君達は集まるといつもおしゃべりをして、本当に品しないね。

……駄目だ、流行りそうにない。

その結論はと言えば、自分の子供に、最悪でも、アニメのキャラの名前だけは付けるなよ、ということだ。

自分で言っただけなんだが、どういうことだ。脈絡が怪しい。

まあ、とにかく……絶対に名前負けするからな！

そう言う僕はとりあえず、負けなかったけど。

まして漫画やアニメを意識した名前でもない。はずだ。

刀と七。

そう言う意味では、の話だけ。

という、自己分析の話でしたっ。

さあ現実逃避から現実回帰だ！

筑紫があらわれた！

筑紫はこちらが気付く前に攻撃を仕掛けてきた！

きゃっほう、某クエスト使い易過ぎ！

……ちなみに現実の僕はここまでハイになれないので、あしからず。

「とーなん、貴様はとんでもないものを盗んでいった！ 盗難だけに！」

「しかし筑紫、勢いだけで何でも許されると思うなよ！？」

盗難って酷い。僕は窃盗犯か。

しかもその台詞から想像できる流れってやっぱり……カリオスト口っぽい。というかこの後の台詞ってアレだよな……え、もしかして僕が筑紫の心を盗んだとか言ってるまさか、こんなところで……告白か！？

……いやいや。

いやいやいやいや！

いや、嫌じゃないけれど！

でもこのタイミングってどうなんだ！？

まさかこの短い、十分にも満たない休み時間で、それこそ僕らは小学校からの腐れ縁なのだ。今までだらだらと漫然とした談笑（略して漫談）をしてきていつそんなフラグイベントがあったかもわからないような関係上、ここで言うのは多分、無いと思う。僕は。

まさかこんな変哲の欠片もない状況で唐突に『付き合って下さい（はあと）』などと、例えるならば、重大な局面（給食のおかわりとか！）でのじゃんけんでグーを出すよ、グーを出すよと言い続けてフェイント、結局その場ではチヨキを出して強かに勝鬨かちどきを上げ、それから数年後に何かのじゃんけんでグーを出して、はい約束守ったぜ、という不意打ちみたいな感じなのか……？ あ、ちなみにこれ筑紫にやられた実話系の話（……系って何だ？ ああ、ミニバン

のことか)。

ホントに填められた。グラビのレーザーをかい潜^{くぐ}って懐^{もく}に潜り込んだのにそこで例のガス爆発したぐらいに裏切られた感じた。これはモンハントーク。

……でも、敢えて日常の場面にそういったものを織り交ぜることによって何気ない風を装って、たとえ僕からの返事がノーでも傷つく事を回避する目的があるのかもしれない(と、都合のいい夢想妄想を繰り広げ続ける僕)。

まあたとえそんな意図があっても僕は多分断らないのでその辺は杞憂だ筑紫！

世界を包み込め、僕の抱擁力！

さてここで肝心の筑紫の様子を、これまでの経験から培った僕の観察眼で描写すれば、うん、目はこちらを純粹に見つめ、今更ながらその姿勢はきりつと背筋を伸ばして緊張に満ちているように見え、何より表情は真剣そのものだった。

……本当に重大な台詞を言う準備か！？

そうなら僕はこれからくる台詞に対して全身全霊全速前進で応えよう！

そうすることで僕は筑紫の真摯な態度に報いることができるんだ！
さあ来い、僕の相棒不知火筑紫！

「盗まれたのは……あなたの心です」

「……っ、差し引きゼロかよ！？」

足を上げてたたらを踏みかけ、トン、と足音をたてた。

僕にはもう、突っ込むことしかできなかった。

……いやいやわかっていたよ！？

僕に春が来ないことぐらいは！

筑紫がこんな奴だつてことは！

四手の二倍は、八寒地獄の八！

そして突っ込みに三点リーダーが入ってしまったことも僕にとって
は予想の範囲内の出来事に過ぎない。その間に僕はあらゆる自傷的
事象（イタい思い込みを口から漏らすこと）を飲み込んでいたのだ
から。

さあ、気を取り直そう！（しくしく……）
そして見えないところで僕だった。

「統那！ そこは『自己愛！？』と突っ込め！」
「嫌だ！ ナルシストと言わせてくれ！」

自己陶醉とか自惚れとか、複数、表現はあるが、横文字の方が話
し言葉としては有名だ。

……………。

四手ナルキツソス。水面に映った不細工な顔に絶望してそのまま
投身、溺死……やばい、リアルでありそう。

そしていつの間にか僕は勝手気ままな反撃をしていた。

「……はっ、ポーツとしていた！ まさかのカウンターとーなんだ
って！？」

「僕はお前を倒すためならどんな事でも耐えるんだ！」

調子に乗って恐ろしいことを言っているけど、全部嘘。

「さらにその上マゾだって！？ なんてレベルが高いんだ四手統那
！ それでいいのか四手統那！？ いやここはむしろ高みを目指す
のか四手統那！？」

フルネームを連呼された。こんな出席確認でふざけたとき以来
だ（ちなみにふざけたのは筑紫で、僕じゃない）。

先生：四手統那君。

筑紫：はい！

先生：……四手統那君！

僕：（返事したら罰ゲーム変死したらツインテール便所したらクソゲーム……）

筑紫：はい！！！！！！

これが、原稿用紙にして三百枚分続いた。

「ごめん、嘘」

僕はさっと謝った。

さすがにポエムみたいな性質は持っていないんだ。

「ハーメリア！」

「わからねえし巧くねえ！ 沈没するな筑紫！ 気をしっかり保て！」

某クエスト7のとある町の名前だった。ぶつちやけ時代に先取られ過ぎてるネタ。

プレステ2が出た頃。21世紀だったかどうか微妙なライン。

ちなみにこの町、ある事件によって沈むので、むしろ僕の突っ込みの方が密かに活きる形になってしまっていた。

……っっていうかまた出たよこのネタ。

「はめられた！」

「直すのが遅い！ 僕より早く言えよ！」

とか言ってみたり。

ああ、楽しい。

「このあたしに指摘など頭が高いわ！」

「そう言われると突っ込むに突っ込めないぞ！？ お前は將軍先生だったのか!？」

僕はあの学校（目当ては激安先生）に入学したかったけれど廃校になったのか、残念なことにとどこを探しても見つからなかった。

「そしてちゃっかり突っ込むマグロ君であつた……」

だつてお前將軍じゃないじゃん……つてマグロ君？

えっと……ああ、あれか？

……それにしても、アドリブはキツイ。フルコースにリブステーキを付け加えられたら……勿論違つて（add rib）。

「今ここに問題が四つある！ 一つはお前が地の文を言っていること。もう一つはわざわざローマ字にしてから和訳するな。さらに僕から『o』を抜かしてツナにする発想が分からねえ！ そして「そして最後の問題は思いついていないんだろっ！」お前のそのノリが問題なんだ！」

統那（Touna） 鮪（tuna）。

そして、中国で『鮪』はチヨウザメ、らしい。

いや、あまり信じないで。又聞きだから。

「そしてあたしのボケに救われる統那君でした……」

「真実正鵠を射ているだけに僕には何も言えない！」

「四つとか適当に言うからそうなるんだよ」

「追い打ちがキツイ！」

だがしかし、マグロが分かったのは快拳だと思うのだが、いかに。

「ところでトナー」

「どうやら僕の体にはどっかの漫画家みたいに墨汁が流れてるらしいな！」

「というかまたトナーかよ！」

「ややこしいって僕の名前！」

「さっきはああ言ったけど名前に負けそうだよ！」

「何でマグロにまで変化しなきゃいけないんだ!？」

「……真剣に改名を考えなくなるな……。」

「みんなどっか行っちゃったよ?」

と、筑紫。

確かに周囲三百六十度すべてをすべすべと見回しても（自分でも気持ち悪い表現だと思っている）僕と筑紫を除いて誰もいなかった。

「やーいやーい置いてけぼりにされてやんの」

「お前もな!」

「って次は体育だった」

「それを早く言えよ!」

「そして誰もいない教室、二人つきり」

「何もねえよ!」

どうせこの高校は男女別での体育なので、筑紫に後の戸締まりを勝手に任せて僕は更衣室に向かった。

この体育が、今回の事態にまた拍車をかけた（と思う）のだが、この時の僕はそんなことを考えてはいなかった。

教室トークキング（後書き）

字面は似てるけど、前の話との繋がりが皆無だったような……。

体育館クロスファイア

はつきり断言すれば、僕は基本的に運動音痴だ。多分、幼稚園児とタメを張れる（勿論高校生の僕が、だ）。

いやいや昨日あれだけ切った張ったの立ち回りをしたじゃないか、という意見もあるかもしれないが、あくまであれは条件付きの例外だ。

これは僕が銃刀法違反を犯している理由なのだが、おかしいことに つまり自分で自分がおかしいということは既にわかっているのだが、僕という人間は刃物を持っていないと、様々な意味でトロいのだ。

これこそ僕の大問題、大命題で、目下コンプレックスになっている。

……どっちにも口があるということは、これはもしかしたら品い話かもしれないけど一応聞いておいてほしい。

まず、この『持つ』という言葉がまた微妙なのできちんとここで はつきりさせておくと、僕が普通と何ら変わりなく生活できる境界線は、着衣のポケットや懐に入れるまではセーフ、鞆に入れるところからアウト、といったところだ。

それでアウトの時、僕は鈍くなり、鈍くなり、とても十代とは思えない思考速度の遅さと運動神経の悪さを発揮……というか曝け出す。

例えば、体育の成績。……以前成績に触れた事があったけど、あれは筆記試験のある科目限定だった、という言い訳をさせてほしい。どれだけ頑張っても、10段階で3以下。

しかもフィジカルな面の他に取り柄があるわけでもないからもう救いがたい（学習の能力は頑張つて中の上、その程度であることは最初に言った）。

もっと具体的に言えば、例えばバスケットボールでは、シュート

はおろかキャッチやドリブル、ポジションニングに至るまで全てが全く全然使えないので、それはもうまるでバイキン扱いだった。

かびるんるんの役にも立たないぐらいだから、破格の査定だよなあ……。

そう言えば、『使えない』と言う表現は中学のクラスメートにさんざん言われたのだが、正直言われる度にイラッとくる台詞の一つだ。別におまえに使われる為に生きてるわけじゃねえよ、っーかおまえ使われてみるよとも言いたくなる。まあこれは個人的なことだし。

そして、それ以外では至って普通だったので（いや校舎裏とかではちよつと逸脱したこともあるけど）体育に関して四手統那は、やる気のない、むしろやる気のない生徒、という認識で通っていたように思う。あとは、一部で近づかない方がいいと、囁かれるぐらいだ。

さてここまで口上を述べるからには何か意味があるんだろうなあ？ ええ？ と言った声も聞こえてきそうなので、そろそろ理由を説明し、「」の登場する文を披露しなければいけないだろう。

今まさに、その問題の体育の時間なのだ。

この時間、刃物を隠し持ったまま一年間やりきる自信がないので、僕は無手である。四手なのに（笑えないジョーク）。

それより、普通、日本の市民は武器を所持しない（警察とかが普通でないと言っているのではない……とか但し書きしとかないといけないんだろつなあ、今時）。

「そおらあー！」

種目はバレーボール。

あえてルールをつらつらと書き連ねることもないだろうけど、一応、サーブ権は得点で移り、移る毎にサーバーの順番が回って、1チーム六人であることぐらいを言っておけばルールの誤解は無いよ

うに思う。あと、僕と打葉はチームがわかれている。

あとは勝手に補完してもらえれば僕としては十分。活字は妄想が勝負だ。

「……………」

打葉が体重の乗った相手のジャンプサーブを打ち返した。

ところで打葉と言えば、中学時代に何人も彼女がいたという噂が立っているが、本人に聞いた限り、それは嘘、というのが僕を知る真実だ。実際打葉は週単位で僕とモンハンをやっていたから（何故かプレー中の話題はティルスに及ぶ。どれぐらい暇なんだろう）、そんな暇はなかっただろう。

「へいトス！」

「おらもう一丁！」

打葉が一発で返球した山なりのボールを楽々繋ぎ、アタックを余裕で決めた。それは真っ直ぐ打葉に向かう。

だが、噂が立つというのも厄介なことで、打葉のその整った容姿のせいで彼女の心…………、僕はこの心ココロという字の読み方が嫌いとか怖いとか、遠ざけたい言葉。特に名前にだけは読みたくない読み。なのだが、まあ今はいい…………。とにかく心、が次第に離れ結局別れちゃった、という被害の心理は事実と創りものが混ざりつつも実在しており、男の癖に女々しい奴ら（差別感ばつちりの表現だ）はそうしたことに對して背徳から目を背けた嘘つぱちの正義感、という故意の錯覚を連帯し、連帯しているのに無責任な行動を起こしている。そしてさらに無関係な奴はまた、行動を起こしすらしない、と僕は認識している。

最終的に、奴らにとって火種はどうでもよく、既に今となってはせつせと薪をくべているだけの単調な行為でしかないだろう。

……ありやりや、柄にもなく真面目に語ったよ。やつちやつたよ。まあ要するに、僕はあいつらのやつていることに納得していない。

「っ……」

「あーあー鬱はやっぱりダメだな。トスもきちんと出来やしねえ」
「もつとちやんとやれよー？」

僕の見る限り、打葉はちゃんとふんわりと、さらに無回転ボールでレシーブという高等テクまで見せたのだが、前衛の奴らは首と視線を傾げるだけで、ある意味息のあつた動きをするだけだった。

鬱というのは、そのまま字の如く『うつ』で、打葉の……まあ、ここではばかっても仕方ないだろう。

つまり、別称であり、蔑称だ。称号とも言う。

まあ、蔑称はほとんど別称の部分集合みたいなものだけだ。

しかし、その鬱という呼び方に僕が抵抗を示すかと言えばかなりの嘘で、僕的にはかなりハマっている（無論、可笑しいという意味ではない）。しかし、ただ、もう一つ、いや　ほとんど足りない。それは余談というか、わかる奴だけ共有してくれればいいのでここでは言わないけど。

物語を楽しむ隠し味、というか、まあそんなところで。

僕が『こころ』という読み方が嫌い　むしろ怖い　なのも、ここにあつて、別に夏目漱石を毛嫌いしているわけでも、誰か特定の個人を誹謗中傷しているわけでもない。

これは『僕はこういう人ですよ』という表示であつて、単に僕の感性の問題だから、誰かに押しつけるものでもなければ、勝手に取り入れるべきものでもない。

だから、これ以上詳しくは教えられない。

しつこく弁解すると、『心』という字の持つ意味はそれなしでは何も語れないほどに素晴らしいと、僕は思っている。

こうでもしないと、最近、差別疑惑にうるさいからなあ……。

それにしても、……まさか称号の話でここまで行くとは思わなかった。

さて、振り出しに戻る。

「……………」

「さあ次だ次ー！」

「あと22点。遠いなあ!？」

そしてその肝心の、というか主人公という立場でしかない、しない僕なのだが、前述の通り残念な無能なので、言うことは出来ても、この時間は聞いてはもらえない。でもまあいつもの打葉ならこの後で平気な顔　それが仮面でないとはい切れないが　を僕に見せるので僕は黙ってこの時だけは見過ごすしかない訳だけど。

……打葉が助けを求めたらいつでも切りかかる覚悟は出来てんだからな？　おまえら。

物騒な考えだが、僕はそのくらいには打葉に対して友情を感じているのだ。さすがに同性愛……は期待する奴はいないよな……何かもう痴漢の冤罪ぐらい怖いよこの話題。いちいち友情にケチ付けられそう。

とか、被害妄想に陥るのが最大の被害だったりして。

さて、もう必要な分は説明したので、これ以上描写して打葉の苦しみを表現しても気持ちよくはないだろう。

……もつと語らないと伝わらないというなら、もう実際に体験するとかしてほしい。まあ、打葉も熟れたこなもので、強かに凌いでいるので、この話自体はあまり参考にならない例だけど。

そういうところとか僕のこの対応が、世間一般じゃないところなんだ。

とはいえ、僕も小学校の頃に受けて、打葉の苦しみというものの一部はわかっているつもりだ。

僕はそういう意味では、打葉の先輩だ。

まあその頃は運良く不知火に助けられただけで、僕が実際にどうしたということはあまりないんだけど（僕がやっているのは筑紫の模倣だ）。

こういう時、往々にして大人の先生が注意するはずなんだけど、今一つ押しが弱いのでその場凌ぎにしかなくていい。まあそれにしたって高校生っていうのは、一番御しにくいような気がする。

「全く、やりきれないよな、四手」

とにかく、これが麻倉打葉の現状を、端的に表した一部である。以上、ネット越しの中継でした（これ、掛け言葉ね）。

体育館クロスファイア（後書き）

心という名前ですが、あくまでこの作品の世界では統那が怖れる、というだけで深い意味は無いです。作者の知り合いには今の所、『こころ』という名前の人は一人もいません。

刀七、の延長、というか短縮です。言葉遊びではなく言葉ふざけです。

もの名前が架空である、小説の後書きで言うのもなんですが、後書きを書きながら、ふと心って他にどんな名前があるんだろうと思ひ、まあ『しん』とかならあるよな……と検索すると、（本当かどうかはともかく）やっぱり予想の斜め上の方々ばかりでした。名前をキーワードに設定するの、間違えたかな……？ と、物書きの一人としてかなりプレッシャーを感じた経験でした。

廊下ワンダー

「おお、今日はまた美味そうな弁当だな。いいよなあ、親ができる人だと」

午前の授業で集中砲火を浴びせられたことなど、どうということないかのようには、それこそいつものことであるように、打葉は僕の席に弁当の蓋を置いて昼食を始めた。

「この間おまえの話したこと言ってみたらマジで晩飯にマーボーカレー作ったぞ、あの母親」

知る人ぞ知る、単なるネタ。

というか実際に作られたことがあるらしい。

「お、どうだった？ 美味かったか？」

「どうも比率が悪かったらしく上手くいかなかったみたいで、どっちかって言うと豆腐カレーっぽかった。しかも少しドロツとした感じの」

「ほお……」

打葉は僕の感想に興味を持ったような相槌を打った。

「次は成功させるみたいだ」

「いいな、それ食わせてくれよ」

「晩飯の残り物扱いで詰めてもらうか」

と、約束を交わして、

「ところでこの間、闇と光の対立っぽいこと話したよな？」

切り出してみる僕。

「ああー、なんかそうっぽいこと話したな」

と、特に訝しがることなく打葉。

「あれに関連する訳じゃないけど、正義ってどう思う？」

ちよっと思うところがあるので、意見を聞いておく。

別に僕は誰かの考えが聞ければ良かったので、相手が筑紫でも、まあ家の人はハズいからパスだとして……浪雅でも、それこそこの間の川井窓梓や、八木尖刃でも良かった。

一人、絶対に聞かない奴がいるけど。

そいつは、正義を道徳とごっちゃにしていたから。

今は多分、耐えられない。

まあいずれ向き合うけど。

「正義？」

「そう、海軍本部の連中が恥ずかしげもなくコートの背中に背負ってるやつ」

「ああ、あれ」

『ああ、あれ』って、他に『せいぎ』という単語にどういう誤解が生まれるんだ。

例えを出した僕も僕だけど。

「俺はなあ……正義ってのは逃げだと思う」

「……………」

「お前だから話すけど、俺の敵はな、皆正義を口実にしているだけで、やっていることはただの憂さ晴らしだ」

逃げ。

人間誰しもが感じる、ストレス、その捌け口。

その為の、正義。

そういう考え方も、あるか。

「多分俺が例えば転校していなくても、そいつらは別の奴にターゲットを変えるだけで、俺の思い出なんかはもう、去来しないだろう。だから俺はここまで耐えるし、逃げも隠れもしていない　　か
った」

「かった？」

なんだ？

過去形？

「ああいや、気にすんな　　」

と、すんなり打ち切ろうとして、

「おーい鬱、ちょっと来てくれないかー？」

などと、『打葉を討つ会』とか嘯いたりする（当然流行らなかつた）グループの頭的存在が、打葉に声をかけた。しかもみんなに聞こえるようにアピールするぐらいの音量で。

僕は立ち上がって軽く睨みつけ、そいつを気持ちびびらせることにどうやら成功したが、それ以上は打葉の行動次第だ、と打葉を見ると、また打葉は、拒絶、というか観念したように首を振った。

幼稚園の頃、深入りをして痛い目を見て、小学校でそれ以外のや

り方で助けられた僕としては、その時点で踏み込むという選択は消された。

そのまま、打葉は僕の目の届かないところへと、教室から連れられて出た。

……あ、弁当食い終わってる。といった即時的な感想もあるのだが、それを述べることによって、意外と台無しな空気になった。

台無しついでに、学校に着いてから放置されてきた（だって学校でだと会話しづらいんだって。今までが今までだし）朱夏の方を見ると、朱夏も打葉を見ていた。

ただし、その目は虐めを許さないといった、道徳的な正義で敵つまり悪、を見る目ではなく、『いかにも様子が怪しい奴を見る目』だった。

そして、それが角度を変えて僕に向けられたときは、多少驚いた。

……え、何ですか？ 朱夏さん。

「行ってみよう」

「え？ あ、まだ食べ終わってな」

い、と言う前に僕は教室からいなくなっていた。俊敏だった。いや、シュビーンだった。

直前、クラスメートが驚いた顔をしていたが、あれは朱夏の行動に対してだろう。何せいきなり僕なんかを連れ出すんだから、普通は一体何があったのかと勘繰るだろう。僕でもそうする。

……ああいや、『普通は』とか言うけど、僕が普通ではないことは重々承知している。

何せ、ガラスに切り裂かれまくっても痛みを感じた次の瞬間には治ってたんだから。

さすがにそれを普通とは言わないだろう。

で、その『普通ではない世界』の先輩とも言うべき朱夏はというと、僕を引きずって廊下を歩いていた。僕はブッシュベイビーの置

物か。

僕が制服のダメージを嘆いていると、朱夏がいきなり、

「怪しい」

と一言。

「怪しいって……あいつらか？ 別に普段通り
「そっちじゃない。統那の友達の方」

と一言。

僕の呼び捨てはともかく（一応、幼なじみだからありだろう）打葉のことは固有名詞で扱ってやれよ……とは言えない僕。朱夏のシリアスむんむんな雰囲気がそうさせない。

……朱夏とは、大概シリアスな会話がテーマだった気がする。

「打葉？ まあ、最近僕の手を借りないなー、とは思っているけど」

四つもあるんだから、一つぐらい全然オツケーなんだけど、とか冗談を織り交ぜながら話すが、その辺は見向きもされない。

「ちゃんと目を見て話してた？ あれは何かやさかしそうだった……何か嫌な予感がする」

と一言。

ここに来てようやく僕は、体勢を整えて無理矢理立ち上がる。というか朱夏がこのまま僕を引きずって現場に到着しそうだったので、さすがにそれは絵にならないだろうと思ったからだ。

別に見た目を格好良くしたいわけじゃないが、制服が傷つくのはもういやだったのだ。

母ちゃんが夜鍋をしているのを知るなんて思いはもう十分だ。かなり申し訳がなくなる。

僕の抵抗で一旦立ち止まることを余儀なくされた朱夏は焦りを含めた表情で目を細くして僕を見た。

……うん、そんな表情も可愛い。

勿論こんな状況（具体的には廊下の角で二人きり、とか）で口に出す訳がない。それこそ品がないだろう。さすがに心、の音が漏れるという使い回しというか、使い古しは無かった。幸運にも。

……良かったー！

「……………」

「えっと朱夏さん？ 何か……………」

まさか、顔に書いてあるとか！？ 実際有り得ないのに！

ちくしょう、世界の法則はどうあっても僕に牙を剥くのか！？

シビアだ！

「まあいいや……………今はそんなことしてる場合じゃないし」

『まあいいや』だつてさ！

やっぱりバシてる！？

僕との会話は……………まあそんなことですよね。この場合。

それに割と緊急事態な気がする。

僕はずるずると引きずられたスボンの汚れを落とし（ごめんよ僕のプロテク継ぎ接ぎスボン……………）周囲に異変がないか窺う。

ちなみにプロテクは、プロ並みのテクニクという意味と、プロテクションという単語を掛けた、思いつ切り日本でしか通用しそうにない略語である。

呑気に僕が括弧の中身を説明していたその時、

バガンツ、という音が、少し向こうのトイレの方から聞こえてきた。

「統那！」

「わかつてる！」

僕たちは咄嗟の判断で駆けだしていた。

……こういう速さも色採のものだろうか？

と、お決まりの、異能者が強くなってますよ的な解説を言ってみたり。

そんな内に、駆けつけることができた。

果たして、

朱夏の予想は当たっていた。

僕が先頭になって這入った男子トイレの中には、打葉と数人の気絶した生徒　まあ、ぶっちゃけいじめっ子ってやつだけだ　がいた。

ただし、双方とも普段とは違い　変わり果てていた。

片方、人数の多い方は、和式洋式を問わずにトイレの個室に放り込まれていた。

効果音がしたのは、どうやら閉じこもった一人を、ドア越しにと　どうか、鍵を掛けられたドアを突き破りながら殴った音らしい。丁度それくらいの穴が見事に開通していた。

もう一つの方、こっちの方がむしろ変わり果てていた。

麻倉打葉はその輪郭の周りから、藍鉄の色を揺らめかせていた。その意味するところは、一つしかなかった。

廁スモーク

「あーあ、来ちまったか、四手」

と、打葉は言った。

このとき僕はそれこそ、そんじょそこらの雑多な人物のように普段との落差に唖然として、い前として、う前としてえ前としてお前としていた。

というのをまあ、後ろの正面は全く気にしないわけで、

「やっぱりね……雰囲気がおかしかったのよ」

被害者のことを全く意に介さずに（どうやらこいつらの評判は朱夏の中でも良くなかったらしい）語りかけた。

しかし、勘でわかるもんなのか。色採って。僕には全然、それこそ前々からわからなかったぞ。

「ん、獅子島、か。同じクラスの」

打葉は今更のように朱夏のことを確認した。

実際この二人に交流の余地などクラスメートであることぐらいしかなかったのだから、実質これが初の会話と言っていいたろう。

まあ、朱夏と普通のクラスメート以上に交流があった人っていうのも、僕ぐらいなんだけど。

朱夏は矢面に立つように、傍観者でしかないような僕の前に回り、そのままこう言った。

「そこで止めないなら、私がおまえを止める」

やっぱり、暴力は許さないらしい。

……だけど暴力に対して暴力、というのは後で何かとツケが回ってくるものだが、朱夏はそれに気づいているのだろうか。

それとも、その為の正義、なのか。

……よく言われるけど、正義は必ず勝つ。

たとえ正義ってやつが今ぶちのめされても、次、またその次、そのまた次と時を重ねていつかは悪を滅ぼす（ここで悪の残滓が生き残るといのが続編パターン）。

逆に言えば、正義は滅びない。連綿と続きが終わらない。

まあ、それは物語の話だけど、ともかく。

そういう意味で、正義は何度でもやり直し、繰り返すことで、確率的に極限まで勝ちの目を持っている。

正義なら、官軍なら。

後に勝ち誇る歴史を綴り、後進に尊ばれるような偉業として語り継がれる未来が待っている。

それは、未来の世界がその正義の下に成り立っているから、正義を認めることを厭わないからだ。

……退屈でうっとおしい話かもしれないけど、これが高校二年生の僕なりの考え、僕の成分なので、カットはできない。

続き。

さて、ここで裏というか、陰を見ると、正義は敗者・賊軍・自分とは異なる正義に対しては容赦しない。勿論悪に対しても、だ。

まあ、敗者の中にはヒーローではなくとも、スターの扱いを受けるものも、少なくはないから、ここで具体的に敗者として、スターでない名前を挙げるとすると、『あの人はそんなじゃないんだ』といった異論が必ず出るだろうから、時代の遠さとかを考えて惨めに負けた敗者を敢えて挙げるとすれば、蘇我入鹿ってところだ。

権力を誇り、山背大兄王を殺したとかをほとんど無関係の（また完全に無関係ではないにせよ）日本の子々孫々にねちねち言われ、仕舞には大化の改新と、小の欠けた中大兄皇子、生ゴミの塊とセツ

トで覚えられるんだから惨めこの上ない。僕の高校の食堂のセットメニューでもこんなに酷いのは無い。

正義ってつまり、こいつらを量産するんだよな……僕も含めて。そう考えると、朱夏の道徳的な正義ってのは皆から見ても正しいと言わざるを得ない一方で、敵を無闇に造り上げていく行為でもあるのかもしれない。

まあ、僕の場合もう既に自分の正義を探す、とかは手遅れなんだけど。

改まって言うけど、僕はもう思想を改められません。

根本は絶対に引っこ抜けません。毛根も抜けません。

……むりやりボケを入れたからと言ってどうなるというものでもないか。

と、

ここまで他人の正義を考えてきてみたけど、結局は僕の正義は全く変わらないのかなあと、思うところに留まるだけだったみたいだ。そもそも大体、この手の問題は既に誰かが掘り尽くしたというか掘り返してもあまり嬉しくない、いわゆる現代における炭坑みたいなものだ。……もし炭坑の喩えが違うというなら、日本をそれで潤わせて見せて頂戴、っと。

だから、大方僕の考えを述べたところでこの話は終わりにしようと思う。

「ここで止める？ それもいいけどな、」

と、明らかに反対のことを言わんとする打葉だったが、

「なら止めて」

朱夏はなおその言葉に被せた。

なんというか、それは強制じゃないかと思わなくもないけど、こ

れは打葉の方が明らかに悪いだろう。

たとえ、こいつらが仕返しをされても仕方なかったとしても、この状況が良いと言う奴はいないだろう。

そこで爽快感を得るような人間とは、僕は友達になりたくない。

つまり、打葉はこの状況を進んで受け入れているわけでは、ないと思う。

「向こうが止めてくれねーから、遂に俺はこうするしかねえ」

「……！」

「何だっ!？」

打葉は、まるで平生と変わらない語調とは裏腹に、ポケットに手をつ突っ込むまでもなく、手のひらにあった物を、

「人体に優しい、煙玉けむりだまだ」

手首のスナップだけで壁に叩きつけて、僕らを比喻ではなく煙に巻いた。

……どうして高校生の持ち物にそんなもんがあるんだ。

「そんじゃな」

そう言って、僕の横、朱夏の横を特に何と言つこともなく、駆け抜けていった。

廁スモーク（後書き）

人体に優しくない煙玉は……毒けむり玉ですね。
あ、これハンターには何の被害もなかった……。

廊下エスケイプ

トイレから逃げ出した打葉。

「あつ、待て！」

それをよくある口上とともに追いかける朱夏（それとオマケのよ
うに続く僕）。

廊下に出ると、

「待てと言われて待たないのもよくよく考えれば悪いな」

待ち構え、そんなことを言っていた。

……おまえ、格好良過ぎるよ。

何の達人まで行ったらそんななるんだよ？

「その問いには、太鼓のと答えるのが正解だろうな」

まあ、面白い答えを期待してた訳じゃないからいいんだけど、そ
ういう風に言われるとそれが面白いと思えなくなるから不思議だ。
僕の七不思議。

ちなみに、

「筑紫だつたら燧陣たっじんの達人とか言うんだけどな」

この燧、こたつの『たつ』である。

言われただけじゃ絶対わかんない。

それに、普通は漢字が出てこない。

火に達。

……むしろ、朱夏に相応しいかもしれない。
火の達人。

「ははっ、ホームドラマの冬的一幕みたいだな」
「……察し良いな」

というか、良すぎる。すげー。

『たつじんのたつじん』って言われただけでわかってるよ。
ここら辺でいい加減朱夏が焦れてるっぽいので（朱夏には、なんか僕の服が人肌ではなくあったまってきた！焦れてるって言うかこれ焦げてるかも！という僕の心の叫びは届いているのだろうか……）本題に戻ることにする。

「……僕達はこれ以上騒ぎが大きくならない内に打葉には止めてもらいたいんだけど、これは聞いてはもらえないのか？ 周りに迷惑だ」

僕は思ったほど冷静に話をする事ができた。

……やっぱりそれほど思い入れが無いもんなあ。奴らに。

「俺はせめて弾き返すのが終わればそれ以上はしないと誓えるんだが、それは聞き入れては貰えないのか？ どうせ周りには迷惑かからないんだ」

打葉は言葉返しというか、オウム返しというか（これは違うな）、同じような言い方で反撃してきた。

しかも『もらえないのか？』を漢字に直された。余計なお世話だ。一つだけ気になることがあるとすれば、僕と打葉で『周り』の定義が違う、というところか。

「聞き入れない。代わりに実力行使に出る」

「って待て待て待て待って朱夏！手を振り上げないで待って！」

ブログの如く炎上しかけた朱夏を（なんて喻えだ……）僕は前に出て打葉に背を向けて『ストオオオオオ……ッッッッ！』と全速全身のジェスチャーで収めることができた。

『待て』を五回も重ねてようやく、だけど。

おっそろしいなあ……。

「……………」

「じゃあ、こつというのはどうだ？」

僕が慌ただしく朱夏を収めていると、打葉の声が後ろから聞こえた。

大の字になっっている僕が首から上を振り向かせる図は想像以上に間抜けだっただろうけど、そんなことを言ってもしょうがない。

「俺とそつちのどつちかが勝負をする。ああ、勝負の形式は何でも良い。例えばじゃんけんでも、スポーツでも、将棋でも良い」

何でも良いという言葉はつまり、自信の表れだった。

打葉は僕なんかとは違い勉強もできて（わざと二桁の順位になるようにする）というところから、もう一つ察してほしい（、運動もできる（はつきり言って周りの環境が悪いので才能の発揮はされないけど）、ゲームセンターに行くことはないからどのくらいできるのかは知らないけれど、ゲームも僕の遙か上を行っている（モンハンしかやっているのを見たこと無いけど）。

完全に（）が付いて、但し書きみたいになっちゃったけど、打葉は全般の物事に際して器用だ。

むしろ（）はこの冒頭のように僕について付けられるべきだろ

うか。例えば、

打葉の方に体を向けて（僕は言った）。

……………ゴホン。

「それで勝った方は自分の要求を通す、ってか」

確認の為に聞いておいた。

いやその前に、勝負ってそういうもんだっけ。

「ああ、で、どうする？ そっちが勝負の方法と人、こっちが場所と時間を決めるってというのが正当で対等な取引だと思っただが」

「そっちな……………」

成程、確かに正当で、対等だ。

打葉は『何でもできる』から、打葉が方法や人を決められるとこっちが決定的に不利になる。だからと言って全てをこっちが決めてしまうと今度は打葉に対して釣り合いがとれない。

打葉にとって、丁度良いハンデだ。

……………いつの間にか僕達、格下扱いされてるけど、今は置いておく。さて、知的なのは向こうに分があるから、最初に選択肢から排除まさか運に頼るわけにもいかないので、じゃんけんも無いだろう。……………ぶっちゃんけた話、選ぶ手も、選手も、最初から決まっている。

「僕が出て、方法は禁止手無しの対戦格闘……………あ、ゲームじゃないからな」

「何勝手に決めてん」

「わかってるよ」

朱夏が何かを言ってしまう前に僕が勝手に決めた。まさか朱夏に、というか僕以外にこんな勝負をやらせるわけにもいかないだろう。

朱夏の正義に付き合わせるまでもない。
火の不始末ならともかく、僕の不始末だ。

「まあ、そうくるだろうなあ。こういう状況だってことはそういうことだしなあ」

何かを諦めたように、指示語を連呼した打葉。
何を諦めたのかは僕にはわからなかったけど。

「そうだな、時間は今夜の11時。場所はこの建物の音楽室あたりをスタート地点にするか、さて、そうと決まったら俺は早退した方がいいな。おっとその前に一つ聞きたいんだけど、いいか？」
「ああ……僕に答えられることなら」

打葉は右の人差し指を立てて、

「お二人さんは『俺のこの状態』について何か知ってるみたいだが、これは一体何なんだ？」
「と、言つと？」
「ああ、これは質問が悪かったな。そうだな、『俺は何になったんだ？』」

……人でないのなら、『これ』という表現も外れではないのだから、僕はそれについて口出ししなかった。

「……多分、色採しやくさいで間違いないっぽい」
「色彩？ 曖昧だな」
「伝聞推定だから、かな。それに、色を採ると書いて色採」
「ああ、そう書くのか」

さすがの打葉も、知らないことはわからないらしい。

「それで封陣ふうじんが出ていなかったのね……」

と、

不意に朱夏がそんなことを言っつて、
不意に打葉がそれに反応を示して、

「風神？ いや…封陣、こっか？」

「……！」（朱夏）

「なっ」（僕）

声を出すか、出さないかにキャリアの差が表れていた。
ばっ、と。

この場にいる三人以外の風景がこの間みたいに、白黒だけの殺風景になった。

紛れもなく、この間と同じ風景だった。

……おまえ、どんだけ吸収早いんだよ。

「おっ、しかし、これにどんな効果があるんだ？」

言葉に比べ、そんなに驚いた様子もない語調でそんなことを聞いてくるもんだから、僕は何の考えもなく正直に封陣の効果・効能・効用について喋っていた。

一通り聞き終えて、打葉は、

「まさかそんな非日常があるとはな。孤独な俺にぴったりだ」

と一息付いて、

「さて、本当に早退するとするか」

そしてトイレから脱出したときと同じように、打葉は僕達の脇をすり抜けて立ち去った。

捕まえる気すら失せる、そよ風のように。

……だから何でさりげなくカツコいいんだ。

なんだよそよ風のようにって。

とにかく、ビリヤードとかが上手そうなクールさだった。

「打葉！」

聞こえているかわからないが……いや、聞こえているだろう、僕は叫んだ。

「独りでいても、いいこと無いぞ！」

「……………」

……フツ。

フツー！

意味もなくフツー！

やっぱり反応なし！

むなしい虚空！

……いやまあ、朱夏も黙るこのお寒い光景、僕が作り出したんだよなあ…………。

とまあとにかく、こうして僕と打葉の学園バトル成立、と相成った訳なんだけど、突然、後ろからピリピリした空気を感じた。

むしろパチパチ。

いや、メラメラ。

「何で、私を無視して決めたのかな？」

「え！？　だって昨日だって朱夏結局あのままだったら負けてたし」

そのことを責めるつもりは全く無いけど、事実は事実だからなあ

……。
僕が台詞を言い終える前に、

「私は弱いつて思ってたの!？」

紅蓮の瞳が僕を睨みつけた。

一応、髪も紅いからアルビノじゃない。太陽に弱いつて言うか、むしろ太陽を殺しそうだった。

同時に一気に空気が乾燥してきた。これが朱夏の殺気が……と冷静に思っている場合じゃない。

乾燥注意報。

スプリングラーは……只今封陣の中につき機械類、作動しないんだっけ!？」

分析結果、やばいよ!

コード・レッド!

……あれ？　ブルーだっけ？

「待つて燃やさないでっつていうか燃やしたら死んじやう!」

カッターナイフでは炎に太刀打ちできない!

いや、太刀にも太刀打ちできないけど。

僕のそれはもう迫真の演技……いや、演技だったら殺される。迫^は偽^{くま}の拳動に諦念したのか、ため息をついて、

「あの麻倉……だっけ？　が只者だとは思えないんだけど……そこ

のところ考えてる？」

早速対策を考えだした。

しかし、今回においては朱夏の介入は無い。
尻拭いは他人の手でするものじゃない。

「大丈夫だよ。あいつは僕の友達だから」

「……それ、信じて良いの？」

「ああ。あいつはほとんど完全無欠だからな」

だから、安心して待っててくれていればいい、と僕は言った。

そして夜、僕はナイフ片手に打葉と対峙する。

廊下エスケイプ（後書き）

用語解説。

燧陣：こたつで陣取ってる人のこと。

色採：省略。

封陣：省略。

むなしい虚空：空しい＋虚しい＋優しさ。

迫偽の拳動：あまりに必死で逆に白々しい動作のこと。

音楽室プラスト

「封陣つてのは、外から見るとこうなのか……」

日付の変わる一時間と少し前（僕は英語で言うところのパンクチユアル、つまりパンクだから、時間はきっちり守るのだ）、僕は開いたままの校門の間に立っていた。

校舎のある位置には半球状の、藍鉄の色を表面に浮かばせた封陣が外から囲み、水のような、霧のような、どっちともつかない感じに光を屈折させ、校舎の形を歪ませていた。

「これに今まで気付けなかったっていうんだから、間抜けな話だよなあ……」

間抜けというか底抜けに抜けているというか。

しかしまあ、腑抜ける訳にはいかないのです、結局は突入あるのみだ。

というか打葉に余計な策を練るだけ無駄である。具体的には巖流島作戦とか。

ザ・ワールド使いに連呼されるまでもなく、そんなことはわかっ
てはいるんだ。

月並み人並みの並々なる台詞なのだが、用心して、し過ぎること
はない……の逆、用心するだけ無駄なのだ。

僕は腰抜けな自分を押して、歩きながら封陣に触る。

……抜け過ぎだ、僕。

「うわ、何の感触もないな……」

近くに来ると、表面だと思っていた箇所が、おぼろげに霞んでい

たのがわかった。

その粒子の一つ一つが打葉の色である藍鉄に薄く光り、拡散している。

その内を抜けて、いつの間にか夜の闇すら真っ黒に染める空間に入った。

……ここで気付いたんだけど、どうも色採というのは光の強さに左右されずにもものを見ることができらしく、『暗くて見えない』ということがなかった。

面は黒く、線は白く。

輪郭は白、空間は黒。

まるで写し取ったような世界。

まるで絵に描いたような世界。

「だけど色以外、変わらないんだよな……」

いや、

僕はさらにそこからおかしくなっているんだった。

僕は右腕を見た。

見える左目だけで。

「……やっぱり動かないよな」

ぶらんぶらん、と肩で揺らしてみただけど、くっついている以外には、何の機能も果たしていない。

視力検査みたいに、片目ずつ左手で隠して、やっぱり右が見えないということも確認する。

……辛うじて右足だけ動いているから、ある意味都合は良いのか？

もしも『右目』『右手』『右足』の三択でどれかだけ残せるなら、

僕はやっぱり足を選ぶのだろう。

自由が段違いだ。

さて、果たしてこの選択にどれだけ意味があるのかと言えば、ゼロだ。

……そもそも僕は何でこんな疑問を抱いたのだろうか？

……考えても仕方ない、か。

「さて、行きますか……」

僕は格好付けた台詞を誰にも聞こえないように呟き、下駄箱から音楽室を目指す。

……まさかその他もう一人が混ざっているということをし、そのときの僕は思いもしなかったけど。

十一時ジャスト。音楽室。

壁一面、崩れそうに積み重なった金属木製問わない楽器の壁をバツクグラウンドに、パンクな僕は打葉と向かい合っていた。

……吹奏楽部があるのかどうか知らないけど、もう少し楽器を大切に扱わないのか？

「時間帯が時間帯だけにホラーになるんじゃないかと思ったが、こうなるとリアルさに欠けて駄目だな」

「確かに、お化けの出そうな雰囲気じゃないよな……徹底的に人為の風景つばいよな」

「人為か。裏、の方が俺は正しいと思うけどな」

「僕らが表なら、な」

「違っぜ四手」

打葉の語調が変わった。

開始の合図。

「表は、多数派だよ　正義が逃げ込む先の、な」

最初は爆破だった。

天井という、視界から外れやすい死角から碎片が爆風に押し出されて降り注ぎ、振動で楽器の壁（……山？）は崩れた。

がらがらがつしゃーんばーん、って感じ。漫画だと『ドーン』とか、そんな文字を打つてるところ。

勿論近くにいた僕も無事では済まなかった。

天井の碎片が細かく僕の皮膚を削いでいく。頭は咄嗟に守ったお陰で禿げなかった。……ナイス僕。

服はまたしても犠牲になったが、こんなこともあるつかと服装は制服ではなく中学生の頃背伸びして買ったちまって、センスねえと僕の父親に　よりによって父親に馬鹿にされたせいで着れなくなつた襤褸ぼろなのさ！

ちなみに背伸びつてのは身長の方の意味で、年齢じゃない。

何故か今になってジャストフィット！

それにしても勢い良く裂けていったもんだ。いい感じにパンクだ。

「爆弾、仕込んでたのか！」

「手製だ」

如才ない！

言葉の意味は良くわかんないけど如才ない！

「警察に捕まってしまえ！」

「お前に言われたくはないな。そして次だ」

「っ、わあああ！」

足下が膨れ上がり僕は足下から持ち上がるように吹っ飛んだ。
いつの間にか（よくよく考えなくても最初からだけど）この部屋
は地雷原になっていたらしい。

「お前にむざむざ無策に接近するつもりはないよ、四手。何でもあ
りといったのはそっちだ。俺はちまちまちくちくとやらせて貰うと
するよ」

「痛っ、てえ……」

打葉は颯爽と音楽室を去った。……なんでこんな状況で颯爽なん
て言葉が似合うんだ、打葉。

立つ風に一人バツ四、で颯爽。

……やべえ、寂しい人だ！ 何この漢字の覚え方！ 離婚しすぎ
だろ！？ ああ、颯爽のイメージが勝手に崩れる！

……ゴホン。

対して僕は吹っ飛んだ勢いで楽器の山に頭から突っ込んでいた。
ぐちゃぐちゃな視界で、勝手に混乱しそっだったけど、なんとか突
き刺さった頭をもたげた。

「ど、こに行った……？」

言いながら、順当に廊下に出る僕。

一方を見ても、もう一方を見ても突き当たりまで何も遮る者は居
なかった。

「逃げ足速いな……」

確率論的に考え、結果、より部屋の多い方に歩く。

今現在、僕のいる階層は一階である。ちなみにグランドピアノな
んかの大きい物を持ち込む手間を省くため、というのが音楽室が一

階にある理由……と僕は考えているんだけど、どうだろうか。

というわけで階層の話をしたからには僕は今、階段の手前にいるわけだが、どうしたものか。

一階には他に事務室、多目的室なんかが置かれていて、授業に使うような部屋は音楽室ぐらいのものだ。つまり他の授業に使う教室は一階より上にある……ということぐらいしか判断基準が無い。

……。

……よし、

「どーちーらーにーしーよーかーなーてーんーのーかーみーさーまーのーいーうーとーおーりー、鉄砲撃ってバンバンバン、もう一つおまけにバンバンバン……よし、まずは一階を当たろう」

ちなみに僕はこれの奇数偶数を知らないのだからこれは正当な運任せだ。

そのまま廊下を直進 ドーン。

どぶあっ ずしやあああ……。

がばっ。

「ここまでトラップあんのかよ！」

吹っ飛ばされて床を擦り、煤けた僕の全力の突っ込みは校舎に空しく響きわたった。

「ちくしょう、いいさ二階に上がってやる……」

僕は引き返し、階段を一段二段と上り踊り場に出 ドーン。
じろじろじろじろじろじろじろじろじろじろじろじろじろじろじろじろ。

……。

……あああああああっ！

びぎちゃー！

「池田屋っちまっただろっが！」

僕は着々と優等地雷処理員の地位を固めていた。
堪えかねて、

「打葉……僕を殺す気か！」

なんて言った日にはもう、リアクション芸のそれになっていた。

音楽室プラスト（後書き）

一応、最後のパンクだけ意味が違います。
それと、颯はともかく、爽が寡やもめと同類に見えて悲しいです。

調理室ナイフズ

「おお。想像以上に壮絶で、想像を絶するな。四手」

「ふっ、ふ……。こんなの効かないぜ……」

あれから十四発もの発破、爆砕を食らった僕はようやくいよいよ打葉の所に辿り着いた。

ここは家庭科の調理実習で使う、調理室と呼ばれているところで……まあ、ガスと水道がテーブルごとに通つてると言えばあとはもう、十分か？

「事前に実証済みだったからいいが、やり過ぎるのはよくないな」

「え……。自分で試したのか!？」

何？

打葉つて基本一周回って馬鹿なの？

「まさか。迷惑のかからない場所で威力と効果範囲を算出して自分の強度ならどのぐらい耐えられるのかを計算してそこから標準誤差と系統誤差を現実的な範囲で考え、個体差をとりあえずお前に当てはめて理想的な破壊力を持った物に仕上げただけだ」

「……な、何？ 現実と理想？」

「確かにそんな単語は言ったがな。まあ、適当に言ったことには違いない」

違うのかよ。

と偉そうにしていた僕は、差が何回も出たところから理解が微妙だった。

ともかく……。本当に計算したのか？

なんか打葉だから、無闇に信じるのは良くないような気がする。詐欺られそう。学者みたいな人の嘘は専門家じゃないと見抜けないし。

ここでどう騙すのか、微妙だけど。

「とにかく、俺は被験してないから実際にどうなるかは究極的にはわからなかったけどな」

「そんなもん人に使うな！」

治ってるけど！

痛いで済んでるけど！

治療費も請求できないけど！

慰謝料は貰っておきたいな、っと！

「そういうお前もその左手に持ってるのはちょっと頂けないな」

打葉は僕の左手を指差した。

……おお、逆転裁判のロゴになれそう。

もしくは名探偵新一。見た目は高校生、頭脳は大人の方。

だとしたらその指差す犯人は……やっぱり僕だよなあ……。

……ゴホン。

指差されたその手には、カッターナイフが握られている。

「まあ、お互い様だろう」

「いや、そっちの方が法律違反だろ。爆弾製作って通報モノだろ？」

「大丈夫だ。これは飛行機には持ち込めない」

「持ち込むな！ しかも『これは』って止める！ 他にあるのか！？」

どうでも良い方向に話が転がりつつある。

……僕ここに何しに来たんだっけ？

「小麦粉と金属の腕時計と眼鏡さえ持ち込めればきつと粉塵爆発で
きるが……問題は小麦粉を怪しまれないようにすることとどうやっ
て拡散させるかだな」

「腕時計と眼鏡で火花出るのか！？ それ以前に小麦粉は却下され
るだろ！」

「材料を選べばそれこそ火打ち石も目じゃないのができると思うぞ
？」

「頼むから自爆テロは止めてくださいお願いします！」

頭を下げる僕。

土下座はしないけど。

「いや、いいんだが。まあ、仮にも戦いの途中なんだから目は逸ら
さない方が良くと思うぞ。特にお前、今は隻眼なんだろ？」

「……………」

普通に気付いてた。

どこにそんな判断基準が……。

……ところで、

隻眼って格好良くない？ こう、響きとかさ。

それに独眼竜だよ？ 伊達正宗だよ？

伊達ってここから来てるのか？

いいなあ伊達。僕も名乗ろうかな？

伊達統那……字面は変わったけど音はそんなに変わってなかった。
うーん、四手と伊達だもんなあ。

行を一つずらして段を一つ上げて濁点付けるだけだもんなあ。
そんなに変わらないか。

これぞフリートーク。

「お前が何に反応してぼんやりしてるのか俺には何となくわかるが、それは締まらないぞ」

「いや、わかつてはいるんだけど」

僕のスタイルというか、スタンスというか。

スタンドではないけど。風の噂でしか知らないし。

「それと理由を言っておくと、お前はさっきから意識しない程度にだが左半身が若干前に出ていて右バツターみたいになってたからだ」

お見通しの見透かしだった。

お見落としの僕とは全然違う。

昔々、あるカードゲームでなにかの化石から進化する貝のモンスターの特異能力をおみおとしと読んだ、僕なんかとは。

それに隻眼のことを指摘するぐらいだから、事実上隻腕であることもお見通し、なんだろう。

「さて、やることはいくつがあるが、調理室に来たからにはまずはこれだろう」

そう言っつて、打葉はあらかじめ元々の置き場所から取り出していたのか、包丁を二本持ち出して構えた。

……いや、それ調理室と言っつたら、に続かないって。

バナナと言っつたら釘が打てる、ぐらいに飛躍してる。極寒の世界や殺伐とした領域なら通用するかもしれないけど、ここは平和で温暖な日本です。と今の状況を棚上げにする僕。

とはいえ、

それなら僕の戦える分野だ。

いや、打葉が僕に合わせているだけか。

そして、

僕との間に三つ横に並んだ水道とガスコンロ付きの長方形のテーブルの上を一步ずつ跳んで打葉が僕に切りかかってきた。

僕は一見頼りなく、また、折れそうなカッターナイフで応戦する。結果、太刀打ち、できた。

「くっ……!」

ぶつつけ本番だったが、打葉の刃の向きに垂直に立てることで何とか折れずに鏝競り合いに持ち込むことができた。

どっちにも鏝なんてないけど。

保証はどこにもないくらいにそりゃあそつじゃ、な話だけど。

「それは、自前じゃないのか?」

「さすがに家から持ってくるのは、気が引けたんでな!」

そんなことを言い合う僕ら。

やっぱり鏝競り合いになると喋るよな。普通。

しかもさつきよりまともなことを話してる!

意外な感動!

……ゴホン。

ここで初めて気付いたのだが、片腕の力なら僕の方が上らしく、打葉は二本を交差させて僕のカッターを受けていた。

「お前、そんな才能があつたんだな!」

「おまえ、そんなに才能あるんだな!」

……。

すげえ！

『お前』と『おまえ』ってこの為の伏線だったのか！
字数一緒！

などと感動する僕を余所に、打葉は次の行動に移る。

後ろで支えていた包丁を外した。同時に僕のカッターが押し込むが、手応えが弱かった。

競り合っている方の包丁が時間差で引いていた。

受け流しだと、直感した。

下手にここで打葉を狙うと、ご存じ切り合いには向かない強度のカッターの刃なので、受け流しの包丁に折られてしまう危険があった。

かといってこのまま押し切っていると自由になった打葉の左の包丁が僕を切るだろう。

……よし、決めた！

「っせい！」

「来たか！」

僕は打葉の右を押し切り、思い切って弾き、打葉の左が僕の右腕を切りつけ 返す刃で僕のカッターが打葉の鳩尾みそおちの高さを逆袈裟に切り上げる。

カッターナイフが、肋骨を一回で断つたことに僕は少なからず驚いた。

……これ、切れ味云々の問題じゃないぞ！？

「ぐっ……やるな！」

肉を切つて骨を断られた打葉は一旦跳び退いて自分の怪我を確認し、僕の『切り傷』に対する耐性ほどじゃないにしろ、回復しつつあるのを見て僕の方を向いた。

対して肉を切らせて骨を断った僕は

「っ……っ！？」

「四手！？」

よくわからないけど、

突如動き出した『右手』に、首を絞められていた。
逆らうように。

調理室ナイフズ（後書き）

実際こんな方法でテロなんて出来たらおかしい世の中なんですけど、よい子は真似しないで下さい、と警告しておきます。一応。

ところでああいう警告（『よい子は真似しないデネ』の類）を見て真似をするなど言われるのはやはりよい子なんですけど、最近その文を見ると、よい子はよい子でも、『頭の』が暗示されていないか？　と思いはじめようになりました（まあ誰かがとうに思いついていそうなものですが、自分は齡17になってようやく思いつきました）。

内容にもよりますが、年少向けの警告の場合、真似るのはそれが悪い子ばかりですし（頭が良い子というのも珍しいですが）、そう思うと何か悲しくなります。

で、何が言いたかったのかというと、よい子の『よい』はグッドなのかウエルなのか、タチの悪い子の自分にはさっぱりわからん、ということですよ。

……なんでしようねこのどうでも良い話。

段々後書きがカオスに……。

調理室クロー

「……っああっ」

何だ！？

何が起きた！？

……違う、『何が目覚めた』？

どうした？

どうして僕は今この状況で苦しんでいる？

……いや、僕は一体『何に対して混乱している』？

『どの点』に対して動揺すればいいんだ！？

僕には、わからない。

状況はと言えば、前回の通り、自分で自分の首を絞めているのに相違ないし、他ならないのだけど、一体全体これはどういうことだ？
右手が凶暴、凶悪な意志を持って、潰そうといわんばかりの力で僕の首を乱暴に傷付けながら驚掴み、離さない。

思うように頭に血が昇らず、立っていらなくなり、後ろに尻餅を突いて倒れる。

「おい！ 大丈夫か四手！？」

打葉の声も心、なしか遠く聞こえた。

……そんなことを言うからにはこれはお前が釣り糸とか鋼線とかの目に見えないサイズの糸を使って何らかの方法で僕の右手に麻酔をかけた上でそれを操っている、というわけじゃないんだな？ 打葉。……疑って悪かった。今のところ必要のない限り、予告してから手段に出るから、そこんところは大丈夫だ。信用できる。

ということは、だったら、この右手は、勝手に動いているのか？

いつかのエイリアンハンド・シンドロームか？

そんな言葉を使うにはもう僕はあまりにファンタジックな存在になっっているんだけど。

薄れゆく意識の中で（この表現、結構様々な場所に出てくる気がする）僕は、決断した。

僕のカッターが、カチカチカチカチツ、と牙を剥く。

「うらあつ！」

右手に、しかもなるだけダメージの通る部位・手首の内側に、カッターを突き上げた。

右手首の神経の一部と動脈と静脈を切り、骨を傷つけた。痛みは、無かった。

「……はあつ、はあつ」

いい感じに緊張感が解れたのが良かったのか、それとも神経のつながりが解れたのが良かったのか、僕の右手は血みどろ（この言葉なんか、ハリポタでも余裕で出てくる）になりながらも、元に戻った。

元の動かない状態に。

肩にくっついてぶら下がるだけのものに。

動かないのが元なのかどうか、わからないけど。

とにかく、命の危険は、去った。

……なんかもう今回の山場を越えた気がする。

「どうする四手、なんか不安要素があるみたいだが、再開するか？」
「そう、だな……世の中には喘息と闘いながら試合に出るプロレスラーがいるんだから、試合中断という訳には、いかないだろうなあ」
「プロレスに限らず喘息のアスリートはいるけどな」

素晴らしいことだ。素晴らしく素晴らしい。
まあ、それも才能　何よりも、タフネスがその才能だと、僕は思っている　あってこそそのものだ、という補足は付いてくるけど。不可能という文字が辞書に無い人がいる以上、可能、という文字が辞書に無い人だっているのだ。

「さて、さつさとクライマックスでも突入するか」
「確かにこれ以上やっても長々とした感じが否めないからな」

さてここでもがらつと切り替えてクイズ。
以上の二つの台詞、どっちが言ったでしょう？

……ごめんなさいふざけました！
御免下さい！

答えは前者が僕、後者が打葉、でした！

つい、ちよつとした出来心と遊び心と戯れ心と移し心と変り心と漫ろ心と迂り心と徒心あだこころと賢しら心と子供心と芝居心と始末心と空心と花心と乙女心（これは虚言）と下心（これは失言）でこんなことをやってしまいました。申し訳ありませんでした。

……とこころで、

「長々つて、蝶々みたいだな」

思いつきでそう発言した僕の顔を、打葉は意外そうで、心外そうに目を見開いた。

「なんでお前、俺が長々（ながなが）と言ったのに長々（ちようちよう）って読んだんだ？」

「……え？　……はっ！　……やっちゃった!？」

「いや、そこでどんなにエキセントリックなりアクションをしても地の文がなければ無意味なんだが」

やっちゃった！

僕は二重に馬鹿だった。

というか、なんたることだ。僕がいかの間抜けな表情をし、天地のように驚き動揺して、常軌を逸した無軌道な反応をしたのか、これでは伝わらないじゃないか！

いやそれより間違った日本語を使うなど、僕は語り部失格か！？
こうしてついに僕はここに来た目的すら忘れかけてきた。

……いやいや、ちゃんと覚えてるけど。

覚えてる内に、打葉の行動を止めさせないといけない。僕の語学力が貧しく困り乏しい様子も露のように呈し見られたことだし。

「お前といると、真剣な話も馬鹿らしくなるから不思議だよな」

「……これから進めるところだったんだよ」

「そうか、ならば早々にそうしようか」

と、打葉は言葉を区切り、

「四手」

と、僕に僕の名字を言った。

「お前は、あいつらをどう思う？」

「あいつらって……誰だ？」

「おいおい、そこはわかっておくところだろう？」

かががみ
加賀上とかのグ

ループのことだよ」

と、打葉は自分の事をいじめる代表の生徒の名字を口にした。

……なんだ、そいつらか。

僕の知っている限り、あいつら、ただのいじめグループじゃなく

て、なんか中学校の卒業式の時にスーツ姿の極めた道の人達が（つまり 道が）真っ黒な高級車で迎えにきたのを自慢したり、同じ学校の誰かを怪我ではない原因で病院送りにしたという、よくわからないのを脅し文句にしたりと、打葉を虐げるのがまるで呼吸であるかのように、それ以上の悪いことを、事実かどうかは知らないけど誇っていた。

全くもって、くだらない悪ぶりだ。

打葉流に言えば、正義の群れ、だろう。

たかが一人をいじめるのに、めちゃくちゃシヨボい奴らだった。

むしろ打葉をいじめるのがついでだったのかもしれない。

まあ、とにかくあいつらが僕にとって、複数の意味で過ぎた存在であるのには間違いない。

だから、こう言った。

「ああ、あれ。僕の中ではあいつらはもう終わっているって言うか、何も関係ないと言うか、完結している存在、かな。だから今更蒸し返すとか、そういう暑苦しい事はしないな。簡単に言えば、興味がない、って言葉に落ち着くと思う。噂も噂だし、関わりたくないから、少なくとも僕はあいつらを割り切って、断ち切ってる」

「そうか」

羨ましいな、と打葉は言った。

俺にはできなかった、とも言った。

「実際、お前みたいに強く生きられる奴ってのはそう多くないと思うぞ」

「……………」

自分で強いとは思わないが、まあ人の鼻は赤いって言うし…………、おっと初歩的ミス。何だよ、鼻って。

とにかく、自分がないものを羨ましがるということは、ぱっと考えてみても、よくあるだろう。

実際僕が打葉を羨ましいと思う面も、あるし。

喧嘩以外、全てAランク以上といって差し支えないそのポテンシャルがどうして羨ましくないのか。

だからこそ、僻まれるんだけど。

「不思議なんだよな、俺は孤独だと思っていたんだが　もちろん、お前のこともただの奇特な友人だと思っていた」

「……危篤じゃないだけ、まあいいや」

奇特の意味も、単に珍しいってだけだし、気にするほどではない、きつと。

「ついさつき危篤だっただろ」

「……確かに」

絞められて、死にかけた。

病気と、言えなくもない。

「でも、お前は結局こんな所まで来るような奴だった。そこで気づいたんだよ」

俺は、孤立も、独立もしていなかった、と言った。

俺のことを考えてくれるやつがいる。

俺は、決定的に、独りでは駄目なんだ、と言った。

独りだと、何も無いのと同じなんだ。

「お前は、俺の最高の友達だ」

調理室クロー（後書き）

第二章をやって初めてお気に入り登録が増えました。やったあ。

ありがとうございます。これからも頑張ります。伏線も張ります。体も張ります（統那とかが）。

これは文字通り、切った張ったの小説……かもしれません。ところで切った貼ったとなると、新聞のスクラップですね。多分。……たまにはこんな後書きも良いですね。

と言いつつ、
お詫びと訂正。

前回の後書きで齡17とか言っていました、全くのウソでした。すみません。

自分大学生じゃないのかよと、気づいて即座に突っ込みました。どうも早生まれのせいで油断したのでしょう。今の所、およそ18歳と11ヶ月です。自分の年齢間違えて自分、老人かよ。まあ、誰も迷惑しないでしょうけれど。

年齢詐称（自分にこんな四字熟語を使う日がこようとは……）をってしまったHegiraですが、よろしく願います。

調理室ディテクト

「お前は、俺の最高の友達だ」

打葉は、友達が欲しかった。

僕は、その打葉と似ている。

……それは僕の都合なんだけど。

僕と友達になれる奴は、本当に少ないから、

「僕はあいつらの為じゃない、おまえの為にここまでやってるんだ

よ」

「そうか」

僕ははっきりと言った。

朱夏はあくまでも、あいつらの為なんだろうけれど、僕は『あいつらの為におまえ達を破綻させる』訳にはいかないんだ。だから僕は朱夏が踏み止まってくれて、今更ながらにほっとしている。

僕は何も意地悪で朱夏の参戦を止めた訳じゃないんだ。バッドエンドに繋がると思ったからだ。

出来過ぎた、最悪の形しか予想できなかった。

まだ出来の悪い中途半端の方が大分マシだ。

今回は、密かにそれが回避できただけでも、嬉しい。

誰も、死なない。

もし

「統那」

「なんだ？」

「俺な、実は一遍終わってやるつもりだったんだよ」

そんなことを考えていた僕に混ぜるように、言った。

このときの僕の表情はぎょっとしていたと思う。

僕の立ち回りを下回るのかと、怖れていた。

結果としてそれは杞憂だったんだけど。

「まあ、それで終われなかったからこうなった　いや、違うな。

こうなったから終われなかったんだ。何がどうしてこうなったかは俺にも推測の域を出ないから何とも言えないんだがな。まあ、お前と対等な立ち位置に立てたつてのは数少ない僥倖だったな

と、そんなことに自分で気づいてしまってるんだから、既にこれ以上お前と敵対してまでやることはないとか、俺の頭は考え出して、次の瞬間には既にそう結論してる」

出来の悪い悪役だな。勝手に人様に迷惑かけて勝手に立ち直っちゃまったよ、ははっ。

そう、笑った。

僕は打葉が笑ったのを見て、素直に良かったと思えた。

そして密かに、泣きそうになった。

恥ずかしながら告白すると、僕が泣いたのは朱夏のことだけで、それも幼稚園の頃だけなんだけど、今回もその例には『漏れていない』。

それでも僕が打葉を大事に思うのに、変わりはない。

「お前に説教されて改心する王道とか、暴走してお前に止めを刺されて残念な結末とか、予想しやすいものだったら楽だったんだがな、どうも俺は察しが良すぎたみたいだ。ここまできて、どういうわけか引き返せるんだよ。うん。今更引き返せないとか、全然ねえわ」

確かにそれは、出来の悪い悪役だ。

そうあってくれて、僕はとても嬉しい。

「まあ、やったことっていつでもあいづらぶん殴っただけだし」
「そうそう。結局そんなんで道踏み外せるかっていう話だよな」
「じゃあ、こっちの要求は飲んで貰えるのか？」

「ああ、もう大丈夫だ。一人じゃなければ、俺は何でもできる」

僕は、ただ黙って聞く。

「俺はもう、遠慮しない。安心して普通に喧嘩して、余計なことを考えず普通に成績を取り、何事も無いかのように普通にバレーボールも独りで勝ってやる」

独りじゃないけどな、と付け加えた。

「……それはさすがに無理じゃないのか？」
「そこところは、まあ見てろって。それよりまずは、あいづらを獅子島のあの異常な正義感にも否定されないようなやり方、つまり、法という方法で行く。それなら問題ないだろう？」
「……ああ。相手だけが悪いなら、朱夏も庇う理屈はない」
「だろ？」

につ、と不遜に笑った。

ここにきて、更なる高みと、深さ。

打葉の余裕に底はないのだろうか？

「俺はもうお前に守られるだけの存在じゃないってところを見せてやる。これからは本音を、本質を、基本を、そして本気を出す」

「それはまた、頼もしい台詞だな」

「それでは、手始めに」

そう言って、包丁を手元で鋭く捌き、バツ字を繰り返し描き無限軌道を保つ。

ひゅんひゅんひゅんひゅんひゅんひゅん。

……僕だって、そ、その気になればあれぐらい、できるぞ！
…きつと。

「お前との決着から、だな」
「え……？」

僕に包丁の片方を向けた。

……確かに中途半端だけど。

結局、こうなるのか。

学園バトル。

僕は、カッターを握り直す。

「最近嵌まってたやつにちょっと面白い剣技があつてな。それも試してみたいんだよ」

「まさか衝撃波とか出てきたりしないよな……？」

「さあ、どうだろうな」

「巫力でデカくなったりしないよな!？」

「ビビりすぎだろ」

「咆える！ タイショ君！ だばだばだばだばー！ とか言わない!？」

「お前、楽しんでるだろ」

「隙あり つとお！」

「おいおい、危ないな」

「いつつもいつつもつ、格好つけてんなコノヤロー!」

「しょうがないだろ、自然にこうなるんだ」

「そして、羨ましいんだコノヤロー！ 悉くたくまくかく隠しやがって!」

「おつ、遂に言ったな？ 俺のどこが羨ましいって？」

「文武両道！ 臨機応変！ 容姿端麗！ 器用裕福！」

「自分の容姿は知らんが、さすがに最後のには異論があるな、っと、結局俺の才能はどれも日の目を見ていないんだから、なっ」

「永久につ、封印してろっ！」

「残念だな、もう隠さないと、決めた！ そういう意味では器用貧乏とはもう、おさらばだな！」

「そいつはよかった、なっ！」

「おおつ、やるなあ！」

「刃物で戦う以上、僕に負けは無いつ！」

「そうか。なら俺はこいつも投入する」

「っだああっ！？ おまえここにも爆弾仕込んでたのか！？」

「幸い機械類が止まっているからな。ガスは通っていない。よって起爆し放題だ」

「最早テロリストの所業だな！」

「おっと、そことそことそことあとあんな場所にも。と言いつつそこにもあつたり」

「悉く避けられない！？ おまえ凶悪過ぎるだろ！」

「いや、ここまでくると俺も巻き込まれかねない」

「自爆テロ！？ 無茶苦茶だろ！」

「と言いつつ俺は窓から脱出を図る」

「なにー！？ ちょっと待って僕も連れてって」

「あああっ！」

ちゅどーん。

と、そんな感じで、今回の話は呆気なく終局を迎えた。

勝敗？ つかなかつたよ。

向こうはネタ切れで、こっちは決め手を欠いた。

調理室ディテクト（後書き）

昨日の投稿の後、またお気に入り登録が増えました。何か嬉しいですね。モチベーションが密かに上がりますよ。

それはそれで、今回の話ですが、まあ、実は元々前回の話とくっついていたんですよ。ただ、無駄に長くなってしまっ……分割二回払い。決してローンではございません。
今回はこの辺で。

自室インブレイス（前書き）

分割二回払いです。

自室インブレイス

初めに、

密かに自宅に帰り（さすがに男子高校生の夜遊び、ぐらいの言い訳は出掛けにしておいたからそこまでの心配はされていなかった）、風呂と歯磨きだけを済ませて寝て、朝起きると、居候の片那が僕に抱きついていた。

「やつほーおにい、おっはよー」

「お、おまえっ、またっ」

朝っぱらから動揺の極み、だ。

なまじ血が繋がっていかないだけに。

くっ……居候は義理の妹ですか!?

義理イイツ、と僕は歯を食いしばる。

それにしても何だこの禁断のアトラクション!?

前回までの僕と打葉が織りなした、ただ友情を確かにしただけの物語を吹き飛ばしてしまいそんな衝撃!

まさかのサービスシーン!?

何だよこの欲しない状況!

このシーンに何の意味が!?

字数揃える必要性あるか!?

ああもうしかもさつきから片那の柔らかいところがふにい、ふにい、ふにい、だと!?

いくら僕の四つ下（中一）とはいえ、それなりにはオンナノコだぞ!?

何が触れている!

そして何が狂^ふれている!

こんなチャレンジングなことしていいのか！？
むしろデンジャラスか！？
いったい何の意味があるんだ！？
家庭内で夜這いしてんじゃねえよ！ 夜かどうか知らないけど！
これまでに何度があったとはいえいちいち動揺するだろうが！
と、乱心の極みに達している僕。
僕、ご乱心だ。

「っ……何度も言うが！ 僕は片那のことは家族として思ってるんだからこういうことはもう止める！ それと僕に拒絶される度に髪を切るのも」

というか、髪が伸びきる度に襲撃をかけている気がする。

「うるさいなー、えいつ」

ちゅー。

……それ以外の描写をする暇さえなかった。
……僕・僕・僕・のファーストキッス、うば・うば・奪われた。
微妙にラップ染みた文章になるぐらいには、僕の言語中枢は壊れていた。

ってそういえば。

ファースト。

1st。

1SEG(このミス何？)。

……。

……なああああああ！？

片那に奪われたのもそうだけど、僕にとって重大なことがもう少し別にあった！

僕、この年でファーストキツスだったのか!?

いや待て……過去に誰かとしていないのか!?

朱夏と幼稚園児の気まぐれでしてたりしていなかったのか!?

筑紫とおふざけ、つてのも無し!?

無しか……。無しなのか……!

むしろそっちの方が残念っばい　　という僕が精神が残念なこと
になっている。

ちくしょう！　記憶違いか記録違いであってくれよ!?

僕、大乱心である。

「何でこんな滅茶苦茶が起こってんだ!」

がばつ、と。

僕は起き上がった。

「あら、やっと起きたのね、とうくん」

「え？　あれ？　母さん?」

最初に目を開けた瞬間、握り拳が見えたような気がしたが、瞬きの後にはその手は背中後ろに回っていた。

……『GENKOTSU』って技名が出てきてカットインが見えたのは気のせいだよな……多分。

「なんだか変にうなされていたみたいだけど……元気みたいね。それはそうと、早くしないと遅刻するわよ?」

言われて時計を確認する。確かに食パンをくわえて走らなければいけない程度には遅刻しそうだった。

何で起こしてくれなかった、と紋切り抗議をしてみると、起こし

たわよ、とのこと。

証拠はないけど、多分そうなんだろう。

周りを見ても、あの居候の姿は見当たらなかった。

……なんだ、悪夢か。

そう考えると納得できないこともない。

現実味があつて、荒唐無稽でもないんだけど（ここらはあまり認めたくない事だ……）、僕の望みは明らかにはっきりしていて、あれが夢であつてほしいということだけだ。

「あれ、とうくん……」

どうしたんだ母さん、と聞き返した僕に、

「口に赤いのが付いてるけど、もしかして口切った？」

「いやいやまさか、僕がそんな怪我するなんて……」

言いつつ、唇を軽く指で撫でると、

指先に、べつとりと何か赤いのが……紅いのが付いていた。

血液特有の鉄臭い臭いはしない。つてかなんだこれ？ 微妙にデカテカ成分が入ってる……？

「あらそれ、口紅ね」

わざわざ赤を紅と直したのはこれが。

……へえー。

「Kaaatanaaaaaaaa!」

かーたなあー！

リアルか！ 現実か！ 夢才チじゃなかったのか！ 幻想魔伝じ

……すつげえ、無駄なやりとり……。
こんなんで二百文字以上稼いでいいのだろうか。

次に、

僕はその後、家を出たところで朱夏に遭遇した。

というか、昨日とは真反対の構図だった。

遅刻しそうな時間ってのも含めて。

待ってくれた人も怒ってた。

「遅い！」

「ごめん！ ってあれ？ 待ち合わせしてたっけ？」

食パンのサンドイッチを片手に走る僕と、その前に行く朱夏。

……多分、僕より長い時間待ったんだろうなあ……。

やばい、段々と申し訳ない！

「……ちっ」

舌打ちされた。

チツ、っっていう音もした。

というか、なんか迸ってる気が。

「舌打ちに混ぜて火花が視界のちらほらにあったんですが目の錯覚ですか！？」

火の気を感じた僕はテンションを油でアゲることで相対的に朱夏の鎮静を図った。

「まさか、今の私は紅くないでしょう?」

「うっ、思い出させないでくれ、それはトラウマだ……って目が！
瞳が紅く燃えている！ 現代に生きるスポ根!？」

スポ根は根絶したと思っていたが、そう容易く根絶やしにはならないのか。と一瞬旅に出た僕。

ちなみに、紅蓮の瞳の朱夏さんのその髪は、黒かった。

……内なる闘志ってやつか？

「……ちっ」

僕のお茶化しに朱夏はさらに舌打ち。

さらに、

「痛ったあ!？」

舌打ちに混ぜって、なんか僕の皮膚に異様な摩擦が襲いかかった。
しゃっ、って感じ。

ザラザラじゃないけど、ツルツルでもない砥石に皮膚を超絶擦り
つけられた感じ。

「なんか擦過傷が！ 朱夏サンこれアンタの仕業だろ!？」

「さあ？ どうせ私は火を操れるだけだし、そんなことができるな
んて一言も言っていないよ?」

「それって摩擦熱で発火するとか……」

「まあ、それも含むかな」

信じられないことをさらっと言った。

……ここにもテロリストがいた！

もう日本は安全じゃない！

油でアゲたのは間違いだった！

オイルばーん、だ。

そして僕の周りはテロリズムのステップが踊り狂っているのか…

…と、明らかにテロリズムという単語を誤解していた僕。

後で調べたら、^{スベル}字面が全然違ってた。

リズムとリズム。……あれ？

……ゴホン。

「つてことは燃やしてるんですか！？ 善良な一般兵を！？」

「一般兵？ 統那は日本軍所属なの？」

イージーミスがイージーられた……はいつまらない！

「ごめんなさい言い間違いを広げないで！ 僕は単に一杯市民を燃やすんですかって言おうと」

「うわあ……私そんな酷いこと、できないよ？」

「すっげえ言い間違いをした！」

真面目に戦争時代に突入した！？

もうこれは焼夷弾のレベルか！？

ミスは四方一理を焦土と化す！

「言い間違いを広げてるのはそっちでしょ ふあゝあ……」

「あれ、眠いのか？」

「えー、うん、まあね」

「歯切れ悪いなあ。なんか深夜アニメ見てたか？ 僕は最近」

「見てるの！？」

なんか食いついた。

……何で？

「さすがに昨日の25時とかのは見れなかったけど、それなりに

」

「面白いの？」

僕の台詞を打ち切ってまで聞いてきた。

……んん？

「……え？ 興味あるの？」

「え、いや、統那が見てるなら面白いのかな、と」

「……」

何？

僕って朱夏に影響力持ってるの？

………何で？

一抹一片の僕の意見が通るの？

「いやまあそんなことより、昨日どうだったか、とか聞かないのか？」

「え、あーそうそうそれが聞きたかったの。心配で夜も眠れなかったわ。決して少し離れたところから見てたりしてなかったわ。でもこれって不意打ちとか卑怯なんじゃないかって葛藤したりもしていないわ。それで、どうだったわ？」

………白々々かしいー！

しらじらじらじらしいー！

四重に白い！

クワトロホワイト！

しらじらしてー！

語尾が『わ』っておまえに似合わないよ！

特に最後が合わない！

というか伏線こんなところに来た！

あの場にいたその他もう一人ってやっぱり朱夏だった！

……っ、何の意味もない！

「……まあ、かなりベターな結末で良かったよ」

「ふーん、ま、ベタじゃなかったらいいんじゃない？」

僕は、少し呆然とした。

……駄洒落！？

朱夏が！？

ちよっとこれは僕の経験からしてびっくりだ！

僕は朱夏をユーモアを省みない人間だと思っていたが、どうやら訂正しないといけないみたいだ。

「何よ」

「いや、何も」

いつの間にか、僕たちは校門を通りすぎていた。

結局僕達は、若干遅刻した。

……それなりに本気で走ったんだけど。いや、マジで。

担任の先生によると、甘い判定で、次同じことをしたら今日の分とその日を遅刻にするらしい。

自室インブレイス（後書き）

用語解説。

一 抹一片・そんな四字熟語、ありません。

ところで、バ リズムのリズムはどっち？

終章フレンド

そして、

「おーおー鬱、元気そうだなあ、良かったぜ」

……締め括りがこいつか。

締めて括ってやろうか……いやいやノリで言った嘘、短縮してノリ虚言だけど。

教室。休み時間。

加賀上（かどうか、実は僕には判断が付かない）が打葉に話しかけていた。

昨日。

どうも、全員頭を殴られたことで気を失い、記憶を失ったらしく（頭殴られて記憶を失うってネタも又聞きだから簡単には信じないで）証拠が出なかった。

というか、打葉という弱者にやられたなどと、皆信じたくなかったのだろう。

そのおかげで昨日の打葉のトイレでの一件は犯人として打葉が拳げられることもなく、また全治一週間以上の怪我人も出ずにトイレのドアが壊れただけの、器物損壊が主立った事件として処理されることとなったらしく、故に打葉が狙われ続けるのも、今のところ、変わりない（代わりに当時不可解な行動をしていた四手統那という人間に疑いがかかっていたということはこの時の僕は知らなかった）。

……というか、打葉、如才ねえ。

記憶をジェノサイド。

連載再開しないかな……しないよな！。

さて、

元氣そうな打葉は、

「あーあー元氣元氣。今までで一番気分爽快だし気色いい」

「……ああ？」

……気色いいって、その言い方が気色悪いな……。

加賀上（？）はそれはもう自分にとって不機嫌なまできご機嫌な打葉に、表面は完璧に取り繕いながらも、面食らっていた。

打葉はもう隠していなかった。

本音を、本質を、基本を、そして、本気を。

本気になると、このぐらい。

「大体お前らがそんなんだから俺の方に勝手に彼女らが寄って集^{たか}って俺を利用して当てつけてるってのに、お前らときたら俺を消そうとするばかりで何にも努力しない、七つの大罪で言うところのお前らは色欲と嫉妬と怠惰と高慢と強欲と憤怒を漏れなくセツトしているだけだ。良くてそのそれなりに鍛えられた肉体が暴食を征しているといったところか。そんなお前らに俺は正直迷惑している。もううんざりでうんざりでしょうがない。俺はこう見えても孤高とか独行とかは苦手だな、今までは周囲に　　というよりお前らに迎合していたようなところがあつたんだが、まあ多少は周囲に迎合させても良いよなあ俺だつて周囲の一部なんだから、というぐらいには最近になつて思えるようになってな。つまり、虐められない程度には我を通すことにしてみた訳だ。とはいえここでお前を殴つて次を蹴つてその次をぶつ飛ばしそのまた次を叩き落とすということをしてしまった日には俺は退学処分と焼却処分になりかねないからな。そんな訳で今から俺は先生様デジタルレコーダーのところに行つて俺のポケットに仕込んでおいた虎の子の録音装置を証拠にお前らの暴力の記録を交渉の余地無く泣く泣く提出し、さらに俺が手伝わされた万引き・器物損壊の件も、俺だけが犯人だつたという証言から一転、お前らが

主犯だと堂々と宣言するつもりだ。さらに今まさに、さつき訪ねてきてくれたお前さん達の元彼女が俺の近年稀に見るお願いの結果、上手いことくすねてくれた煙草も重要な証拠として今頃提出されているだろう。うーむ、はて？ 何か煙草に混ぜて片栗粉のような小麦粉のようなものがあつたがあれは何だったのだろうな？ さすがのこの俺でも知らないことがあるとは、世の中は狭いようでないか広いな。俺はお前らがなかなか深い世界に、これは矛盾した表現になるんだがつまり、棺桶の用意されない世界という名の棺桶に両手両足、さらには頭を突っ込んでいるみたいで安心したぞ。お前らには第二の人生、つまり果てしなく続く戦いのロードが約束されているんだろうからな。ちなみにこれは今までお前らが口走った真実の断片を千切り取り繋ぎ合わせ継ぎ接いで俺が論理的に一番あり得るだろうと言う可能性を口に出しているだけだから、間違っているたのなら謝ろう。十中八九、まあ十はありそうだがな。まあそれにしても俺はお前らが早く第三の人生に歩めることを祈るよ。さて、ここからは俺のフィールドなんだが、なんとその第二、第三の世界の方に今から適当なところに手配して

……。
……。
なげー。

「打葉、あいつ、もう逃げ出したぞ」
「ん？ そうか、まあそうだろうな」

原稿用紙二枚以上を使う台詞だった。

それに、明らかに相手の人生を破滅させるような言動が後半の方にあつたが、僕は絶対に気にしない……。

気にしたら負け、じゃあ済まない。

言がアフターケアにまで及んでるよ……アフターケアっていうか、単なる追い打ちだけ。

ていうか。

法どころじゃないし。法に触れそうだし。

内部告発かよ……あ、法律上はいいのか、内部告発。程度のひどい被害届ともいえる。

「とまあこのようにして俺はいつでも反撃できた訳なんだが、やっぱり孤独は怖いからな、俺は」

徹底的に、打葉は孤独だけが駄目だった。

僕が離れるかもしれないと、どこかで感じていた不安を抜き去り、拭い去った。

「確かに近寄り難いな……それは」

「味方がいれば、何でもできるもんだな」

今、女性を味方に付けてなかったか？

「それだけ敵も増えるもんだ」

……うわあ。

その内、地球の半分が敵、とか言いそうだ。

「こんなの正義じゃないけどな」

「そりゃそうだ」

正直、少し怖ろしいと思わなかったといえは嘘になるが、頼もしかったのも事実だ。

朱夏は一部始終見ていたが、さすがに水を差す真似はしなかった。火、だからかもしれないとか、くだらないことを考えてみたり。

「まあ、あんなにするのは最初だけだな」

「最後とは言わないんだな……」

「当然だ。絶対が言えるのは数学と、真に究極まで達した学問ぐらいだよ」

「難しいな……」

僕にはよくわからない話だ。

世の中が相対性理論で通るんなら、成績評価も相対評価にならないのか？

……うーん、よくわからないし、頭の悪さを晒したような気がする。

「なあ」

と、打葉は突然切り出した。

「友達ってなんだと思う？」

炭坑のような問いだった。

……僕に聞くか？ それ。

「僕の思う友達は、僕を友達だと思える奴だけだ」

僕も、炭坑のような答えを返した。

「ははっ、絶対どっかで使われてるぐらいにありふれてるな、その
答え」

「別に、これでいいだろ」

「そっだな」

という、僕と打葉の物語。

以下、語り部のコメント。

以上、本編。

なんか綺麗な形だったけど、これで今回はおしまい。
というわけで、僕の視点ではハッピーエンドだけど、あいつらからすればバッドエンドで、客観的に見れば半端なエンド。

だから、ハッピーエンドでも、バッドエンドでもない。

まあ物語、特にファンタジーとかバトルとかのそれというのは大概そんなものかもしれないけど、全てオンリーワンで、一つとしてナンバーワンは、無い。

……ONRA襪褌ONRAのようなネタだった。

……ゴホン。

そして、作品と賞されるもの全てに言えるかもしれないけど、大概そうだったものの、底辺は溢れるほどありふれているけど、誰もが認めるトップというのは、いない。

だからこれは底辺的な物語だろう。きっと。

ただ、底辺の中で真ん中なのか、角なのか、はたまた底辺ではなく底面で、中央に位置するのかもしれない、もしかしたら次元がさらに飛躍して底時空なんてところにあるのかもしれないけど、結末が読めていたという点で、これはやっぱり底の知れた物語だ。

まあ、面白さの追求で多分にエンターテイメントを補った感だけは否めないけど、読む立場にしてみれば、興奮のない物語だっただろう。戦闘も結局中途半端だったし。

そう思うのなら、やっぱりこれは閑話で、緩和だ。

とらひぢやで、
續く。

終章フレンド（後書き）

ええー、まいど馬鹿馬鹿しく、はかばかしくない話にまたしてもお付き合いました、真にありがとうございます。

打葉の話です。眼鏡です。イケメンという設定です。頭がよろしいです。反比例して統那が馬鹿やってみました。筑紫との漫才もやりました。朱夏は……何やった？（あれ？） 浪雅出てきました。母親と居候が駆け込みましたが父親は間に合いませんでした。そんな話です。

豆のような知識のような話題。

打葉の色（というかテーマカラー？）である、藍鉄、という色ですが、パソコン版のページを見ておられる方には背景の色を変えることとお見せしています。

二章丸ごと藍鉄です。勿論一章は灰色、統那の色でした。というわけでケータイ版をご覧になっている方は、ぜひ一度、パソコン版の方もチラッと目を通していただけると、今より一味ぐらいは楽しめるのではないでしょうか。

今回はこの辺で。

また、来月お目にかかれるように、頑張ります。

序章カッター（前書き）

僕は日常を送る。

二度と戻ってくることはない日常を。

序章カッター

順当に、僕こと四手統那しで としなは自分の教室で慎ましやかに生きていた。しかし、そんな僕の大人しさも『不知火筑紫しづめいがいる』という付帯状況の前では塵芥ちんがいのようなものだ。

というか同調してしまう。シンクロ。共振。レゾナンス。共鳴。

「おはようとーなん愛してるぜ！」

「応！ 僕も愛してるぜ！」

「しかし体以外だけの関係で」

「純愛か！？ 僕らの愛は純愛ですか！？」

ということを朝っぱらから叫ぶ僕らの周りには当前……ああもう間違えた、当然ながら人がいない。

ある意味当り前の光景として認識されている。

……これが『あの二人の仲の良さが気持ち悪い』というやつか。

そしてわかっていながら改善しないという最悪な状況だった。

「む……まさか君は偽者トウナ乙型か？」

「何で偽物疑惑が！？ しかも甲乙付けられた！」

甲が上で乙が下。僕は下級らしい。

いらん解脱……解説だった。

またしてもなんだこのミス。

「……ああよかった。ただの調子の悪い統那だった」

「僕のバイタルゲージ突っ込みなのか！？」

調子悪いとか言われたので、気合いを入れて発声した。

僕の活力つて突っ込みで判断されてたのか……。

「あっ、スカウター壊れた」

「今ので！？ 耐久性低っ！」

さらに声を荒らげるレベルまで達した僕。

すっかりスカウターの件をスルーしていた。

というか突っ込みというものを感覚でやっている僕なのでどの突っ込みが良くてどれが悪いとか、違いがわからない。

ちなみにコーヒーは飲めない。苦い。にげえ。

「しでん君、とーなん君」

そんな僕に釘を刺すように呼びかけた筑紫。

「むじん君みたいに言われたが気にせず言うぞ。ああ分かってるさ不知火筑紫。僕がうるさいと言いたいんだらう？ しかし今この時この場所そして地球がおよそ365×46億回回ったところ（自転）において多少のやかましさはやむを得ない」

「そこはね、『不可視物質！？ その壊れたスカウターは今どこにあるんだ！？ そんな珍しいものは僕が手に入れてやる。って僕は裸の王様か！？』ってボケツツコミをする所だよ」

「致命的に間違えたああああ！？」

意味不明すぎるやりとりだった。

教室から逃げ出す人までいるし。

「とーなん」

「はい何でしょうか不知火サマ！」

「うるさいよ」

「はい……」

今回は、僕の負けだった。
そもそも勝負だったのかどうかも怪しいけど。

それから分の単位も経過しないような後。

「おう統那、待ちくたびれたぞ」

見てたなら参加しても良かったのに、と思う。

あさくらうちは
麻倉打葉が悠々と自席に座って僕を待っていた。ビジター僕。インバイター打葉。

「……僕以外に話す友達いないのか？」

「居ないって言ったなら、どうする？」

「僕が悪かった！」

即座に謝った。

かなりエグいトークだった。

僕以外に友達いないみたいなこと言ってたじゃん。打葉。

何やってんだよ僕。

K（空気） Y（淀む） じゃんか。

「いやはや、頼もしいなあ」

言葉とは逆に（……？）ふう、とため息をつく打葉。

……えーと、あっ、皮肉か。どう考えても今の僕、頼もしくなかつたもんなあ……

「気付いたか」

「そうだね、実に人脈の少ない事に気付いたよ」

「悲しいなあ、俺ら」

「全くだね」

この時、同時に窓の向こうを見た僕達のシンクロ具合といったらハンパなかった。

「おっと。ここで抱きついてくれるなよ」

「何でそんなことになっているのかわからないけど絶対しないから大丈夫だ！」

別に金メダルを取ったわけでもないし。

「マジかよ統那。そんないやらしい目で俺を見ていたのか……」
「絶交したいのか!？」

僕をおちよくるとどうなるか、わかっているのか!？
わかっているからこんなことしてるんだよな!？

「っていうベクトルの妄想はちょっと俺には無理だったな」
「なんだ、ただの妄想か……」

存外ほっとしていた僕だった。

「きつとパラレルワールド、言い換えれば『もしも・ザ・ワールド』
では妄想が全て現実になっているんだろうな……」
「妄想つてめっちゃ怖え!？」

ていうか言い換える必要、あったのか？

「きつとあの子とその子があんな事やこんな事を……」
「……」

う、打葉、それは反則だぜ！

ゆ、ゆゆゆ、百合だと！？ パラレルワールドでか！？

そんな発想、僕にはなかったぜ（この時の僕はただの妄想であることを微塵にしか考えていなかった）！

これは是が非でも考えねば（是が非という言葉を使う人は善悪の判断が付かなくなっている可能性がある）！

嗚呼！ なんとというパラライズ……いや、パラダイス！

マヒってどうすんだ四手統那……ええいとにかく！

うわ、うわうわうあ。どこかの回路が言語野をショートカットしてるよ。ちくしょう、こんな時にものを考えられなくてどうするんだ！

ゆ……百合、ひめゆり……部隊。

……
うわああ違う！

沖縄大事だけど！ 日本人として戦争の残酷さを忘れちゃいけないけど今の僕の状態とは別の話だ！

百合、ゆり……リリー。

フランキー、は論外として、リリー……

「とーうーなー？」

ス。の時間だった。僕のパラライズは終わった。

キャッチアンドリリース。捕まえてないけど、逃した魚は大きかった……と思いたい。

僕のきらきら妄想オーラ（……吐き気がするぜ）に何か法に触れ

るものがあつたのか、獅子島朱夏サンが僕の名前を呼んだ。

あと、僕をひらがなで呼ぶの止めて！ とある魔術の誰かに似てるから！ というかむしろそっちが魔導書少女擬きの疑いかかつちやうー！？

……ゴホン。

と取り繕つても僕が慌てているのに変わりはなく、

「え……いやいやまさかこれは会話の流れというやつで僕は神も仏も人も認めるほどに天衣無縫純真無垢清廉潔白天真爛漫なんだ。ナチュラルな感性を持っているんだ！」

状況証拠しかないのに小学生に見つかったアリのようにつるたえる僕。

四×四文字熟語。四手の自乗。

てんいむほうじゅんしんむくせいれんけつぱくてんしんらんまん。どれも僕がマスターしていない言葉^{スベル}だった。

MPが足りない！

つまり説得力皆無！

そして朱夏は笑顔だった。友好的……の反対、無好的な、笑顔。アンフレンドリイ。

「だったら地獄からも生還できるはずだよね？」

……やべえ。可愛い。

朱夏がにっこりしてるよ。

「えっと、それは……はっ！？ あぶないあぶない……その笑顔はトラップだった……」

って、

僕がなぜ朱夏にそんな引け目を感じなきゃいけないんだ？
あつち？のことならいざ知らず……

と、僕が描写も忘れて思考に耽った際に、
地獄の片道切符を、行きは朱夏、帰りは自力で、という具合にち
ようど半分ずつ負担していた。……問題ありすぎだ。

それより打葉、おまえいつの間に逃げた……。と、その思考を最
後に僕はガクツと意識を閉ざした。

そして僕は倒れている間、閻魔と三途の川の関係について考えて
いたけど、答えは出なかった。知らないし。

ちなみに、僕の今際いまわの際きわにはどうやらお花畑が見えていたようだ。

この他にも、例えば家庭科の授業では、調理実習があった。

僕と打葉と筑紫と朱夏で一つの班、という面子だったのだが、ど
うもこの人選にははね除けられた感じが感じられなかった。

とまあこの日はそんな感じにハイスクールライフを漫喫……満喫
していた。

……最後の最後で漫画喫茶かよ。

序章カッター（後書き）

うっかりして前回の投稿の日付をすっかり忘れてました。ギリギリセーフ……。

できる限りキープしてみたいですね。

十数話＞一ヶ月のспан＞また十数話。

うん、この気ままな感じがやりやすいですね。

……ちなみに今回は背景（パソコン版の方だけですが）を適度に変えたり変えなかつたりします？

探求フォーラーアウター（前書き）

落ちて、外れる。

探求フォーラーアウター

帰り道、ある人に出会った。

そいつは歩きながら左右をきよろきよろと見ながら、なにかを探すようにしていた。

そいつは男で、背は僕よりはきつと高い。顔の作り、体格は共に無駄の無い。無さ過ぎる。細さだったが、しかし表情には逼迫や追い詰められた感じ、飢餓の苦しみといったものが全く見えないから、その細さは体質なのかもしれない。

枯れているようにも、朽ちているようにも見えるのに、活きている。そんな妙な第一印象だった。

それは生まれてすぐに古木になったような、年輪のない縄文杉のような奇妙さだった。

ちなみに、第一と言うからには、この場合、第零印象もある。それは

「……………」

そいつはあべこべな格好をしていた。何があべこべなのかというと、僕と同年代の顔立ちなのに（その枯れたような顔が潤ったら、という前提でもものを見ればそう見える）社会人の着るようなスーツを、ボタンは留めずネクタイは巻かずシャツはしまわずズボンに限らず裾は破れたり裂けたりポロポロ、といった感じの着崩した……違う、着古したスタイルを着こなしていた。髪はボサボサ……といても八木のワイルドとは違い、美容師がバツクに控えている様な整った感じはするけど、まあ、お母さんによるカットを崩した髪型（僕のことだ）よりはマシだと言える。……なんだこの下から視線。

もつとも、そいつの容姿で一番の個性を見出せる異容……漢字ミ
スった。うわぁ。……異様な点はネクタイの代わりのようにペンダ
ント……ではなく黒いシンプルな眼帯を首にぶら下げているという
ところだった。両目とも見たところ健在で正常のようだし、ただの
ファッションとするなら眼に付けとく方がいと僕は思うんだけど、
そこまで追求するほど、『通りすがり』という関係は近くないだろ
う。……眼帯というとまた話が伊達正宗に走りそうだからここで止
めて、他の描写に戻る。

そいつはもちろん僕の近所にいるおかしい住人、ということでは
ない。真正銘のしょー、初対面だ。

……ショータイムとか言いたくなる自分に、幸あれ……と、この
時僕が意図している『幸』は手枷の意味だ。自分で自分を罰したく
なったということだ。

……ゴホン。
結局逸れてるし。

『もつとも』、問題だったのはこの人物の印象と言うよりもむしろ、
これらの情報を『瞬きする前』に処理仕切っていた僕の頭だ。……
こんなところで何でボールが止まって見える現象が起こってるんだ。
案の定というか、展開からして当然というか、そいつは僕の存在
を『確認』すると、話しかけてきた。

「よう、何をさっきから金玉くり貫いて見てんだ？」

「言い間違いにしては元の台詞もおそろしく酷いな！」

きつと『めんたま』と言いたかったに違いないが、それにしても
くり貫きはしない。

くりぬくって……死ぬって！

「まあまあ、俺の質問に答えるよ」

「前から歩いてきた初っ端からグロいネタを扱ってくる枯れ木が服

も枯らしたような人を見ていました以上終了僕は帰る」

ドライな僕。

ドライの時間ですよ。

上手いこと『ドライ』と『枯れる』が被っているよ。

「まさしく俺という存在のことじゃねえか。ところでついでにちょっと『者』を尋ねるぞ」

「既に僕の了解は取るつもりは無い、と」

どうやらきよるきよるしていたのは人探しをしていたらしいということはわかった。

「尾上蔵波おがみ くらわは、筒井羽織つついはわおり、戸井竹美嘉といたけ みか、この三人に覚えはないか？」

どれも、僕の聞いたことのない名前だった。

「知らないな。知り合いなのか？」

「知り合いじゃない。だけど知っている」

「……なんだかよくわからない方向に話が進んでいるようだ。ヨーダ。」

小ボケ。

……ゴホン。

とはいえ人脈のない僕のことだから、もしかしたらすぐ近くにいるのかもしれない、という可能性は拭えないけど。

「まあ、質問に答えてくれてありがとうだよ。お礼と言っちゃ何だけだよ、俺の名字と、俺の知っているとおある三人のお話をお聞かせしてやるっつ」

「じゃあ拝聴してやるっ」

この手の手合いの話は適当に聞いておいてサヨウナラ、に限るの
で、そうする。

もう逃げるのは諦めている。

「俺の名字は菊池^{きくち}。名前はまだない……しよだ」

「我が輩は猫であるみたいなおボケはいらねえ！」

とても僕の口から出たとは思えない台詞だった。

「さて、お話だ　あ、結構真面目に語るぜ？」

「わかったから」

「そんじゃあいくぞ」

あるところに二人、人がいました。

そもそもいることには問題はなかったのですが、それは不自然な
出来事となりました。

誰でもない意志　つまり考えうる限りの大多数に味方しない存
在　が働きました。

不自然は消えるのが自然です。

このままではどちらかが消えるでしょう。

誰でもない意志は、今度は事態に輪をかけるために偶然に偶然を
重ねて働きました。

そのために、もう一人が現れました。

もう一人は、存在を左右された以上、これ以上誰でもない意志に
左右されません。

そして不自然が自然になりました。

その結果、釣り合いがとれました。

一時的な、保険のような釣り合い。

じゃんけんのあいこのような釣り合い。
それをなんとかしてどうにかして言葉で表すと、こうです。

彼、彼女、そのの三人。

それぞれが相関関係にある、二等辺三角関係。

最初に彼は彼女を理解し、
しかし彼はそれを知らず、
いつも彼はそれを畏怖する。

突然に彼女はそれを知覚し、
しかし彼女はそれを知らず、
結局は彼女は彼を容赦する。

途中からそれは二人を熟知し、
すぐさまそれは二人を手伝い、
最終的にそれは二人に知られる。

どちらかが崩れた時、不自然な自然が崩れ、最後に一人生き残る。
それでようやく、釣り合いがとれるのです。

彼女が崩れると彼が生き残り、
彼が崩れると彼女が生き残り、
それが崩れると、二人共々崩れる。

まだ、結果は出ていません。これは今起こっていることなのです。

「とまあ、こんなところだ」

「……………」

態度とは裏腹に、意外と深そうに聞こえるお話だった。

二等辺三角関係とか、どこかで使われたような言葉はあったけど。この話が、まさかさつき言っていた三人　尾上蔵波、筒井羽織、戸井竹美嘉　に繋がっているのか？　ということは、筒井羽織（多分女？）か、戸井竹美嘉（こっちは女だろう）というのが『彼女』で、尾上蔵波（多分、男だろう）というのが『彼』、余りが『それ』、ということ……なのか？

その三人を探しているというこの菊池というやつは一体

「うん、俺の思い付きも捨てたもんじゃないな」

「思い付きかよ！」

ちつくしょう！

黙って真面目に聞いた僕が莫迦だった！　馬鹿だった！　バカだった！

「おっとそれ以上詮索するなよ？　作品が汚れるけがだろ」

「三人の内二人以上が死ぬ物語のどこが綺麗なのか教えて貰おうか」

自慢じゃないけど僕はキレイという漢字を空で書ける。

いやまあ、それはともかく、ここで状況はまた変わった。

とはいってもバトルパートなんかには全然突入しなくて、

「統那、何でさっさと帰ったの」

僕の、まあ、ある意味天使・獅子島朱夏が僕の後ろの方から現れた。

探求フォーラーアウター（後書き）

あくまでこの人間性での『真面目』なので、あまり言葉に信憑性
これってもしかして宗教的な単語？）は……。

引摺バーナー（前書き）

危なくない、火はない。

引摺バーナー

状況は変わらず下校の途中。

「統那。何でさっさと帰ったの」

朱夏サンはとても事務的な口調でそう言った。

「えっ、いつも別々に帰ってなかったっけ？」

それは駅のない方角に二人一緒に歩いていたら絶対誰かに勘ぐられるだろうと思つてのことだった。別に付き合っているわけでもないし（付き合いたくないわけではないぜ）。

……しつこいようだが、火はあるが（別の意味で）、あえて煙を立たせることもないだろう。

というかそんな振る舞いを見せたら僕は業火に焼かれることになりそう。

「だから、今日は用事があるって言ったでしょ」

「……あれ？」

そんなのあつたっけ……全然思い出せない。

「なあなあ、俺も混ぜてくれよ」

「なあなあで物事を進めようとするな」

さらに菊池が僕達の服装と比べて浮きまくり目立ちまくりにも関わらず関わるうとしてきた。

……まあ、僕はどっちでも構わないんだけど、とりあえずの流れ

で適当にコントでもやってみようかなと思った。

「ああそうだ、そっちの君にも聞いておきたいんだけど、尾上
「私は知らない勝手にすればどうでもいい興味ない」

……朱夏サンは何がしたいのだろうか？ とうるか対応が初対面
に対するものじゃない。

人の心、を精神的に傷つけるのはあなたの道徳的正義に反しない
のか？

まあ、簡単に取り返しのつく範囲ならいいのか……？

「なあなあ、泣いていい？」

「だからなあなあで物事を進めようとするな」

ホント、お互い初対面なのにノリがいいな……。
馴染み過ぎだろ。

「ああもうなんかめんどい……！ とにかく一旦家に帰るよ。話は
それから」

結果的に意味もなく立ち往生していた僕を朱夏はおよそ女子とは思えない腕力で（色採だとは思えるけど）僕を引っ掴み引っ張って
引き摺ずった。

そうなると被害を食らうのは、マイ制服。つまり……マイ・ユニ
フォームオオオオオオオオオオオオオム！

ここまでできたらこだわってやる（何かのスイッチオン）！

「待つて引き摺るのはわかったからせめてケツを接地させるのは止
めさせて！ また母さんに迷惑がかかる！」

「じゃあ背筋ピーン！ すれば？」

「僕はランドセルが何かを背負ってるのか!？」

背筋ぴーンって! 元体操のおにいさんか……っと、このネタ風化激しいんだろぅな。すでにピンとこない人がいそうだし……。

「ランドセル? じゃあそうすれば?」

「だから何でちょっとサディステイク!?」

『ランドセルする』っていう動詞を僕は知らないのにそれを要求された(突っ込み所はそこではない)!? なんて鬼なんだ!

「本当ならサッカーするつもりなんだけど」

「ごめんなさい甘く見ていました」

『サッカーする』っていう動詞を僕は知らないのにどう考えても自分が蹴られる画しか浮かばない強烈さがあつた。なんて鬼なんだ。

そして僕が謝ると同時、朱夏は引き摺りを再開した。

……それにしてもどうやら、朱夏はDS、略さず言えばドサディストだった(略した人はこの語感の悪さに気付いていたのだろうか……どうでもいいか)……何だこの設定。……冗談だよな?

……ゴホン。

きつと一時的な風向きだ。きつと。

とにかく、僕は涙ぐましい服の補修を避けるために、なんとか直立姿勢を保った。気合いで。

僕が用意できたのを見るや否や、朱夏は誰にも止められない勢いで(決して速いわけではなかったが)すたすたとその場から離れるように僕を引っ張った。

僕は制服の背中を引っ張られながら、後ろを向いて菊池に見送られた。

「わー、菊池が所在なさげに手を振ってる」

引き摺られながらちよつとした客観的視点、現実逃避に走った僕。というか引き摺られて、これ以上何をしろと？

そもそも引き摺られる意味が自分でもわからない。

……うーん、何でだ？

「そう言えば、あの怪しい人と何話してたの？」

角を折れ曲がり、見えなくなつてから朱夏がそんなことを聞いてきた。

……菊池、おまえ朱夏（＝健全な女子高生）から見て怪しい人だつてね。

「日本語」

「あっそう」

僕が（古典的に）そんなことを言ったもんだから、朱夏はなんと手を離してしまった。

ぱっ、どさっ。

ごちーん。

「痛っ！」

捨てられた。しかも直前まで斜めに引っ張られていたのに何故か頭から落ちた。多分『ぱっ』の前に足が上になるように振り上げられたんだと思う。なんか僕、鞭のようになつてたし。

ということとは……まさかボケが裏目に出た！？

どういうこつてすたい！？

そんな感じに混乱している僕に、朱夏が手を差し伸べた。

「はい」

「あ、ありがとう？」

捨てられておきながら感謝も変だな……と思いつつもおとなしく背中を掴まれている僕。もう歩いた方がいいんじゃないのか？とは思っているんだけどなかなかこれが止められない。

しかし、

一瞬持ち上がり、

ぱっ、どさっ。

ずきーん。

二度目は刺すような痛みだった。と思ったら砂利に頭を打っていた。

「痛あつ！？」

「あ、ごめん」

それで済めばまだ良かったんだけどさらに朱夏は、

「うわああ待って置いてかないで！意外と頭がふらふらしてきた

……っつとっばあ！？側溝に落ちかけた！やばいやばい！末期まつき

！末期まつき！」

朱夏サンここで置き去りとかどんなチャイルドエラー……ゴホン。

いやさサディスト、ドサディスト！

そして一頻り喚ひびいた後、倒れながら僕は突発的に感傷的になった。

……今日の僕はぐるぐる回ります。

ああ……僕の人生ってプチ酷い。

初っ端から殺されかけて、また殺されかけて、見た目小学生の子と知り合って、久しぶりに朱夏と話して、バトって、ここで殺人罪

を犯し（あの時跡形もなく消えた八木はその後行方不明ということになっていくらしい）、打葉と揉め事を起こして、十数回爆発に巻き込まれて、切り合いになって……

……うん、プチどころじゃなく十分に酷かった。

なんとかいうか、思い返すとかなり精神的に痛かった。

もう起き上がりがたくない。氣力を振り絞って追いかけるのも一苦労の様に思われる。

……単に怠けっぽくなっているだけ、と言ってしまつとここで僕の株は大暴落なんだけど、実際そうかもしれないからしょうがない。割を食うのは僕だけだ。僕の株なんて誰も買っちゃいない。

……ゴホン。

どのぐらい時間が経ったか数えてないけど、僕は今までの気持の整理をつけて、起き上がった。

そして僕は追いかけて と、結果的にはちょっと離れたところで朱夏は待つてくれたので、そこで話を再開した。

「ホントのところは……日本語も本当だけど、まあちょっと者を尋ねられただけで、あとは適当なお話だったよ」

「ふーん……本当にどうでもよかつたんだ」

さらに菊池が可哀想になった。

……おまえ、怪しい上にどうでもいいんだって。

それでも僕ほどそんなに扱われることもないだろうけど。

「それはそうとそっちこそ、用事って何だ？」

この獅子島朱夏という人がデートって柄じゃないのはこの僕自身がよく知っている。

期待せずのほほんと構えていた僕に対して、朱夏はまた事務的な口調で言った。

「今日、川かわい窓まど棹わくに会いに行く」

「これにはまあ、普通に驚いた。」

引摺バーナー（後書き）

今回の様に、この小説のサブタイトルは送り仮名を意図的に削除する傾向があるので漢字テストの時等、これを正解と思い込まない様に注意しましょう。

ちなみにここの背景色は朱色らしいです。

参考サイト『原色大辞典』（<http://www.colordic.org/>）

ここのこういう色彩がわかんねえよ、という方はどうぞ。

同時に作者の底も知ることになるかもしれないが。

タグは付け方を知らないの………というかタグって何ですか？

抱擁ディペンダント(前書き)

無いもの。

呑み込む。

抱擁ディペンダント

帰宅。

一旦家に帰ると、僕は桐那きりな片那かたなの声が聞こえた。

「おっかえりーおにい」

どうやら母さんは買い物中らしい。僕と片那以外にこの家での人の気配はしない。

そして僕は足元を見ながら靴を脱ぎいつものように素っ気なくスルーし、視線を上げ

「僕はおまえの兄じゃない バカかあ！」

最初に、前後の文脈が全く繋がっていないことをここに表明しておこう。

僕が『バカかあ！』と言ったのは、あくまでも片那の格好に対して、である。

さて、状況その他諸々を語る。

長くなりそうなので という理由ではなく、無視しても大丈夫だと言っておく………というかできればしばらく無視の方向で。

では、

なにゆえにふるあがりのすがたですかそしてそもそももっているたおるですらすでにあたまをふくことだけにしかようをなしていないほとんどいっしまとわぬすがたまたはうまれたままのかっこうつまりすっぱだかもしくはまっぴなのはどういうことだそんなぎもんはそうまとうよりもはやくなんまんかいもよぎったけれどぼくはふるばいやかたなのへやになりふりかまわずそれこそすはだにふれる

のもかまわずおしこんださわるたびにへんなあえぎがぼくのこまくをつきぬけたけどそれもこみでぼくはけとばしたじつはこのていどのやりとりははじめてではなくかこになんどかけいけんしているのももちろんおそっていないけどこうしよりするのがいちばんときまつているのだいちばんといえはいちばんおそろしかったのはうまれたままのすがたでだきつかれたことだろうさすがのぼくもいつしゆんのきのまよいをいだいたけれどなんとかみさおをまもることにせいこうしたつまりぼくはあれいのままですまれてこのかたかのじよがいなかったりするしかたなはけつきよくだれともつきあわないどころかむしろつきあうとしたらおんなのことかいいだすからじつさいはつきあっていないけどぼくとしてはどうしていいやらふくぎつなしんきょうでしんみょうにしているぐらいしかてはないさてそんなことをかたっているうちにかたながでてきたけどまだじょうげあわせてさいていげんのにまいしかつけていないからつつかえしたまったくなんていうはじょうこうげきだもはやぜつたいてきともいえるぼうへきをきずいたぼくだからこそたえられるけどこれはひとにはみせられないいやけっしてぼくがひとりじめしたいというわけではなくなどないわけをする^とぼくのたちはがくるしくなるだけなのでこのへんにしておこうおつとやつとぶつうのすがたでてきたこれでつぎにすすめる。

.....

何故だろう、漢字やカタカナに変換したり句読点を打つたり丸括弧で括つたりといった、当然であるはずの読者サービスをするのがひどく躊躇^{ためら}われた文章だった。

多分、これで正しいのだろう。

無かったことにして次に進もう。

なんか（別の意味で）重大なカミングアウトとかあった気もするけど。

「ねえ、義理のおにい」

けろりとした顔で片那が僕を呼んだ。

……あれだけ拒否してもノーダメージなんだから意味わかんないんだよなあ。

「くっ、お前が居候という点を除けばその表現はほぼ正解なんだが、僕は……僕は認めないぞ！」

「あー、おにいがツンダー、いつになったらデレるのかなー？ えいえい」

僕のほっぺを指先でぶにぶに。
じゃなくて、

「どこでそんな言葉を覚えてきた」
「萌ちゃん」

ついに、登場。

あの人、『萌ちゃん』。

誰かって？ 僕と片那の共通の知人にそんなにストックは無いよ。

「あの野郎……どうして僕の家族なんだ」

「だめだよおにい。父親にそんなこと言っちゃダメ」

父親。マイファーザー。ゴッドファーザー(?)。そのくせ変な名前。それが僕の父親である。

男のくせに自分のことを『萌ちゃん』と呼ばせるっていうのは人としての感性が無いことの証明だろうが……まあ僕とセットでいるときに名前を呼ばれることがないからとりあえずどうでもいいとするか。このご時世名前に『萌』という時が付くって結構痛手な気

がする。そう考えると同情できなくもない……訳がない。それを補って余りある性格がある。ふざけてる。『ふざけるな』って言われたら逆ギレするくらいふざけてる。

とはいえこの場では適当に非を認めるのが良さそうではある。僕って大人だ。

「……そうだな。悪い」

「じゃあおにい、抱っこー」

「アホ！」と僕は叫んだ。

やっつけられっか！

それぐらいの沸点突破だった。こうなるとつい舌を振るってしまう。

「僕達の間柄においてその抱っこという行為には果たしてどれだけの意味があるのだろうか？ そもそもそれをするきょうだいがどれだけ

「抱っこー」

打ち消された。そうだ。こいつも僕と同じだけ、逆に僕への対処法を積み重ねているはずだった。

しぶしぶ、僕は一瞬だけ欧米かぶれになり、ハグに応じた。

「……なんでこうなるんだ」

「はぐはぐー」

「幼児かおまえは」

その後渋々抱っこしてあげて（ぐるぐるわーいバージョン）、適当に私服を選んで着替え、僕は家を後にした。

そして、玄関先にいい感じにキレた朱夏がいたのに、また驚いた。

抱擁ディペンダント（後書き）

ひ、ひらがなで文字数を稼いだわけではないですよ？ といっても普通はカウントする人いる訳ないんですが。

今回は……はつきり言って、話数少ないです。

番外編入れずに一桁に止めてしまおうか……

今日の一言（不定期）。

前話の配色が見つらなかった人、手！あげて！？

探索ライター（前書き）

歪み、歪む。

ひずみ、ゆがむ。

ゆがみ、ひずむ。

探索ライター

散歩、のような。

そんなくだりで僕は町を朱夏とろろろろろろろろして、しばらくそんなことを続けていると、窓枠が両腕をまっすぐ水平に伸ばして親指を縦、人差し指を前、中指をそれぞれの反対側の手に向けて、そのまま「うーん」と彷徨うろたいでいるのを見つけた。万が一「いつぞやの風船はどこに？」と思っっている方の為に言っておくと、今回は小さく可愛らしいリュック（チューリップの、アップリケ）を背負っていて、それに唯一存在するチャックの金具に紐が括り付けられていた。故にハンスフリーである。

……あの風船何でできてるんだ？ この間は自分でぶら下がってたよな？

まあ、ここで考えてもどうせわからないことなのだろう。後でなんかフシギナチカラがどうのこうのってなるに決まってる。

ちなみに、待ち合わせとかは特に決まった場所を指定していなかったらしく、跡路市の僕と朱夏が住んでいる近辺、ぐらいにしか決められていないらしい。なんて杜撰ずさんな人達なんだろう。

「……何やってんだ？」

「あ、統那君だー。こんにちはー。こちとらは元気だよー」

「こんにちはー！」

僕も今元気になったよー！

さつき軽く背中に火傷の感覚が染み着いたけど（僕の尊厳の為に割愛してるけど）、そんなこと吹っ飛ぶくらい元気になったよー！

「……何でそんなに嬉しそうなのよ」

「今僕は洗われた……！」

洗礼というのはこのことか!? 今ならどんな高潔なことでもや
つていけそうな気がする!

何かに殉じることができそうだ! 具体的には少女!

……ゴホン。

大丈夫。ギャグで済む範囲の突発暴走だから。

「で、今は何やってんのって、統那が聞いたよね?」

「朱夏ちゃん可愛いねー。こちららは二人をちゃんとして待ってたん
だよ?」

曰く彷徨っているのは待っているのと同義、だそうな。

……そんな訳ないですよ?

「そのキョンシー擬きが待っているって言うのか」

「これはねー、ダウジング」

「フレミングすげえ!」

フレミングの左手と……あれ? 右手ってあったっけ?

「あるよー。親指が導線を動かす力で人差し指が磁場になって、中
指がその二つから出てくる誘導電流なんだよ」

「ふー、ん?」

……左手との違いがわからない……。

なんだっけ……電・磁・力なかつひしつじちぢぢぢだよな。……あれ? 変わらない?

何だ?

「だから、左手の法則は相手を持ち上げて落とすの」

「ここでビンヤードを出さないで!」

リメイク版の1・2に出ているって言うけど3をやっていない僕はこのキャラクターの本質がまるでわからないんだ！

……ゴホン。

ここまで僕のテンションにお付き合い頂き、誠に有り難う御座います。

「実はこちらにも忙しいんだよー。だから必要なことだけ言うからねー、これ」

リュックから一枚、二枚と紙を取り出してそれらを僕と朱夏それぞれに渡してきた。

「……地図、だよな」

いつかの僕の絵よりずいぶんマシな出来だった。泣けてくる。朱夏の方を覗き込むと、そっちも同じような図面だった。

「そこに行つてくると良いことあるよー。きっと」

そう言うと、風船少女・川井窓梓は今までと別の方向を向いた。

「もう行くのか？」

「うんうん。こう見えてこちららは本当に急ぎ忙しかからねー。これからきみたちの他に三人と会わないといけないんだ」

「……」

三人。

また、三人、か。

何となく引つかかるものがあった僕は、聞いてみた。

「窓枠……ちゃん？」

その前に（しょーもない）課題があった。

川井窓枠。年齢不詳。

「さん？か？ちゃん？か、それとも個別にあつた呼び方をすればいいの？」

「んー、こちとらは見た目は子供、頭脳は大人だからどっちでもいいよー」

「じゃあ窓枠ちゃんで」

「何で即決なのよ……」

呆れ果て見下げ果てた朱夏、に気付かない僕。

「これが洗礼効果か……！」

「は？」

「何でもありません……」

「うわぁ……朱夏がドライに……。本当の意味で乾燥注意報発令中。きつとドライが移つたのだろう……か？」

「で、ちょっとだけ聞きたいんだけど」

「いいよー。愛と勇気だけが敵つていう魔王のような人の話でも世界に多大なる影響をもたらした王者のような人と人の間の話でも代わり映えのしない異世界の話でもどこにでも行けるからこそ動きたくないという境地に至つた人や何でもかんでも作つた人や誰が直接依頼したわけでもないのに望まれた暗殺を実行する人の話でもいいよ」

……ちよつと興味をそそられる内容だけど、今はそこじゃない。

「……とりあえず、尾上蔵波、筒井羽織、戸井竹美嘉の三人について、何か知ってたりする？」

僕としてはあんまり期待していなかったんだけど、窓棹ちゃんの反応は、

「……うーん、なんて言ったらいいのかなあ」

予想外のそれだった。

「そう言う存在の話は知っているけど、所在は知らないし、もっと言っちゃえば実在も知らないんだよねー。お話に聞く程度で」

「なるほど……そりゃあ残念」

「探してるの？」

「ああいや、ついさっき会った人がその三人を探してるって言うから」

「なるほどなるほどー。三人つながりでねー。でもこちとらが会うのはその三人とは違ってたから残念だったねー」

「とつても残念だよー」

「遺憾だねー」

「遺憾だよー」

「やったねー」

「やったよー」

「……………」

とんだ茶番をやっている僕の背中に朱夏の沈黙と白い目が突き刺さった。

さくっ、と。

「それで幸せ？」

一言。

ぐさっ、と僕の心、が大量出血した。出血多量。サービスどころではない。

打ちひしがれ伏せる僕を、窓枠ちゃんがつつん、と突つついた。服の上からなので、感触はよくわからなかったけど、素晴らしいものだったに違いない。

どうも今日の僕は年少者に突つつかれるらしい。

「大丈夫ー？ 統那くん」

「その言葉だけで、僕は立ち上がれる……！」

「うざっ」

やばい、段々朱夏のキャラが固まってきてる！
厳しい！

「はあ……付き合ってらんない」

朱夏は僕から離れるように去っていった。

「え……」

……スタスタ行っちゃった！

この状況で二回目の置いてけぼり！

いやまあ、はぐれるとかはともかく、勝手知ったる土地で迷子はないけど。

「……丁度いいや。お話ついでに言っておくことがあるんだ。統那

「くんだけに」

「何だい」

……残念なことに今の僕の表情はとても気持ち悪いことになって
いるだろう。

そりゃあそうだ、『統那くんだけに』というニュアンスにどれだ
けのものを感じていたか。少なくとも並々なものではなかった。今
ならチヨコボールで銀のエンゼルぐらいは引き当てられそうな有頂
天にいる。非想非非想天にいる。いや、煩惱ありまくりだけど。

しかし、窓枠ちゃんの表情は僕の行動で揺らぐことなく、常のよ
うににこにこ顔だった。

「きみは、朱夏ちゃんのことについて、どんなことを、どれぐらい
思っているのかな？」

探索ライター（後書き）

目に優しい空色、です。

そして『空色って ライオに似てるなあ』と思ったはいいもの、
ところで ライオってなんだ？ というところを思い出せなかった
のが残念ですね（正解はウェブでどうぞ）。

名前は知ってるけど何だったのかを思い出せないって惜しいなあ、
という話です。

警告メッセージ（前書き）

歪みは元には戻らない。歪んだまま定まりもしない。
そして定めという事すら歪んだまま定まっていけない。

警告メッセージ

「きみは、朱夏ちゃんのことについて、どんなことを、どれぐらい思っているのかな？」

「……………」

僕は、即答できなかった。

それは、『好きかどうか』とか『想っている』とか、そんな甘い曖昧な話ではなく、辛く辛い話に繋がるであろう、問いだった。

それが、わかった。

「どんなこと……って」

「幼稚園の年頃、きみたちは幼馴染みとして接してきた、らしいけど」

そうだ。僕と朱夏は幼馴染み。

よくあるかは微妙だけれども、

まあ、ありがちな設定だろう。

「それが一体全体どうしてこんなことになっているんだろうね？」

こんなこと。

こんなこととは、どういうことだ。

その言葉に、僕は『僕はこの人に望まれていないのか』と感じた。こちとらは僕のことはお呼びじゃないってか？

「……………こんなことって言い方はどうにかしてもらえないか」

それまでの友好的な雰囲気無しにしてまでも、僕は言葉を返し

た。

しかしそんな反抗も、すぐに掻き消された。
立ち消えた、といつてもいいかもしれない。

「こんなこと、こんなことで十分だよ。どうして今更いとも簡単に
きみたちは一緒に行動できているのかな？」

「それは、小中は関わりがなかったけど、別に僕達には何も」

「本当に？ 本当に何もなかった？ こちらは全く全然完全無欠
にきみたちの過去とは無関係だけど、きみたちが『可笑しいくらい
におかしい』のはね、絶対必ず完璧にわかるんだよ。歪み、つまり
正しくないことはこちらの専門領域なんだよ。そして、こちら
が背景を知らないなりにもきみに一番聞きたいのは、

どうしてきみはそこまでなつてなお、朱夏ちゃんを嫌いにならな
いんだろうね。

ということだよ」

理解したくない、言葉だった。

そんなことを思っている時点で、理解したくないと拒絶しようと
している時点で、僕は既に折れていた。

「……何が言いたいんだよ。僕にだけそんなことを言つて、どうし
るつて言つんだよ。僕は何を言えばいいんだよ」

「だから、こちらが何を知っていて、何を知らないかを言いたい
んだよ。きみにだけそんなことを言つて、強制的にはという限定で
だけど、何をしろとは言わないよ。きみはこちらの疑問に答えて
くれればそれでいいよ」

「……………」

念押しされる必要が無いぐらい、僕には何も言えなかった。

「きみたちの関係は、とても危うい。車輪は回っていないのに前には進んでいるような危うさだよ。ふざけた言い方をすれば、火どころか、ジェット推進の車、だね。火の車だったらきつと、燃え尽きて崩れてそのままだけど、きみたちはジェットエンジンなんだから、エネルギーが尽きると　　尽きるとは限らないけど　　、大破しかねない。その大破の鍵が何なのかはこちとらにはわからないけど、そんな不安定をいつまで守り続けるつもりかな？　　……ううん、仕方ないけどもう止められないところまで来ちゃっているんだったね。ならこちとらがここで言うのは見当違いの見間違いかもしれないね。最初にもっときつく言っておけばよかったよ。そうすればよかったのに。だめだなあこちとら。これじゃあさつきはきみに聞いているだけでいいって言ったけど、やっぱりこれはもう『きみに頑張ってもらうしかない』と言うしかないよね。いやあ悪いことを言っちゃったよ。でもこちとらがそんなことを言ったからといって状況が好転する訳じゃないし、目に見えて悪化するわけでもないんだよね。何が起ころうともただ刻々と深刻になっていくだけなのかもしれないし、何も起ころないかもしれない。そんな感じに、そんな具合に、そうしていつかは折れて、破滅という名の終わりはやってくる。うまく行き続けない限り、ね。決して波瀾万丈からは逃れられないと思うよ。でも、しばらくはそんな大波もやってこないみたいだし、今からできる限り備えることは当面は有効なはずだよ。ああそれと、なぜきみにだけこうい話をするのか、まだ言っただけだったね。それはきみが　　きみだけが　　揺らが無い、確固たる意志を持っているのがわかるからだよ。きみは凄いよ。凄いなんだけど、おかしいよ。可笑しいぐらいにおかしいよ。きみは、きみたちは、やっぱり可笑しいぐらいにおかしい。そしてこれは歪みに敏感なこちとらがふと抱いた単純で純然たる疑問なんだけど、

過去に絶対に何かあった、にも関わらず、どうして何もなかったように存在できているのかな？

でもそう言っちゃうと、こちらこそどうして存在するのか、という哲学の話になっちゃうからあまり話すことじゃないんだけど、これはきみたちにはちゃんと現実問題として現れることだよ。歪んで、歪んで、歪んでいる。それがきみたちなのに、どうしてこうも普通なんだろうね。強いて言えば『普通の異端』に留まっている、というのかもしれないけど。普通はその普通は破綻しちゃって、異端の異端ぐらいには行き着くはずだよ。もつと行くと異端の異端の異端、だよ。三重の歪みむねこというのはそれぐらいに、重いんだよ。第三者としてこちらには朱夏ちゃんあきちゃんが歪んでいるのを理解しているからいいんだけど、きみは違う。きみは『第三者以上の立場で』どうしてそれを理解していながら踏み止まらずに前に進めたのかな？

……いや、無自覚のままに進んでいるのかな？ とりあえず、そういうことにしておくね。うん、こうして見ていると、きみが強いことはもちろん、戦いが、という意味じゃないよ。強すぎるぐらいに強いのはひしひしと伝わってくる。それでも、決定的にダメなんだ。遅くても早くても、歪んでいる限りはどうしても撓み、たわ軋み、破綻は訪れる。きみがやっているのは何を隠そう、先送りだよ。……正義？ それもいいよ。正義は正義と悪のためにある言葉なんだから。あとそうそう、正義と悪は裏表じゃないよ。その根拠はこちらと同じものは同時に見ることでしかできないと思っっているという所にあるんだ。それに当てはめると、むしろ反対側こそが道德だよ。道德の観念はいつもそういうものの背景にあるんだから。表の正義を見て、裏の道德。多種多様な視点の中で選ばれた視点。を見ると、裏の裏は悪だった、なんてことや、その逆があるかもしれない。ううん、実際にあったのかもしれないけど、こちらとは知らないよ。見た目は子供だもん。正義と悪は裏の裏、だね。表々一体、裏々一体ひらひらひらひら。見た目にはひっくり返さなくても変わっちゃ

うんだよ。それを踏まえて、言わせてもらつと、

最後まで朱夏ちゃんを守れるのは、多分きみだけだよ。

だからきみはどれだけ無駄で無常で無情で無益で無辜^{むこ}で無策で無残で無念で無謀で無理であつても今まで通りのをやるのをあきらめちゃいけない。こちとらが言うまでもなくね。今まで通りにするためには、あらゆる可能性を試するのが最善なんだ。それでもこちとらごときでは、こればかりはどうしようもないから、きみたちで頑張つてもらつしかないんだよね。あ、これは同じことを言つちやつたね。じゃあ締めくくりに、こつ聞こつかな　以上を踏まえた上で、確認するよ。どうしてきみは朱夏ちゃんを嫌いにならないんだらうね？」

そんなの、

そんなの、決まっている。

「僕が、一番朱夏のことを

」

さて、がつつり言われたところで、僕はようやく朱夏を追いかけた。

目的地は、商店街のとある一画にある店。

どつやら、骨董屋らしい。

警告メッセージ（後書き）

空色、二回目。こちとらこちとらうるさいの回、です。

この辺はあんまり真剣に読まないでくれていると、逆に助かります。

今日の一言。

こちとら江戸っ子でい！（言ってみたかった）

営業シエイカー（前書き）

ゆらゆらゆれる。

とても簡単に。

営業シェイカー

幸いにも朱夏サンは歩いてくれていたので僕が追いつくのは簡単だった。

「ぜい、はあ、they, her……」

「……………」

「何か言って！」

置いてけぼりばかり追いかけてばかりの僕だった。そして、僕と朱夏は地図の場所にたどり着いた。

骨董屋。

いかにもな木造で、古めかしい以外にほとんど特徴のない建物だった。二階建て、一階の瓦屋根の上に？轟骨董？と、看板が立て掛けられている。既に開いているが、入り口はやかましくガタガタガツツ！という音を立てそうな、木の枠にガラスという、やはり古めかしい引き戸だった。

中には、僕の語彙では『おばちゃん』としか表現のできなさそうな女性そのまま飾り気のない普段着という装いで展示スペースでもある土間の向こう、地面から数十糎^{センチ}高い床に正座で座り込んでいた。

「いらつしゃい……なんだ、高校生のお客さんかい。まあたまには若い顔と会っておくのもいいさね。ああ、ここは年中無休 いやいや、有休で悠久に暇な轟骨董^{とんぼくどう}さね。ああああ、無給と言っても差し支えないさね」

差し支えないのか。

「何かに罅ひびが入ってそんな店名だな……って、あまり歓迎されてない？」

何気に失礼な僕を、朱夏は『大体こんなところで寂しく古物商やつてる時点で気づかないかなあ？』という目で見ていたが（もう僕の株がいくら落ちようと知ったことか）、おばちゃん（暫定）に向かって襟を正し、挨拶を始めた。

「私は志士島朱夏って言う跡路高校の二年生です。あなたは？」

それに対しておばちゃんが、今気付いたかのような反応で口を開いた。

「……ふう、これもまた因果かねえ……あああ自己紹介されたら応えるのが日本人ってもんだろうね。おっと私も日本人だったさ……私は車三つの間と書いて轟間とんぼまと言うもんです。見ての通りこんなところで骨董屋をやってる偏屈でございますよ。改めて、初めましてシジマアヤカちゃん。良い名前さね」
「ありがとうございます」

……その丁寧を僕にも少し、向けて欲しいよ。
ということを曖……あれ？ 『おくび』って言おうとしたのに出てこない……！ 何！？ シフトJISに載っていない！？

ご覧の小説の制作はシフトJISコードを基準にしているのに！
おくびがない！

ちくしょう！ 伝わらないぞ！ 『口』に『愛』と書いて『げっぶ』という意味の楽しい漢字なのに！

うおあああシフトJIS！ しっかりしてくれ！

……ゴホン。

ともかく、そんな愁嘆を口愛おぐひにも出さずに僕は努めてはっちゃんて振る舞う（この文だけ横向きに読んでネ！）。

「そして僕は四手統那、今をときめく高校2年生さ！」

キラーン……………

むなしい虚空。

むなしい虚空、発生中。

「……………」

「ああそう……………良い名前さね」

見事なまでに滑る滑る。

朱夏のまるで半魚人（しかも不細工な面）を見るような冷酷無比な視線が痛い。居た堪れない。いた『たまれな』い。……………痛いと居た堪れないに共通項があったからどうしたと言っただ、僕は。

「……………どうも（ホントにどうもすみません。ボケが、潤いが足りないんです）」

せめてもの轟さんのレスに言葉以上の感謝の念を送った僕。

まあ、まず届かないだろう。

「さてさあ、お二人さん見たところ何か探し物さね？」

「というか……………ここって何があるんですか？」

「ん？ まあそうさね……………見たまんまと言うかね、古い物だったら何でも扱っことがあるさね」

そう言う轟さんの後ろに、叩いて直りそうなテレビが2〜3台あった。ホコリは被っておらず、現役でチャンネルを回せそうだった。

「骨董というより、古物を扱う感じか……」

「そうさね。希少さや美術的な価値より何より、古さがあれば買い取っているもんだから、趣味でやっているようなもんさ」

ここで僕の思考は立ち返る。

一体、窓枠ちゃんは何でこんなところに案内したんだろうか……？
平成生まれの少年少女に昭和と大正明治江戸以下省略、の情緒を堪能しろと？

「一人でやっているんですか？」

「いやいやそんなことはないさアヤカちゃん。普段は私一人だけど、休みの日には双子の子供達も手伝ってくれるのさ。それはいいんだけどね、どっちもやんちゃでねえ。こないだなんか授業中にまでクラスの垣根……あああ実際は一続きのベランダさね、それを越えてまで兄妹喧嘩するもんだからもう参ったのさ。まったくお互い誰に似たんだか……おっと、これじゃあ愚痴を聞いて貰っているようなもんだね。やれやれ、年ってのは厄介さねえ」

「いや、もう長文はがつつり頂いたことがあるんで」

あれって、文字数だけで原稿用紙四枚超だったよな……
読書感想文の長さだった。

「そうかい？ 最近の高校生は短気だって聞いたことがあったんだけど、えー、トウナくんは違う様さね」

「……いえ」

気が長い人は突発的に人殺しはしないだろう。いくら朱夏を『守るため』とはいえ。

僕が黙り込んだのを機と見たのか、轟さんは自分の話を進めた。

「ふうむ……さっきからのお二人さんの様子を見る限り、探し物と
いう訳ではない様さね……じゃあどうしてここに来たのさ？」

営業シェイカー（後書き）

今回は書くネタが……、うーん、そうですね……作者なりの考え事でも。

面倒ですが、あいだ間との混同を避けるためにあわい間と書く時は全てルビを入れます。
困る例。

『その間』：前後の文脈にもよりますが、これだけでは『あいだ』と『あわい』の区別がつかない。

まあこれは作者の意地悪な不備を勝手にフォローしているだけなのですけど、たまに他の作者の作品を拝見させていただいている時に明らかかな不便でしかない書き方があるんですよ。

（ここからはもっとつまらない話です）

例えばこの小説で使った漢字を使うと、『僕は吃驚した』とかが突然出てくるようなものです（まず書くことがない上に読み方が複数あつたりするのが輪をかけて問題になったり）。まあ調べれば済む話なんですけど、さすがに日常で頻繁に仮名書きされているようなものを難しい漢字にしてほつたらかしにするのはどうかなー、と。ちなみに自分は『咄嗟』の読みが咄嗟に出てこないような阿呆で五月蠅い鬱陶しい木偶の坊です。

……これ以上はさすがにやめときます。ただ、それぐらいには真剣に書いている、ということかどうかご容赦を。

……すみません。最近、ストーリーが良さそうなものを見つけては読みづらくて途中で投げちゃったというのが多かったもので。プロならともかく、自分も含めて、アマはしょうがないですよ……

非売エルダー（前書き）

青かったのに、秀でた。
踏みつけて、折られた。

非売エルダー

夕方もいいところの、骨董屋。

「ふうむ……さっきからのお二人さんの様子を見る限り、探し物という訳ではない様さね……じゃあどうしてここに来たのさ？」

轟さんは聞いてきた。

「実はここに行けって言われただけで、具体的に何を、ということはないんです」

「川井窓枠っていう小学校低学年の案内でここに来ただけど」

どちらかというと言葉遣いが荒い方、後者が僕の台詞だ。いや、単に敬語を心得ていないだけなんだけど。

川井窓枠の名を聞くと、轟さんはいきなり脱力し、溜め息を吐いた。

「ああああ、まったく……何で私をこき使おうとするかねえ……まあいいさ。と言ってもここには見ての通り、物しかないから必要な人には必要ない所で、例えばそっちのポニーテールのお嬢ちゃんはこちらには用はないだろうさね」

「ふーん」

同時に言った。というか言ってしまった。

何やってんだよ僕。

「何よ」

また同時だった。何だこのコント。

というか僕、『何よ』とか言っちゃってるよ。

オネエかよ。

いやだよ。

やあよ。

……ゴホン。

「いやいやお二人さん、ここで喧嘩はやめて欲しいさね」

大丈夫です轟さん朱夏は物的被害を出さないで僕を討伐することが可……フツ、全然大丈夫じゃないな！

「まあ確かに私にはここはどうでも良いんだけど。……ところで『物』があるってことは、この僕っ子になんか刀とか剣とかないですか？ 軽く現代社会の中で携帯できる」

「僕っ子って大分違うかい？」

僕は朱夏が銃刀法違反を暗に推奨しているのではという疑惑に触れることなく（口は災いの元）突っ込んだ。男が『僕』を使うのはまだ普通のあり得る部類だろう。

……僕っ子ってむしろボクっ娘とか綴って女の子の属性に使うんでしょうねきっと。いや、ボクは知らないけどね。

「……残念ながら、一応は大仰な物こそ ああ、一応刀剣の所持許可みたいなのは持ってますよ そういったもんは……辛うじてっというものはあるさ。でもそれはとても売り物になるもんじゃないし、まして携帯できるとなると……隠し武器ってことになって、そんな危ないもんは流石に用意できないさね」

「いやいやそんな危ないもの持ちたくないですよ」

とてもこの間ナイフを持つどころか人を切った人のものとは思えない台詞だった。

とんだことを言ってますよ僕の口。

「すみませんねえ。ここにはオンボロな店と、それに見合ったボロ刀や折れたナマクラ刀ぐらいしか伝わっていないさね」

「……ボロ刀？」

と、ナマクラ刀。

それは逆に、新品よりもむしろ、僕の興味を引いた。

というか、普通の刃物ではナイフと何ら変わらない、という僕獨特、特有の感覚だった。

「ええ、どうも錆び付いてるらしくて、頑なに抜けようとしなくても、見ることもままならない。かといって燃えないゴミにポイというわけにもいかない。困ったもんさね」

「……もし良かったら見ても「無理さね」」

言い終わらない内に断られた。

「意地悪で言っているんじゃない。見たところお二人さんは単にあの歪ライアー術師の紹介でここに来ただけで、確固たる目的は無い……と。これは当たっているね？ 沈黙ならイエス。ノーなら何か別のことを言うといいさね」

「……………」

僕は黙りこくった。

「よろしい。そんな何の目的もない人に、私は『武器』を渡すわけにはいかないのさ。わかるね？」

「……はい」

「というわけで、少なくとも今、渡す物は何もないのさ。必要ができたならその時来るといいさ。わかったら一旦お帰り。川井窓枠の紹介に免じて、必要な時はいつでも応えて見せるさね」

「……どうも」

もうこれ以上ここにいるべきではない。さすがにそれはわかった。僕より先に朱夏がお暇いそひしようとお辞儀をした。

「どうもおおじやました」

続いて僕も後ろに向けて出るべく（お辞儀を忘れて）振り返ろうとしたが、

「ああ、ちよいと待ちなさ」

瞬きほどは、あっただろうか。

その間に、轟さんを中心にずつ、と白と黒が、広がった。

丁度、家を包み込むように見えたところで、外の果てが見えなくなつた。

封陣。

通算6度目、か。

そのどれも、使う人は、色採だった。

轟さんは、正座そのままの姿勢でゆつたりとしていた。

外に出ていた朱夏（言うまでもなく紅蓮バージョン）が恐ろしい速度で戻ってきたが、何の敵意もないのを見てすぐに、矛を収めた。その色は、黄色のようできて少し違い、山吹よりほんの僅かに明るい、鬱うつ金色。

決して光らず、輝かず、しかしはつきりと目に映り、静かに輪郭

を蠢く。

「あつしも一応こういうもんなんですか。ああああ、安心するさ。敵じゃあないさね。それにもうこんなおばさんさ。陸りくに戦えやしないさね……。そしてこれをやった理由はというと、二人が本当に『こちら側』なのか、確認しなかったのさ」

「で、ちゃんと色採と確認できた、と」

「ん……。まあ、そうさね。予想通りの結果ではあつたさ。……。それと坊やの方、萌葱もんそうさんによるしゅさ。いや、むしろ私の子供の方がよろしく、かな？　まあ、どうやら坊やとは縁が薄いようにも見えるがね」

「……僕の父親のことを知っているんですか？」

萌葱なんて名前で、男という存在、僕は父親以外に知らない。名前に萌え〜、とネリチャギ……。違う（何この定番のような言葉）、名前に萌えとネギが使われてる、バカな父親だ。馬鹿な父親だ。莫迦な父親だ。むしろ祖父ちゃんが馬鹿なのか？

まあ名前に『萌』が付いてる男のキャラクターは既にいるし、有りつていえば有りなのか。

……話題が逸れた。とりあえず僕が言いたかったのは父親の名前が萌葱だと言うことだ。

けれど、轟さんはそんな所を気にしているのではないらしい。

「四手なんていう『ヤバい』名字、そうそう忘れるもんじゃないさね」

「……………」

どうもこの人も普通とは視点が違うらしい。

後ろの朱夏はこれをどうでもいい話と判断したのか、さっさと出ていった。

それに合わせるように、轟さんは封陣を解除した。
商店街の喧騒が、戻ってくる。

「それと、あのお嬢ちゃんを大事にしてやりな」

「なっ……僕たちはそんな関係じゃ」

純情ぶる僕だった　と誤魔化す僕だった。

ストレートは僕の弱点ですよ。

その代わりジヤブは全力で防ぐ！

何のことだ。

「ふふふ……冗談の一種さね」

轟さんが笑った。

そして、僕は店を後にしたのだった。

非売エルダー（後書き）

鬱金の力……こういう表記だったら売れないんでしょうね。文字の入れ替え（アナグラム）をするともっと売れな……という小学生の考え。

ところで突然ですが、次回で三章終わりです。

終章アピアラー（前書き）

突然、だったのか？
きっかけは、あったのか？

終章アピアラ

朱夏との、帰り道。

結局、収穫らしい収穫と言えば、新しい登場人物が二人増えたことか。

「これからのことを考えなきゃ」

きっぱりと朱夏は言った。

「これから、というと？」

「私達は、もつと強くないといけない。そんな気がする」

今でも十分強いと思うんだけど……まあ、実際のところ、八木との戦いでは実質朱夏はダメージを与えられていないし、そう感じるのも無理はないのか。

だからと言って、僕が余裕でいる訳ではない。

今までが単に相性が良かっただけの話だということぐらいは気付いている。

多分、相性ぐらいで左右される様では、ダメなのだろう。

窓枠ちゃんにも言われたし。

「強くなる……って言ってもどうするんだ？ 当てとかはあるのか？」

朱夏は曖昧な表情をして「さあ？」と言った。

「私はそんな確実っていう意味でずるい方法とかは知らないし、都合のいい師匠みたいな存在もないから、闇雲に試行錯誤していく

つもりだけど」

「それって大丈夫なのかなあ……」

「時間がないってこともないし、大丈夫でしょ」

獅子島朱夏はストイックだった。

まあ、道徳的な正義の人が楽な方法を探すこともないか。

それよりも僕の心配している事柄は、

「それを僕に話すということは、その……訓練？　に僕が協力する
ってこと？」

「そうね」

さらりと決定。僕の意見は無い、と。いやまあ断る道理も無い
だけ。

それにしても朱夏のこういう勝手さといい受け答えの間のなさ
といい、そういった僕に対しての遠慮の無さというものは果たして、
親しさの表れなのか僕のことを露ほどにも思っていない証拠なのか、
僕は考えないことにした。

「とりあえず今夜あたりどこかに集合しようかと思うんだけど、ど
こかにいい場所知らない？」

「うーんそうだなあこの辺って小学校中学校住宅地って土地柄のせ
いか公園が若者の溜まり場として機能してないからそこを使うのが
いいのかな　っていきなり今夜？」

今夜という単語が引っかけたせいか、僕は棒読みで返事をして
いた。空元気というか、元気が空になっていた。

「じゃあ今日は休むの？」

いやまあ、行動は速い方がいいのはわかっているんだけど……あー、なるほど。

自分に厳しい、か。

そういう真面目は僕は嫌いじゃない。

いや、嫌ってもしょうがないんだけど。

にしても、そういう風に言われると断る理由が思いつかないから世の中不思議だ。

「いや、やっぱり善は急げって言うし、今日からやるぞ」

「だったら、そうね……今夜の十一時集合で」

……こうなると、深夜番組は録画かなあ……あ、家族にバレる。どうしようか……。

「わかった。それで行くぞ」

僕がそう言った瞬間。

あっさりと、どっぷりと。

目を疑うように短い間隔で、身近な感覚の封陣が、僕の肝を消し、そして消えた。

白線と黒影で、視界が埋め尽くされ、

生き物の居ないが故の死のない世界。

現実的でない現実。

嘘みたいで嘘じゃない。

災害の通り過ぎた後、跡のように僕は、慥然としていた。

「……統那！」

「あ、ああ。……どうする？」

ぴしゃりと言葉を打たれ、僕は我に返った。

「今から行っても、どうせわからないから行かないけど、もう悠長に構えてはいられなくなったかも」

窓枠ちゃんや轟さん、打葉のいたずら、という可能性は端から考えていないのだろう……いやまあ僕が普通に考えてもこの三人にそうだった側面があるとは思えないし、何より封陣の威圧感　なん　で言葉で表現してしまっただけいいのかわからないけど　が今までのとは違った。

「だったらなおのこと、急がないとな……」

「そうね」

「……あれ？」

ここで僕は一つのことを思い至った。

「どうしたの？」

「いや……同じ色採なんだし、打葉も誘ったり　つぶあっ！？」

朱夏のぐーぱんちが頬にクリーンヒット！

一瞬だけ首が半回転しそうだった！

……な、何？　何！？

もしかしてぼ、僕の幻覚だったか！？

「どうしたの？」

おお、同じ台詞。ということは時間が戻ったんだな（統那くんは物理的ではない衝撃で混乱しているみたいです）。

よし、もう一度……

「同じ色採なんだしう　ずへえい!？」

そ、双骨!？」

鳩尾と腹部に両手のぐーぱんちがクリティカルヒット!

というか僕のリアクションボイス、気持ち悪い（だからといって『あべし』を使う気にはどうしてもなれないのだけど）……。

「どうしたの?」

エンドレスエンプレスとでも形容できそうな無茶苦茶だった。

「……も、もういいです朱夏サン」

これ以上は僕が保たない……。次はどこをやられるかわかったもんじゃない。

以下は四手統那の与り知らぬ話であるので、三人称で書かれています

跡路市のまた別のどこか。

周囲に何者の気配も無い、ビルの屋上。

突然、人の腰の高さに中心を置いた円周上に冥い球が幾つも現れ

た。それらはどこまでも光を出さない球体だが、いつしかまるで閉じこめられていたかのように白い淡雪のような光点がそれぞれの中から吹き出しては消える。それらの僅かな明かりを漏らす冥い質量が廻りながら、中心に揃って幾筋の尾を引き、重なり合う。

闇夜の星空のような景色を宿した穴がいつの間にか、人をすっばり覆う程に広がり、穴の奥行きも伺い知れないその空間から朧な人影が穴を抜け出て、いつしか確かな形を持ってその容貌を現実のものにしていた。

その瞬間だけ、副作用として封陣が現れるのだが、これを防ぐ手立ては現時点では見つかっていない。

周囲を油断なく警戒、気配を探る。

「……………」

現れてすぐに見つかり、最悪襲撃されるといふリスクは、どうやら避けられたらしい。

現れた人影は封陣 本人がそう呼んでいるかは定かではないがを解除し、サングラス越しに夕焼けの光を正面に浴びて目を細め、それをうんざりだとはかりに、くるりと背を向けた。

その顔立ちはおじさん（いわゆる、おっさんではない）と大体が評を下すくらいの、渋さと頼り甲斐のある顔（だと、本人は思いたくない）。背は日本人にしてはやけに高いが、そのオールバックの髪の毛の黒さと和装がやはり、日本人というイメージを真っ先に抱かせる。ただ、和服の上にさらにベージュの、サラリーマンがよく着るオーバーコートを着ているせいで季節感の外れた印象、さらに言えば和服も常識からすれば目立つ類の格好ではあるが……それらが男に対して異様なものを感じさせる。

しかし、それ以上にその壮年の放つ尋常ならざる威圧、覇気が普通の人には関わろうとはとても思わせない様な何かを持っていた。

その声は、軽薄さを『装うように』、落ち着いていた。

「さて、到着したは良いものの、どうしようかねえ」

言うや否や、男の懐で振動がした。取り出したのは、90年代の携帯……二つ折りでもなく、画面も小さく、カラーすら縁遠いものだった。少なくともサイレントモードなるものは持っていない。

その携帯は、『こちら』とは通じない代物だという一点さえ除けば、何も異質は無い。

携帯が、震え続ける。

男は悩み、しかし無視するわけにもいかず、出る。

「はいはいもしもし……はいはい着いてますって……いいえ、何も聞かされていないので全く存じ……あれ？ そうでしたっけ？ ……ああそつでしたそつでした。誘拐でしたね……いやあそんなことはないですつてスカウトですよねスカウト……はいはい、はいはい。そんじゃ、失礼」

………はあ、と溜め息をつき、携帯を仕舞う。

「いつまで経っても慣れないもんは慣れんねえ」

男は、標的を探すべく、行動を始める。

終章アピアラ（後書き）

とりあえず、肩透かしの第三章、終了です。

伏線張りまくり、バトル成分ゼロ（もしや恋愛成分もゼロ？）の第三章です。回収し切るとこの物語は終わります。それぐらいに詰め込みました。

カタカナの部分は『くする人』でほぼ統一してみたり、本来そういう目的のものではないのに前書きを使ってみたりとそっち方面でもトリッキーな構成でした。

次回からは全て戦闘要素を含むはずですのでその辺はご安心を。というより今回の話の構成にご容赦を、でしょうか。

ところで、もしかしたらこの小説が自分の十代最後の小説になるかと思うと、何か「おおお……」と来るものがあります。もう一年もしない内に二十歳……その頃にはもう少し幼稚さが取れていることを祈ります。いや、その前に単位ですね。大事ですよ、単位（昨年度いくつか落としました）。

最後に、こんな勝手な更新ペースにもかかわらず見てくださっている読者の皆様に感謝して、後書きを終わります。

P・S・何かオススメの小説（とにかく面白い！という方向で）、あります？ 媒体は問いません。問えません。

登場人物サメーション(前書き)

何となくこんなのが書きたかった。

この物語を(正弦の自乗) + (余弦の自乗) 倍楽しむ方法です。

わからなくても構いません。

登場人物サメーション

五十音順

麻倉 打葉（ 十七歳）

あさくら うつは

主人公の友達。主人公の親友。主人公の真友。主人公の心友。どれか一つは確実に当てはまるのだろう。

あいてつ
藍鉄。

実は中学の頃からいじめられていた。イケメンでいじめられるというのもおかしい話だけど、そういうのあるかもしれないなあと思っ

た。
自殺を図ったが、それを条件の一つとして？色採？となった。

何にでも『気付く』事に長けている。天才的な秀才。

どこか別の視点で活躍させたいと作者は展望している。

豆知識。台詞に三点リーダー『……』を使っていない。

尾上 蔵波（性別年齢共に不詳）

おがみ くらは

菊池の探し人、らしい。

詳細不詳。

加賀上（ ）

かががみ

主人公のクラスにそんな名字の人物がいた模様。打葉談。

詳細無し。

というか別の作品でこの名字を使ったがってる作者。

川井 窓梓（ 推定八歳）

かわい まどわく

主人公の……知り合い。小学校には通っていない様だ。
空色。

明らかに普通の存在ではない。常に風船を持っていて、それにぶら下がるなど、奇怪な行動と言動が目立つ。打葉よりも長く喋った。今振り返ると何を言ってるんだろつかコイツと思わないこともない？
歪術師ライアー？と呼ばれることもあるが、詳細不詳。

本人曰く、「撃退能力しか持っていない」。
暗躍しているようで暗躍していないのでは？ と作者は首を千切らんばかりに捻る。

菊池（ ?歳）

きくち

主人公のちよっとした知り合い。

みすばらしい。眼帯をペンダントにしている。

本名不詳。

年齢不詳。

目的不詳。

不詳不詳。

そして、主人公の菊池に対する、第零印象とは……？

実はホームレスな生活をしているんですけど、言わなくても良いことを（本編では）述べなかつた作者に対する感謝の念は今この瞬間潰

えたでしょう。

桐那 片那（ 十二歳）
きりな かたな

主人公の家に住む居候。

主人公に果敢にアタックをしている。そこに意味はあるようで、ないのかもしれない。家に来る以前の経歴は不詳。

名前が『かたな』ではあるが、これ自体は『刀』を意味しないと作者は明言してみる。

豆知識。百合疑惑あり。

獅子島 朱夏（ 十六歳）
しじま あやか

ヒロイン……かもしれない。まあヒロイン。筑紫よりはヒロイン。

朱色。緋色……そう言うならむしろ、火色。

主人公よりも前に？あっち側？に関わっていた。

火を使う。？炎技えんぎ・？と云って技を使う事がある。現時点で判明しているのは？離火はなび？のみ。

道徳的な正義感、というのが根幹にあるっぽい。

後に引けなくなった段階でキャラクターが弱いなあと作者は自責の念に駆られた。

豆知識。イメージは和風。

四手 せせらぎ（ 三十四歳）
しで せせらぎ

主人公の母親。専業主婦。

主人公を『とうくん』と呼ぶ。おっとりでもないが、慌てることもない。ややハイペースなマイペース。

できるだけ無意味な名前にしようとしたらこんな風になった。

四手 統那（ 十七歳）

しで とうな

主人公。語り手。

灰色。

物語が面白いかどうかを左右するのはこの統那に他ならない。

『切る』事に関しては人一倍こだわりがある。

現在？封陣？の中では右目が見えず、右手が動かない。

通常の？色採？の回復力以上に『切り傷』の回復が早い。

この法則は他の？色採？にも当てはまる。

物を大切にしないが故に、部屋は小綺麗。

実はもっと別の名前にしようかと思っていたと作者は楽屋裏事情を

明かす。

豆知識。無し。

四手 萌葱（ 三十六歳）

しで もえぎ

主人公の父親。

名前だけは登場。主人公の印象からして、ふざけた人格であることは確からしい。

不知火 筑紫（一六歳）
しらぬい つくし

クラスメート。主人公の親友……というより、恩人に近い。
これだけは言っておくが、主人公と関係が保てている時点で普通ではない（軽くほのめかしはあったが）。また主人公と過去に何かあったらしいがそれがここで語られることは無いだろうなあと作者は残念無念になる。つまり語るかもしれないということである。
豆知識。一番安直に決まった名前だったりする。

筒井 羽織（性別年齢共に不詳）
つつい はねおり

菊池の探し人、らしい。詳細不詳。
『はおり』ではなく『はねおり』なのが味噌。ミソミソ。

戸井竹 美嘉（性別年齢共に不詳）
といたけ みか

菊池の探し人、らしい。詳細不詳。

轟 間（四十歳）
とどろき あわい

主人公の知り合い。

鬱金色。ウコンの力を漢字表記にしない理由はきつとここにある。

商店街にある店の一つ、？轟骨董？で店番をやっていた。店主が夫かどうかは不明。

双子の兄妹がいる模様。本人は主人公の父親と関わりがあるらしい。日本刀を二つ所持している。ただしどちらもまともな使い方はできない。

耐震補強が必要なさそうな名前だなあと作者は字のバランスの良さに感心する。

八木 尖刃（ 二十三歳）

やぎ せんば

敵。第一章のみに登場。統那の最初の敵ということもあり、ちよこちよこ名前だけは出てくる。

狐色。

何か理不尽な事件（事故ではなく）に遭ってそこから？色採？になったようだ。そこから犯罪に走るようになったらしい。

川井窓棹に？形取り？と言われた。

物質をコピーする能力……と言うのが大方正確なものだと思われる。斬撃をダイヤで防ぎ、炎は鱗に溜め込んだ幾重もの空気の層で凌いだ（一応、補足説明）。

最後は主人公に切られて死んだようだが……？

んんーん、と口癖っぽかったことを言ってみる作者。

夜天 浪雅（ 二十四歳）

やてん ろつが

主人公のご近所さん。フリーター。

ジャージ愛好家。最終学歴、どこぞの体育大学卒業。こんな頭脳を

擁した学校が可哀想だと言わざるを得ない。
出番が少ないことが残念なのは作者だけである。

登場人物サマেশョン（後書き）

こんな風に多分定期的に人物まとめをやると思います。
あくまでまとめです。紹介はしません。

ちなみにこの物語は壮大とは程遠いスケールなのでその辺は覚悟しておいて下さい。

序章 ディスコース（前書き）

ディスコースって言うのか。

序章 ディスコース

今回の話の内容とは全く関係無い、言い換えて無関係な話なのでけれど、ちよつと僕の過去について少し喋ってみようと思う。

無関係だった僕の過去。

まあはつきり言えば、無いのは関係ではなく話す事、というのが正解だ。

数少ないネタ 今回の敵についてでさえ、この僕が知る機会を逃してしまつたが為に大した情報は得られていないのだ。

名前、小間しよまげんせい險静。出身、異世界。

見た目にわからない情報と言えば、これぐらいだ 性格や能力はさすがの僕も弁えているからここはおたのしみ、ということだ。

後は、僕らでは勝てなかつた、ということぐらいか。

…… やっぱりもう終わった。やる気の問題か？

まあ、

それが頂けないから、僕の昔話を少しするので、何とか了承してほしい（了承して頂きます、か？）。

序章の役割は基本的に行間のように存在したり、しなかつたりするという方向で。

さて、どこまで振り返ればいいのか……。

うん、筑紫に会う前、小学校低学年の頃が僕の最も残酷無比、無慈悲無比な時期だった。

何が残酷だったのかと言えば、僕の周囲に対する影響がと、言わざるを得ない。今にして思えば 別に『今』でもなく高校生の僕でも小学生後半の僕でも思っていたことは何ら変わらない あの時僕は何も知らないガキ、いや、餓鬼 ある事に対して餓えて乾いていた者という意味で だったし、それ故に劣悪を極めていた

んだらうなどと、後になつてみて、常々思つのだ。

あの時、僕は何をしていたのかと言えば、何もしていなかった
いやいやそんな人並み外れた事はしていなかった。ただ、友達が
欲しかったと、記憶している。

だけど、それは過ちだった。

「おまえ、おなじみちなのか？　いつしよにかえろーぜ」

「うん、いいよ」

程なくして、僕の知らぬところで死んだ。

僕は一人になった。

「わたし、　　なの。よろしくねっ」

「うん、よろしく」

明くる日、その子の机には何故か花が供えられていた。

僕はまた一人になった。

「へえ、じゃあおれのこれ、やるよ。ほら、これならちいさくてじ
やまにならない」

「ありがとう」

そして僕がそいつの最後の目撃者になった。

貰った極小カッターナイフ（確か、社会科見学でどこかのゴミの
焼却施設に行ったときの文房具セットの一部だ）はいつだったか、
無くした。

僕は更に一人になった。

一見しても何回見ても簡潔なこれらの出来事はそれこそ文章に起
こせば短編ぐらいにはなるんだらうけど、必要無いし、何よりこの

僕がそんな事を許さない。死んだ友達に少なからず悼んでいる僕が、だ。

さて、数は覚えていないけど、そんなのが際限無く再現　そんな事を言っつては友達に失礼なのは百は承知なのだけど　されて、周囲もようやく気付いてきたらしく、

僕は独りになった。

友達になろうとするやつも、虐めようとする奴も、理解しようとするやつも、排除しようとする奴も、僕との間に人間関係を築こうとする人は全て、死んだ　ではない、それだとまるで彼らが自発的にそうしたともとられかねないので、死なされたと言おう。

そう、悪いのは僕で、みんなは運が悪かったんだから。

幸い　その言葉はみんなには悪いけど　既に構築していた家族なんかはどうやら、無事だった。だけど、それは僕のメンタルには関わらなかつたと思う。

勿論その全てにおいて、僕は新たに『関係』を築いただけで、実質何もしていなかつたのだらうけれど、事実がどうあれそれを不気味に思わない人がいるのだらうか　いや、いたけど、そんな親切な、もしくはお節介な、もしくは厄介な人はいなくなったのだからいなかつたも同じじだつただらう。

そうして、僕は筑紫に救われるまで、ずーっと独りぼつちだつた。そんな小学生だつた。僕は。

……まったく、自慢にもならない。

多分僕に普通とずれた何かがあるとすれば、おそらくその辺りに原因の一端があるんだと思う。

自分で人を切るよりも、自分の関わりが切れていく事の方がずっと怖い。

決して『自分がされてもいいと思っっていることを他人にする』な

んで詭弁のような事を言つてのけるつもりはないし、まして『自分が切られてもいいから他人を切つてもいい』などと思つてしているわけではないけど、僕はそれだけ、関係性というものを大事にしている。そのためなら、ためらい無く他人の命を切つてやる。そういう人間だ、僕という人間は。……人間は？

……まさか、もしかして、ありきたりな表現で言えば、僕は人外と言われるのか？

人の間、ではなく、外と。

いや、それはいいか。

むしろどうでもいい。何が変わる訳でもないんだから。

さて、くだいようだが僕の事。

端的に言つて、切れ者ではないけど、切り者で、切られ者。

それも僕の一端であるのだけど、それはつまり、極端でしかない。極端な性質という、一端。

本質はもつと別の所にあるような気がしてならないのだ、いつもいつも、足し算を間違えてしまつているような、引き算で引きすぎているような、掛け算を取り違えているような、わり算で何も割り切れていないような、自分の歩き方はちゃんとしているのか、喋る言葉は通じているのか、感じ方はみんなと共有し得るのか、考え方は逸脱していないか、呼吸の方法はおかしくないか　まあ、だからといって僕が周囲との差異、差別を気にするという事ではないのだけど　そんなような、何か重大な欠陥を抱えているような気がするのだ。

そうして僕は無意識に自分について考えたりする時がある。一日たりとも考えなかったことは無い、とは言わないけど、ふとした時に、不意に思い出せないという事を思い出す。

断続的な『いつも』だと思う。

まあ、だからといって僕はそれを思い出そうとするような不安に駆られたりはしない。かえって封じ込めてしまいたいような……、それはともかく。

そこで僕が連想するのは、何とかまあ、朱夏の事だったりする。

名前のように、朱色が基本。

本当は火の色。

悪を裁く正義の炎、のような。

僕の幼馴染み。

.....。

ここで偽らざる韜晦たうかいを言つと、僕は朱夏の事を、まあ、それなり以上には特別に想つて おつと、じゃあそろそろ脈絡とは無関係に始めます。

序章デイスコース（後書き）

ああ始まつちやった。一ヶ月って短いねーとか老いを感じて生きて
いる作者です。

何となく勝手に後書きコーナーでドリフトを一回転ぐらい失敗して
「てへ」とか言えれば良いのですがこれが中々上手く行きません。
「中と上を書いたんだから同じ文に下も織り交ぜろよ」というツツ
コミにも対応できそうにありません。

とまあいつもの冗談はともかく。

一身上の都合で意外と時間がピンチですが、何とかこのペースを保
てれば意外と良い感じの軌道に乗る第四章です。よろしく願いま
す。

最後に、今回のテーマは『脈絡無し』……最悪だ。

授業ディレイ（前書き）

ディレイってマイナスイメージな単語の割に右肩上がりに見える。

授業ディレイ

時間的には一時間目の英語の授業。

「はい、ここで“ I wonder if you cut me ”という文がありますけどこれは、はい遅刻常習犯（出席簿にチエック、つと。……ぶくくつ、チエスのチエックと掛けてる。……ぶつ。チエックメイトも近いか……っ！」

いきなり笑いのジェネレーションギャップだった。

僕こと四手統那よんていとうなは学校の荷物検査が無くなって久しい六月のある日、見事に遅刻魔となっていた。

それはいつもの理由ではなく（そう何度も荷物検査があつてたまるか）、僕の幼馴染み（の、ような……）獅子島朱夏ししじま あやかのせいだった。

「寝坊して遅刻しました以後気をつけたいと思います」

ということを今週だけで四回も言っている僕。

あまりに無機質な対応なんだけど、正直な話、演技ではなく感情を抑えている部分もあった。

欠席数は一応まだセーフなラインだけど、このままだと留年してしまいそうだ。

机に向かう途中、歩きながら僕は前の席に座っている朱夏の顔を通り過ぎ様に見た。

「……………」

よくもまあ、しれっとしてるよ。

眠気の目の字も無いし。僕なんか目と民と气ぐらいまで行つて
のに……。

僕はこの状況に少なからず、理不尽とか格差を感じずにはいられ
なかった。

(……ああもう、らしくない)

それもこれも、毎日続く『特訓』のせいだった。

夜十一時に公園に集まり(その前に家の前で合流しているんだけ
ど)、そしていきなり二人で戦う。これだけ。一応、小規模な封陣
を張ったり(僕がやつても失敗するので朱夏にやって貰ってる)と
周囲への配慮だけはあるけど、正直、それ以外は身も蓋も無い。

現在、全ての戦いで全敗。勿論僕が。

だって と言うと見苦しいだけなんだけど 互いに同じ様な
身体能力で片やナイフ一本、片やいわゆる火炎放射器一丁。

ナイフの射程は手の届く範囲(投げるという手段もあるけど、そ
うすると僕は手放して大の字になって仰向けかうつ伏せになってい
る)、火炎放射の射程は十メートル以上、さらにそこから放射面が
容赦なく広がる。

はつきり言つて僕に逃げ場は無い。弾切れでもない以上、僕に勝
ちはない。

朱夏の手加減と色採の回復力で黒焦げになるのは免れているけど、
上半身は常に裸になる必要があった(いつかの八木やと同じ理由で)。

その僕の肉体について、

「意外と筋肉付いてるね」

と朱夏は言うけど(この時僕は恥ずかしさを堪えて「み……見な
いで」とボケた)、僕に言わせて貰えば体脂肪率は一応20%を超
えないだけの太らずムキらずな感じの、中肉中背つてやつだ。一応

特訓の成果として、日増しに力が付いているような感覚はあるけど、未だに片那かたなに腕相撲で勝ったことがないんだから、それは嘘だ（決して片那が馬鹿力という訳ではない）。

まあ、特訓の成果が表れたとすれば、それと、あとは一つ発見があった、ということぐらいか。

どうやら、僕は持つ刃物によって動きに違いが出るらしい。

ナイフを持った状態を基本とすると、カッターナイフでは若干速くなり、軽くなる。体感程度ではあるけど。

鋏はさみ、包丁、日曜大工の道具から鋸のこぎり……と、入手が簡単なやつを試してみたけど、鋏は動きは良くなったけど大きさと形状、強度からして実戦では使いづらくて（たとえマインドレンデルを出されても同じ事だ）、包丁はナイフに比べ、意外と重くて戦いに支障が出たし、鋸に至っては振る度に揺れるしなるの二拍子で思うように扱えなかった（材木は恐ろしいぐらいに伐れたけど）。さらに言えば後ろの二つは持ち運びが不便だ、という弊害もあった。

以上の理由で、僕はナイフ（家にあった二代目）を使うのが最善、という結論になった。

しかし、ここからが問題で、それ以上の前進や進歩が全く見えなくなっただ。

ちよつとずつ僕の動きにも経験らしきものは見えるようになったんだろうけど、一向に朱夏に近づける気配がしない。

あれを避けるには、いわゆる『消えたように見える』足捌きが必要になるんだろうけど、朱夏の前では動きがバレバレ、すぐに捕捉される。あそこまでたどり着くの一体どれだけの時間をかけるのか。少なくとも3分も走れなかったような人がフルマラソンを完走する、といった努力の範囲では収まらないだろう。

あれはまだ人の範疇だ。……僕も人類の一員なんだろうけど、それはそれ、だ。

「こう考えてみると僕がいても無駄なんじゃ

ぶすつ。

「てっ」

着席っている（現在進行形）僕の後頭部に何か刺さった。

まさか教師のチヨーク投げならぬ刃のブーメランか……という馬鹿な推測は捨てて、僕は刺さった何かを抜き（淡々と言ってるけど痛い！）、後ろを振り向く。

後ろの不知火筑紫を牽制しつつ確認すると、刺さっていたのはなんと裁縫針だった。なんてこった。

「（……不知火でめえ何をする！）」

「（壺を突いてやったのさ！）」

そんなこと言ったら皆がその言い訳使うだろうが！ だから鍼師はりしは医者と同じく免許制なんだよ！

……僕は一体全体何を言っているんだ？

「（壺とかいらねえよ！）」

「（なにやら最近獅子島さんとアヤシイらしいから、その辺の妄想をしているんじゃないかと、煩惱を打ち消してみたのさ）」

当たらずも遠からずな所が凄い！

いやその前に、針で煩惱は消えないよな？

「（してねえ！ とうにかものを考えるのは人として生まれた権利だろ！）」

僕は便宜上嘘をついた。

「(ナトーのくせに生意気だ!)」

「(北大西洋条約機構のくせに生意気か!?)」

僕は国家の枠を超えても生意気と断ぜられるのか!?

NATOとTOUNA。

滅茶苦茶無茶苦茶な繋がりだと思う。

「(バカめ! 納豆も知らないのか)」

「(カタカナ使っておきながらおまえは何を言う!?)」

……無理矢理だ。

ミスディレクション
誤誘導もいいところだ。

「(何を隠そう、あたしは初志貫徹で知られているのだ!)」

「(僕はおまえの言動が自由に動き回るところしか知らねえよ!)」

それで僕が振り回されるのがパターン。

「(納豆!)」

「(あたかもそれが僕の名前であるように言っていることはあえて追求せずに言う。何だ!)」

「授業終わってるよ」

「……うわ」

そして休み時間になってまたしても会話の途中で周りに置いてけぼりにされていたことに気付いた僕だった。

これもパターン。

授業ディレイ（後書き）

統那という名前が思いの外いじりやすく驚いてるところです。

それと、連載を再開した途端にアクセスが跳ね上がって過去最高記録をマークしたのにビックリしました。ありがとうございます。そしてそれ以前の過去最高が何故か三章を終えた直後、ではないのが作者の百八不思議の一つに数えられています。

ところで事物についての不思議は七つで十分なのかもしれませんが、個人の抱く不思議はどう考えてもそれを遥かに超えてしまっている、ということとはつまり、我々人類はどれだけ他と被らない不思議を抱え込むかによって個性を確立しようとしているのでは、とは言ってみたものの、適当に言っている以上何の説得力もないんですね。

こんな文章に感化されないように気をつけましょう、ということは無意味な後書き、もしくは遊びを終わります。

会話ディファレンス(前書き)

ディファレンスのわからないルー大柴。
ないだろうなあ……。

会話ディファレンス

昼休み。

「ほうほう、そんな事があったとは思っていたが、そんな事があったのか」

「慧眼けいがん恐れ入るってやつですな打葉先生。あー今日は大当たりだ、ウナギうめえ」

気取る打葉と、茶化す僕。

男二人、弁当昼食。

……現実こんなもんだ！ リアルリアル！

今は、僕の近況を話していたところだ。

「そうだな、特訓は良いことだと思うぞ。物語的にだかな」

「何で斜に構えているような斜め上の感想が出てくる!？」

打葉先生はどうやらご機嫌斜めだった。

「まあ、俺を混ぜても詰まらないだろうからなあ。きつと少しの情報を見ただけでヒント以上のものを沢山出せるしな」

「打葉先生は何でもかんでも気付いちゃうんだなあ！」

絶対に僕と朱夏の特訓をハブられたこと気にしてる！

「まあ、お前ら二人の間にべたべたとくつつくつもりもないけどな」

「まるで僕らがべたべたとくつついているような言い方じゃないか」

打葉

「そうか？ まあそうだろうな。確かにそれだと鍛錬にならないな」

そう言っつて、あごに手を当てる。うん、理解が早くて助かる。朱夏がそんな甘い人物だと一体いつ描写したと言っつんだ。甘さ控えめプレーン……いや、淡泊じゃないか。

「それでさあ、結局寝不足だよ……」

「獅子島の方は普通に登校しているんだが？」

「ああ、実はね、特訓が終わった後に録画した番組見てるんだ」

「ふむ、まあそんな事だろうと思っつていたが、そんな事があつたのか。成程な」

僕の自社株が落ち込んできた。

それにしても言い方が嫌味くせー。

「ああ、自分でもそう思っつていたが、そうだつたのか」

「……もしかしてユアブーム、とか？」

マイブーム、じゃなくて。

「そうだな、薄々そんな所だろうと感っじてはいたが、そんな所だつたか」

今のは使っつづらそうだつた。

「それにしても、特訓、ねえ」打葉は言つた。「良く知らないんだが、色採つてのは皆が皆、特殊能力みたいなものを持っつているのか？」

「んー？ どうなんだろう？ 僕が最初に戦つた人は持っつてたし、朱夏も火を出すし、僕は……しよぼいけど」

刃物を犠牲にして一回だけ何でも切る、とか。

裏新宿最強の不良、とかに当たったら砕けちゃう気がする。まあ、そんなあらゆる意味でナンセンスな存在がいるかどうか知らないけど。

「成程。大体分かった」

僕は『何が』とは口に出さなかった。

「期待してくれ、ということだ」

こうして僕がそれを言ったものと想定された答えが出てくるからだ。

「こうしてみると俺は悪役になっていた方が展開し易かった様な気もしないではないな」

「もの凄い強敵になる気がする！」

まず僕の思考を想像だけで完全補完されかねない！

『お前がそうすることは計算済みだ』とか『お前は俺の掌の上で踊っていたに過ぎない』とか！

「その台詞自体は別になんて事は無いんだけどな」

「今僕喋ったか!？」

考えが読まれてる！ ちなみに心、の聲が口に出るとかいうありふれてツマラナイ体質は僕には無いらしい。良かった。さすがにその辺の賞味期限は切ってもいいだろう。

二番煎じでも、できるだけ飲めるやつだけにしたいなあ、とか。

「さあな。そんなのはどつちでも同じ事だ」

「かつこいいこと言ってるけどそれはパクリだ！」

「『それはパクリだ』か。ふん」

「確定させなくていいから！」

この二つを多用すると人に嫌われるっばい。

「さて、話題を変えようか」

「打葉先生無理矢理だなあ」

別に無理矢理なのはどうでもいいんだけど。

「『原因を自分に認めず他に求める』っていう行為は、人としてどうなんだろっな？」

唐突にそんな話題を振ってきた。とは言え、僕達の普段の会話の流れからすれば、掘り下げることが見当たらない時の話題の転換はしよっちゅうある。

で、話題は自己責任を逃れる人、っばい。

「人として当然なんじゃないか？」

「それはよく考えてない言葉だろ」

やっぱりバレた。単に『人として』を使ったかっただけの僕。

「でも、案外そういうのも外れていないような気がするんだよね」

「まあな。もしも他のせいにする奴がいない、もしくは少数派

だったらもつと世の中上手く回っているはずだ」

「教育が悪い、環境が悪い、特に政治が悪いなんかはよく言うけど、まさか自分自身が一番悪いなんて思えないよな。僕自身も含めて」

気の持ちようだと、僕は思う。

『しあわせ』の定義と、一緒の次元で考えれば、だけど。

「根本的に、『悪い』みたいなマイナスな言葉を使わせなければいいんだけどな。副作用はともかくとして」

「脳にいい習慣ってやつですか、打葉先生」

「ちょっと違うけどな」

否定語を使わない、だったか。

ちなみに、ここで話題がさらに逸れようとも僕達は話したいことを話しているだけなので、気にしない。

ここの読者であるからにはそういった真面目は捨てて貰わなきゃ、とかわがままを言ってみたりする僕。

「悪いといえば、四手。全てに対して『悪い』っていうのはどういう事を言うんだろうな」

「うーん……世界を滅ぼす、とかじゃあないんだろうな……」
「だよな」

果たして世界を滅ぼすことで喜ぶ存在が、いないとも限らない。

悪はすべてをすべからく“Oh no!”と懊惱あつのうさせるべき……はずだ。

……ここまでくるとさすがにそのままオヤジギャグだ。

まあ、

そもそも世界が続くのがいい事なのか、打葉はわかっているのかもしれないけど、僕にはわからない事だった。

「そもそも何かの利害と何かの利益が被らないものってあるのか？」

「そんなものは、視点をどこまでも意地悪に広大に拡大すれば、無

いんだろつな。ダイヤが削れて困る人はそうそういないだろうが、削られる炭素原子にしてみればそれまでの安定を脅かす脅威だったかもしれない。まあそれにしても分離を望む意志があったかもしれないという可能性を否定したくはないが。他にも例えばだ、地下水を汲み上げれば、地表は潤い地表は陥没する、みたいなものだな。そして、そのどちらが利益で、また利害なのか、そういった二元的な判断はできない」

意志があつたからと言って、行動を起こすとは限らない。そう考えれば意志の存在を否定できなくなってしまう。

単純な話、石に意志があるか？ という問いに対する答えは『あつたとしても証明できない』だろう。僕の場合。

「量刑みたいな難しさだな」

「だから戦争は無くならないんだろつ」

「ああ……全くだよ」

「見解の相違だな」

「みんなちがつてみんなしぬんだよな」

「みんなわるいのはいつしよだな」

「みんなさいごはいつしよなのにな」

「まあ、皆違つても、皆どうでもいいというのが俺の見解なんだが、どうだ」

「僕の見解はみんな性癖が違つてもみんないい度胸してるよな、なんだけど」

どこかで聞いたことのあるような金子さんだった。

ここまできるとルール無用のワイルドカードだ。

さて、真面目に語っているように見せかけているだけの話でした、といついことば。

会話ディファレンス（後書き）

と見せかけて、統那の中で『打葉先生』のおフレーズが定着した話でした、ということ。

険悪デイスアグリー（前書き）

さすがにネタが無い。

険悪デイスアグリー

その晩。

少年マンガよろしく、特訓をやっていた時間。

恥ずかしいことに、この時僕はどうしようもなく同情されるべきではなかったように思う。だから無駄に経緯も語らない。

僕は身勝手だったと言えるだろう。

フラスコにフラストレーションをため込んでガスバーナーで熱した気分だった。しかも沸騰石が入っていない状態。危険っちゃ危険だけど、爆発事故にまでは発展しないぐらい。

「……これって意味あるのかなあ？」

もうかれこれ十数回は皮膚が焼けたらろうか、そんなタイミングで僕は言ってしまった。

そう、言ってしまった。

いくら、燻くすぶるようにその思いがあつたにも関わらず、言っではいけないという事ぐらいわかっていたはずなのに。

「……じゃあ止めれば？」

対して僕の発言の意図も訊かずに、朱夏は突き放した。

朱夏の反応も、どこかよそよそしく感じた。

それがいけなかったとは口が裂けても……まあ、口が裂けたら言えないけど。

「いや、そういう意味で言ったわけじゃあ……」

「だったらどうして？」

間断入れずに、朱夏はきつく問い詰めてくる。

この時はまだ、対話の余地は残っていたのに、僕はそれを無駄に
してしまった。

どうしてだろう？

……いや、ここで踏み止まっても、そんなに大差は無かったんじ
やないか。

「いやだつて僕、これ以上強くなれそうにないし、ここで一緒にい
ても無駄なんじゃないかって思うんだ。それで効率がいいのかな、
と」

この時、一番に思っていた『不安』を言えば良かったのに、何故
か自分本位な『不満』を言ってしまった。その結果、冗談や比喻で
はなく、朱夏の方から猛火の熱気が押し寄せてきた。

「何？ じゃあ統那は意味とか効率で動いていたの！？ そんなに
詰まらない人間だったの！？」

驚いた、と言うよりびっくりした。

朱夏の叫び声を、僕は久しぶりに聞いた。

僕はびっくりしたけど、そのびっくりしたという事実がかえって、
僕に無闇とも言える自信をつけた。

僕の中で何かが切れた。吹っ切れた。

……おまえがそういうことをいうならきつと僕はそうだったんだ
ろうな！

「……ああ！ ああそうだよ僕は意味とか理由がないと動かないん
だよ！ 何だよわからないな！ 大体そっちこそ自分のことばっか

り考えて、僕が工夫しようとしてることは全部無視だろ？ じゃあ一人で仮想した敵相手に戦っても変わらないだろ！？ それに僕が敗れて敗れて敗れて敗れて敗れて敗れて敗れて敗れて敗れて敗れて敗れて敗れて敗れて敗れて敗れて敗れて！ 敗れた時僕を見てきみはどんな顔をした！？ 哀れんできた！ 残念そうなものを見る目で！ 誰もそんな目で見られたくないんだよ！ 僕だって！ それで一体何の進歩があつた！？ 僕の焦げた回数だけだろ！？ そっちは何か劇的に変わったのか！？ こんなんで得る経験値なんて自主トレとなんにも変わらないだろ！？ 何がしたいんだよ！？」

朱夏のことを理解しようとしていなかった癖に、僕はそんなことを言ったように思う。

わからなかったのだ。

ここにきて、よりもよって獅子島朱夏の事がわからなくなっていた。

やるべき事と、やりたい事、どっちなんだ？

「……知らない！ 勝手にすれば！？」

「ああ、さつさと帰って寝るよ！ これ以上寝坊しなくてせいせいするよ！ じゃあな！」

「あっ……」

そんな声だったかが聞こえたとしても、僕はずんずんと遠ざかる足を止めなかったと思う。

この日僕は、多分今までに一番『切れた』。

足取りは重たくて、それでも朱夏から遠ざかるならと思うと、大分速かった。

気分は、悪かった。

家に帰り、浴室で自分の皮膚を見る。

「無傷……だよなあ」

焼かれた影響かはたまた高速回復の弊害か、微妙にチリチリしたかゆさが落ち着かなかった。

……えっと、うん、まあシャワーシーンとかは要らないだろう。省略。

風呂から上がり、早めに帰ったのだから見ることもできたのだけど 録画の確認だけ済ませておいた。そして自室に戻り、そのまま眠さに任せて寝た。

大体あれなんだよな……

目的があるなら言えばいいのに。

いつも通り火をぶっ放すだけだろう？

僕なんか必要なかったんじゃないのか？

不必要で無必要で非必要で……未必要だろう。

僕は哀れまれてまで、きみの特訓に付き合えない。

一人で十分に進めるのに、なんだって僕を混ぜたんだよ。

言えばそれでいいのに。

本当は知っているんだ。

どうしてそうするのか。

まさか僕が知らないと？

……。

僕が言う事じゃないな。

僕も何にも言っていない。

本当に言いたいことは。

方法がダメだったんだ。

それはわかってるんだ。

でも、どうすればいい？

謝る事は勿論だけれど。

それで解決じゃあない。

……ああ、そういえば。

初めて喧嘩したのかな。

よく思い出さないけど。

仲直りはした事がない。

大丈夫だとは思っけど。

……まあ、さすがに明日になったら忘れた、なんて事にはならな
いだろうけれど、それでも僕は続けなければいけない。

灰色を。

………うん？

灰色って、どういうことだ？

思い出せない。

思い出さない。

………どうなんだ？

僕はどうしたんだ？

生まれて、両親に育てられて、幼稚園に行つて、朱夏に会つて、
会わなくなつて、いつの間にか片那かたながいて、小学生で、筑紫で、中
学生で、打葉で、表面上は完全に更生して、今。

………抜けている。

何かが足りない。

歪みっていうのは、これか？

………ああ、だんだん混乱してきた。

がらがらがらがらがら

目を、覚ます。

頭を、冷ます。

「……これで夢オチじゃなかったらどうなんだよ」

僕はそこで違和感に気付く。

僕の右脇に、桐那きりな片那が普通に眠りこけていた。腕を抱き締められていて、いい感じにパラライズしていた。断じてパラダイスではない。

「何でいるんだよ……」

あ、鍵かけるの忘れてたから簡単に侵入できるのか。……施錠しても無意味なのは置いといて。

「だあーいすき」

寝ぼけながら誰か愛しの相手に告白していた。

……間違っても僕じゃあないよな……？

「でもちゅーはおあずけー」

「……僕を亡き者……じゃなくて泣き者にしたいのか、おまえは」

既にファーストでないという事実が僕の記憶の地層からダイナマイトで乱暴に発掘された。

極悪の朝だった。

険悪ディスプレイ（後書き）

現在右肩ばかり上がっている作者ですが決して成績や業績の事を言っているのではなく、左肩を動かすと痛いので大体の動作を右でこなすが故の右肩上がりです。右肩上がりにも良いことと悪いことがあつたんだなあと痛く感じています。

きつと関節に邪気が溜まりやすい性質なのでしょう。

階段を降りている時に足首の関節が鳴っている奴がいたら、そいつの事は放っておいてあげてください。作者からのお願いです。

まあ願いがひとつ叶うとしたらその関節を全て治してしまいますが、これからも後書きコーナーを落書きコーナーとして扱っていきますのでよろしくお願いします。

寸劇ディスクコード（前書き）

ディスクの变化形。
嘘に決まってる。

寸劇デイスコード

学校。

家庭科。

調理実習。

「痛っ……!!」

「おっと大丈夫かー？」

「いや、これぐらいは」

「せんせーい。トナーが汚しました……あ、間違えた。怪我しましたー」

「確かに出血でまな板を汚そうとしているけどな！」

おそらく誰かが思いついているであろう同音異義語タジャレだった。

そしてこれは僕と朱夏と打葉と、今話している筑紫の四人班だ。

僕は不注意にも包丁で野菜を捌いている時に 既にわかっているかもしれないけど、その辺は得意分野だ 指を少し切ってしまった。あつと気付いたときには爪の中ほどに横から切れ込みを入れていた。さすがに骨まで届いてはいない傷だけど、感じやすい人には見せられないかもしれない出血だった。何というか『どばあ』とコミカルな擬音が出そうなくらい。

絆創膏ばんそうこうを持ってこられた頃には実は傷口は塞がっていたのだが（四手統那のモンスター効果発動！）、わざわざ無駄な疑いを作ることもないので残っていた血を洗い流し、見えないようにぱぱと付けた。

「あ、おい獅子島。焦がしてるぞ」

「え……きゃあっ！」

……この日の昼食はとても不味かった。

その日の帰り道、一人でだらりと帰っていた。端から見れば幽鬼のように見えたかもしれない。通報はされないにしても、職質はされかねない。

「……、ああ」

思い出したように僕は絆創膏をひっぺがし……その場で捨てるのは忍ばれたので、粘着面を内側にして丸め込み、ポツケに仕舞った。その後頭部を、

ぶすつ。

「筑紫てめえええええええ！」

刺さった針の痛みに構わず、後ろに向かって怒号を飛ばした。

「へいへい！ リリースア〜ンドキャッチ！」

ヒトラーの演説すら凌駕した僕の大声でさえもどこ吹く風で受け流した筑紫は振り向いた顔、つまり僕の後ろにさらに回り込み、針を抜いた。

「いてっ！」

……それ、清潔だよな！？

感染症とか洒落になんねえぞ！？

それに下手に神経打って全身麻痺とかならないだろうな……!?!? 　そして僕は何でそのことをこの前ではなく今になって気にしてるんだよ。なあ、おい。

「何なんだよ……!?!?」

今日は気分と虫の居所が悪いんだ、という僕を筑紫は問答で巻き込んだ。

「今日は調子悪いな四手二等兵！　青春してるのか！」
「イエスマム！」

軍人設定か、と思う前に適応していた僕。考えず、感じていた。いやまあ、ここ数ヶ月どころの付き合いじゃないんだし……。

「イエツサーだろうが下郎！　それで戦場を生き残れると思うな！」
「下郎は戦争階級ではありません！　サー！」

普通はサージェント軍曹とかコーポラル伍長とかフライベーター兵卒だろう、と知ったかぶってみる。

「貴様あたしがサーと言ったことは否定しろ！」
「イエツサー！」

卓球少女並にサーサー言ってた。
あと、筑紫を男性扱いし続ける僕は何気に酷いのか。

「サーは男性に対する敬称だといっておろうが！　貴様死にたいよ
うだな！」

貴様って素敵並みに矛盾していていいなあ……。

……ゴホン。

さあ、再び真面目に遊ぶぜ！

「そんな！ 僕が死んだら我が輩しか残りません！」

『僕』が使えなくなったら一人称が『我が輩』になる、という意味で使ってる。

我が輩は猫ではなく四手統那である。

……無意味なボケだった。

「ならばここで謝れ！」

『ならば！？』と僕……我が輩の分離した頭は突っ込んでいたが、現実ではそんな対応はしない。

……うわ、違和感ゲロゲロ。

何だゲロゲロって。

精神分裂か。

……ゴホン。

「あざーっす！」

あっちもこっちも間違えてる僕。

そろそろ收拾がつかなくなってきた。

「ふっ、そんな貴様をあたしは怒って怒じよする！ それでこそあたしが認めた外郎だ」

怒するって何だ？ 調べると……ああ、平たく言えば許すって事か。

……そうなると文の意味がかなりわかんねえよ。

というか、

「それ『げろっ』って読まねえ！」

時間差突っ込み。

ういろっ、だ。

「黙れ！ 今から貴様を食ってやる！」

「僕今から食される！？ てかおまえは捕食者プレデターだったのか！？」

ういろっ＝食べ物。

……この解説は要らないか。

それよりも、アメリカン映画のような（ハリウッド、ではなく）存在が六年以上も身近にいた事に僕は失望を隠しきれない。

絶望ではないのがこれまたなんというか。

「いやあたしは日中でも活動できるアンパイアなのさ」

「言い間違えた結果ただの審判だ！？」

吸血鬼ヴァンパイア、とでも言いたかったのだろう。きつと。

「おつと時間だ。さあこれからも青春を懺悔のネタに追加していくがいいさ！」

「そこまでおかしな事を言っていないから突っ込めねえ！」

普段に比べて、ではあるけど。

「それにしてもまた問題を抱えているのかい？」

「……まあね」

筑紫のテンションが変わった。
何を考えているのか予想できないのは変わらないけど。

「といつても今回はあたしが出る幕、というわけじゃないみたいだねえ」

「いつおまえの出る幕があった、不知火筑紫」

「なーにを言いますかね市電君」

「漢字おかしい、それと『ん』を付けるな」

そう言つと『ん』を取らないのが不知火筑紫、と解説で先手を打つておく。

おそらく『し』を取つて

「でんくん
殿君」

「偉くなつてるなあ僕！」

どっちも敬称としての意味がある。
で、次は僕の名前の方をいじつて

「うな君」

「かゆみ止めみたいだ！」

コーワケール。

モロコシヘッド、とか。

この単語に対して僕の偏見は、ツツパリで名を馳せている軍団の一人にそんな呼び名の人がいるんじゃないかという妄想にまで発展している。

「とにかく、別に心配することは何もないから。ちょっと言い争っただけで」

「獅子島さんと?」

「そうそう朱夏とコミカライズできるんじゃないかっていうぐらいの喧嘩をしちゃったんだよ」

筑紫には隠し事は無し。

僕の? ナイフ? の事も、言わないだけで、知っている。
いや、さすがに筑紫の関われない範囲は言わないけど。

「ふんふん。そいでそいで?」

「それつきりそれつきり。それつきりですよ」

……何かの歌詞みたいだった。

「んにやるほど。青春してんなあ……のほほんっ」

「のほほんは擬音じゃない」

さらに語尾の小さい『っ』がのほほんの雰囲気を邪魔してる。ずいぶんと減り張りのきいたのほほんだ。

「ずずずずずずずずずずずずずずずずずずっ、つぶああっ」

「一体何立のお茶を啜ったのか知らないが、そこまで落語家よろしく雰囲気作りに努めなくていいぞ」

「おソバナのに……」

「(動きの描写が無いから) わかんねえよ!」

じゃああれか!?

単位は米か!?

「じゃあうどんだったらわかったりしたり?」

「当り前だ!」

「マジか！？ 間近！」
「そうだ！ 操蛇！」

多分な！ 絶対じゃないぞ！ うどんだったら音がわかるとか十中八九幻想だ！

僕と筑紫の組み合わせは平気で嘘がまかり通るんだからな！ 『
そうだ』とか、本当はふねへんなのにむしへんにするような無法地帯なんだからな！ そう、僕は蛇を操るへびつかい座、つまりアスクレピオスっ！

……ゴホン。

これじゃあ嘘と言うより妄言だ。亡くなった女の言と書いて妄言……心霊現象！？

「ともあれ、まああれですよ。ちょっとは肩の力を抜いた方が総合的にはかどるんですよ」

「……ああ、そうだな。悪い。助かったわ」

「にやにやあ……」

にやにやしてた。

「『いやいやあ……』って言いたかったのは痛いほどわかるぞ！」

「にやあにやあ」

「ふっ、着ボイスゲット！」

にやあにやあ、にやあにやあ、にやあにやあ……

僕の携帯に素晴らしい機能が付いた！

「にやにい！？」

「今回は僕の勝ちだあああああ！」

携帯を栄光の証のようにバーン、と掲げた。
すんげえ馬鹿な戦い。自覚はしてるんだけど、正直楽しすぎて止められない。

「く、九段下（ゆ、油断した）……………」

「油断大敵だぜ、筑紫……………」

「その語尾についてる点々々々々がム力つくぜ。だが、この間の『愛してるぜ』ヴォイスは既に入手済みよ……………」

いつかの僕の『愛してるぜ』が筑紫の携帯で繰り返された。

「何い！？　そこから闘争は始まっていたというのか！」

「これは、おあいこだぜい……………」

一緒に息を吸って、

「僕たちの戦いは、終わらないっ！」「」

「打ち切りだぜっ！」

「漫画の話だよな！？」

……………まあ、

ともあれかつて僕の角を取り険を取ってくれた筑紫のおかげで僕は今、言葉では言い表せないほどに助かっていた。

……………あとは、謝るきっかけがあれば、かな。

しかし、現実はずっと、いや、もう少しだけ、加速していた。

寸劇デイスコード（後書き）

この小説は経済になんら影響を及ぼさないので打ち切りは無いでしよう。

ちなみにこの二人の周りでは例の如く「ママー。あれ何やってるの？」、「しっ、見ちゃいけません！」というやりとりがあります。主人公は気づいていません。

自分は絶対に近寄りたくはないですね。このおちゃらけた二人の組み合わせには。

しかし書く分には面白いんだよなあ……。

襲撃ディストラクション（前書き）

まあ現代社会で怖いのはむしろディストラクションでしょうけど。

襲撃ディストラクション

その日、結局僕は家に帰り（片那の迫撃をかわし追撃をかわして）
晩御飯食って部屋に戻った。

「いやあ、どうしよう……」

踏ん切りはついたものの、多分向かいの家にいるんだけど、

「昨日の今日で、行きづらい、い、いいいいいい……」

ガキ臭いのは重々承知だったけど、どうにも行動には出られなかつた。

「あー、うん。双六すしろくで一回休みのマスに止まったと思えばいいか……
……って、うわあ。」

「ダサいな僕……」

ヘタレの謗そしりを免れない。

まあ、意思表示じゃないけどちょっと練習してみるか……

「……封陣」

分身の術はオレの一番苦手な……ゴホン、封陣は僕の最大の苦手になつてた。一向に上手くなる気配がない。どうやればあんな暗黒ドームができるんだ。教えてくれよ打葉。

「……はあ」

まあそんな訳で今回も失敗。どうしてもあの『白黒』が出てこない。
トライアンドエラー 試行錯誤の繰り返し返し……いや、むしろ無謀錯誤か。
トライウイズエラー

「……寝よ」

布団に入ったあと、コンマ数秒で僕は眠った。
実際はもったかかっていたんだろうけど。

次の日。

土曜日。

熱心なことにこの学校は土曜日も授業をやっていたりする。昼で帰れるけど。

「ちよん、ちよん、ちよん（出席をとる音らしい）、っと……？
おお珍しい。獅子島さん休み？ はい先生、ボクの所に連絡がありました
ました っで自分やないかい！」

普通に出欠確認ぐらいしろよ。

担任と生徒達の温度差を実感しながら僕は前の席を見つめる。

空席。

今日、獅子島朱夏は欠席してます。
理由、僕にわかる訳ないでしょう。
弊害、僕が先生によく当てられる。
理由、前が空席で目立ってしまう。

何となく、いつもよりつまらない気がした。

そんな日の午後、ついに来た。

封陣　　と思った時には、メシッ、と天井が潰れかけていた。

「！」

「!？」

何かが教室中に降り注いだ。

ズドドゴガガガバキガガガッ、ドガッシャアアアアア
ン！

それらは教室の天井や窓ガラスを突き破って入り、壁や床を突き破って出た。封陣の中の教室は、何か巨大昆虫の巣穴の様に穴だらけになった。僕はその中を転けつ転びつ逃げ惑い、なんとか生き残ることができた。尻餅を突いた姿勢から起き上がり、大声で呼びかける。

「打葉先生無事ですかー!？」

「ああ、同級生に先生と言われるのはあまり、気持ちのいいものは、ないな」

入り口近くで瓦礫を下から押し退けながら打葉はむくりと立ち上がった。

軽口を叩いてはいるが、打葉らしくもなく、一発貰ってしまったらしい。見た目にはひどい怪我がないのは例によってアレだろう、『人外』の存在』はどうたらこうたら、以上の理由により鉄筋コンクリートなど比ではない強度が、とかそんな十把一絡げの説明が出てくるんだろう、きっと。

「打葉らしくないな……むしろ僕が喰らってそんな感じだけど」
「『運が悪い』ぐらいの設定はあっても、いいだろう」

……そんなありきたりな。

「それはともかく完全に視界の外だったからな。しょうがないな」
「……？」

視界の、外？

打葉にしては妙な表現だった。

「いや、そんなこと言っても野暮なだけだな」

「そんじゃあ野暮ついでに俺の用事に付き合っちゃあくんないかねえ？」

いつからいたのか、例外無く割れていた窓の近くに和装（僕は紋付き袴というのがどんなファッションなのか想像できないからそれ以上の情報は知らない）の上にコートを羽織った酔狂な……おっさんがいた。まあ正確にはダンディっばいし、おじさんと呼んでもいいんだけどおっさんと呼ぶのが僕の感性ではしっくりくる雰囲気だ。色は、暗褐色だった。

「おっと、おっさんの自己紹介がまだだな……そうだなあ、小間^{せい}陰^{かげん}。それが俺の名前だ」

たった今思い付いたように、自称おっさん・小間は手をほぐすようにグーとパーを交互にぶつけ合う事を繰り返しながら言った。

「俺は……まあ、そうだなあ、結局何だかんだと言って人材発掘の

ような事をやってんのよ」

ところでというかついでというか、僕はその衝撃的な格好に何も言えないでいた。

……ゴメン。確認しておくけど、僕は取り返しのつく場面ではふざけるよ？

代わりに打葉が会話してくれるから、それで勘弁と堪忍して。

「その言動とこの行動の関係を考えると、順当に考えれば狙いは俺達 正確には『そっち』と関わりのある存在 って事になるな」
「おつ、少年聡い事言うねえ。そういうのは俺、嫌いじゃないよ？」
「順当に考えないなら、お前の性癖とかもつと別の存在を探している等、可能性は多岐にわたる訳だが」

「酷い事言うねえ。おつさん悲しいなあ」

「で、結局どうなんだ？」

「あゝ、こっちは組織で動いているからそれに従えるなら大概誰でも良いんだよねえ。こんなおつさんに回ってくる任務だし。あーあ、やんなるねえ」

「成程。おつさんは暗躍する懐刀という訳だな」

「……ホントに聡いねえ。おつさん敬服するわ」

「三下の振りをするなら言葉遣いは規律を守るように堅苦しく、もしくは偉ぶった口調にしておかないといけないのがセオリーだからな」

それはセオリーなのか？

「アイタタ……言葉遣いは自由なんだけどねえ、ウチの組織は。まあ下っ端は畏^{かしこ}まってたっけかな」

「そして、こうして話しかけてくる時点で、こちらに何らかの更なる行動を仕掛ける気が満々である、というのも外れてはいないだろ

うなと考えるんだが」

「そうそう、『俺に殺されない』ってというのがシンプルな最低条件なのよ。と言うわけでそろそろお試しさせて貰うわ」

すつ、と小間が掌をこちらに向ける。と同時に「四手！」という打葉の警告が聞こえ、僕は会話の流れについていけないなりにも反応してしゃがみ、拳から放たれた『何か』を避けた。

それは空中を通り過ぎ、後ろで壁を破壊して、心臓に悪い音を響かせた。

「へえ。避けるということは、経験が浅いか遠距離は苦手かのどちらか、と……」

「成程、色採には遠距離と近距離みたいなタイプ分けも存在する、と」

「……マジで抜け目ないねえ、君……いやこれ誉めてただけだね。ああ、それと別にそういうタイプ分けはしない方がいいよ。哺乳類爬虫類魚類鳥類両生類ぐらいの正確さしかないからねえ」

あ、その話なら僕もわかる。所詮人間の作った分類だから、例えば力モノハシみたいに奇妙な、例外に近い存在が出てくるんだっけか。

「さてそういう君はどうなのかねえ、つとな」

軽薄そうな言動そのままに今度は猛烈な加速度で打葉に攻め込んだ。

「ふむ」

打葉は数瞬考え、何かを決めたように頷くと、

「^{エクサレーション}息吹？、だな」

なんかいつの間にか技を会得してた。

襲撃ディストラクション（後書き）

まあはつきり言えばこの物語の作者というものは苦手分野が多すぎるので当然心情描写もそこに含まれていて、なんだか自分でもよくわからないことになっていますが、作者的には戦闘描写が出来ればこの物語は万々歳ですのでそこら辺は余り気にしないで行こうかなとか開き直った態度で臨もうとしているのが現状だったりします。まあその辺の主義主張はころころと変わっていると自負する作者の言うことですので気にしないで貰えれば幸いです。

小康ディフイート(前書き)

本当は家康ディフイートとかしてみたかった。

小康ディフェイト

昼真つ盛りの封陣下。

「？息吹？、エクサレーションだな」

迫る小間に対し、打葉は予備動作無しで（予告こそしたけど）、火を吐いた。吹いた。

それらは打葉の至近距離、丁度小間との間の面一杯に目一杯広がり、白熱の光を発し、蒸発した。

それは朱夏の放射とは比べものにならないけど、小間の接近を阻むには十分な効果を発揮した。

小間は「わちゃっ、あっちっ！」と言いながら再び距離を置いた。

「おいおい、子供が火遊びするんじゃないわよ！」

朱夏に山ほど聞かせてやりたい台詞だった。

「おっさんの台詞とは思えないな。それに威力は抑え目だ」

「失礼な。おっさんこれでも猫被ってんのよ」

調子に乗ったダンディという表現がしっくりくる声の小間は、少し焼けたのか酸欠になりかねないぐらいのペースで両手に息を吹きかけていた。

「別にそちらさんの中身に用はないけどな」

「手厳しいねえ。最近マナーゲームが激化してるせいかな？」

……マナーゲームだろうか？ このおっさん、スタンスの割に楽

しいな

「しかしまあ、及第点はやれないねえ」

どっ、と。

後ろから思いつ切り頭をぶん殴られたと気付いた時にはもう手遅れだった。

「俺のそっくりさんには気を付けな」と

僕の意識は落ちた。

目が覚めると、保健室の白い天井が見えた。

「四手。そろそろ起きたか？」

「……うん？ ああ、打葉先生お久しぶり」

横の椅子に打葉が座っていた。何やら文庫を読んでいて、僕の方を見てもいない。

「そうだな、一時間振りだな。小間険静に不意打ちを喰らって気絶した後『言い忘れてたけど、中途半端な奴だったら事情があつて消さなきゃならないんだよねえ困った事に。色採ってやつは少なすぎるぐらいが丁度良いからなあ』』と言ひ残し去って行ってからだと五分振りだな」

「……解説ありがとう」

おかげで思い出す暇も無かった。

「しかしあいつは予想外だったな」
「あいつ？」

小間の事か？ それとも僕を後ろから殴った奴だろうか？

「いや、ただのほのめかしだ」

「ふうん。ただのほのめかしか」

「きつとお前が考えもしていない事だ」

「そこまで言うからには僕が追求しちゃいけないことなんだろうな」
気になるけど、舌戦で打葉に勝てる気がしないので元から諦めている。

「まあ、そっちは俺がなんとかする」

……打葉が主人公やった方が良くない？ この物語。

「一人称だとお前が最適だろう」

「いや、だったら三人称にすればいいだけで……とにかく、あいつの襲撃のあと、どうなったんだ？」

「今まで気にしていなかったようだから言って置くが封陣での損壊はこっちには影響しないぞ」

「……えつと？」

何のことを言っているんだ？

「ん、違ったか？ お前の疑問は学校が壊れていないかどうかだろ」
「う」

「僕の思考の先回りは止めて！」

何より読者がついてこれない！

えっと、要するに！ 封陣で物が壊れても、現実世界では何も起こらない、ということ。

……まあ、八木との戦いで気付いても良さそうなものだったんだけど、今まであまりにも気にしなさ過ぎだったかもしれない。というか気にしてなかった。

さすがに今回は僕の身近な白昼の学校での出来事だったから、それが壊れていないかぐらいは気になった。

「どうやら『封陣が現実世界を基に形成されている』という仮説が今のところ有力だな」

「……………」

僕が何も考えていないかのように物語が進んでいる。

ゆゆしき事態だ。

「まあそんな事よりもだ、俺達は強くならなと緩やかに殺されかけている状況の方が今は優先して対処すべき事柄だろう」

その、帰り。

「トニー君元気かい？」

「ついに外国人になっちゃったなあ僕ってやつあ！」

筑紫に捕まった。

「あたしの事は と呼んでくれ」

「読めねえよ！　なんだよそのニヨロニヨロ！」

「もしくは」

「漢数字の三……じゃない!?　何だこれ!？」

ちなみに正解は『クシー』、らしい(言うまでもなく筑紫　>クシー、だ)。ギリシャ文字、あんたナニモノだ？

ああ、あと機種によっては三との区別ははっきりしていると思うけど、わからない奴は本当にわかりにくいから。携帯とか特に。

「で、　さんはトニー君に何の用で？」

「惜しいなあートニー君。それは『ゼータ』だ」

「ちつくしよおおおおおおお!」

似てるなあ！　一回くねっとしないだけで！

ついでに言えば、　(ニュー)と　(ユプシロン)とか全然わかんねえ！

「……改めて、　さんはトニー君に何の用だ？」

「そーそー今日は愛しの朱夏ちゃんを見かけないな、と思って。

トニーなら何か心当たりがあるんでない？　昨日喧嘩したことだし」

『誰の愛しだ』とは突っ込まない。

「見かけないって言っても一日だけだろ。それなら風邪とか誰にでもあるんじゃないのか？　喧嘩して欠席するなら昨日の段階でだろ」
「ノンノンあたしをナメない方がいいぜトニー。『獅子島朱夏のインフルエンザ伝説』を忘れたとは言わせねーよ？」

インフルエンザ伝説……?　……ああ、あつたあつた。すっかり記憶の海に埋没してた。

当時は第三者的に『ふーん』と感じていたような気がする。

「なんだっけ……確か自分がインフルエンザなのを押しして無遅刻無欠席を守ろうとして結局感染者を学校中に広めた結果学校をしばらく閉鎖させた、だったか」

そんでもってインフルエンザが出欠のカウントに入らないっていうのを後から知ったっていう無茶苦茶滅茶苦茶っぷり。

朱夏ってそれぐらいに遅刻と欠席には執念があるんだよね……。

今回それを軽くぶち破るほどの事態が起こったらしいのだけど一体誰が……。

「イエス。だからトニーが関わってるんじゃないかねえのかいコレつつうあたしの論理展開ローリングしてんだけど了解したかしったか？」

「おまえが何かを考えていそうで何にも考えていないのはわかった！」

そして論理展開ローリングって何だ。

「早く答えねばあたしがここでマップになる」

「え！？ 脱ぐの！？ ここで！？」

その論理展開ローリング（この用法で合ってるのか）がわからねえ！

そして！ これは少なくとも僕が望むようなシチュエーションではない！ 『見たい』という気持ちを否定はしないけど（……あえてしないけど！）、こんなオープンな姿勢で開けっ広げにされるのを喜ぶのとは絶対に同じシチュエーションではない！

「イエス、ウィー、キャン」

「僕にはできないからな！」

一人称複数形で僕を巻き込むな！

……で、

「まずは制服を脱ぎまして……」

「何故スカートから脱ぎ始める!？」

「一番防御力が低いから」

「少し論理的!？」

いや勿論止めるぜ!

最近の禁欲的なまでの年齢制限のためにも!

「止める止める答えてやる僕の思い当たる節と言えば本当に昨日朱夏と喧嘩したぐらいだから! でもそれを朱夏が気に病むとは思わないし!」

「ふっ、初めからそう言えばいいのだよ」

……。

何だ、この軽く敗北した感じ。小間にやられたのより悔しいし。

「しかし喧嘩ね。まあ、ここまで来たらトニー君が誤るしか無いんじゃないん？」

「漢字が誤ってる! あと朱夏は僕のことなんか落ち葉ほども気にしちゃいないだろうけどな!」

正解は勿論『謝る』だ。

「やだなーこんなミス50000とあるよ」

「『ごーぜろぜろぜろぜろ』とか言われても僕は知らないなあ!」

小康ディフイート（後書き）

前の話の色彩変更忘れてた。おっさんゴメンよ。

暗褐色が見当たらなかったからそれっぽいもので代用。

ダメダメじゃん。

あと、クシーはもしかしたら文系より理系の方が馴染みのある文字かもしれない。

謝罪ディクリミナライズ（前書き）

免罪も筆一本で免罪になる、とは誰も記録に残すことのない低次元の台詞だよね。

ちなみにどっちがどっちだかわからない人が意外といるらしいです。

謝罪ディクリミナライズ

朱夏の家の門前 から五分後。

「ごめんなさい」

「……………」

何故か僕に対しては無愛想な朱夏の母親（僕の父さんとは浮気してるんじゃないかって言うぐらいに親しげに話してる）に通されて、僕は朱夏の部屋で土下座していた。

土下寝をやるという手もあったんだけど、そんなにふざけてはいられない、ということぐらいは僕でもわかる。

「正直あの時僕が具体的にどんな事を言ったのか、よく思い出せないんだけど、音をあげるのが早かったとは思ってるよ」

十数秒ぐらいはあっただろうが、それぐらいの間を置いて朱夏は口を開けた。

「何で、そんな簡単に言うの」

ふてくされてるのか、その口調はどこか僕を責めるようだった。

ただ、声は弱々しく、今にも泣きそうだった。

誰だろうね、こんな顔させてんの。

……………。

「今なら、謝って済む問題だから」

「……………何よそれ。今日休んだ私が馬鹿みたいじゃない」

……まあ、聞かなかったことにして、

「そついえば聞いてなかったんだけど、僕は朱夏の特訓には必要なのか？」

「……必要だよ。絶対」

とてもそつは思えないけど、朱夏が言うのなら、それは本当なのだろう。

「だったら、僕はそれに協力するよ」

てつきり僕は、朱夏に必要とされてないんじゃないかと思っていた。だけど、朱夏がそう言うってくれる以上、僕は何も惜しまない。

「……もう少ししたら私がそつちにいったのに」

「いやいや、窓から侵入は勘弁してほしい……」

心臓と体面に悪い。

それから十数分後。

他愛もない会話をしばらく続けた頃には朱夏の調子はいつもの話しやすいものに戻っていた。

「でもまさか自分の言った事を忘れてるとは思わなかったなー？」

「あ、いや大体は覚えてるよ？ 要するに僕が協力しても無意味だ、って言いたかっただけでそうじゃなかったんなら僕の方にやらない理由はないかなーって」

慌てた僕の言い訳に朱夏は呆れた。

「私も何も考えずに行動したり、悪いところはあつたからこれ以上は言わないけど、それならそれでやり方を決めないといけないね」
「それはこれから少しずつ考えればいいと思……う、けど……。あ
」

思い出した。

「けど？」

僕はそのままの疑問系で訊ねた朱夏に、今日あつた出来事を話した。

小間陰静の事。

「　　というわけで悠長なことを言つてられなくなった、っていうのも、昨日の今日で謝つた理由の一つなんだけど」
「何でそれを私に言わないの！」

何かやる気と一緒に火花が散つたようなものが見えたけど、気にしたら負けだ。

「結局の所は強ければ問題ないんでしょ？　だつたら今すぐ行動あるのみ！」

確かにそうだけど。

「じゃあすぐに準備して！　ほら家に帰つた帰つた！」
「わっ、っと押さないで押さないでこける！　まる転ぶ！」

そのまま、僕は背中をどつきまわされ追い出された。

朱夏の家と僕の家との間の道路を横断している最中、何も気にして

いないような大きな声で朱夏は窓から叫んだ。

「こういう状況ならあのお店に行って刀でも何でも貰えるんじゃない!?」

「あー冗談冗談僕には銃刀法違反の単語は何も聞こえないご近所の皆さん気にしないで下さいねえ!」

意図せず僕は情報隠蔽に必死になった。

ここで、僕にとっての転機が訪れる。

何がきっかけと言うわけでもないのだけど、後になって思えば、ここでそうなるべくしてなったというのが一番自然な解釈だという気がする。

有り体に言えば、不自然な話の流れというやつなのかもしれない。

それは事故だったと言えるだろう。

家に帰った瞬間、例の如く片那が僕に飛びついてきた。そこでまずかったのが、僕の対応だ。

昨日、封陣の練習をしていた成果が今になって現れた。

どう気合いを入れればそうなるのか、自分の領域を拡大するような意識を覚えた。

それは、とても小さく、僕の周囲二〜三メートルに留まるものだった。その現実から離れ、現実離れた白黒世界の中に、片那はい

そのときの色がどうだったのか、僕は不覚にも覚えていない。

「片那!？」

「……………」

そして、僕はその事実には驚き、片那もまた驚いていた。
飛びついてくる勢いはそのままに

ガッンッ！ ゴァンッ！

片那の頭突きを受け、後ろに仰け反った僕はさらに、ドアに後頭部をぶつけ、本日二回目の気絶

「おにい、大丈夫？」

「……………」だから、僕はおまえの兄ではないと何度言ったらいいんだ？」

玄関で土足のまま、ただ足だけ宙に突き出された格好で寝ていた僕は、片那の呼びかけで目を覚ました。

体を起こして向き直る僕に片那はふわふわ語る。

「びつくりしたよー。いきなりおにいがアレ出すんだもん」

「……………」っていうか、おまえって、」

「うん、色採とかその辺の事情は知ってるよ」

……………唐突な事実を告げられて僕はなんにも言えない。

「でももう役目は終わっちゃったからどうでもいいんだけどね」

「……………」役目？」

そしてどうでもいいって……流れが急流過ぎる。

「そう、おにいに力をあげるの」

「力……」

「だから、カタカナの力は違うって」

「……あれ？」

またやつちまった。

「もう一回、封陣をやってみて」

片那は真剣そのものの表情で僕に指示した。僕はそれに従ってさ
っきのプチ封陣を展開してみた。

その風景に、片那はやはり居た。

纏う色は、鉄色だった。

「何か、気付いたことはない？」

「気付いた事って……」

「ぴょーん」

戸惑う僕にさっきの再現とばかりに飛びついてくる片那を僕は、
両手で抱き留めることができた。

「で？ 何がしたかったんだ？」

「おにい、わからないの……？」

えっと、何？ なに？ 何だ？

……え？ 僕って鈍い？ そんなこと言われても……照れねえ。

「じゃーんけーん」

ぼん、と片那が右手でチヨキを出して、僕は左手でチヨキを出した。

「あーいこーで」

「ちよつとおにい、もう引っ張らなくていいでしょ……もしかしてわざとなのかなあ？」

次はパーを出そうと思っていたのに止められた。

「じゃあ、これ。握手しよ？」

「あ、ああ……」

そう言って、右手を差し出してくる片那。僕はそれに応じ、る……

あ……。

「もしかして……そういうこと？」

「そゆこと……」

とある神話の偉大そうな名前の神の正体がどうしようもない浮気夫だということを知ったかのような残念さで嘆かれた。

そしてアニメ版ビックリマンのあいつの設定がいかに滅茶苦茶でなかった事を知った僕。

「その右手はただの右手だけど、『戻った機能』はそれだけじゃないんだよ」

「……いや、わかった。あとは自分で大丈夫」

封陣の中で動く右腕を確かめてから、僕は封陣を解いた。

「ところでそれが役目だって言うなら、何で役目の終わったおまえはまだ存在してるんだ？」

それこそ『僕の右腕』ならそうなるんじゃないのか？

「んー、ご都合主義？」

「そんな理由なら消えてしまえ」

この世界はそんな主義がまかり通っているのか。かといって下手に消えて僕の精神に入り込まれても嫌だな……。

「でも全く力は無いから中途半端に危ないかも」

「うーん……」

よかったのか、悪かったのか。

「さあおにい、もう決定的な欠点は無くなったから思っ存分切っていいよ」

僕はこうして何のきっかけもなく、力を得た。

正確には戻っただけだから、これはむしろ順当だと言っていいだろう。

生来の天賦の才。誰にも文句は言わせない。
殺刃師。

「うん。後はフル活用するだけだ」

さて、得るとしたら、あの刀だ。

謝罪ディクリミナライズ（後書き）

鉄色っつーのはもう少しテツテツした感じのものだと思っていましたが本当にテツテツした感じのもですね。

なんというか、緑？

く没ネタく

トウナは レベルが あがった！

ちからが 0ポイント あがった！

すばやさか 3ポイント あがった！

たいりよくが 2ポイント さがった！

かしこさが 0.0000000001ポイント あがった！

うんのよさが 0.1 かけられた！

さいだいHPが 30 あがった！

さいだいMPが 50 あがった！

ツツコミ所満載の上にこれを一人称でやると必要以上に台詞が増えそうだったので。

剣呑ディセンバディード（前書き）

カタカナから単語を推測するのもそろそろ限界が近づいてきている。

剣呑ディセンバディード

「ああ、もう来たのかい？ 案外早かったねえ」

いつかと同じようにして、骨董店には轟間ごうまが座布団すわに坐っていた。

「ちょっとおっさんに襲われちゃったんで、もう仕方なく強くなるざるを得なくて……」

「ふん、確かにあんたは修行で強くなるタイプでは無いだろうさね」

轟さんはゆったりと居直った。

「さてさあ、シデトウナ君。名字だけでなく名前を聞いた時からかなりヤバそうな雰囲気は感じていたさ。そのちぐはぐさといい、ね」

この人は見ただけで見た目ではない変化がわかるようだ。

「今回は、大丈夫ですか？」

刀を貰っても。

「ああ、好きなのを持っていくといいさ」

「あ、いや、持っていきません」

僕の発言にわずかに怪訝な表情を浮かべる轟さん。あと二十年ぐらい若ければ（まあ中学生のお子さんがあると云つことでもそのぐらいの年齢差が妥当だと思つ）僕はその表情に見蕩れていただろう。と述べることに何か意味があるとは思えないけど。

「触らせて貰うだけでいいんです」

それだけで、僕には十分だ。

「まあ、そっちがそれでいいって言っならあたしゃあ止めはしないさね」

「ありがとうございます」

「二本とも触っていくのかい？」

僕は首を振った。

「いや、とりあえず一本でいいです」

一本ずつならともかく、片方は、多分僕の手に負えるかどうか…
…勘だけだ。

「賢明さね」

「じゃあ、ボロ刀の方をお願いします」

「折れ刀は、止めとくのかい？」

「いいんです。そっちは…まだ荷が重そうなんで」

少なくとも片手間で扱いきれる代物ではなさそうだ、ということ
が何となくわかる。

妖刀、というわけでは無さそうなんだけど……。

「そうかい。じゃあ、こっちなさ」

立ち上がった轟さんに案内されて、奥の間にたどり着く。掛け軸
や壺が飾られた典型的な和室の壁に、二本の鞘に納まった刀がそれ
ぞれの台（あれだ、あの支点が二つあるやつ）に置かれていた。

僕はどっちがどうという説明を受けずに、一本を手にとった。
それは僕が力を籠めるとしゃらん、と滑るように滑らかに抜け、
下がった切っ先から水滴がぼたりと落ちた。
横で轟さんは感心したような声を漏らした。

「やっぱり、使う奴は抜けるもんさねえ……」

「じゃあこっちがそのボロ刀で正解だったんですね」

「折れてないからそうに違いないさ。どっちかというところと錆刀というのが正しいようさね。そのせいで抜けなかったのかい……」

轟さんの言う通り、その刀には全くもって光沢がなく、それどころか表面はざらざらで、刃は毀れ峰は崩れ、鑄がどこにあるのか全くわからないぐらいの赤錆だった。

抜けないのも仕方がない話だった。

だからといって、無論僕だったから抜けた、という訳ではない。

『この刀』だったから抜けたのだ。

轟さんが説明を付け加える。

「銘だけは伝わっているさ……それは？村雨丸？。あるミーハーな刀鍛冶が打った刀さ」

「いつの時代だ……」

「江戸時代ぐらい、と聞いているさ」

三国志クラスのミーハーっばい。

ちなみに中国人は三国志を詳しく知らなかったりするらしい。外国から見たニンジャ・サムライの認識だろうか。

「……これ、使い物にならなくなるけどいいですか？」

「そんなのは今更さ。それは譲るのさ」

気前の良さに僕は器の違いを痛感するばかりだった。

「じゃあ頂きます」

「どうぞ、召し上げね」

剣呑な感覚、とでも言えばいいのか。

比喻ではなく 間違えた。比喻で、僕は刀を呑んだ。

さて、

これから話すのは僕の精神世界での話であって言うならばそんなに本編に関わらない、ギャグパートに近いものだと言える。

一つ前提として言うと、決して全ての、ではないという前提こそ必要だけど、僕 この時点での僕 は基本的に大量生産されていないような刃物との意志疎通ができる。つまり人格ならぬ、刃格じんかくを感じる事ができる。

そして今は、ある一つの刃格と対話している。リアルには全く表れないけど。

「僕の精神世界にようこそ。村雨……ちゃんかな？」

「ふん、何よ」

返事は素っ気なかった、というより尖っていた。

「いや、だから……」

「だから何！？ 数百年振りに私を使える人が現れたと思ったらそこまでイケメンじゃなくて幻滅、とかしてるんだから放つといてくれない!？」

第一印象。とつてもとつつきにくいです誰か助けて。

「別に君に好かれようとか思っていないけど、友達ぐらいにはなれないのかな？」

努めて慣れない口調で対話を試みる僕。

「ふん、どの道主従関係は覆らないんだから私がどうしよう関係ないんでしょ。『もう一人』もかなり悔しがっているみたいよ？」

『もう一人』って言うのはあいつのことだ。あいつって言ったらあいつの事だ。

「無意識での技とは言え厄介なことをしたなあ……」

まさかあれにあんな副作用があるとは……。

「で？ 現実的な話 精神世界でこんな事を言うのも滑稽こっけいだけど
あなたは私をどこまで使えるのかしら？」

「さてね。とりあえず？一の型？を何もない基本型として、？二の型？？三の型？？四の型？……ぐらいしか思い付いていないかな」

精神世界でカツコつける僕。無意味だ。

「……へえ」

「へえ、か。あんまり驚きじゃないのか……」

本当、無駄知識。

……いや、冗談だけど。そこで20回も言われたって困るし。

どうかには100回『はい』と言った馬鹿もいたんだけど、はて、

誰だったか。

「うっん、正直に驚いたの。……その辺の才能はあるみたいね」
「光栄だね」

精神世界でカッコつける僕（その二）。サムい。イタい。

「べっ、別に」

「あ、僕はツンデレお断りだから」

どう考えても作り物っばいから。

……じゃあ何で深夜番組見てんだよ、僕。

萌えてないのか。

萎えているのか。

萌えるゴミと萎えるゴミ。

どっちもくさかんむりが無ければ賢そうなイメージがあるのに残念な漢字になってしまっまあ……。

……ゴホン。

「……それだったら私はいんじゃないの？」

刀つぐらもの、刃格。

「あ、そうか。じゃあオツケーで」

毎週金曜日の夕方にすげ替わる新しい顔（の、ヒーロー）並みに意見が見違えた僕。もう白々しさしか残っていない。

「ふんっ。しょうがないわね！」

「まあ頑張っつて」

「……調子狂うわね」

明らかにあきれた村雨ちゃん（ビジュアルは和服少女だ！ 僕だけ見える特権バンザイ！）。

はっはっはっ。僕相手に本気で取り組む人 あくまでも人だけど は例外を除いてみんな逝くから、まだそういう人がいることはありがたい事だ。

まあ、関わる人が片っ端から死んでいくどっかの人（僕ではない）よりは格段に生温なまぬるいんだろうけど。

「じゃあ、これからよろしくって事で」

「だから、私に選択権は無いって言わなかったっけ？」

いわゆるジト目で僕をにらんだ。元々刀であるせいか、ぶった切られそうに感じる。

「それはほら……あれだよ。強制的に従わせるより協力した方がより強力になるっていう王道パターンだよ」

普通の親父ギャグに加えて普通以下のコメントだった。

「そんな理由で私と対話してるの……！？」

気分的には僕の喉に刃が少し切り込んでる雰囲気だ。

頸動脈。

「まさか。そんな事を至極真面目に企んでいる奴の面を僕は鏡の中
にしか見たことがないなあ」

すつとぼけた僕。

「自白したようなもんじゃない……まあいいわ。協力してあげるわ。所詮刀の運命なんてそんなものよ」

「正確には？形無刀？かたながたなだけど」

「そう言えばそうね。無形の可能性って言えばいいのかしら？」

「そんな大袈裟なものじゃないって」

「そうね。形無しの可能性かもしれないわね」

僕の世界が一瞬凍えた。

「どっちかって言うと、ツンドラ……？」

「キャラの確立が大変なのよ……」

ツンデレ成分はもう朱夏が微量ながら持つてるし、確かに大変だ。
さて、

こうして、僕の頭は中々に愉快なことになってきているのだった。

……なんつーまとめ方だ。

剣呑ディセンバディード（後書き）

前回の話がレベルアップだとすれば、今回の話は装備品が手に入った感じの話です。さすがにドラクエ5のカジノでメタルキングの剣やグリーンガムが手に入ったレベルではありませんが、まあそんな感じですよ。

あと、今回ののも更新が日付変更ギリギリで申し訳無いです……誰が期待しているのかもわからないですけど。

というか、剣呑ってこんな意味違う。

相談ディクライン(前書き)

……特に何も言うまい(ネタが無い)。

相談ディクライン

その後、

日付変更完了した感じの時間帯。

「よっし、勝った……!!」

僕は朱夏と実戦形式の試合をして、ようやくにして勝利を納めた。

「その前に五回も負けてたけど」

「漏れ無く僕の汚点を晒してくれてありがとう!」

そう、きつちり上手く行かないのが僕だ!

いやまあ、勝てなかったのは使い方がつかめなかったからっていうのもあるし……。

375

「でも本当にいきなり強くなったね……」

「僕はジャンプ体質じゃないからね」

残念ながら努力も根性も友情も、どちらかと言えば僕からは比較的遠いものだ。

「じゃあ私はどうなのかな?」

「……眠れる獅子、とか?」

獅子島だけに。

「かっこいい……」

僕の思い付きはどうやら朱夏には小学生に初めて二重跳びを見せたみたいに感動されたみたいだった。やめて、そんなに目をキラキラさせないで……って何キャラだ、僕。

「それで、明日は休みだけはどうする？ このままやるとか？」

「うーん、疲れすぎるといけないけど時間も惜しいし……ブレーンストーミング、とかどう？」

端的に言えば自由に意見交換しましょう、的な。……『的な』って何だよ僕。……キーラの味も知らない僕にわかるはずもないか。そして何よりこの文章が存在する意味がわからない。

ダメダメだった。

……ゴホン。

とにかく、意志疎通は僕達にとって大事だ。

僕達は話し合いを始めた。

「統那はやっぱり機動力が勝負だから、速さの底上げをするだけでもだいぶ違うと思うの」

普段は50メートル走六秒弱（……意外と速い？）

「そっだよなあ。右手も動くようになったし、それだけでアジリティとかセラリティ（どっちも機敏とかそんな意味）は結構上がったような気がするんだよなあ……。朱夏は……。どうなんだろ。素手でも戦えるならそれに越したことはないけど、八木との戦いみたいな羽目にならないためにはもっと画期的な方法が欲しいよな……」

「多分、というか絶対に私、パンチやキックで他の色採には勝てない自信がある」

何でか知らないけど僕の中では『僕には勝てるんじゃないか』という推測が成り立っている。

「いつそもつと火を強くするとか、技を編み出す方が向いてそうだなあ……………」

「一応、多少は考えてはあるけど……………」

「どういうの？」

「ううん、ありきたりなのだから今言わなくてもいい」

「……………もしかして、普段の火炎放射にも技名とかついてたりする？」

「あ、うん。火吹かひきとか適当につけてる」

「そのまんまだなあ……………」

「というか、独自性が……………」

「文句あるの？」

「いや、うん良いと思うよ。歌舞伎と掛けているところとか字面でどんな技か伝わるところとか良いと思うよ」

取り繕いながら朱夏の技の解説をする僕。

「まあ今さっき思いついたのもあるけど……………そう言う統那はどんな技を使うの？」

「僕？ 僕は……………そうだなあ」

「まさか今考えてるの……………？」

『もし本当にそうならなんかがっかりするんだけど』という目で僕を見た朱夏。何で技にそこまでこだわるのか。

「大丈夫だって。考えるのは僕であって僕じゃないから」

「？」

「ああいやこっちの 向こうの話だから。まあ、そうだなあ……
？連続殺人？、かな？」

「どんな技？」

「ん、あんまり大した意味はないんだけど」
「……………」

朱夏表情を見る限り、自分も火吹とかネーミングしてるだけに
文句も言いつらいようだった。

「そついやさ、打葉もなんか技身に付けてたんだけど、早すぎない
？」

しかも息吹と書いてエクサレーションって、無駄に格好良いし。
僕も思わず羨望の眼差しだ。嫉妬するぐらい。

「問題無いんじゃない？ 味方が強くなるのは良いと思うし」

僕は言葉に詰まった。

……朱夏に支持して欲しかったなあ……。
随分身勝手な欲求だった。

「……………でもなあ……………まあいいや……………」

そんなどうでもいい事はともかく、

「？ どうしたの？」

いいんだ朱夏、見逃して……。

「そついやマンガとかで見たことあるんだけど、朱夏は火を使える

つて事は炎の魔人、つてのも具現化する事もできたり？」

「やったことは無いけど、できるよ。ルーンの記号とかは使わないしマナで動いているわけじゃないし精霊を召喚するわけでもないから一発で消えるかもしれないけど」

消耗する力を考えると効率はものすごく悪いね。と朱夏は付け加えた。

「そういう統那はこれからは素手で戦うの？」

素手統那、なんちゃって。

「どうだろう？ 確かに必要じゃなくなったけど、武器としては優秀だし、まあ状況によって使い分けるよ」

「使わないよりは使う方が良いと思うけど？」

「でも学校に持っていくのはもうやりたくないなあ……」

「校則に拘束される、って？」

そう、そんな感じ……、

「やったーもう荷物検査にビクビクおどする必要がないんだー！ いえーい！」

と今になってようやく気付いた僕。

いきなり叫んで朱夏に蔑視されたのは内緒……にできてない。喋っちゃったよ。

「そう言えば気になっていたんだけど、私はこの通り、悪い人を許せないからこうやって戦うことにやぶさかじゃないけど……その点統那はどうしてすんなりと入って来れたの？」

すんなり、という訳じゃないけど、『どこにでもいる何の取り柄もない極普通の高校生』のような無闇に変な戸惑いは、確かに無かったように思う。

最初に驚いたのも、自分の身に起こった異変についての方が大きかったし。

「僕は朱夏を守ればそれでいいんだけどね」

多分、僕の『異常』はそこに起因しているものがほとんどだろう。

「え……」

「なになに、少年。おっさんにもその面白そうな話を聞かせちゃくれないかねえ？」

まるで端からそこにいたかのように、おっさん　小間陰静が僕の後ろで腕を半分組みながら片手で顎を摘んで僕に目配せしていた。おい、何かツッコつけてんだ。

相談ディクライン（後書き）

さあ次は待ちに待った本格戦闘だ！ 瞑目して見よ！

……嘘です。気張らず出来ればいいんで刮目して見ていただければ超嬉しいです。何で目を瞑って見るとか無茶なことを言ったのかわからない……。

そして時間がない作者……。『大学生ってこんな焦った生活だった？』と思わないでもないですが趣味に余力を注いでいる内は、この物語は大丈夫でしょう。

ちなみに左肩ですが、徐々に回復しています（治ってなかったのかよ）。

あとひといき。

おおむねできる。

自分の世代はどっちだったっけなあ？（頭がカラコロっている。ただの死んだワーキングメモリーのようだ）

ともあれ、また明日。

力量ディスプレイ（前書き）

案外これの最初に辞書に出てる意味を知らなかった作者。

力量ディスプレイ

封陣が展開される中で、一も二もなく無言で僕は振り向きながら遠心力フルスイングで横に薙いだ。

しかし余裕の登場をただけあって小間は慌てたようにしながらも簡単によけていく。

僕の？打ち込み？の様子から斬撃だと推測したのか、こんな事を言った。

「うわ、ちょっと二人きりのムードをじゃまされたからって、うおわやっ！ 乱切りはっ、無いんじゃないっ!?!?」

「その誤解は嫌いじゃないなあ!」

「同時に否定と肯定!?!?」

ちなみに乱切りと言っても本人は全く切られていない。焦ったように動きながらも的確にこちらの呼吸を読んで思いつ切りしゃがんだり必死に横に体を引っ張ったり磁石の対極同士のように跳び退いたり……絵に描いたような慌てっぷりだった。

「くっ……リーチが足りない!」

「ふっふっふ。距離の差、つまりそれはおっさんとの実力差に他ならないのだよ。少年」

急に格好付けてダンディなお声をお聞かせになった小間だったが、僕がそれに突っ込む暇もなく、被せるような朱夏の声が聞こえた。

「リーチなら、私の出番かもしれないわね!」

朱夏が手から火を吹いた。火はまっすぐ小間を目指し、逃げる方

に向かつて掃射された。当然逃げる方は小間で、絵に描いたような慌てた動きでぴよんぴよん跳ねている。

「ノノノツ、とつ、ノーウ！ お嬢さんは火炎放射器の残虐さを知っててこんなことをするのかい！？」

「炎使いにそういうことを言う方がよつぽど残酷だと思っけどー！？」

「僕に言わせて貰えればおっさんにそんな平和主義があるとは思えないけどな！」

朱夏の火が途切れるのと入れ替わりに僕が再び小間に迫る。

一つ、凶器を携えて。

「なんつだあそれええええええ！？」

驚く小間の瞳に映ったもの　つまり僕の手には、？氷刃？が出現していた。

一一の型。

単に凝固するだけでは為し得ない薄氷が、反るように湾曲して刀の形を作っている。峰は宝石のように三角形の幾何学模様でびっしりと埋め尽くされ、鎬しのから刃にかけては透き通って氷の美しさを純粹に表し、現していた。

触ると低温火傷しそうな柄を確かめるようにしっかりと握り、僕は若干興奮気味に切りかかった。

「？村雨・凍こめて？だ分かったかあ！」

若干小間のノリに吞まれながら前にどンドン突き進む。

一撃目を後ろに大きくステップして距離を稼いだ小間は、

「あっちゃー、これは避けられないわなあ」

コートの内側に物を探るように差し入れた手を抜いて、一緒に取り出した何かを僕の氷刃にぶつけた。

そのまま競り合いになったのは氷刃と、一見何の変哲もないサーベルだった。

「おっさん剣術は得意じゃないんだよねえ」

「僕も習ったわけじゃ、無いけどなっ！」

未熟同士、それなりに切り合いを展開した。派手に足を動かすことも無く、縦の斬撃は横で防御、右斜めに切れば左斜めで防ぐ、攻撃をかわせば次の攻撃をかわされる、突きで攻めれば打ち払われ突き返される、まるで単調な、それこそ競技のような切り合いだった。五分ぐらい、刃を打ち合っただろうか、最後は鏝迫り合いの拮抗。

その結果、僕は少し息が上がり、小間はまるで平気だった。

「いやー、なんていうかねえ、この辺はキャリアの違いってやつ？

悪いねえ。おっさんはママゴトじゃ死ねないんだわ」

「そう、それは良かった。こんな間を繋ぐだけのような切り合いで優勢になった方が困る！」

まあ、半分以上は冗談なんだけど。大体今日明日で強くなるにしたらって、根本のすげ替えだったらともかく、技量に関しては限界つてものがある。

そこが僕と小間の違い、か。

経験値に差があるというなら、どうすれば

「統那！ どいてえええ！」

『何事！？』とも思っただけど、それと同時に僕は驚いて跳び退いた。そのままダツシユで逃げる。朱夏の射程範囲から。

「紅炎！ 風を飲み込み吹き荒れる！ ?火蔵^{かぐら}? あ！ いつけえええええええ！」

何に気触^{かぶ}れたのか何事かを唱えながら、朱夏の手からまばゆいと表現できそうな紅蓮の炎が放射された いや、放射と言うか、もうそれは噴火だった。

ツツツドオオオオオオオオン！

ぎりぎりまで僕のいた場所を膨大な熱量が突き抜けた。それに伴い、?村雨・凍?が、融解する前にさつと昇華した。

所々が影のように黒く見えたせいもあって、質量の塊が乱暴に吐き出されたように感じた。

小間が何事か慌てて叫んでいたみたいだったけど、聞き取ることはできなかつたし、射線のすぐそばにいた僕もその爆風に吹き飛ばされていた。五メートルぐらい放物線で遊んだ僕はすっかりと地面に削られるように落ちたことで遊びのツケを払った。むくりと起き上がって見た光景、風景に僕は感嘆せざるを得なかつた。

「うっわああああ……」

現実には干渉しないのだが、破壊し尽くされた公園は無惨なものだった。そこに何の遊具があつたのかを推測できない程に物という物は根こそぎ持って行かれていて、さらに、地面は元から黒かつたけれど、白く表現された輪郭がえぐれた土を物語っていた。耕され

たよつなとも言えるかもしれないが、現実には焦土なのでその諭えを使うにはあまりにも農耕の環境とは程遠かった。

残り火がそこかしこに揺らめいている。

今にも再び燃え上がって爆発しそうにして。

「とは言えこの手の技の後はほとんどの場合敵は立ち上がってくるからなあ……」

『やったか!?』と気の利いた一言でも言えればいいのに、また台無しなことを言ってしまった僕。その言葉に反応したのは朱夏ではなく、反応しようにも、聞こえていないだろう。何故なら僕は、

「うおおおおお……こいつあちいとおっさんでも堪えるわ……なんつってー」

信じられないことに　　と言うのはありきたりなんだけど　　朱夏からマツ八十分の三秒ぐらい離れた所で、煤も付いていない小間が立ち上がったのが見えた　　その後ろだ！

「出てくるとしたら、このタイミングだよなあ！」

「おっ、やるようになったねえ少年」

後ろに僕は回り込んで、新たに『抜刀』する。

三の型。

「　　？村雨・滴したたり?!」

小間はそれに応じる。僕に振り向きながら振り下ろされたサーベルは、僕の手刀が切り拓いた平面上で水が弾けると同時、

ど真ん中からパァンと切り捨てられ、

「うっそおー!?!」

「嘘のような切れ味が売りだ!」

折られた半分はくるくると宙を舞って地面に刺さる　前に消えた。手元に残っていた物も同様に、消えた。

「汚れ一つ無いって、まさか……さつき朱夏の炎を食らってたのはダミーか?」

コイツ、分身の術とか口寄せの術とか言わないよな……。

「あら? 言ってなかった? おっさんは魔法使いたいな事は大概できちゃうのよ」

本当に言っただよコイツ。

言っただと同時に、小間は立体視みたいに横滑りに増殖し、十、二十……となっただよところで僕は数えるのを諦めた。

「何だよ、これ……」

「嬢ちゃん程じゃないけど火も使えるし……そうだねえ、RPGの魔法使いたいな感じで捉えて貰って一向に構わないわ」という声は何重にも響いた。

コピペの風景に、取り囲まれた。

「おたくらそろそろ死ぬ気で来ないと死ぬかもしれないねえ」という声も何重にも響いた。

その彼我の差に思わず、へたりたくなつた。

正直、遊ばれていた感覚はあつた。こっちは割と本気で取り組んでいるのに、向こうはわざわざそれに合わせるような動きしかしてこなかった。それはどう考えても、本気を出していない（あるいは出せない）なのだろう。

一緒に小間に囲まれた朱夏に話しかける。

「どうする……？ 朱夏」

「片っ端から焼く……とか？」

「最善だね。名案じゃなさそうだけど」

まあ何というか、ピンチだった。

「お前さんら、そろそろ腹を括つとけよ？」と言う数十人の声。

一斉に 若干秒ずつタイミングをずらしながら 統率されき

つた集団が襲いかかってきた。

最初は徒手空拳、だらりと垂れ下がった腕を眼前でうならせて顔面めがけて叩き込んでくる と思いきや、それを半身で避けようとした僕の足を軽く蹴手繰られた。仰向けに転んだ僕にさらに畳み掛けるように とうか畳み掛けてくる一人の小間。

自身の中心線に据えた、体重の乗った肘鉄が、僕の右側の肋骨を砕いた。

「じおっ……ああああっ！」

ここまできてようやく僕はさっきの一撃目でさっさと切っておけば良かったなどと後悔したけど、そんなことを思ったせいなのか、僕に肘を入れた小間はさらにあるうことか自爆し 炎は出さず、圧

力と爆風と破片だけだが、僕がすつぱり収まるぐらいの小さな、浅いクレーターを作った。苦痛を叫ぶよりも強く圧力がかかり、一瞬だけ僕的时间が失われたような感覚に襲われた。

「がつ……っは！」

そんな風にボロボロになった僕の視界の隅の方で別の小間が、地に拳を打ちつける事で体に纏った電気を放した。それらは僕へと弧を描きながら確実に辿り着き、僕はそれで ショックを受けて神経が刺激され、体が不自然に跳ね、結果不自然に起き上がった形で棒立ちになっていた。

最後に、

「……とまあ殴るだけでもこういう風に布石を積み重ねていく事が大事なのよ　つと……」

僕の顔面と後頭部と右脇腹と左の肺とを、四体の小間の拳による衝撃が突き抜けた。奇数番目に表現した部位が前から、偶数番目に言った箇所が後ろからの攻撃だった。

頭部への深刻なダメージもさることながら、脇腹に貰った攻撃もスタミナを徒に消耗するし、呼吸器への被害がそれに拍車をかける。人体は弱点の集まりなんだだと、僕はこの時心底感じた。じつとしていればまた回復するんだろうけど、そんな暇を与えられなければという予想をするまでもなく、僕には本気で終わりが見えてきた。

この間、三十秒も経っていない。現に朱夏は接近を許さない火炎放射で、掃射で持ちこたえているけど、それも後どれくらい持つのかわからなかった。

後からさらに小間は増え続けていた。既にかかなりの無力感と虚脱感が僕の身に降り懸かっていた。まだ戦えと言われれば十分に

戦うことができるけど、その先に勝ちが見えてこないのだ。

さて、

そういうところで登場する人物と言えば、

「こんな所で戦っているとは思ってはいたが、まさか本当にそうだったとはな」

麻倉打葉に華麗に登場された。

もっと早く来いよ打葉……と、僕は倒れ伏しながら、そう思った。

力量ディスプレイ（後書き）

今まで書いている作品では影響無いようにしていますが、ユーザー名を変更しちゃいました。やっちゃった。

名前は二十次 壱隠岐と書いて……まあ、そのまんまです。何となく感じがよければ（『……感じ、いいよな？』と自分で疑問に思う）いいんで。ええ、どうでもいいんで。

そんなどうでもいい話より、この話についてですが、何とかまあ、加筆が8、修正が2の割合で混ざった推敲の結果でこんな風に四千文字突破というかなんというか、だったら分割しろよと親切心の呵責もあるにはあるのですが、怠惰な心が作者の揺れ動く脳内を叱責したのでこのまま掲載。まあ全部バトルだったので案外さつくり読めたのかもしれませんが。

これからもHegiraまたは二十次を現実から切り離してくれませう。

また明日。

手足デイストロイ（前書き）

デストロイをよりネイティブに近づければ『イ』が付くはずでいす。
……あれ？

手足デイストロイ

「選手交代、ねえ。俺様控えがないから参っちゃうわ」と言う声が何十重という口から出た。

それを見て、打葉は特に表情を変えない。

ただあるがままの状況から言える事だけを言う。

「悪いな。こつちには控えがまだいるから頑張ってくれ」

それがどうという事もないのだけど、まるでこちらの方が有利であると、ブラフとはいえ錯覚してしまいそうではあった。少なくとも僕に勇気を与えるほどには、打葉の言葉というものは作用していた。僕なんかとは違って堂々としていた。

「う……おっさんげんなり……」と、お茶目なおっさんがたくさんいた。「おっさんの手を替え品を替える手品も通じるかどうか怪しい空気だねえ。これじゃあ」と悲観するおっさんもたくさんいた。

「悪いが全力を注いで注ぎ込むからどうにもするなよ」

打葉のその台詞は、『どうにかしろよ』と言われて『どうにかしろと言われたからどうにかしたぜ』という風に、覆されたときに相手が格好良くなるのを防ぐ目的があったと言える。

……なんだこのちんちくりんな分析。僕って解説キャラ失格？

……次頑張ろう。

「うわっ、おっさん為す術もなく死んじまっ？」かけるエヌ。

ずん、と。

小間がとぼけている隙に打葉は何も言わずに地面を『踏み砕き』、それから言った。

「？脚アシ？といきなり行くか」

踏みつけた一步は地面にヒビを入れてなおも重く、打葉は周囲を轟々と揺らした。人の身に余る威力に警戒した小間軍隊……：群体か？ 群体にしよう。うん。

局地的な地震に、群体はその場から動けなくなった。

「うおおわわわわっ！？」のエ又倍。

そして補足しておく、もちろん打葉に地震を起こすぐらいの（……直訳はアウェイクアースクエイクか？）信じられないような巨漢設定があるはずもないのは事実だ。

打葉は「ふむ」と鼻を鳴らし、結果の分かりきった実験をしている学者のような表情を作った。

「あまり俺がふさわしくない能力だな、これは」

能力そのものは否定しない、といった感じだった。確かにそんな乱暴なのは打葉には似合わないとは僕でも思うけど。

「……こいつはちっと手強ていぢいかねえ……」以下省略。

僕と朱夏を遠巻きにしつつ、戦いは続いた。

「考えるなという暗示だとしたらまた変なもんだな。さてと、手スワット？だ」

たゆむ事無く実験を続けるように、打葉は攻撃し続ける。試行錯誤どころではない。試行思考の繰り返しを淡々とこなしている。

ただし、人間の規模を超えて。

問答無用で打葉が薙ぎ払った　　と言うより、そんな動作をした。空気を払って、少し風を起こしただけの動き。

その動作はただ単に、負けん気の強い女の子がやるような平手打ちぐらいにしか見えなかつたけれど、見えないのだけれど、

ぐららあがあと嘶しななく象のそのような、生身の人間に思い切りぶつかる野生の音がした。

「お、うおおおおおおおおおっ!？」

音に派手さが無いのが、妙に現実味を帯びていた。

どう見てもその手に掻き払われたとしか思えない動きで群体が、散った。実際に見える限りは、打葉の手は伸びもせず、巨大化もしていない。

さらに、群体の立っていた地面が、ざくりとえぐられて土砂の波を盛り上げた。

波は公園の外周に植えられた木々、林に及び、その間から土が漏れてようやく勢いが死んだ。

土砂が舞い、枝がしきりに折れ、沈む音だけが妙に耳に残っていた。

一瞬、つまりまばたきをする間、僕はそれらの光景を目で疑い、耳で疑い、あらゆる感覚で疑って見たけど、僕の思考回路は五十歩百歩のタイムでラップを刻むだけだった。

打葉、無双キャラ？　打葉、チートか？（僕はこの単語が嫌いだ）

打葉、何で味方になった上で強くなってるの？ ……いやいやこれは打葉というキャラクターに失礼か。

そんな似たり寄ったりの似通った感想しか出なかった僕。

打葉はまた「ふむ」と言いながら鼻を鳴らし（どうやらため息の代わりのような）、言った。

「どうも俺では負けないが、勝てもしないな」

その台詞はあまり聞きたくなかった。

「魔神的な強さを發揮して何を言うんだ打葉先生？」

「正攻法じゃ無理、と悟ったのよその憎むべきイケメン少年は」

打葉の『手（スワット、とか言ってたっけ……特殊部隊？）』でえぐられた地面に巻き起こっていたもやもやした粉塵の中から、一人、ゆらりと立ち上がった。

あえて誰と言うこともない、小間陰静だ。

寒気を吹き出すように関節を軋ませながら立ち上がる途中、猫背の姿勢と暗闇に光る目だけで肉食獣に食われそうな、そんな空気を体現していた。

険しく僕達を見据え、静かに殺気を放つ。

それは、僕達には無いものだった。

何もしていないのに、迫力だけで人を圧倒する　し得る、経験値の差。幾千もの万難を潜り抜けた歴戦の生存力ということなのだろうか。たかだか一月そこそこの色採とは格と核が違うと言っことか

「確かにその少年の破壊力は底知れないものがあるが……俺らの戦いの範疇でそれは必要条件にはなっただとしても十分条件にはなり得ない　ってな感じのいい感じに解説しとけばオツケーだな！？」

おっさんどうよ!? 格好いい!? そこの女子が放っておかない!？」

「後半の浮いた台詞のせいでダメになっているしそこまで深くもキマってもいねえ!」

今までののが台無しだ。

僕のボケが形無しだ。

総じて台形無し。

「かっこじょうていたすかていかっこことじかけるたかさわるにいこーるぜろ。」

にぶんのいちかけるたいかくせんえーかけるたいかくせんびーかけるさいんたいかくせんのかなすかくしーたいこーるぜろ。

……ゴホン。

ちくしょう!

折角僕が誉めるような描写をしていたのに!

よりもよって自分で貶めやがった!

何がしたいんだこいつは!

「まあ、放っておくかどうかは俺達に聞くよりも獅子島の方に聞いた方が良くと思うんだが」

ようやく僕にも小間がわからなくなってきた。

しかしそんな僕の憤りを素通りして、息を吸って、ゆっくりと小間は言った。

「と言うわけでどうよ嬢ちゃん!? 俺様格好いい!？」

一人称に様を付けるほどには小間は興奮しているようだったが、次の朱夏という言葉は小間の期待を裏切るものだった。

「私は魔術師裁判によって小間険静を火炙りに処することに何の依存もないんだけど、最低限殺すのだけは止めておくね」

ぼっ、と小間の足下から頭頂に渡り、火の手が上った。

……おまえ鬼だよ。

手足デイストロイ（後書き）

解説

$$\text{(上底+下底)} \times \text{高さ} \div 2$$

$$\text{二分の一} \times \text{対角線} a \times \text{対角線} b \times \sin$$

要するに台形の面積のことを言っています。

……まあ、大学生にはお粗末な知識ですが、**適当**ですのでご容赦を。

今日は程々に、また明日（これ定形文にしよう）。

連続デイスメンバー（前書き）

そう言えば最近書店のメンバーズカード……ではなくポイントカードが多いですね、という意味の無い話。

連続デイスメンバー

「あ……うおおあああああ！」

あれよあれよと火達磨に変化していく小間は、何も派手な行動を起さずによろよろ、ふらふら、おととと、揺らいでいた。

「あ、朱夏。あれは（画的に）やりすぎじゃ……」

「だったら何で倒れてないのか説明してくれないと私は納得できないよ。それにこれでもさっきの大技で意外と消耗したし……。ふう」

通り一遍の事を言った僕に、朱夏は全く意見をねじ曲げずに燃やし続ける。が、

「ごほっ、ごほっごっほ！ うっわ、ちょっとおっさんの酸素が足りませーん！ 誰か助けてくれえーい！」

「……………」
「あれが死ぬまで直らないタイプ、なんだろうな。馬鹿かどうかはともかくとして、だが」

それほど時間は経たなかっただろう。いつしか小間の体にまとわりついている炎が散り散りにすぼみ、小さくなり、消えていった。焦げた服も、巻き戻して再生されるように穴を塞いでいた。

「あゝ、きつつー。おっさんボスキャラじゃないんだからさあ、あんま虐めないでくんない？ おっさんお金ならあげるから」
「なら倒してから奪ってやる」

なんと、僕の台詞である。

「強盗！？ 容赦ない！？」

僕にうんざりしたような驚きの目を向けた小間。

「統那、だめだよ強盗は」

「朱夏……」

うんうん、やっぱり朱夏は僕より弁えている。

「賠償請求しないと」

「僕よりもハイエナがここにいた！？」

……朱夏は僕より『おっさんへの対応を』弁えていた。

「おっさんの運命や如何に！？」

「幾何にしてやる」

ぎらり、と手刀を構えた僕。

とっさに混ぜっ返す事ができたのは筑紫との特訓の賜物……いや、賜物だろう。

……字面で臆物みたいなものを連想した僕は馬鹿か。

「お前等楽しそうだな」

打葉が言った。

いや、だって小間が簡単な話題振ってくるし、しょうがない。

「はい質問」

朱夏が手を挙げた。そして誰の返事も待たずにそのまま続けた。

「そろそろ無駄話はやめない？」

「……………」

「致命的な事言っねえ、嬢ちゃん」

そこまで空気を読まないのはどうなんだろう。

「なら、まずは俺だな」

再び打葉が手を振った。こするどころではなく、地面を軽くえぐりながら小間を打った。ように見えた。

小間の手が、打葉の『よくわからない攻撃』に当たったと思うと

「早速で悪いけど弱点候補見つけちゃったわ」

ひゅっと、どうやってかすり抜け、

「接・近・戦！」

「!?!」

平手で振り抜いた打葉の腕を押さえつけたまま、

バリバリッと、

雷を纏った掌底をそのまま顎に打ち上げた。振り抜いた姿勢でコートと和装をなびかせて、小間が高らかに告げる。

「?昇雷拳?、ってな。本家の十分の一ぐらいしか出せないのよね

え。でもまあ脅しには十分っしょ」

その傍ら、力無く打葉が倒れた。その間際に見えた、焦げたような痕が痛々しく、また恐怖であった。

思わず足が竦みそうになるが、止まるわけにはいかない。

僕はこんな理由では止まらない。

「さて次は嬢ちゃんかい？」

拳で反対の掌を叩いて残滓のようにパチパチしていた電気を散らし、「手加減出来たら良いんだけどねえ」と嘯うそいた。

「どうか？ ご期待に添えるかはわからないけど」

朱夏にしては珍しく、挑発するような台詞を言った。

それに乗ったのか、はたまたその逆なのか、小間はこれまでの口調を変えた。

「……………そうか。ではここまで来た以上改めて名乗ってみよう。？魔ウイカフイスト
法拳士？小間険静。柄にもなく、参る」

纏う空気と共に、小間の動きが急変して気付かない内に朱夏の前
にまで接近して朱夏の腹を狙って拳を真っ直ぐ正確に突き出した
が。

「はずれ」

「陽炎による目眩まし……………か」

「？炎技・挫然さぜん？。逆上のぼせないように注意してね」

……………これまたよく見たことがあるようなオリジナリティの無い技

が出てきた、と言っでは台無しだろうか。

「早く当てないともう一回必殺技擬きを撃つよ？」

「いいや、それはご遠慮願う」

静かに広がった害意が朱夏を捉えて『何か』をしようとするのを僕は感じた。

獅子島朱夏！

「？」

「？」

感じた次は、いつの間にか小間の背後で？形無刀？を振るっていた。同時に口が勝手に何事かを呟いたが、不思議なことに自分自分の声を聞き取れなかった。

『』という音。

この時の事を振り返ると、僕が人並み外れたのはこの瞬間だったんだろっな、と思う。

まるで、誰にも気付かれないような。

呼吸と言うのだろうか。気配と言うのか、それとも色採独特のオーラ、とか未知の単語で言い表せばいいのか……それら生気が、僕の中で虚となっていくのがわかった。白黒の世界では存在し得ない影ができたかのような、虚の存在感だった。自分の足で立っているのかすら判断の付かない、まるで浮遊しているみたいな逸脱感、というか虚脱感 だった。自分で実在を疑ってしまいたくなるような虚。すっかり隠し切っていた。

まるで、

このまま『隠れ切る』事もできそうな感覚だった。

今の僕を見ても、誰も何もできない。

そうして僕は何も言わずにただ消え入るように、音を殺し気配を殺し、暗鬼のように隠れ、切り裂きジャック。

本当の所は何も分かっていないんだけど、

とにかくやる、切る。

やり切る。

?連続殺人?

シリアル

「……!?!」

「統那!?!」

僕は、小間を、切る。

一切

いっさい

「な」

双切

そっさい

「に」

切三

さいさん

「を」

切四さいし

「し
」

切五みごし

「た
」

切六ぜつむ

「!?!?
」

切七せつな

……これが、僕の今の限界だ。

「連続して切った……八つ裂きになるまで」

首、縦に頭、右手、左手、右足、左足、横に胴。

時間差で、それぞれがバラバラのタイミングで好き勝手に離れた。

連続デイスメンバー（後書き）

ウイカフィスト……超適当ー！ 才能を感じられねえ！ という心境です。今の所。
シリアル……超単純ー！ ちゃんと考えているのかよ！？ という心境です。この所。
昇雷拳……超真似ー！ どこかで聞いたことある響き！ という心境です。この頃。

という訳で、また明日。

終章ディプライブ（前書き）

さり気なさの欠片も無く『第四章』と『D（アルファベットの4番
目）』を掛けていた。

終章ディープライブ

しゅばっ、と。

なんだか前回の話でキメた僕はと言えば、

(……………るゑゐん?????)

わからなくなっていた。

無意識にやってのけたけど、その無意識にやったことが何なのか、わからない。

そう、わからない。

そもそも僕が考えた？連続殺人シリアル？に、『あんな機能』は、無い。ただの連続技だ。

無いんだ。

多分、これは忘れた事じゃないんだけど、本能的なところで自覚しなきゃいけない気がする。

……………。

……………はあ。後で考えよう。

「ふう……………終わってたらいいなあ……………」

「……………」

いきなり脱力した僕に向かって朱夏は驚いたらいいのか責めればいいのか悩んでいるようだったので、その点を加味して僕の方から話しかけることにする。

「いや、ホントびっくりしたって。まさかいきなり僕があんな技を

即席でできるとは思わなかったし」

しかし、答えたのは朱夏ではなかった。

「そうよなあ。まさかこの俺に気付かれずに俺を八つ裂きにするとはなあ。俺もびっくりよ」

ぎくり、と。そういう擬態語が似合いそうな素振りだ僕が振り向くと、何一つ欠ける事なく、小間険静は変わらぬ姿、五体満足で立っていた。

「おまえ……」

「ああ、その凄い技のお礼に豆知識を教えとくわ。俺は？色採？じやあ無いのよ」

色採じゃあ、ない？ 『この空間』で存在できるのは色採だけではないのか？

わからない のはこの瞬間だけだった。

「何だと……？」

「？命彩？つつーんだわ」

ここで新単語が出てきた とか言っている場合じゃない。

雰囲気が違うものになった。

相手が尚更ふざけるのをやめていた。

成程、格が違うというのも頷ける。大人と子供ぐらいの差は、あった。

初めから一方的な関係だったのかもしれない。

「そこで寝っ転がってる少年の言う通り、おまえ等？色採？とは違って、普通の威力を持った攻撃では、簡単には死なない。少なくとも土砂崩れ程度では、生き残る」

何かを言っている。

「しかし我らの戦いもまた『同族で殺し合う』事が真実なのだから、我らの攻撃手段が我ら自身を殺せないと矛盾が生じる。つまり我らの攻撃は全く別の法則で我らを殺しているのだ」

明らかにかけ離れた事を、言っている。

「人から発展する？色採？程度の法則では殺せないから、我らが我ら自身を殺す方法というのが、よく言われる魔法という言葉で表されるものだ」

深淵のような冥い底から腹の底に響くような声で、言っている。

「だが、なれば全ての命彩が魔法を使えるのかと言えばそうではなく、本当の魔法使いは多くない。大体が疑似的に一つの分野に特化して魔法の一部を再現しているに過ぎない。そう、つまり俺はいわば様々な魔法の分野に手を出す、拳法使いと言ったところだ」

さして自分を誇るようでもなく、淡々と、滔々と語っている。

「まあだから所作のそれぞれに拳を交えているのだが……そこはいい」

「それを、僕達に言っただろうするんだ」

「必要最低限の、只の啓蒙だ」

これ以上余計な事をするつもりはないのだと、言っていた。
ざつ、と歩く。

「なに、を……」

「決まっている。一番危険な因子を回収する」

誰に、と思つたら、なんと小間は僕の方に向かっていた。

歩みも間違はなく僕に近付いている。言葉にすればこそ単純なものだったが『目に見える』圧力が、逃げる事すら許さなかった。

素早さとかタイムミングとか思い切りとか、そんな要素を握り潰された感覚だった。

勇気と知恵だけで切り抜けられるような状況じゃない。

そんなのを看過するほど俺は甘くないとでも言いたそうに僕を見据えている。

逃げる事がそのまま生から逃げる事に繋がってしまうような、理不尽さを感じた。僕は今更ながら、ようやく秀囲気で実力差を実感し、手を抜かれていた事を確信した。

きつともう、敵いつこない。

「だめっ！」

朱夏が叫んで火を放つが、決して炎ではない威力だったし、小間はもうそんなものをもともしない。

物々しい足取りは、崩れない。

打葉の重厚な動きとは対照的に、まるで閃光を発しているかのように速い動きの手で、火を叩いて弾いた。

「やはり燃料が尽きていたか……もう『保護』も必要ないな」

僕の眼前に、立ちはだかった。
頭を掴もうと、伸ばしたその手を

「スラップ
?手?」

音もなく、見えない圧力が小間の形を押し潰した。

「う、打葉……」
「悪いな。寝ていた」

打葉はそのまま小間の方を油断無く見た。そっちでは小間の体が崩れた砂山の映像を逆戻ししたみたいに組み上がっていった。

……人間じゃない。

不躰にも僕はそんなことを呟いていた。

「ふん、ならばこの場にいる者の中に人間と言える存在は全くないことになるが」

「……今のは失言だった。ごめん」

「何を敵相手に謝っている。そんな感傷は遊びの時だけ感じておくものだ」

謝ったのは小間に対してではないんだけど……。
再び、僕の視界を覆う。

「俺の今の回復について多少なりの解説を加えてやるとだな、『特定の殺害方法に対する回復魔法』を事前にかけてある。回数制限こそあるが、その回復力に制限はない」

今度こそ、今度こそ。

小間の言うところの『回収』をされてしまう。そう思った。

だけど、運命　僕は信じないけど　は僕に味方しない。望まない最善を実現した。

思わぬ方向、横合いから殴られた。

そいつは、僕が女だったら感嘆のため息をつくような整った顔立ちだった。眼鏡が無意味に効果的に光ったりする錯覚が見えることもある。僕よりも高いその背は理知的な雰囲気逆らい、しっかりとした体格を持ち、簡単に僕を吹っ飛ばした。

麻倉打葉だった。

「こういうパターン、よくあるよな」
「……………」

小間は僕達の二束三文芝居を黙って見ていた。

「何だよ……………それ」

「最低限のフラグだっただろう」

「知らねえよそんな事！　何をしようとしてるのかわかっているのか！？」

おふざけではなく、僕は声を荒げた。

「青春しているところ悪いが、俺としては究極的にはどちらでもいいんでな、さっさと引き裂くぞ」

「ああ、俺にしといてくれ」

何も気にしていない、と態度で語っていた。

「何言ってるんだよ！　それが友達の役割だとか思ってるんじゃないかねえ
だろうな！？　おまえ実は寝惚けてるんじゃないのか！？　こんな
時間だもんな、そうだよな！」

「ははっ、寝言は盗み聞きして声を殺して抱腹絶倒するもんだぞ？」

「ふざけるな！」

「お前こそふざけてろ！」

「！？？」

「考えて結論を出しているのか！？　自分の行動の結果を可能な限り
予測しているのか！？　感情に任せた行動が同じ思考速度での計
算に勝てると思ってるのか！？　俺が全くの打算抜きでこんな行
動にでると思うのか！？　まさかここにきて美德や自尊心を持ち出
す気じゃあないだろうな！？　言っておくが俺は自己犠牲なんて事
をやっているつもりは無い！　総合的に見て俺が『一番被害が少な
い』んだ！　それを分かれ！」

圧倒されて、僕はそこから何も喋らなかった、というよりは喋れ
なかった。

一通り言葉を吐き終えた打葉は、僕に背を向けた。

「話は終わったか。行くぞ」

あとは、ただ打葉が、何の抵抗もなく連れ去られるのを見ている
ことしかできなかった。

殴られたショックで、僕は意識を保っているのが精一杯だった。

後に残された僕と朱夏は、無力を噛み締めながら、解けていく封

陣を見ていることしかできなかった。

結果として、小間は帰っていったが、その代償はあまりにも大きかった。

終章ディプライブ（後書き）

.....。

いや、こういうタイミングで後書きをカオスにして良いものかと悩んでいたのですよ。今の三点リーダー×4は。

何はともあれ、第四章終了です。テーマ通りに脈絡の無さを実現できたかどうかはともかく、楽しんでいただけたのでしょうか。作者としてはそこが一番気がかりです。気がかりっぱなしです。どうしようもなくしょうもない心配性ですね。

まあ予想外に統那を強くするタイミングが早かった感は否めないのですが、やっぱりこの物語はこんなもんだらう、と逆に腹を括っています。割り切って自由に書いてます。

というわけで腹を切らないように気をつけよう、がモットー（期間限定）の作者でした。

それと.....

ああ、どなたか親切な方で、感想を寄越してくださる方はいずこに.....？ と、泣き言を言っても今の世知辛い世の中ではこんな貧弱アクセス数（2万）では感想は来ないのでしょうか。どっかのランキングサイトにでも載せない限り。まあそれ以前に面白いのかどうかわからないことには動きようが無いのですが（正直言って、ランキングに載せるほど面白いとはとても思えない）。

カオスはカオスでも、滲み出る作者の混沌とした暗澹たるあんだん気持ちをコーラで薄めたような後書きになってしまいました。すいません。誤ってました。謝ります。

また来月。

序章 モーター (前書き)

モーターじゃない (だからどうした)。

序章 モータータル

番鳥優子つがことりゆうこという僕の最も苦手だと言えるこの人物のことをここで話すからには、この章は間違いなく佳境への架橋となるはずだ。

それは戦いの連続の幕開けという意味でもあるし、僕の間人関係が切羽詰まってきたという事でもある。と、そんな風に言ってみたところで僕を中心に物語が進んでいる訳ではない。むしろ僕を置き去りにしかねない勢いで周りがどんどんと僕を引き摺っている様に感じられるのだ。

最初から巻き込まれてそれからずっと巻き込まれ続けているのではないかと思いたいぐらい、めまぐるしく僕の周りは動いている。渦潮に飲まれているのに未だ中心、奥底にたどり着かない。

巻き込まれ続ける……というのがもしかしたら僕に限らず何か、誰かと関係を持つものの宿命なのだろうか　　と言ってしまえば簡単なのだけれど、宿命という言葉は僕という存在にはあまりにも残酷でしかないのだからそうもいかない。要するに僕の選択肢はあらかじめ狭せばめられているという事だ。

さて、話が逸れそうなのでさっさと番鳥優子の説明に戻らせて貰う。

彼女はとにかく僕の範囲をほぼすっかり覆いきっていて、それはきつと僕を殺すには十分だったのかもしれない。

ただ僕はそれでは死ななかつた。それは僕の恩人以上の存在である不知火筑紫しごひつづきのおかげかもしれないし、僕の幼馴染みの獅子島朱夏ししじまあのせいだったのかもしれない。いや、もしかしたら『あいつ』の存在が一番大きかったのかもしれない。しかし僕に降り懸かる問題はそれだけではない。

命彩。

ふと現れた異なる世界の住人の呼称。

少なくとも普通の人ではなく、色採とは段違いの強さを誇ってい

る。……誇っているが、彼らはどこかで決定的にこちら側と違っている存在だった。何というか、端的に言えば、梃子でも動かない変梃てこ、というか、哲学的な変哲へんてつというか……いや、その辺の表現は難しい（何しろダジャレ優先だ）。申し訳ないことに僕の語彙ではそれがどうおかしいのかは説明できない。何となく覚える違和感の塊、ぐらいにしか語れない。エキセントリックの集まり、というのがかろうじてできる説明だろうか。とにかく僕の目に奇異として映ったことは間違いない。

それと、後から思えば彼らは何かと戦っているようだった。何か……僕達ではない何かと、まるで僕達の向こうを見ているような戦い方だった。そう、彼らの眼中にはなんと僕は存在していなかったのだ。僕達は通過点でしかなかったようなのだ。

まあ、そういう意味では彼らは戦いやすかったと言える。そしてそういう意味では番鳥優子は僕の最高最悪の苦手なのだろう。

だがしかし、変であるとはいえスケールという点においてはどうしても命彩の方が格上で、客観的な事象のレベルとしてはどうしても色採を上回ってしまい、周りからの見た目には命彩 おまきの 沖陽菜野の方が強く映る。

だけどそれはやっぱり一般論で、僕個人の受ける衝撃としては、番鳥優子はそれに劣らず、それどころか勝っているようでさえあった。それだけ僕に対するものが凄絶だったのだろう。

狂っている。

そこに気づけなかった僕はかなり致命的とも言える。反省すべき点とも後悔しなければならぬ欠陥だとも言えそうだ。しかし古今東西何度も繰り返されるように、後悔は先に立たず、反省ですら過去にはまるで意味をなさないので厄介この上ない。しかしそこら辺が古今東西様々な物語を盛り上げるといことをさすがの僕も承知しているのでそれをこれ以上とやかく言うつもりは無い。

少し話が逸れた。

番鳥優子という存在はある意味死神のようだとも言える。『ようだ』とは言つてもそれは決して比喩ではなくて、その存在の一側面において番鳥優子は完全無欠の死神で、誰かの命を刈り取る事にかけては比類無き強度を持っていた。しかしそうは言つても、それは『死ぬべきもの』に対してという前提があつてこそのもので、決して核弾頭のような広範囲を無差別に焼き尽くし電子や中性子を超高速でばらまくものではない（そつちの方が圧倒的に恐ろしい）。正確には、運が悪ければ死ぬぐらいの一種生易しいもので、真の意味での確率現象を具体化したようなやつだ。

死ぬべき奴は死ぬし、死なないやつは絶対に死なない。

ただ、審判を下すという　一種、裁判のような　状況だけは番鳥優子の任意で現れる。そんな訳で番鳥優子は決して意味もなく、忌みもなく死神を名乗つてはいないのだ、と今は思える。まあ現在進行形の僕からすればこんな話は当前……ゴホン。当然の事ながら知る由もないので番鳥優子の正体はこの後に知ることになるのだが。まあ詰まるところの詰まらない話、僕はこの二人の魔の手から逃れる為に戦う訳だが、それもこれも巻き込まれた結果だと言わざるを得ない。僕は何も働きかけていないはずだ。

かといつて僕が何も悪くなかつたというわけではなく、むしろ僕が　少なくとも番鳥優子に関しては　悪かつたと言わないといけないのだろう。これはそういう問題だ。原因では僕は関わっていないのに、途中経過で僕が壊してしまつたようなものだ。巻き込まれているだけのはずなのに、だ。

さてそんな風にして一人の人間の人生を死に誘うようにして狂わせてしまった僕だが、その結果として特に何も起こっていないのだから、一体僕は何をしたかつたのだろうかと頭を抱えて考えたくなくつてしまつが、やはり特に何もしたくはなかつたのだろう。

まあ、今回の事件は僕がどうしようとも、元から不可避だったのかもしれない。ただ、もっと上手く立ち回っていられたのではないかということ、思わなくはない。しかしそんなものは思うだ

け無駄で、その理由はただ単に、哀れな羊のような僕にはどうした
って逃れられない柵しがらみがあつて、それは運命などというありもしない
ものではなく、徹底的な人為でしかなかったというだけのことだ。

その僕自身のアイデンティティに関わる事に僕の意志が介入でき
ない以上、僕にはどうしようもない事なのだから、これを僕がどう
こう言つてもただの不満にしかならない いや、そうも言
い切れない（この僕に限つて切れない事があるとは）。究極的には
僕はずっと昔の段階で残りの人生の重要な分岐点を粗方処理あらかたしてし
まっていたのかもしれない、と思う。例えば許嫁が既に決まってい
る小学生のような人生の選択肢の限定を、だ。

まあ、そう進めた場合の結論は僕の物語は最初から消化試合のよ
うなものだった、ということだろう。

そして僕は、ああ……ここでこんな事語るんじゃないなあ。
なんて後悔してみたりするのだ。

まあそんな訳で、今回も始めよう。

序章モータータル（後書き）

死神って書いて『しにがみ』って読むけど、元々あるべき書きの『死に神』、から『に』を遠ざけるのはいささかなものかと（つまりどうでもいいと思っっている）。

また明日。

邪険インクエスト（前書き）

おおぞととにぞとへんが並んだ。

邪険インクエスト

被服室。

決して罪を『被』っている囚人『服』を着た人の部屋では無い、なんて。

「にゃー、悪いね四手統那サマサマー。あたしが呼び出したばかりに……」

「様様と言われて一向にいい気にならないのは何故だろうな!？」

勿論そこに尊敬の念が籠もっているかどうかと言えば微妙だし、何よりそれを言っているのが不知火筑紫だったからだろう、けなされてる気しかない。

まあ、それはそれとして鬱憤を山積させておいて、いつものように会話が続く。

おっとその前に、

僕こと四手統那は情性的な流れでその被服室にいた。

目的はと言えば筑紫の活動している部活動の一環で、筑紫は僕と言うより、僕の着ている制服に用事があるらしい。

その理由が、

テーマ：制服をぎりぎりまで改造しよう！

……ぎりぎりって何だ？

気にするあまりにそのことが口をついて出た途端、敗北よりも惨めなことが待ち受けているだろうから、僕はその思考には触れず、話題を変えた。

「……そう言えばいつものはどうした？」
「によ？いつものとは何ぞや？何時もいつとも言え今は何時何分何秒で、地球が何回回ったとき？」

とぼけるな。あと、いつかも触れたかもしれないが、地球は自転と公転をされていてそのどちらをもつて回っているとするのか、あとの『回る』という表現からは実は天動説と地動説のせめぎ合いの結果地動説が勝った影響が現れていてもし天動説が認められているなら『宇宙が何回回ったとき？』と言わなければいけない、もしも宗教的な理由で天動説（科学的な意味ではなく）を信じているなら間違つても『地球が何回回ったとき』など言つてはいけない気がする、そして実際に回った回数を数える方法だが、初期の太陽系は土星の輪っかの様に太陽の位置の周りで高温の小さな惑星（なんだろう、マグマの塊、的なイメージ？）が展開されていてそれらの衝突・融合で段々と規模の大きな惑星になりやがて地球になったという話を聞いたことがあるけど、それを信じるならそもそも数えるタイミングが見つからない……ビックバンから生命の誕生まで、どこからが地球の始まりなんだろうか？そしてこの課題では46億という十桁の数字の最後の桁を求めなければいけないわけだが有効数字という考え方から科学的にそれは意味があるのかという課題が『地球が何回く』という台詞から見えたことにビックリしたよ！

……ゴホン。

僕の思考、飛びすぎ。

振り出しに戻る。

で、何を話していたんだっけ……そうだ、筑紫がいつもと違うんだ。

「いつも僕の名前をいじくるじゃないか」

「じゃあ西手くん」

「微妙に増えてる！」

読みがなも、画数も。

なんというやつだ。

「銃じゅうな那くん」

「紡錘でもして出来た製品を売ったのか!？」

糸が金に変わった!

刀とうが銃じゅうに!

やべえ! かけえ!

銃那と書いてガンナー (gunner)!

いけるかもしれない!

……ゴホン。

「ていうか単なる誤植だろ！」

「じゃあトヌーとかトネー、トノーって言うてみるかい？」

「トナーとトニーで既に二十分だ！」

何で五段活用させなきゃいけないんだよ。

個人的にはトノーは (ツッコミの観点から) 許容範囲。

「トナーとトニー……おっ……」

「何か思いついたのか？」

「トナト」

「ロクなもんじゃなかった！」

トマトみたいだ。

四手トメイトウ。

「トナルド」

「なんだか惜しい！」

ドナルド、と言われて思いつくメジャーな二つの内、どっちを思い浮かべるんだろうか。僕はアヒルじゃない方が先だった。

ランランルー。

……いつまで経っても僕はこいつが何をしたいのかわからない。

「ネタがねえんだよもー！」

「何！？ そうだったのか！」

それでもまあ、よくもここまで僕の名前をいじれたもんだ。

個人的にはシデンが一番気に入っている。

かつこいい。それだけ。

採寸を一通り終えて（ところで男ってバスト測る必要あったっけ？）雑談を交わしていると（他の部員も勝手に話し合っている。どうやらこの人達は筑紫という毒を克服しているか既に致死量を上回っているらしい）誰かが部屋に入ってきた。

「……………」

引き戸を開いたまま手で止めて、引き込みそうなくらいに暗い目で部屋を見渡す 途中で僕に視線を止め、こちらに歩いてきた。

「……………四手統那」

……………番鳥優子。

だった。

僕の知りうる範囲で彼女についてプロフィールングすると、三年

生、調理部、口数少ない、陰湿、黒髪ロング（手を付けずに伸ばすっぱなしな印象）。そんな言葉が当てはまる。

そして、ついでのように言うが、激しい感情を殺したかのようにものを見る目や、触れたらふっと消えてしまいそうな肌（触ったことはないけど）、儂さを含んだような綺麗さを持っている（好きとか云々ではなく）。

僕の目の前にいるのはそんな、少なくとも僕にとっては厄介な要素の塊なのだが、一番厄介なのはそこではなく

僕はいつものように相對し、應對する。

「何時何故何処で何で僕がここにいることを知った？」

「そんな事は全く關係ない」

お互いに淡泊なやり取りだった。

僕達は、これでいい。

「何時何故何処で何で僕に用事ができた？」

「特に」

「別に、の変化形をここで使われても僕はおまえのことを絶対に何とも思わない」

ちなみに僕は芸能人を『見かけない』タイプの人間だ。

そんな僕に、番鳥は言葉少なに、

「そう」

「そうだ」

ここで、何も無い間が少し。

「最近何かあった？」

「……おまえに言うことは何もないな」

「というかおまえが何を言いたいんだ？」

「そう」

「そうだ」

「間が少し。」

「私に言わないことなら、あるの？」

「僕はそんな詭弁には乗らない。この一ヶ月、僕に振り返るべき事は何もない」

「そう」

「そうだ」

「……」

「……」

「何もない間が少しいつもより長め。」

「ところで調理部に入る気は？」

「ない」

「無理矢理脅されて入る気は？」

「無理に対して道理で挑むのが僕の主義だ。つまりそんな脅しをやるような悪の組織に入る気はないということだ」

「そう」

「そうだ」

「間が少し。」

「君の食材を捌くテクニクだけは世界を狙うどころか越えているけど」

「実際に僕の調理風景を見ていないでよくそんなことが断言できるな」

「もし本当に大したことがなかったら学校の噂になっていないけど」

「……そうなのか？」

「そう」

調理実習の時の僕ってそんな風に見られてたのか……？

もしかしたらこの間の失敗はクラス中が驚いていたのかも……いや、その考え方は自意識過剰か。ミスなんて誰にでもある。

……いかんいかん、何でこいつが騙そうとしている可能性を考えていないんだ。

「さらに最近聞くところによると獅子島朱夏という君と同じクラスの女子も火の扱いが巧いと評判」

「ちょっと待て、おまえの歯牙は朱夏にもかかっているのか？」

「……」

少なからざる僕の動揺に、逆にびっくりした表情を見せた番鳥。

「有益な情報を入力」

「どう考えても無益だと思えない」

「そう」

「そうだ」

「……そうかもしれない」

「……？」

「今回の本題とは関係ないから」

ますますわからない。

こいつに本題とかあったのか（今更だが先輩に向かってなんと
い言い種だおんぐ）。

「それも済んだ。とりあえず」

「とりあえず………？」

変な文法で締めて、番鳥はそのまま部屋から出ていった。

………すげー苦手だ。

邪険インクエスト（後書き）

少々目に毒ですがご了承下さい（背景の色のことです）。
というが無口キャラってこんなんだっけ？ 書きづらい……。
…………… 三点リーダーばかり使ってる気が。

さあ！ 制服は改造されてしまうのか！？
また明日！

遭遇ハプレス（前書き）

最近プレスしてないなあ（何だ）。

遭遇ハプレス

番鳥優子。

『ばんちょう』って読みたいけど、『つがいどり』。

「という危険人物がふよふよしているから気を付けるように」

僕の忠告に朱夏は答えた。

「と言われても私にはどうしようもないんだけど」

「だ・よ・ね〜……」

その通りである。

「さて今は帰り道な訳だけど……」

「それは私も知っている」

……あれ？ 地の文を言ったつもりだったのに口に出してたよ。

ごめん朱夏。

「……なに？ なんか言った？」

そして逆転現象。

まるでテレパシーか腹話術を失敗した感じだ。

「で、その帰り道、僕は獅子島朱夏という幼馴染みと」

「……救急車呼ぶ？」

「是を非にして呼ばないで！」

もし是非が非でも呼ばないで！

……このままじゃ僕がおかしな独り言をつぶやく人間だと認定されてしまう！ 早々とこの流れを排除しなければ！

（しばし精神統一……）

……ふう、よし。オツケー僕はフツーフツーフツーフツー……ツ
ー、ツー、ツー、ツー（電話が切れました）。

オツケーいつも通り！

……ゴホン。

「なんか逆に呼びたくなってきた……」

「国民の皆様の血税をそんなことに使うな！ そして携帯を開くな

！」

そんなんだから無闇に警察イコール便利屋の認識を持っているバ
カが1%（身勝手な推測）ぐらいいは存在するんだ！

……思いつきで言ったけど一億の1%って結構膨大な数だ！

「……携帯、やっぱり繋がらない？」

開いたままの携帯のディスプレイを眺めながら、朱夏がつぶやい
た。

麻倉打葉。

……まあ、気にしていないっていうのは無いよな。

そんな朱夏に朗報。

「実は繋がるんだ」

「そつだよね、やっぱりつなが　ええっ!？」

うん、僕も驚愕だ。

びっくりぎょつてん
吃驚仰天だ。

驚天動地の心地だ。

「さすが通話料無料サービス。僕の親友は抜け目が無い」

「これまでの前提が一気に覆ってない!？」

どの辺が前提にあったのか僕にはわからないな、ははははは。

「この間なんか『おう、こっちにもゲームとかあるぞ。しかもライオンナップもそっくりだ。想像だにしていなかったが結構気楽だな』とか調子良く喋ってたし……」

「心配が一つ減ったよ……」

良かったね。

いや、良い事なのかわからないけど。

「と言うわけで五体満足無病息災で生きてるよ」

「もしかして、減ったから損した……?」

僕の言は多少スルーされ、朱夏は独りごちていた。

「なるほど、それで心配すると損するの……。風が吹けばイケアが儲かる、みたいだな」

「……違うんじゃない?」

正解は桶屋が儲かる、だ。

風が吹けば塵が舞い、塵が舞えばめくらが増える、めくらが増え

ればめくらの商売道具・三味線が売れ、三味線が売れば材料の革のために猫が減り、猫が減れば鼠が増え、鼠が増えれば桶がかしられ　とまあ、こんな流れの話なんだけど、イケアの場合は風が吹けば風が良く売れ、風が売れると和紙も売れ、和紙が売れると伝統工芸ブームが起こり、伝統工芸が流行ると京都に足を運ぶ人が増え、京都に人が増えると古い建物に落書きをする人が出てきて、落書きする人が増えるとテレビで子供に悪影響が及び、壁や家具に落書きをする子供が増える、家具が落書きされると交換したくなる人が出てくる、そこで組立式（購入者自らが組み立てる）の家具を販売するイケアが儲かる……伝統工芸を伝統芸能とゆがんだ形で解釈するとか落書きとか、滅茶苦茶だな、現代日本と僕。

「何かの論法を言いたいののはわかったけど、風とイケアにどんな関連があるの？」

「さあ」

そして朱夏はつつこみ力は磨いていないはずだから、この反応は予想内だ。そーてーのはんいないだ。

自己満足。

「まあ、お互い無事だったら僕達はそれでいいんだよ」

「私には判断できない事だから深くは言わないけど、なんか変な友情だね……」

別に最初から僕は普通じゃなかったし、と言うのは軽い逃げだろ
うか。

そんな風に、

会話を続けていた僕達の目の前に、ふわり、と一人の人が現れた。

「ふうん……」

女性。まずスカートは口がばつさりと斜めになっていて、切り揃えられているのに違和感バリバリ。片足は膝下数センチまで見えているが、もう片方は踝くるぶしくらいしか視認できない。一応、色調はともかく、全体的なデザインとしては今風とも言えそうな黒いドレスで、所々にふわふわしたレースやらフリルやらがくつついている。そして基本的に袖は長いのだろう、左はすっぽり隠れ、右手首から先だけが切り口のような袖口から覗いていた。そして、頭は……表情こそ見えるが、マネキンを取って付けたような不気味さがそこはかたなく漂う。陰気百倍、みたいな感じだ。

それは不健康に青白い左足、そして右手首から先、何も見ていないような目を宿した頭部。首根っこが折れているかのように傾いている。を露出し、負の空間を醸し出しながら、僕達が歩いている歩道の右側を通り抜ける。

「べつたり……」

ちようどすれ違うタイミングで、彼女はそんなことを言い、僕は鳥肌が立ち、思わず「ぞわっ」と口に出してしまった。

いや、実際ぞわっとしたんだけどなんだか間違ったりアクションをしてしまったようで、嫌な気分だ。

「な、何……？」

不審者じみた黒いドレスに気を取られていた朱夏がびくつきとしてぞわっ、と口に出した僕を見た。そして僕はと言えば、二度見の為に、彼女に向かって振り返っていた。

彼女は、にっこりと、幸せを薄めるような……そう、薄幸の笑顔でこう言った。

「こんにちは……私は沖陽菜野……よく他人からはある意味名前勝ちしていると言われているわ……」

それだけを言っつて、再びのそのそと、ひたひたと僕の視界で徐々に、ゆっくりと小さくなつていくのを 見終える前に、振り返つて、僕は背中 of 悪寒から離れるように歩いた。初夏にも関わらず それこそかき氷すらまだ食べていない時期に 歯が震え出すのを止める、という動作がひどく不釣り合いだった。何かのバランスを崩されたのではないかと疑りたくなる。
そんなものに苛まれて^{こころな}いる僕の表情を見てか、朱夏がただならぬ心配をかけてくれた。

「……統那、大丈夫!？」

「……うん。ああ。少し落ち着いた」

「なんだか尋常じゃない震え方だったよ？」

「困ったことに僕は暑い時はかえって寒いと思いたくなる癖があるんだ。それで、季節の変わり目のこの時期は特に症状がひどいんだ」
「……嘘つき」

びしつと見抜かれた。

断言された。

いや、ごまかせるとも思っていなかったけど。

「ちょっと待っててあいつに聞いただしてくる!」
「いやいや待った朱夏! 向こうの方が単にオカルトチックなセーブルスをしたいただけだったとしたら、あいつはかなりの手練れ^{てだ}だ! 下手に手を出すとお金とか何か大切なものが巻き上げられる!」

という冗句で朱夏を留まらせようとする僕。というか、絶対にこ

ういう時に朱夏みたいなタイプのキャラクターが関わっても事態は好転だけはない、と相場は決まっている。

……もちろん、それだけじゃあないんだけど、

「……それだけ元気になったんなら、大丈夫かもね」

「うん、僕はいつでもお天気元気だ」

何だよお天気元気って。

どうせ朱夏は突っ込まないだろうから自分で突っ込んでしまった。

「……………」

案の定、朱夏は黙った。

多分、いい意味では、ないんだろうなあ……。

(ロマンティックが止まったような……) 微妙な空気の中、僕達はいつものように帰宅と相成った。

遭遇ハプレス（後書き）

オカルトといえば幽霊を信じるか信じないかというのがありますが、自分は『いたらいたで、まあ面白いだろうなあ』という中途半端なスタンスで見えております。まあつまり、これの作者なんてのはお金をかけてまでそんなもの見ようとしないう方がいいな—と想っているただの一般人でして、また、戦争するぐらいなら宗教（見えないものを見ている点では一緒だと思う）も捨てちゃっていいや的思想
つてこれありきたりな話だよな—、と今日も人並み十把一絡げであることに満足しております。

今日は良い天気です。
ではまた明日。

門前アンチパシー（前書き）

嫌いなものは嫌い。

心理ってそういうものらしい。

門前アンチパシー

それからしばらくして家の前に着くと、見知った人物がいた。

「ようやく来たか。待ちくたびれたぞ」

夜天浪雅やてんろうがだった。

……煙たいことこの上ない。もしも僕という装置に火災警報機が備わっていたら即座に『火事です、火事です』と喚いているところだ。それぐらいには僕は嫌煙して、敬遠している。

補足しておけば、浪雅は煙草を吸わない。

「一体何の用だ夜天浪雅」

「つれないじゃないか四手統那。折角おとなのおねえさんが通りがかりに嫌がらせをしてやろうと画策していたのに」

あれって結局はポケモンバトルを挑んでくるからなんだか歓迎していいのやらいけないのやら。

「だから僕はおまえが嫌いで嫌なんだよ！」

また、『嫌』の字を二回繰り返したことに大した意味はない。

「何分最近出演していないなあと思ってな」

「僕の父親なんかまだ一回も出ていないんだけどなあ！」

少しは見習え（いや、何をだよ）！

「ははは。四手父親は出演しないことになった」

「え……マジで!?!」

僕の地の文でしかその存在を表現できないのか!?!
それはそれで難儀な展開になったな……。

「四手の父親、萌葱もえぎさんには何を隠そう私もお世話せわになっているのだよ。肉体的に」

「肉体的に!?!」

あの野郎何してんだよ!?!

家族にぶっ飛ばされたいのか!?!

「ええい教えろ! あの野郎おまえに何しやがった!?! 事と次第によつては僕は家庭を守る!」

主に母親 といつてもマザコンじゃなくて、それ以外の家庭環境に複雑な感情を持っているというか……ん? これってファミコン(略さず言えばファミリーコンピュータ)か?

「君のその口振りでは逆に家庭を壊しかねないが」

「大丈夫だ! あいつだけを切り離してみんなハッピーハッピーどはっ!?!」

興奮していた僕の頭の後ろをどつかれた。この場で唯一の良心とも言える存在、朱夏によつて。

「おおおお……」とうめきながら僕は憐憫れんぴんをさそうように目を潤ませ(たつもりで)、後ろを向いた。

「そんな口車に乗せられるんじゃない。もっとびっくりしないと」
「び、びっくり?」

発光ダイオードかよ。

「ははは。奇異にも彼女ができたか」

「奇異とか言うな！　そして笑うな！」

「ふははははははは！」

「高笑いするな！」

「いや、失礼。君と言いつもりが奇異なことに奇異となってしまうた」

「……………」

多角的に面倒くさい。

それとその知的に見える話し方は（僕の）誤解を招くからやめてほしい（絶対、こいつ本当はバカだつて）。

「つていうか彼女とかじゃないし……………」

「ほうほう。友達未満、恋人以上か」

「条件付き二次不等式か！？」

えつくすにじょうまいなすにえつくすまいなすさんだいなりいこ
るぜろ、えつくすのつといこーるまいなすいち。

いや、『友達の境界』が-1というわけじゃないんだけど……………。

「え……………ふ、ふとうしき？」

「そこからかよ！」

僕の数学は所詮高校レベルだぞ！？　大卒のおまえが何故できないんだ！　と大卒に過剰なる期待をかける僕。

「人間の頭は不要な事は忘れるようにできているのだからこれは仕

方ないんだ。うん、仕方がない」

「僕にはおまえがどうしようもない奴に見えてきた……」

名探偵コナンとかの推理についていけない頭なんだろうな、こいつ。

数学ができない奴は論理的思考が上手く働いていないのと同じだからな……（ここになぜ数学を学ぶのかという問いに対する答えの一つがあると僕は思う）。

「というか、僕の突っ込みに反応できないならそんなボケかますなよ」

「いやしかし私はだな、ここで友情と愛情がどうして上下関係にあるのかということ論じたかったのだが……予想外に四手統那という人間が理系だったものでな。少々戸惑ってしまったのだ」

友情と愛情の優劣ぐらい電撃文庫のラインナップを見ればわかるだろ！

徹底して異性の関係の方が優先されてる。

「そうか？ ああ、確かに友情がない作品はあっても愛情というか萌えがない作品は無いな」

「そうだ。ライトノベルの必要条件とも言える」

……のかどうか、ちょっと揺らぐけど。

「しかしだ四手。私には必要条件と十分条件の違いがわからないのだが……」

「おまえ徹底的に数学嫌いだな！」

ベン図とか言ってもどうせこいつには伝わらない気がする。

習っているはずなのになあ……。

「おいおい、ベン図のことならさすがに私も知っているぞ。あれは良い車だよな」

「それはベンツだ！ 普通のボケをかますな！」

便座とか言わないだけまだマシだけど！

「成程な……ところで便座というのは、星座の一種なのか？」

「おまえのその場しのぎのようなエキセントリックな発想に僕は匙さじを投げる！」

ぼーい、と。それはもう軽く。

そんなもんが第八九の星座に数えられてたまるか！ 汚れてしま
う！

「星座と言えば有名なのは……やっぱ、あれだな。……えーと、な
んだっけ？」

「黄道十二宮を除いて考えればおそらくおまえが言いたいのには北斗
七星、つまり大熊座の事を言いたいんだろうなあと乱暴に推測した
けど当たっているのか？ ああん!？」

「はっはっは。そんなに怒るとバカになるぞ」

全くもって説得力無し！

こいつのあまりの頭の悪さにこのままでは僕はヤンキーに進化し
てしまうかもしれない。

……ついでに言えば北斗の意味するところは『北のひしゃく』と
言う意味で、一体何がかっこいいのか僕にはさっぱりわからない。

自分の名前に『斗こ』がくまついていたら僕は泣いている。『僕、将来
ひしゃくになるんだ……それで神社で参拝客の口を濯すすぐんだ……ほ

とんどのお客さんが間違つて水を飲むんだけど僕は負けない……！」
……どんな子供だよ。嫌だよこんなやつ。

まあ、十歩ぐらい譲つて北斗七星のように方位や時刻を知らせ、みんなの指針となつて輝くように　と願いを込めて北斗と名付けられたのなら僕は受け入れられそうだな。そんな事もわからずに『斗』と名付けるようならきつとそれは世紀末に毒されている。

……ゴホン。

とにかく、子供にひしゃくと名付ける覚悟があれば、それは自由だ（念のために言っておくと、僕は当て字の概念を知らない訳じゃない）。

僕は統那で良かった。

「そうそう私の場合はだな、雅な放浪と解釈できるのだが……親はどういう気持ちを含めたのだろうな」

「大自然の浪のように優雅であれ、つてところなんだろうなあ！」

個人的にはなんとも抽象的でいい感じですよ。

「……………そうなのか!？」

「気付くの遅え！」

今更ながら、僕のブレーカーがいくつか落ちた。

その後僕は浪雅に何度と無く失望して、やっと家に帰ることができました。

そして、

「やつ、僕の息子」
プレスチャイルド

浪雅てめえ嘘つきやがったな。
というわけで、

僕の父親・四手萌葱、登場。

門前アンチパシー（後書き）

基本的に統那は年上に対してドライです。長幼の序、年功序列なんてのは考慮に入れていません。つーか浪雅、書きやすっ。

それではまた明日。

閑談センテンス(前書き)

書き足していく内に目標の倍の長さになった。

閑談センテンス

一階にある和室の中（まあ、客間と同じ働きをしているから他の部屋より綺麗にされていて、居やすい）、ゆったりとしまむらとユニクロを組み合わせたスタイルに胡座あぐらという風情で僕の父さん、四手萌葱は子供のような笑みを浮かべてゆらゆらとしていた。辛うじて爽やかさだけは持っているから 盛っているから、か？ とにかく、その子供っぽさは雰囲気的には許せる仕草ではあるが、僕の父親がやる行動として見ると、これがなかなか看過できない。

「もう少し大人になれ」

「ふっ。統那にニユートロンジヤマーの何がわかると言うんだい？」

「架空の産物だって事ぐらいは知ってる」

なんでここでガンダムシードなんだよ。

「ぐほあっ！ お、おまえはもう父さんを、越えている……」

「ずいぶん弱えな！」

ザクもびつくりの耐久値だ。

一騎当千分の一。

「まあ冗談は置こうか おっと」

父さんは煙草の箱を取り出そうとして、天井 正確にはそこに取り付けられている小さな物体 を見上げて悲しそうに目を細めて、ため息をつきながら頭を落とす。

「だから煙感知にしないで熱感知にしようって言ったのにさあ……」

母さんってひどくない？」

「これを機に控える。煙草」

消防法も良いことをするもんだ。

「いつも懐に控えているんだけどねえ」

それは控え違いだ。

「普通の人よりいくらか納税しているからって偉ぶるのはやめろよ」

タバコ税（ちなみに酒税は納めていない）。

「はっはっはっ。いくら父さんでも必要以上に日本国に媚び諂こびうほど落ちぶれちゃあいないさ」

納税して働いて学校に行かせて投票して、それだけさ。と言った。

「都合が良いから日本に住んでいるだけだ。って主張は何回も聞いたから」

「あれ、そうだったけ」

「物忘れがひどいな」

「ひどいなあ。息子に言われちゃったよ、認知って」

「いやあこれは結構傷つくよ。言われてみる？ 『お前頭おかしいんじゃないの？』って」と言っているが、さして傷ついていない風だった。

会社に雇われている研究者、科学者ということだが、その辺の気風がこのふよふよした雰囲気を生み出しているのだろうか。

「というかその前に認知症とは誰も言っていない」
「そう？ まあ、認知症つてのは認知症つて事を認めたことを認められなくなったときが本格的だよな」

僕の父親らしき人は何事かを喚きだした。

「知るか」

「少なくとも父さんはそう思うなあ」

「僕は言と刃と心で認めるとなるのが不思議でならないという方向に関心が向いているからそれを調べたいんだだからじゃあな」

「おっと待ってよ僕の息子」
プレスチャイルド

「何だよ僕の父親」
ファザースペースレント

ちなみに片那は娘^{トーター}。そのまんまだし、何かと問題がありそうな呼び名だった（なにせ居候だ）。

「何か悩みがあったら力になるぜ？」

「……………」

そうか、それでも僕の父親なんだから、『何か』に気付くって事はあるよな。

……………うん、ちょっと見直した。なんだかんだで心配してはくれて
いるんだな。

そうだよな、子供のことを案じない親ってというのは自分がそうさ
れていない限りはいないよな。

僕の母さんほどではないにしろ、こっちもこっちで面倒見は良い
ほうだし

「三角関係とか」

「何のことを言っている!？」

嘘、前言撤回！

「同級生の幼馴染みか、はたまた近所の年上か……」

「てめえ垣間見てやがったな!？」

見るは見るでも覗きの類の方らしい。面倒な方を見るだった。

「というか何だこの会話の流れ。客観的に見れば……どうでもいいか。フラグなんてあってないようなものだ。」

「……いや、それ以前に、モテてないから……。僕に？ あり得ないあり得ない。僕みたいなちやらんばらんちんぶんかんぶんをまともにも相手にするような奴、いたら自殺してるよ」

「フレステチャイルド過激な息子を持って、父さんは面倒だなあと思っているよ」
「後衛的なことを言われて僕は光荣だよ」

少なくとも前衛的な父親よりは（言い換えれば、星一徹みたいなやつよりは）子供として、楽だ。

そのまま父親を無視して二階の自室のドアを開けると、

ばんばん、と。

風船を持った小学校低学年の女の子、川井窓棹かわいまどわくがベランダで『ぶら下がって』いた。

今日だけでなんだかたくさんの人にあっているせいか、何かリアクションを取らねばと思つた挙句、何を思つたか、床に向かつてエルボードロップした僕（徒勞に終わったのは言うまでもない）。

「朱夏がしなくなつたと思つたらおまえかよ！」

『入れて！』

年少者特有の、幼い声が窓越しに伝わってくる。
僕は俊敏かつ快く応じて彼女を中に入れた。

「どうしてここが？」

「朱夏ちゃん」

「ああ……」

教えたのかよ朱夏。

僕の個人情報はどこまで広がるのだろう。まさかミサカネットワ
ークとか使われないよな……無いか。

「それでどうしてこちらがここに来たかと言つとねー」

「ここに住む！？」

気が狂ったようにきらびやかに目を輝かせる僕。

「それはむりー」

うわー、ひらがなで優しく断られた！。

いや、はっきりと断られたのか……。

「……まあ、冗談はさておいて、こんな何もない所にどうして？」

「きみがいるからだよー」

「わーい！」

僕は見捨てられてなかった！

と感激した次の瞬間、

「もの凄い死相が見えてるよー」

オーサイン
死相。

「え……」

なんかズバリ言われた。

聞き違いでなければ、見捨てられている方がマシな台詞だった。

「正確には生きている状態が『歪んで』見えるんだよねー」

「ゆがんで……」

「歪んで、とも言っね」

「ひずんで……」

送り仮名で判断できない……。

まるで不正にふさわしい特徴だ。

いびつだ。

「うーん、具体的には『運』が偏ってる、ね」

「……不幸体質？」

ふこうだー。

「違う違う。ほら、えーと、なんて言うのかな……」

言葉を選んで悩む窓枠ちゃん（見た目年齢八歳）を僕は網膜（ロリ）に焼き付けた。

……うん、あと一週間は保つ。もつ。たもつ。

「ああ、あれだよあれ。占いでさ、金運恋愛運健康運って分け方が

あるでしょ」

「ああ、あの無責任な」

まあ一億の十二分の一ぐらいなら、誰かは当たるんだろうし、本物以外は曖昧模糊なぼかし表現だから当たったような気になるんだけど。

「無責任かどうかはわからないけど、その中で、きみは『誰かに殺されない』、というカテゴリーの運が欠落してるんだよね。ケーキ全体から一切れ取ったみたいに歪んで見えるんだよね」

「えーと、窓枠ちゃんは、僕が殺される、って言いたいのかな？」

全く、縁起でもない。

「いつになるかはわからないけど、少なくとも殺される原因は他殺だと思うよ」

……………。
うわあ……………。

「コメントのしようがない……………」

「うん、こちらでも自分が言われたらそんな感じになると思うよ」

さらっと言うなあこの小学生（実年齢はおもつきし怪しいけど）。

「他殺、ねえ……………まあ、当然といえば当然か」

「ん？ 思いの外ポジティブだね」

「？色採？なんてやってたらほとんどが殺されてる……………ってことぐらいは想像つくけど」

窓枠ちゃんの前で皮肉っぽいんだけど、魔法少女とか、ああいうふわふわした感性はとても僕には持てない。無理だ。

「それでもないよ。現代社会で食い荒らす？色採？の方が珍しいんだから」

「……そうなの？」

「それでもないよ」

「……え？」

「いやいや今は冗談だよ」

「わーい許しちゃう？」

「！……、……」

……な、なんだかよくわからないけど今のはいけなかった、……のか？

そのまま窓枠ちゃんは「耳にまだ違和感が……」と難しそうな顔をした（これも脳内メモリに保管した）。

「わざわざ2オクターブも上げなくていいよ……」

「僕にそんな特技が!？」

女声並み！

ソプラノ!？

そして、これ、どう活用すればいいんだ!？

襲われそうになったときに『きゃー!』……いや、自分で撃退できるだろ。少なくとも普通の人ぐらいなら。

「それよりも、別に？色採？になったからって全部が全部きょーぼーじゃないんだし」

「って言ったって……普通、力を手に入れた『人』ってのはそういう傾向があるもんだろ」

「まあ、そうだけどね。でもそこで重要になってくる事実があつて、色採？つてのは、限界があるんだよ」

「限界……？」

「そう。下限と、上限」

下限と上限。

底辺と、天井。

「面白いことに下もあるんだよ。だけど、今それは関係ないけどね」
「で、上限っていう言葉だけど……例えば僕がどれだけ『食つても』、それで強化できるスペックには限界があるってことでいいのか？」

他に当てはまるとすれば、『食べる』数に上限がある、ぐらいだろつ。

「そうそう。ダブル定額」

「まさかの単語で解説が簡単に！？」

思わぬ単語が飛び出してきたのでついに突っ込んでしまった。

「だから、きみが最初に会ったあの？形取り？は、言っちゃえば迎え酒の酔いを迎え酒で治していたようなものなんだよ」

「高揚感だけを得る、つてところか」

となると、クスリみたいなものか。

まあ、わかつてて手を出すものじゃあないよな……。

「じゃあ普通の？色採？はどうしてるんだ？」

「さあね。どうなんだろつ。千差万別してるって言えば、納得してくれる？」

「僕は窓枠ちゃんの言うことは何でも信じるよ」

「ありがとね〜」

「どういたしまして〜」

……とまあ、あとはこんな感じのぐだぐだトークで長らくくつちやべったために、晩飯に呼ばれるまでいたいたいな少女を自宅幽閉していたという経歴を持ってしまふことになったのだった。

閑談センテンス（後書き）

正確には、ロリコンというか、年下に異様に甘いだけなんだけど、まあそれは他人が決めることなので皆さんは『統那』だろっが『四^ろ手統那』だろっが好きにお呼びになってください。

ではまた明日。

道化スリップ（前書き）

一転して二転三転して学校。

道化スリップ

どこの世界にも残党という奴は存在するもので、ある程度の組織になると簡単には壊滅させられない。ぐらいの認識は博識ならぬ薄識はくしきの僕も知っているところではあるのだけど（これはオリジナルではない）、まさか学校単位でそんなものが残り続けるとは思わなかった。

「おいおいあのヤローは転校したつてのにこのヤローは何でまだここにいるんだろつなあ？ なあ四手統那あ？」

……文脈的にどんなスタンスの人間かって言うのはわかるんだけど……誰だっけ？ というかそもそも登場したの、初めてじゃないか？

僕は白々々しくも、小動物のように怯えた。

「清貧学生の僕に……一身上の都合だけで転校できるお金はないのです」

「おっ、と手が滑ったあ！」

そいつはとにかく問答無用で僕が殴れば良かったらしく、話しかけてきていた時からじゃんけんでもしたかったのか、拳をグーチヨキパーさせて（いや、チヨキって違うだろう……）、結局、よりにもよって眼潰しのチヨキだった。

……ああ、だから僕が知らない人物なわけだ。

「わあああっ！」

とわざと声を出しながら、よけた。

壁際で、かなりぎりぎりまで引きつけていたのが功を奏して、二本の指がぞつとするほど小気味いい音を立てて、スーパースローで見れば第一関節が反対側に直角だった。

……それぐらいの力で目潰しするつもりだったのかよ……。

「ぐっ……っ！」

すげえ。悲鳴を上げない三下。四の数字を持つ僕が偉そうに言うことじゃないけど。

決して『殺意』が相手に負けないように　そして殺しそうにならない程度に　気をつけながら、僕は言う。

「そつちは僕を襲ってきた同級生の中でも百本の指にランクインするぐらいには強いみたいだけど、それじゃあ足りないなあ。そのランキング一番の麻倉打葉アサクラウチハに比べれば　」

「るっ……せえっ！」

そいつは片足で蹴り上げた。

が、もう片方が体重の支え方をミスって転んだ。

「がつ！？」

「成程！　手が滑ると次は足が滑る！　流れる石の如し！　さすが！」

完全に僕のペースだった。

というか僕がマイペースなだけだった。

それと、こけたのにはちゃんと理由がある。

それは、四の型（こんなところで！）。

「（？村雨・露^{しづめ}？つてところかなー……？）」

「足下から湿気が延びて、床と壁に付着する。それは圧力の強さに比例し、滑らかになる。」

「うつせ……えあつ！？」

「転んだ姿勢から手を突いて身を起こそうとするが、その手がまっすぐになる前に掌が水平にしゃつ、とズレる。」

「水の摩擦力が直立を許さない状況。」

「……う、生まれたての小山羊ごっこ！」

「いや、全然そうは見えないけど……、ここはほら、僕がふざける場面だし……。」

「ふざけんな！……て、てめえ何しやがった！？」

「わぁ転んだぁ」

「このおちゃらけた台詞、なんと僕のものである。滑り込んで、激突を計る。」

「お前は一体全体何なんだ！？」

「ふざけた高校生だ。」

「滑った足裏でもうなにがなんだかわかっていない相手の体をタッチし、触れている瞬間に全身の筋肉をバネのように解放し、運動量をありつたけ叩き込んだ。」

「カーリングのストーン同士の衝突のように、僕は寸前までそいつのいた場所に居座り、蹴った奴をボーリングよりもまっすぐに滑ら

せた（ちなみに地質調査の方のボーリング）。

「うおおおおおおおうふげっ!?!?」

遂に楽しげな声でスケーティングを披露し、躊躇無く消火栓とい
う壁に激突した。

……うわ、消火栓、凹んだ。

「と考える前にシュピーン」

「く……来るなフォギャツ!?!」

サンド『僕の敵』イツチ。

それとも、

サンド

『僕の敵』

イツチ

だろうか。

喩えるならオセロでもいいかもしれない。

とにかく僕は滑り込み、肩から突撃して、相手を壁とで挟んだ。
それで相手は失神し、どうにかケリが付いた。

「なるほど、こういう手口もあるわけか……」

いかに相手の『殺意』を殺ぐかが、微妙に勝負だったのだが、上
手く行った。

さすがに会う人会う人殺そうとは、とても思えない。

思ったら思ったで、死んでしまう。そして逆に、死ぬなと思えば死んでしまう。

水平に保ったシーソーのような、不安定さ。

「馬鹿馬鹿しく戦う……意外と光明が見えてきたか？」

どうするか悩んで、結局放って置いたまま廊下を歩む僕。

打葉の時は、あいつに殺意が全くとっていいほど無かったのが幸いした（まあ、？色採？だったというのも大いにあるんだろうけど）。

まあ、たとえ戦闘中にそれがあっても、決する前に無くなってしまえば、問題はないらしい。

階段に足をかけて、一旦止まる。

「……………これを逆手に取って行けば……………うーん、どうやるか」

僕が人生でもかなり重要な疑問を解決しようとしていたその時、

ずっ、と。

いつもの封陣と共に、

強烈な殺意　と、感じ紛う程の、死の気配、足音が、ひた、ひ

た、ひた…………と。

階上からばやあ、と染み出てくるような色が、迫る。

「ここであつたが一日目、ぐらいかなー？」

真っ赤。

深紅。

朱夏のそれとは似ても似つかない、鮮血の色。

明らかに制服ではない、ちょうど一反分いったんはあるだろうか、単に被せたように見える、真っ黒な貫頭衣は決して床には着かず、その着衣に似つかわしくない顔を見せ、下手をすると在るかどうかもわからないような足をかろうじて覗かせていた。

乾き切った布がはらり、と舞ったかと思えば、そこから伸びて露わになった片手には、まるで死神に相応ふさわしい、しかし小振りの鎌が握られていた。

「おーい、もしもーし、やつほー四手統那君。死ぬ準備はできているかな？」

その顔は見なくてもわかる。

『苦手意識』がすでに構築されている。

僕を襲ってきたのは、何を隠そう、番鳥優子だった。

道化スリッパ（後書き）

タイル張りの床は水をまくとよく滑って転ぶので気をつけましょう。

また明日。

襲撃ウエポン（前書き）

うえぽんってあだ名の人居たら、その人かなり強そう。

襲撃ウエポン

階段の踊り場を見上げて、僕は身構える。

「まさかそうかもしれないな、と思っていたんだけど……意味ないな」

「そっだねー」

「そっだ」

結局何の対策も打っていない。

だから無意味。

「というか制服の上に乞食こじきのようなコスチュームを纏まとっているがそれは何だ」

あえて言うなら死神の纏まとうイメージ、というやつなんだろうけど。

「ミステリック」

「つまり意味のないもの、と」

「そうかもしれない」

「そっか」

そっだ、ミステリックなる単語は存在しない。

ミステリアス（不可解）かミステリー（秘密・謎）だ。

ミステイック（神秘的）は惜しいけど、やっぱりミステリックという英語は無い。

ちなみにどれもこれも意味の区別は曖昧。

「そして手にあるのは凶器ってことでいいのか？」

「それはちょっと違うかもね。私の手には凶器しかない」

そう言い、おもむろに乱暴な速度で腕を振るう勢いに任せて鎌を投げた。

「!?」

それは一呼吸前まで僕の首があつた位置をかつ切る軌道を描いていた。

仰け反つてよけた僕の視界の下から上を、回転しながら鎌が飛び抜ける。

「……なぜ僕を殺そうとする?」

「それがわかつたらやめてあげるかもしれない」

「自分の胸に聞け、ってか」

「そうなるね」

「そうか」

……会話のパターンが変化しているな。

そして貫頭衣の内側から無骨な、およそ五尺の柄からL字になるように刃が伸びたような大鎌を取り出して僕に振り下ろした。

「……..
?凍^{いてつぎ}?!!」

この間のものとは違い、短く、脇差しぐらいの長さで留めた繊細な作りの氷刃を出現させて、俯角の付いた鎌の刃を受け止める。

そして、刃同士が、接着した。

「くつついた……」

「そりゃあ、氷が圧力で溶けてんだから、そこからもう一回、無理に冷やせばそうなるだろうな……！」

会話をしながら、冷や汗が流れているのがわかる。

……くそっ、これ、女子の扱っ威力か！？

一番に受け止めている方の刃は、接点が溶けていて鎌が若干食い込んでいる（氷は圧力で融点が変わる。あれだ、富士山の頂上に近いところで米を炊くと美味しくならないのと、扱っ理屈は広い意味で一緒だ）。

「押し、切るっ」

「切るのは僕の専売特許だとは言わないが、おまえが言っな！」

だが僕の口答えは口答えに収まり、無情にも峰の幾何学模様には、ピシピシとさらなる線が出来上がりつつあった。

ひび割れ模様。

「……？滴したたり？っ！」

空いていたもう一本の手で、最早使い古されたと言っていいだろうネタが元にある技を使っつて、僕は鎌の柄を切断した。

飛沫しぶきが飛び散り、地面にばらばらと落ちる。

……一瞬だけしか發揮できないのが難点だな。

僕の後ろで氷刃と一緒に捨てた金属が重く響く　と意識を逸らした際に番鳥は軽々と天井めがけて跳んだ。

「……雨が降ろうと槍が降ろうと一族郎等皆殺しの素人」

「……まさかっ！？」

真っ逆様に、番鳥の懐から文字通り、一メートルほどの槍が降っ

てきた。

腕を振り抜いた姿勢で気持ち前かがみだったという理由で僕は全力前進した。今更それを見るために向きを変える余裕と言える余裕はなかった。

どどどどどどどつ！ と槍は連発されて、次々に床に突き刺さっていく 音だけが聞こえる。

ここであえて割愛せずに僕の感想を述べると、

不思議な ではなく、不自然なことに これが明らかにフェイタルな攻撃だとわかっているのに、僕はあまり、この『槍』という攻撃形態にさほど恐れを感じていなかった。

何というか、肩透かしな感じと言えはいいのか、備えに備えた試験の問題が簡単すぎて満点を取ってしまったような落ち着かなさだった。

さて、それはともかく、

すぐ後ろに馬蹄が殺到するかと思うぐらいの勢いを持った音が迫っている。

意を決して、視線を僅かばかり後ろに向けると、なんと番鳥はそのまま天井を走っていた。

……真似できねえ。

「人として、間違った動きをしてんじゃねえ！」

「人でなしに言われたくないなあ」

「お、おまえの事だああああああ！」

僕としたことが、思わぬ口答えに一瞬面食らってしまった。

天井が壁で塞がれているのを利用するため、手近な教室に転がり込んだ。ぶつかった机がいくつか倒れる。少々体を打ったが、槍は

止まった。

「……さて、思い出せた？」

「今もつておまえに対する恐怖感が何かが生み出されているんだよ

……」

「そう」

「……そうだ」

息も絶え絶え、立ち上がって再び対峙　せず。

「なら、まだ殺しましょうかね」

「……ああもう！」

僕は、逃げを打った。

机と椅子を番鳥に向かって『切り飛ばし』、散弾のようにして動きを止めている隙にガラス窓を全身で砕いて、僕は宙に投げ出された。

程なく重力に捕まり、僕はなす術なく落ちる。

カリキュレティンゲ
計算中……。

「うーん……三階？」

このとき大切なのは、あまり上方向にジャンプしないことだ。

そして、秒速一メートルの内に出した答えはというと、さすがに正解だったのだが、あまり意味はなかった。

「落ちた〜……よ、っと」

七分の十秒ぐらい滞空していただろうか、着地の衝撃はそれなりだったが、？色採？が悶絶するほどではなく、僕はすぐに逃げ出す

ことができた。

そこからはよくわからなかった。

離れていくにつれて、いつの間にか風景に色が戻り、生命が息づく、平和そのものといった、幻想のような現実に、僕は帰ってきていた。

たっ、たっ、たっ……、と。

そして、ようやく一息ついた。

とりあえず、今日死ぬことはなかった。

襲撃ウエポン（後書き）

1 0 / 7 || 1 . 4 2 8 5 7 1 4 2 8 5 7
.....。

また明日。

早退ウィズドロウル（前書き）

あんまりタイトルが当てになっていないです。

早退ウィズドロウル

その後鞆を届けてきてくれた朱夏によると、どうやら僕は無断早退をした馬鹿者として担任様に盛大に吹聴されたらしくて、今や僕の評判は水準に比べて深海魚と遭遇できるレベルには落ちているらしい（とはいえそれぐらいでは日本海溝の四十分の一のスケールにしか満たない、という点がこの学校の不良ていへんに対する基準がいかに深いかを示している）。

……ここだけの話、僕のこれまでの所行をすべて詳じまびらかに明かされてしまえば、僕は本来こんなところにいられるようなステータスの人間ではないので、そこで理不尽だなあという気持ちをアピールするつもりはあまりないのだけど、まあ、思わない点がないというのは嘘だろう。

何というか、諦観のような、『あーあ……』と口から漏れそうな気持ちである。

僕の前世がどうだったか知らないが、後世にはカルマによって報いを受けて貰うか……あーあ……申し訳ない。

ここまでの叙述でわかる通り、僕は未成年とはいえ傷害罪に問われても仕方のない経歴なので（なにせ××××××だ）これはどうでもいいと言えはどうでもいい。

とまあ、

そんな話を枕にして、話を進める。

ただし枕とここでの話は関係ない。

「だから明日からしばらくの間、僕は隠遁生活をするから学校には行けないんだって」

「行って」

断定のようにも聞こえる朱夏の要請だった。

「何で」

「行かなきゃいけないから」

「殺されるよ、僕」

「殺されなきゃいいでしょ」

「そんな向こう見ずな見通しで言われてもなあ……」

まあ、あの話を知らないというのもあるんだろうけど。

「というか、学校じゃないとかえって狙われたときのリスクが高まるかも……」

……ん？

「どづいことだ？」

「……ほら、いつも私が一緒にいるとは限らないわけだし」

じーつ、と。

怪しいので、僕は『おまえ、なんか誤魔化してないか？』と、表情だけでアピールした。

僕からすれば朱夏が嘘を吐いているかどうかは見落としようがないぐらい簡単な事だ。

その代わり、

「じゃあ結構な頻度で一緒にいてくれるのか!？」

とはしゃいで、蹴られた。そして蹴られまくった。

二桁に突入して十数発食らった辺りで僕は数えるのをやめた。

「……バカ」

「……………」

痛い、というかほとんど遺体。

くさった死体のごとく倒れていた僕に、朱夏は言った。

「むしろ毎回気を張ってる私の方がバカみたいじゃない……………」

「いやいや朱夏、僕の方が歴とした莫迦であるという自覚があるぞ」
「だからなんだってば……………」

何でか、僕を見てため息をついた。

………… 時々思い出したように僕を揶揄するなあ、朱夏。

「とにかく、明日は一緒に学校に行くこと」

「え、決定……………」

どうやら僕の主導権は複文における従属節並に無いらしい。

僕は頑として要求を拒み続けたが、朱夏はそれを退けた、みたい
な。

「従わなければ焰の錬金術師が明日この部屋を焼く」

「刑法二二二条!?!」

脅迫罪である。ソロ目。

というかやってる事がなんら放火魔と変わらない…………。

朱夏サン、おまえは今どこに向かっているんだ。

「ところで統那」

「なんだよ朱夏」

「たまに不知火さんとおかしな事しゃべってるけど、あれって何なの?」

「ラブコメのコメ成分でおにぎりを作ってるんだ」

おざなりにほとんど真実半分冗談半分を告げる僕であった。

そして、やっぱりおかしな事って認識だったか……残念びんしけんだ。

十哲。

「かといってラブ成分がある訳じゃあないんでしょ」

「虐待的だ……」

「は？」

「いやいやいや、逆接だったか」

そんなまさか、虐待と招待じゃないんだし……。

「逆説じゃないの？」

一見ラブコメのように見えて、そうではない。

いや、パラドックスなんて高尚なものじゃないんだけど。

「うう……僕としたことがミスを繰り返すなんて」

末代の祟りだ。

「それは末代の恥、かな」

「また一つ僕は賢くなった！」

また一つ馬鹿が露見したとも言つ。

グラスに半分残ったカクテルを、半分もあると見るか、半分しかないと見るか、だったか。

ポジティブとネガティブの違い。

「なんか付き合ってるって噂も出てるみたいけど」
「……………ああ、筑紫？」

方向修正。

一瞬朱夏の事かとも思ったが、そんな思い上がりはとつさに打ち消した。

「あれは単に馬鹿な掛け合いをして遊んでいるだけで、まあ大抵は一学期が終わればみんな免疫ができてくるからその誤解は解けると思っよ」

すると朱夏はこっちが気付くまで僕を見ていて、何事かを考えるように顔をうつむけた。

「あのー、朱夏サン？」

「不知火さんのことも名前で呼ぶよね」

「ん？ ああ……………それはちよつと事情があつて……………」

それははつきりと覚えている。

筑紫は、最初から『不知火筑紫』だったわけではないのだ。

その頃を詳しく知っているわけじゃないからそれについて僕が半可に語るわけにはいかないのだけど、単純に両親の間に何かの問題が起こった結果、そうなったようだ。

「別に僕に限らず、名字で呼ばれることをあいつはどうも好きじゃないみたいだからなあ、本人は口に出していないみたいだけ」

そのとき筑紫の表情は僅かに微かに、悲しそうになるのだ。本人は気付いていないんだろうけど、あの物憂げな表情は……………たまんな

いね!

……とんだ最低人間だった。
人類最低。

「とにかく、仲が良いんだね」

「……何で朱夏サンが僕と筑紫の関係にこだわるんだ?」

どうもさつきから様子が変だ。妙だ。

「実は……統那の友達の数が心配になって」

「余計なお世話だ!」

よりもよって僕のコンプレックスを!

フレンドコンプレックス。略してフレコン。

「学校で親しいのは私を除いて……二人だけ? 少なすぎない?」

「そういう朱夏サンはどうなんだよ!」

犯人はお前だ! っていう感じにさした指に、

「……………(シュボツ)」

イグニット
点火。

勿論、僕が。

「あ……っちいいいいいい!!? 暑い厚い篤い熱い!」

何とかして熱さを表現しようとして失敗している僕。相当テンパ
ってる。

temper。

「待つて確か爪は焼いちゃうと臭……っせえええええ！ っていうか焦げるし！ も、もう言わないから！ 一生のお願いだから殺さないで！」

「……………はあ……………」

三六個も点を打つてようやく火は収まった。

「一生のお願い、これで聞いたからね」

「……………なんか言わされた気分なんだけど」

まあ、実際自分から言ってしまったんだけど。

段々と、僕の立場が無くなっていく気がする。

ふと携帯の時計を確認すると、結構話し込んでいたらしく、朱夏は後ろで一本に束ねられた、黒く艶の光る長髪を翻しながら（なんと驚くべきことに）普通に玄関から帰った。

早退ウィズドロウル（後書き）

まあ、今回の話は……どうなんでしょっつ…

とりあえず、また明日。

擬死リーパー（前書き）

正式タイトル、『イミテーションズリーパーリーパーリーパー』。
さすがにやめました。えらい。

擬死リーパー

ざっと過程を省略しよう。

「はあ、……はあっ……」

逃走中。

遁走中。

「ああもう死んだ振りってどういうことですか死んだ振りって！
そんなことで最後まで騙される人なんて 私のことだぁー！ー！
！」

僕はまたしても襲われているわけで。

しかもこの上なく馬鹿なやつに。

「ちくしょう、上手く行くと思ったのに……！」

なんとこの台詞、半分は本気である。

半分冗談なんだけど。

ていうか、後ろから投げられてくる

「鎌鎌鎌かま鎌 っておまえはオカマでポウなのか!？」

「……故人をネタにするのはどうなんだろうと思わずにはいられま
せんねー」

はつきり言ってオカマとマイケルには何の関係もないからこれは
僕の妄想でしかない。しかも、正しくは 全然正しくないけど
オカマにポン、だ。

というわけで、

鎌乱舞。

その大きささまざまな鎌が飛んでくるのに背を向けて廊下を走る僕
(校則に廊下を走るなどは書いてないのでお咎め無し)。

床や壁に刺さるだけの小さい方に比べ、壁を切り裂き天井を割る
大きい方 安易にデスサイズと呼びたくはないけど、そんなイメ
ージの物体 は絶対に当たらないようにしないといけない。そん
なわけで、優先順位を決めた結果、量の都合で小が避けきれなくな
り、

「うわっ！ ……うえい！ ってああ！？ 制服破けたあああああ
！ うああああ！ なんてことをしてくれてんだ畜生！」

夜なべ(おなべじゃねえ)！

これはもう、あれか！？

またしても母さんに迷惑をかけるのか！？

「そちらの物品の破損に関して当方は一切の責任を負いかねますよ
」元からおまえに期待してねえよ！」

政治屋と同じぐらいにな！

それ以前に死神にどんな期待を寄せると。

投擲をとつてきぎりぎりとつてきで外しながら僕は通路を折れて階段を半分昇った。
踊り場の僕が上、番鳥が下、という構図。

「なあ！ いい加減理由を教えてくださいよ。因果がわからない事ほど
納得のいかない事はない」

攻撃が切れた間を利用して問いかけたのは正解だった。「……………
…」と若干の沈黙の後、番鳥は語りだした。

「『彼』がいなくなったのは、君のせいって聞いたから」

彼。

彼というのは、この文脈なら……あいつか？

「まさか……八木やぎ尖せん刃ば」

「その人は知らない」

「……………」

……ありや。

ここにきて外すとかどんだけ勘が鈍いんだよ僕。全然切れ者じゃねえよ。なまくら者とでも名乗るつもりか、僕は。

「あると思っただけどなあ……………」

「……………殺す」

ボロ布をひらりと舞わせたかと思うと、その内からげんのう玄能が飛んできた。

軽く人を撲殺できる工具だ。

おちゃらけながら「お手軽鈍器!？」などと言ってられるのも今の内、すぐに僕は転じて逃げた。

しかも玄能は一個ではなく、二個、三個、五個、八個、一三個、二二個、三四個、五五個……。加速度的というか、フィボナッチ的に増えて、番鳥の懐から襲いかかってくる。

……いや、9!(=362880)とかよりはずっとマシなんだけど。

ちなみに最近こんな数学的表現が多いのは、僕が数学にハマっているだけなので気にしないでほしい。

そして、一気にそれだけの数を投げられて全て当たらない　な

んで芸当を僕が披露できるわけもなく、すぐに攻撃を受けることになる。

……少なくとも居合いぐらいの集中した場面ならできるのかもしれないけど。

最低限、頭だけを後ろ手に庇って、それらを受けた。

アドレナリンでも出ているのか、その攻撃に対する声は出なかったが、確かな重たい衝撃が僕の骨と筋肉を痛めつけ、たちまちに走る足がもつれて転んだ。

「ぐうう……」とわずかにうめく僕の後ろで、空を切り裂く音が近づいてくる。

ズバンッ。

「うあっ」

断末魔にしてはあまりにもお粗末な悲鳴を上げて僕はやはり、息絶え なかった。

じゅくじゅく。

ぼくぼく、と。

3倍速逆再生ぐらいの速さで、最後にはすーっと、ファスナーが閉じるように、袈裟に切られた傷口が無くなっていく。

今度こそ言い訳のつかなさそうな制服のダメージを残して（このネタ引つ張りすぎだ）！

「面白いねー。『治るの速っ！』って突っ込みたくなるぐらい面白いですよ」

「何を、マッドサイエンティストの端くれみたいな、こと、言うてるんだ」

当然僕は全く面白くない。そして面目ない。

次に、転がって仰向けになった僕の視界に飛び込んできた物は、

「次はこれでいこうかな」

無造作に取り出された金属バットだった。

「卑怯だろ……それ」

だから、殴られるのは得意じゃないんだって。

「私は私の私に、殺害方法は際限はない。そんな私に私が捧げる称号は」

？
リーパーリーパーリーパー
深淵を跳ねる死神？。

そう、名乗った。

そして、片手でバットを担ぎながら、ブイサインで決めポーズ。

「……厳密には最初のはディーパーだと思っただけだな」

「語呂を優先するのは誰でも同じ気持ちですよ。知らなかったんですか？」

「知らねえよ」

くそ、会話に切れが出ない。

「こんな時、打葉ならどうするんだろうな……」

それは、あいつの手八丁ぶりから思わず言った一言だった。

「……………」

そして、そのまま機械のように僕を見つめたまま、黙り込んでしまった。

……なんだ？

「……おい、番鳥優子さん？」

「……ぶっ殺す」

なんだかかぶるぶると震えておられる。

目を閉じれば、なぜか逆鱗の二文字が見えた。

「え？ 最初からそんな空気じゃなかったか」

「私の好きな人ばれた知られた見つかった聞かれた触られた舐められた嗅がれたぶっ殺す……！」

「ええええええああああああああああ！？ 奴だったのか！？」

……なにこのカミングアウト。

『彼』って、普通にこっちだったんかい！

深読みし過ぎた！

……というか、今まで打葉を好きでないキャラクターばかりだったことの方が驚きか！？

「……」

「……」

異様に気まずい沈黙が流れた。

そんな風にして、僕はまたしても流れを壊してしまったのだった。

擬死リーパー（後書き）

番鳥ゆうこりんはちょっと精神不安定なのであたたたたたたく見守ってあげましょう。

日本語って不思議ですね。なぜか世紀末が唐突に出てくるんですから。

また明日。

再帰イラショナル(前書き)

いつまで経っても、殺される。

再帰イラシヨナル

そして、突然番鳥の方から喋りだした。

「お前、まさか、まさか……マジで」

「いやだっ、待って！ 黙って！ そうよ私みたいな根暗が人を好きになつたらおかしいよね！？ 小学校中学校で集団に虐められて集団に虐め返すような生活を送っていた人が人に恋するとかダメだよね！？」

「いやいやなんて言うか、解説混じりに言わせて貰うとおまえ人格ってどうか性格入れ替わってるから根暗に見えないし別に根暗だったとしても人を好きになってもおかしくはないはずだと思う」

そろそろ、今回の佳境を迎えてきた。……番鳥のキャラ的に、という意味だが。

ていうか、お前そんな少女だったのかよ。

「トイレで水ふっかけられたら授業中の教室にホースで散水するよ
うな女子が恋しちゃいけないよね！？」

バットを振り回しながらとんだことを抜かす番鳥に僕は閉口して
しまった。

「陰口叩かれたらネットでその子の個人情報ばらまくような女子と
か殴られたからって近くにいた無関係な人を二階から突き落とすよ
うな危険人物もダメだよね！？」

「お前強すぎるわ！ おまえ、本当の名前は番鳥シヨウハたる！」

さすがにやりすぎだ。

下手すれば少年院に行ける。

なんて言うか、仕返しの度合いがドリフターズのコントに匹敵するスケールだ。

「そりゃあもう人を殺さなかったのが不思議なぐらい！」

「そりゃあ良かったな！」

本当に。

「ていうか……恥ずかしい！ どうしてよりによって君なんか知られなきゃいけないんですか！？ キャラクター台無しですよ！」

いや知るかよっーかキャラクターで僕に突っかかってたのかよ……
…という本音は包み隠して事実だけを言う。

「勝手にばらしたのはおまえの方だろ」

「あ………誘導尋問だ………」

不気味な姿そのまままで縮こまった。

……なんかちょっとかわいい。

「……えー、と、ちょっと……もしもーし」

四つん這いで打ち拉ひがれている番鳥優子と、その取扱説明書を探している僕の画。

「そっだ……これだけは聞かないと………」

「ああ、打葉ならまだピンピンしてるぞ」

「……え？」

「少なくとも携帯の通じる所にいる」

かといって、会いに行けるような場所でもないのかもしれないけど。

「ほんと、に……？」

「ああ。本当だ」

これが、駆け引きとかでなく、本当のことなのだから、背徳など全く気にしなくていいのがやりやすい。いや、そんな本格的な騙し合い化かし合いみたいなのは経験してないけど。あんなの映画の世界だ。

「嘘はついてないみたいだね……うん、信じるよ」

ああ、これで危機は去った

そう思ったのがいけなかったのか、番鳥の向こう、廊下の先に人影が見えた。

『ダメだって……逃げないよね……こんな結末ではね……それなら私が後押ししてあげるよ……』

実際に、聞こえはしなかったが、

そう、呟いているように見えた。

そして、そんな『声』と一緒に、
バアン、と。

乾いた発砲音が聞こえた次に見たものは、紛れもない、マガジンを装填するタイプの拳銃が弾く音と、信じられない拳動で僕よりも矢面に出た、番鳥優子の力無く倒れていく光景だった。

「番鳥!？」

「えっへへー、借りは返したぜ……」

……確か金属バットを持っていたはずだったが、見切りに失敗したのか？ と、考える余裕もなかった。

……やべえ、モロに、

『オレの……せい、か……?』

トラウマ。

死。

他人の死。

血の色。肉の色。

惨たらしく、華々しく。

いつもいつも。

何の偶然か、何の因果か、何の運命か。

まるで僕が血溜まりのような。

まるで僕が死溜まりのような。

僕は悪くないんだ。僕は悪くないんだ。

悪いのは、偶然で、因果で、運命で、僕ではない。

それが、受け入れられたら。

それも、受け入れられずに、僕は……何を悪と決めたか。

少なくとも、目の前で倒れているこの先輩に対し、僕が思うところは

「てめえ……確かこの間も同じ服装で登場したよな……風呂入ったのか、洗濯してんのか」

理性と激情の、グレイゾーン灰色。

もう、こんな光景は見たくなかったのに。

しかし、そんな僕の理不尽に対する屁理屈のような怒りは、相手には何の影響も及ばさなかった。

かつん、かつん、とヒールを鳴らし、近づいてくる。

番鳥の深紅が冷めるような、醒めるような、翡翠色ひすいをしていた。それは、しかし衣装は黒く、肌は青白く、細部まで見れば、成程、目は隈がびつしり、不健康そのもので、顔筋がないとすれば納得のいくのつぺり顔だ。そして、今気付いたのだが、もつと不気味な点があった。それは首が据わっていないということ、3Dスティックやアナログパッドみたいにごろごろしていた。まあ最近では道端でも『下を向いて歩こう』とでも言わんばかりの歩きをする（そりやあもつ、前からチャリンコのベル鳴らされるぐらいの）奴もいるからそこまでおかしいことではないのかもしれないが、しかしこれは決して真つ直ぐにはならないという点で、異常だ。

「おかしい……」

「僕にはおまえがおかしく映るんだが、これは立場の違いだけで説明が付くのか」

もしかしたら言葉で切りつけることができているかもしれない、そんな錯覚に陥るほどに、僕は静かに冷めて、冷えていく。

「世の中に立場の違いで説明の付かないことはない……ところで……私がおかしいと言ったのは……滑稽という意味ではないのよ……」

「こんなことをやっていて楽しいなんて馬鹿げた感想を言う人間なんて……一人しか知らない」と、沖、陽菜野、は言った。「こんなことをして何を感じない人間もいるのだけど……」

「それはともかく……私には殺さなきゃいけない人がいて……その人に貴方が酷似していたから……殺しにかかったんだけど……ダメ

だつたみたいね……」

「そんな因縁……他人にぶつけてんじゃねえよ！」

軋む体軀を無視しながら番鳥を跳び越えて、その懐まで迫り、手
刀で人の字に切ろうとした　　が、

「あら……」

迫る手前、僕は何かで転び、尻餅をついた。
番鳥のばらまいた、武器の一つだった。

「ダメね……頑張る人ほど私の前では無力……」

「ふざけんじゃねえ！」

重力に真つ向から逆らつて立ち上がると、今度は足首を内側に捻
った。自力　つまり、色採の脚力で、だ。

立った状態で足の甲が地面に着くという、幼稚園児の描いた絵の
ような、馬鹿げた事態が起こった。

親指が、外側になっている。

「いつつ　てえええええっ!?!」

敵の前でいけないと思いつつも、足を抱えるようにして庇った。

「力を制御できていない色採なんかには負けていられない……」

色採なんか。

「何だ……おまえも、命彩っていう僕達の生活を脅かす奴らの一員
なのか？」

「知ってるのね……」

……流行ってんのか？

「誰に聞いたの……？」

会話に集中することで、怒りを自分で妨げる。

「そっちが退いてくれんなら、お教え差し上げてもよろしいんだけど、な」

幸いにも、この時の僕は若干頭が良かった。情報の価値というものを分かりかけていた。

どうやら頭に血が昇るとそのまま巡りが良くなるらしい。

僕が言つと、沖はやや考え、

「考えるわ……条件は」

お前が死んでいない理由の解明。

死神よりも、死神らしく言った。

再帰イラシヨナル（後書き）

統那の知るところではないのでここで言うてしまえば、番鳥さんはこの人に唆されて襲撃に思い至ったということであんなにか了解をお願いします。

まあ、自分は視点が限られていることこそが一人称の面白さだと思っ
ているので、例外的に理解に最低限必要な情報以外はばら撒かない
ようにしています（すみません、『一人称に三人称描写を混ぜる
＝手を抜いてる』という勝手なイメージがあるので……）。

ともかく、また明日。

凶弾デイスチャージ（前書き）

一応、今回の英語には二つの意味が含まれている。はず。

凶弾デイスチャージ

学校の廊下。

「死なない理由の解明……って具体的にはどうするんだ？」

「方法はどうでもいい……時間は有限だけど……私が納得できればそれでいい……」

首を横に傾げ　むしろ折って、沖は淡々と、つらつらと。

納得って、こっちは説得しなきゃいけないのかよ。

……。

そもそも、死なないことの証明って、それ自体が破綻した命題だよな……。全ての生物に対してそれを調べると、下手を打てば全滅しかねない。

だから、

「悪い」

僕は沖を殺しにかかった。

足は、我慢できない痛みじゃないぐらいには治っていた。

もう少して手が届く、と言ったときに

「殺害は最大の攻撃……」

ふらり、と僕の切りかかりは脱力状態でかわされた。

「防御は最高の攻撃……」

後ろから足で払われ、再び僕は転んだ。

「しかし何より強いのは……いいや……これは黙つとこうかしら……それと……軽々に悪いと言わないで欲しいわね……」

銃の重く、くるくると回る金属の音が聞こえ、僕はとつさに身をよじろうと動いたが、左肩を弾丸が貫いたのが先だった。

「ぐっ……」

「一般に物語では剣が銃に勝つのが盛り上がるみたいだけど……これは圧倒的に銃と射手のスペックよりも剣士のスペックの方が高くないといけない……つまり多くの場合……銃の使い手が剣士に比して強いときは確率的に剣士の負けが濃厚ということ……つまり君如きには私は殺せない……それよりも何で創作では銃使いは剣士以上の身体能力を得られないのかということに私の興味は津々（しんしん）なんだけど……」

下手をすると黙々と、と表現してしまいそうな口調で語る沖だが、撃たれた僕は、そんなことを聞いている場合じゃない。

血と一緒に、辛さを顔に滲ませながら今日何種類目かわからない痛みを耐える。

「私の弾丸は？^{プレイヤー}博徒？の特別製……さあ……どうなるかな……」

「……てめえ、何しやがった……！」

僕の体に空いた銃創が焦げ付くように熱い。

それとは別に、悪寒が背筋をなでる。

今までのダメージが骨と筋肉、足、背中、左肩にのしかかる。鈍痛、激痛、疲弊が僕の意識を持っていこうとするのを何とか堪えるので精一杯だった。

この場での力関係上、なす術も無く、時間の経過を待つことしかできないのが歯がゆい。

「……そっちは外れみたいね……」

『激しい静寂』の後、言われたのはそんな一言だった。けれど、僕が気にしていたのはそっちではなかった。

「……………」
「番鳥……おまえ」

そいつは撃たれて尚、立ち上がった。深紅の中に、さらに深紅を滲ませながら。

「大丈夫、なのか……？」

番鳥は、にんまりと笑った。

「ん〜ふふ〜　ぜんぜん、まあ〜ったく、心配も心配りもいら
ないですよ〜統那君？」

「大丈夫じゃねえ、よな……」

僕が割りと言面目じゃない方の違和感を感じたのもつかの間。

ぬっと、まさしく幽鬼の動きで僕に迫ったかと思うと、そのまま僕の首を真正面から絞め上げにかかった。

「ぐっ……………」

「……………」好き好き好き好きつきつき好き好き好き好
き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好……

……………」

……最後のはどうだろうか。
空気までぶち壊すとしてもないやつ、と解釈すればいいのか？

そして、続けて。

躊躇無く。

止め処無く。

パアン、パアン、パアン、パアン、パアン、パアン……。

心臓に悪い音が、とても安く、軽い。

全部、一人の命彩に向かって撃たれていた。

「う……ああつ！」

番鳥優子と同じ色の、血が傷口から溢れ出る。

普通なら　まして虚弱に見えるあの体躯で　立っていられる

のもおかしい状態、容態だ。

しかし、それでも。

「ふ……ふふつ……とことん興味が出てきた……何なのかしらねその『運』は！……まるで『あの人』そのもの！……いいじゃない……観察のしがいがあるわ……さあ来なさい……見極めてあげるわ……」

彼女は番鳥優子に全く　それこそ歩兵だろうかと金だろうかと構わないとばかりに　気を払っていなかった。

「……………」

今、ようやくわかった。

番鳥が強くなるのが自滅しようが、あいつの今の興味はそこにはない。

あるのは　僕が死ぬか、死なないか。
それは、ミリ単位ですら揺らいでいなかった。

「いいじゃねえか……そうと分かれば分かつまで、だ。ここまで来たら僕も男を見せてやるよ……覚悟しろよ、沖陽菜野」

……まあ、ぼろぼろの相手にこんな事を言う僕のどこがかったいんだってことになるんだけど。

凶弾デイスチャージ（後書き）

投稿の直前に突貫的に点検してみたけど『お前これは寝ぼけながら打鍵しただろう』な箇所がいっぱいあった……いかにいかに。もっとふざけなければ（……あれ？）。

ではまた明日。

確率エスタブリッシュ（前書き）

なんで、『ひきいる』と『たつ』を間違えるのか、と。

確率エスタブリッシュ

なんだか知らないが（知ってるけど）、沖を相手しないとイケなくなつた。

そのためにも、まずは（若干頭がふやけた）番鳥。

「番鳥……悪いが僕に任せろ」

「何で何故何ふーあーゆー？」

「あいつの敵じゃないからだ」

僕は間断なく断じた。

そして、沖に話しかける。

「とうわけでいいか？ 僕とお前の一対一で」

「私に文句はあるはずもない……それより普通……そう言う時は恰好良くサシとか言うものじゃないかしら……？」

「僕の流儀じゃないんだよ。『刺し』に通じるから」

僕は切るんだ。

刺しても、ましてや斬るでもない。

「そういうものかしら……」

「いやいや待つてよ。ここに存在したる私はどうすればいいのですか？ この高ぶる士気ならぬ死しき気はどうすればいいのですかね？ あとで君にぶつけなければいいんですか四手統那君」

ぶつけられたら確実に死ぬような気がする。

「溜め込んどけ。その分だけ他人が幸せになれる」

「身勝手なこと言いますね。いいですけど」「言っちゃってなんだが、いいのかよ。」「ほんじゃーちゃちゃっと乳繰り合っけきなさいな。私はここでゆったりたっぷりのーんびり見させていただきませよーっと」

本当、投げやりだな……させていただきますを万能だと思ってるあたり。

これも『解放』の副作用、か？

……はあ。

「さて、死なない証明の時間だ。命題の準備はいいか」

「命題も何も……最初から命題は決まっている……」

「あはは、かつこわるいですね。はははああああああああああ

！ごほっごほっ！」

「無理な笑い方をしてむせてんじゃねえ！そもそも笑うな！」

「失礼しました」

あーあ、締まらない。

まあ、どうせこれが僕だ。

『まったく、だらしのないわね……よく今まで生きてこられたと呆れかえるばかりね』

うるせえ。

頭の中ですら罵倒される始末かよ。

今まで以上に使ってやる。

「？村雨・凍？」

右手の意識を発散させ、放射。

刀の造形を、放棄する。

「
？刃走^{ははしり}？」

右手から人の全力疾走世界記録ぐらいの勢いで薄氷が生え、樹氷を連想させるように広がり、沖に襲いかかる。

僕の視界が、巨大な氷の枝分かれで埋め尽くされる。
コンクリートに、氷の切れ込みが無数に走る。

「ひゅーひゅー。かつこいー だけど私ならそんな攻撃生きられる、かもしれない！」

ギャラリーうぜえ。お前はエクスカリバーか。

さて、話の流れの都合上かどうか知らないけど、沖はやはり、生きていた。

「ルキーはママの味……他人の不幸は密の味……」

「何故その二つを並列する！」

やってはならないことをこいつは！

「もったいない……」

「もう意味が分かんねえよおまえ！」

折角の戦闘ムードだったのに、ここに来てさらにコメディイを入れるか！

周りの空気も物理的に冷えてきて、床には既に霜がついていた。

「ほらほらー、次の新技いかないなら私が殺しますよ統那君？」

「おまえは空気を読まねえと人気キャラ投票で殺されるぞ！」

「え……ホントに？」

「天地神明に誓って」

嘘だと言える（心、の声）。

人気投票なんてここでやるだけむなしだけだ。

「やばいね……お口にチャックしないと……チャパパ」

「うるせえ！ しかもその笑い方は既に使われてるんだよ！」

有名な漫画で、お口にチャックが付いているやつが。

「痴話喧嘩は終わり……？」

僕達の台詞について鼻持ちならない台詞を宣のたまいながら、沖はざり、ざりともう延びることのない砕けた氷と霜を踏み砕いてこちらに接近する。

「痴話喧嘩してねえよ。僕は」

「いやですねー統那君、まるで私がチワワ喧嘩しているみたいじゃないですか」

「なんだそのカワイイ戦い!？」

ちくしょう、突っ込んどけまう！

話の腰をへし折り過ぎだ！

ここまでくると序章で語った内容を改めた方がいいんじゃないのかとすら思えてくる。

「統那君、チワワを舐めてないですか？ 咬まれると痛いよ？ きつと」

「せめて言い方に説得力を持たせろ！」

「よくよく考えれば咬まれても痛くない犬なんて豆柴ぐらいですよ
ね」

「嘘をつけ！」

「私は正直物！」

「二重の意味で嘘つきだな！」

私はしょうじきもの（嘘つきの反対）。

私は正直、物である（者ではなく）。

「嘘をついて言ったのは統那君じゃないですか。なかなかの非道
ですよ。その行為」

「僕は命令形の文のつもりで言っただけだ！」

「分かっているよそんなこと」

「分かっているついでに邪魔してくんのをやめろ！」

「むー、仕方ないですね」

番鳥はようやくやく止めてくれた。

「ああ……台無しだ」

僕は形無しだけだ。

「そろそろ……私の攻撃ね……」

「……………」

沖の首が前に倒れていて、表情が見えない。

よし……四手統那、油断だけは……するなよ。

結局のところ、こいつは今まで能力を發揮していない。

攻撃は全て失敗し、それどころかダメージが蓄積されていった。

「ところで……私の攻撃が何なのか……気付いている……？」
「いや、知らねえし……って、気付いて……？」

……待てよ。

嫌な予感が、する。

周りのコンクリートに、

ピシピシと、亀裂が走る。

このタイミングで。

まさか、そんなことがあるのか。

「おまえ……そんな、証明の出来ないことを」

ふざけてやがる。

自分でふっかけた問題を自分が解けねえなんて。

「私の行動は……全部偶然で片付けられてしまう……」

「あるのか……そんなことが」

胴体をぐらん、としならせて、首を後ろに持っていった。

「逆よ……そんなことしか……人生には無い……」

断続したひび割れの音が終わり、一気に崩壊する。

真上から、天井が、落ちてきた。

確率エスタブリッシュ（後書き）

まあ、こんな能力でも大した驚きなんてあるまい（という、自虐）。

はてさて、また明日。

崩壊リバース（前書き）

よみがえれ。

そして、終われ。

崩壊リバーズ

元、学校の廊下。

丁度僕の周囲五メートルだけが上階から崩れた、というのがしばらく前の　僕の意識が落ちる前の　出来事。

ついでに言えば、階層も、一階落ちている。

そして、目覚めて最初に感じたのは、痛覚。

「うう……ああつ……！」

僕は、人の大きさは越えているであろう瓦礫に足を挟まれて、身動きの取れない状態になっていた。

その瓦礫の天辺に座った姿勢で、沖陽菜野がだらりと首を下に向け、こちらを見ていた。

「私『達』は……決して超人の集まりというわけではないの……」

説教ではないが、言葉を上から下へ、文字通り垂れていた。

「余程のインセンティブが無い限り……防御は特定される……防御力なんて……数値化出来るのは徒手空拳だけよ……」

「だから、どうしたって……？」

おまえのだからならした口上に付き合うどころじゃねえんだよこつちは。

向こうもそれは承知なのだろう、僕の迷惑だと言わんばかりの敵意を介さず続ける。

「その特定された防御の中でも……『切断』はメジャーな部類に入

っているから……たとえ私にその刃が届くことがあったとしても……
私は殺せない……」

「……………」

ということは……あれか？

こいつだけではなく、他の命彩にも、僕は勝てない？

こいつはそう言っているのか？

……あれ？

何でそんなことを

……ん？

「……………ええ、と」

何でそんな所にいるんだ、朱夏。

「統那っ！」

心配そうな顔をして、崩れた天井の縁で僕を呼んでいた。
何となく、ちよつと邪推してみる。

「このタイミングといい登場の仕方といい……ああ、そういうことか。ははーん、読めたぞ。今回の黒幕は獅子島朱夏だったという才子だな。全ては朱夏の手ひらの上で這い回る虫のようなものだったんだな」

「それは二重の意味でイヤ」そして、「それに私は何も仕組んでないから」と朱夏は即座に繋げた。

「うん、まあそうだよ……これ以上ギャグをやる余裕も無さそうだし」

「一回焼いてみる？」

「そうだな、じゃあ頼むわ」
「りょー、かいつ！」

朱夏はそのまま、煌々とした紅蓮を、沖へと放射した。
それを沖はぐらりと 瓦礫から飛び降りて避けた。
それはつまり、食らったら只では済まないということ！

勝機！

「朱夏！ そのまま払え！」
「言われなくても、そうするつもりっ！」

沖は逃亡を諦めたのか、またしても銃を構え、逡巡無く弾丸を放つ 事が出来なかった。

「狙ってえ、弾いてえ、集中力MAX！」

番鳥がその前に沖の拳銃を弾で弾き飛ばしたのだった。
朱夏の炎が、沖の近くにまで到達した。

「？ 炎技・分烙？！」

炎が瞬きの間にぎゅっと凝縮を終え、解放された。

動けないでいる沖の脇で放出されたそれらは、砲丸をイメージさせる勢いで四方八方に飛び散り、いくつかが沖をとらえた。

既に、あの微かな声が聞こえるような状況ではなくなっていたので、判断が難しいが、おそらく沖は苦悶の表情を浮かべている。

あとは

「んんーんん？ どうやら俺の力でも使いこなす気にもなったのかあ？ ああん？」

黙っておまえは利用されていればいいんだ。

「はっはっはあ、散々な言い種じゃねえか！ いいぜいいぜ！」
残念だったな。僕を殺せなくなつて。

「バカは一回死ねば直つちまうんだよ」

随分理解が良くなつたな……。

「そりゃあ最初は受け入れ難かつたがなあ、まあしようがねえよ。それよりも、俺はお前の「殺人剣」に殺されちまつたわけだが今度「活刃剣」で甦るんだろう！？ 悪いこたあ言わねえ！ 贅沢も言わねえ！ やつちまえ！」

分かつたよ、更生させてやるよ！

「ひやははは！ ？形取り？がこんな使われ方をするたあ皮肉以外の何物でもねえぜ！」

「めいめい命銘、？オウカ？」

切れ味を殺したまま、？それ？を宿した足を無理に引き抜く。

ギヤリギヤリギヤリギヤリ！ とあまり聞きたくない類の摩擦音が軋る。

足に、出血は見られない。既に見るも無惨な制服の内側に見える足は、妙な光沢を帯びていた。

「よっし、無傷！」

「それは……！？」

ちよつとした驚きに目を見開く沖に向かって走り、腰に据えていた手を抜刀のように振り、『液体』を飛ばす。

攻撃には見えない攻撃を沖はその正体を悟れないまま、食らった。

「……………」

「ちょっと、考え無しだったか……………」

最初は効いていないのかと不安になったが、それはすぐに打ち消された。

「!? ……目が……………あああああ……………」

沖が片目を押さえて、絶叫を上げる。

化学つて……………怖いな。

そして、僕はひざを突いた。

「……………はあっ、はあ……………いや、意外とこれ、消耗が激しい……………」

どつと、更に疲れが出てきて、息が切れる。

さすがに体にかんりの無理言わせてきているからな……………。

ここでさらに体内から抜けると、さすがにやばい。

「きゃー。残酷なことしますね統那君」

「散々人を痛めつけた人にだけは言われたくねえ!」

「統那……………あれは可哀想だよ」

「し……………仕方ないんだ!」

朱夏には下手に出る僕。

……………ゴホン。

さて、そろそろ始末をつけるか。

「さすがに……………これは……………効くわね……………」

「……これ以上やられない内に、もう帰ってくれ」

一回こっきりの、撤退勧告。

帰らなければ、切ってしまう覚悟を含めたつもりだ。

「一体……何が狙い……？」

「狙いも銜てらいも無い。ただ、もう、疲れた……」

最初から、こっちはおつ払えればそれで良かったんだから。

「……………」

「えー？ 私は元気なのに」

番鳥はそう言うが、僕はそれを制する。

「だったら聞くけど、おまえにはこれを殺す理由があるのか？」

「……………」

ちよつと黙った。

どうやら、沈黙は金、という言葉は知っているらしい。

それと、少なくともこちら側には殺す理由など、あるはずもない。殺されかけた代償に傷跡を残してやっても痛い目を見せても文句は来ないだろうが、その線引きだけはしっかりしておかないといけない。

「分かったら、帰れ。そして僕らを面倒に巻き込むな」

「分かっているわね……貴方……組織という物の無情さを……」

「だったら今死ぬってか？ 次はもう片目も瞑って貰うつもりだけだな」

「ふふ……それでも」

言いかけて、口を開いたまま、固まった。

僕　その後ろに、目を見開いて、今まで貫いていたポリシーを曲げて、姿勢を正して。

沖陽菜野は緊張を露わに、固まっていた。

「別に風も虫も騒いじやいないが実際に来てみるとどうだこれは。俺に登場させるなよ。沖」

きちんとした形で、終わりにかけていたのに。

ちゃんとしたきまりで、落ち着きつつあったのに。

丸くとまでは言わないけど、上手く収まりかけていたのに。

これまでの僕達の努力を無駄にしてしまいそうな、そんな性質。

これまでの僕達の物語を無為にしてしまいそうな、そんな成分。

そこまでの圧倒的な述語でさえも凌駕するほどの、気配の無さ。

振り返ると、

誰か、人がいた。

崩壊リバース（後書き）

漢字にするとあまりにもアレなんでカタカナにした次第です。
これ以上は今回は特に言うまい。

という事でまた明日。

境界スポイル（前書き）

まあそんな事を言ってしまうば、『これ』でさえ台無しと言われても反論できる余地は無いのだけぞ。

境界スポイル

僕は、呆然とそいつを見て、
朱夏は、油断無く見据えて、
番鳥は、息を吞んで見守る。

「……ん、ああ悪いな。こいつは融通が利かないくらいがあつてな……案の定、来てみればこの有様だ。ここはこの俺に免じて見逃してやってくれ」

いきなり現れた男は、詰まらなさそうに　ただし、倦怠感などと言つものとは全く無縁の様子で　そう言つた……いや、そんな文法では語れない。

詰まらなさそうに呼吸を詰まらない、詰まらなさそうな表情を詰まらない、詰まらなさそうに深い海のような蒼で統一された着流しを詰まらない、詰まらなさそうに整えたのか、詰まらなさそうな髪は詰まらなさそうに手櫛で詰まらなさそうなのが一目で詰まらない。詰まらなさそうに下駄をからんころんと詰まらない、詰まらなさそうに足を止め詰まらない、詰まらなさそうに僕の前に詰まらない、詰まらなさそうに見詰まらない、詰まらなさそうなものをやはり詰まらなさそうだと詰まらなさそうに諦め詰まらなさそうに再び詰まらない。

「なあ、見逃してやってくれよ」

「……おまえは、誰だ」

詰まらなさそうな問いが詰まらなくしたのか、詰まらなさそうに「はあ……話を聞けよ。まあ答えてはやるが」と詰まらない、詰ま

らなさそうに「俺の名前は、ここで言うには馬鹿げているから止めておこう。それよりもお前の名前に興味がある。聞いておいて損は無さそうだ」

「……いや、僕も、ここで名乗るのは止めておく」

男は「最近は何も返しても流行っているのか……おっと、最近に限った話でもないな。これは失礼」と詰まらなさそうに詰まらな終える頃には詰まらなさそうな視線を沖の方へと詰まらなさそうに詰まらない、「俺は命令を実行できたら嬉しいとは言ったが勝手に死なれては困る」と、詰まらなさそうに詰まらなくした。

「ふむ、しかしこいつをここまでにするとはな。やはりお前の名前を聞いておきたいな」

「だから名乗るつもりは」

と拒否する僕の前に、

台詞を言い切る前に、

至って普通に詰まらなさそうだった。

そして、僕に手を詰まらなさそうに、

「……ふむ、『そいつ』をちょっと見るか。珍しい物だ」

何の効果音もなく、

何の擬音も感じられないままにして、

(え……)

その手が、詰まらなさそうに僕の体に沈みこんで隠れ、詰まらなさそうな僕の『中に存在する物』を、詰まらなさそうに掴み詰まらなくした。

それは、僕の内蔵なんて、ちやちなものではなく、

『 いやあああああああああつー! 』

『 これは やつべええええええ!?!? 』

村雨と、オウカ。

思わず叫ぶ、その刃格。

それにつられて、僕も。

叫ぶ。

恐い。

「 やめろおおおおおー! 」

不意に、離れた。

「 おっと、そんなに騒ぐなよ。中途半端にしちまっただろうが 」

詰まらなさそうに、手を外へ詰まらなくした。そして何の大したこともしていない風に、詰まらなさそうに言い詰まらなくした。

「 あ………… ああああ…………!?!? 」

ここではないどこかのRPGで罰金を取られそうな言葉を紡ぎながら、『内部』の惨状に、僕は上体を起こしたままひざを突き、目の前を見ずにただ、ばらばらに壊れている、そして見えない、実際にはここに無い刃を必死に繋ぎ止めようとしていた。

周りから見れば、僕はただ両手を見て絶望しているようにしか見えない。

実際、少なくとも、こいつの目には詰まらないことだっただろう。

「おいおい……そんなに大切な物なら大事に丁寧に用心しているよ。むき出しにしてあるからてっきり見せびらかしてんのかと思っただろっが」

「ふざけん、なよ……！」

視線を下に隠しながらふつつと沸き上がる怒りをコントロールしようとする詰まらない僕がいた。

そして、

「……で？ よく分かんないけど、そつちも敵って事でいいの？」

詰まらないことに手先から火を呼気のように吐き出して、朱夏は敵意を男にぶつけていた。

「おいおいなんなんだよ聞き分けが悪いな いや、『悪い』のは俺だ。だとしたらどうするか……そうだな 聞き分けが無いな。おいおいなんだよ。横から突然しゃしゃり出てきて」

喋ることすら詰まらなくなっている。

「そつちこそ私より後に出てきているじゃない」

「成程そう言う考え方もあるな。しかし、俺のことなど登場していないと考えておけばいい。七人岬程度にとらえておけ」

「……？」

「統那君、何ですか七人岬って」

「さあな、僕は知らない」

ここで『知っている』と発言しても意味は無さそうだったので嘘をついた。

……この中で僕しか知らないのか、七人岬。

「何だよおい、すべったじゃねえか。どうしてくれるんだ陽菜野」
「……申し訳ありません……」

いやいやいや、思いつ切り面食らってたぞ今の沖。
責任押しつけやがった。こいつ。

「さて、どこまで進んだんだか……そうそう、お前だお前。『俺はお前に何の興味も無い』。面白味の欠片も無い奴には何の魅力も関心も無い。『面黒い』おめくろ奴では興味どころか意味も無い。だからお前は俺に関わるな。目障りだ」

ひどく自分勝手な言葉だったが、それに反論することは誰にも出来なかった。しようと思えば出来るはずなのに何もしようと思わない。……いや、思えない。

いや、

……詰まらない。

この男を前にして、何かをする意欲があつと言う間に消え失せていくことに気付く。

いつの間にか、僕は何を押さえようと自分を制していたのかすら忘れかけていた。

何という、徒労感だ。

この状況で、僕達は何をすればいいのか。

ただ、願うしかないのか。

出来ないに決まってる。

ただ、祈るしかないのか。

はあ？ どうやって？

ただただ、段々と、僕らが消え失せていく前にこいつが消え失せ

るのを待つしか出来ないのか。

待つってさ、一体どれくらい待てばいいんだよ？

それとも、呆れ、諦め、頹れるしかないのか。

だからさあ、何と、何と、何をするんだ？

「こ……のおっ！」

「……！？」

直接言われていない僕が今の言葉に参っていたのに 番鳥ですら動かなかつたのに 朱夏は、どうやら先の言葉を侮辱と見なし、て火を放った。

字面では完全に危険な放火だったが、

「ふん、やはり面黒い」

「なっ……！？」

それを詰まらなさそうに詰まらなくした。

いかにも至極詰まらなさそうに鼻息を詰まらない。

「興が醒めた。帰るぞ」

「はっ……」

すっかりといった感じに、沖が追従していた。

「お前なあ、読点を三点リーダーで代用するなよ」

「はっ、我が盟主」

「……いや、やっぱりそのまま個性を殺すな」

「はっ……」

「……はあ、どうもこいつは忠実すぎていけないな。なあ？ そこのお前」

僕の視界では男の両目と鼻と口と正面全てが見えているのだが、まあ僕に向かって意見を求めているわけではないんだろっなあ、とぼける僕。

無気力なりの、これが精一杯の出来ることだった。

「ふん……そうだ、対抗までは行かなくとも抵抗ぐらいはしてみせろ。そうでなければ俺の世界が面黒くなる」

言葉も程々に、男と沖は座り込んだその姿勢のまま、呪文のような文言を漏らし、突如現れた、もやもやとした白い穴に飲み込まれ、消えた。

「……………」 (僕)

「……………」 (朱夏)

「……………」 (番鳥)

僕達は、そのまま何も喋らずに

「……………つぷはあっ！ ……やったー息止め自己ベスト更新しました

ー！」

「そいつぁ良かったなあ！」

物語を仕舞いにすることは出来なかった。ていうか、それで喋ってなかったのかよ！よく考えるとこのページの最初からだし。ちくしょう、やっぱり台無しになったよ。狂ってる。

境界スポイル（後書き）

番鳥優子が台無しにしたもの3つ。

- 1、自分の人格。
- 2、物語の展開。
- 3、敵キャラの印象。

……最強^{チート}かよ。

また明日。

終章ロープブリッジ（前書き）

ロープ……荷造り困いにテントや登山、戦闘から自殺まで何でもござれのSM道具のことですか（後半は実体験に基づかない）。

終章ロープブリッジ

そんな命のクライシスがあった次の日。の朝。

僕は桐那きりな片那かたなに起こされる前に目覚め、残念がられながら（夜這いではなく朝這いのような）登校時間までのんびりと過ごした後に家を出て、いつものように朱夏を待って一緒に登校していた。

ここ数ヶ月の経験からして、どうやら朝は僕の方が強いらしい。

「そういえば昨日、遅れて登場してたけど……何してたんだ？」

「どこにいるのか分からなかったから、探すのに苦労して」

「ふーん、ああ、だからあの崩落でようやく分かったのか」

「……そうだね」

朱夏は両手を伸ばして、欠伸あくびをした。

そして目下僕の一番の焦点（つまり、焦った点）だったはずたぼろぼろになった制服は、幸運にも（？）筑紫が修繕してくれた。

正直、総合的な評価としては母に劣るけど、バレない程度には仕上がり（しかも放課後の時間だけで）、文句など全く出なかった。そしてそれを見たとき、驚いて何も言えなかった。驚嘆に値するってやつだろうか。

「まあ、一件落着、終わったことは済んだことだし、これ以上整理する必要もないか」

おそらく今回の中で一番の一安心をすると、

「酷いですねー。まだまだ完了形にするには早すぎますよ統那君」

後ろから声がして、腕が鎌のように僕の首に絡まってきた。

絞まる絞まる。

「……何で、ここに」

「ええ、知らないんですか統那君、今はユビキタスの時代ですよ。つまり私はどこにでもいるんです」

「そんな時代は今も昔も未来も来ない」

僕より先輩のはずの、番鳥がそんな口調で密着してきた。

さすがに気道の確保だけは許してくれたが、纏わられたままの状態は個人的に良くない。

「それよりどうですかこの一体感。胸とか当たっちゃってますよ」「実はこの制服改造されてて、『背筋矯正ぶろぐらむ』とかなんとかいうコンセプトの下で鉄板が埋められているんだ」

わあ、僕ってクール。

こんなくだらない言い訳を思いつくなんて。

「なるほど！ 道理で鋼のような肉体だと思った！」

いや、嘘だけだ。

というか、鋼のような肉体と言われても……僕は錬金術師じゃないし（論点が違うなあ）。

「……はっ!? 騙されませんよ統那君。君の背は猫背でも何でも無いじゃないですか。そんな矯正聞いたことないですよ」

「ところでなんでそんなに丁寧な喋り方になったんだ？」

くるくるくる、とラジコンみたいに番鳥に回される……僕。どうなってんだ？

「それはですねー、伊織ちゃんです」

「伊織？」

『誰だ？』ととりあえずとぼける僕。

「知ってる人だけ知っていればいいのでそれ以上は言いませんよ人識君」

「決定的なことを！」

あれを模倣するのか……さすがにこっちの両手は健在だけど。

「さあ本題へ移りましょう人識君」

「僕の名前は四手統那だ！ いい加減にしろ！」

「私、統那君に惚れました。吊り橋効果ですけど」

「…… っておい！ それってつまり惚れてねえってことだろ！？」

なんだ！？

一瞬思考が止まった！

「いやいや分かりませんよ統那君。もう既に体を密着させることに抵抗はないみたいです」

とても受験を控えた高校三年生の行動とは思えない。

「おまえに恥じらいはないのか！？」

「無恥の恥、と言いますし」

「字が全然違うし意味が分かんねえ！」

無知の知、だろう。正解は。
自分がいかにもものを知らないかを知るといった概念をそんな低俗な
ものに……。

「では鞭の血、ですか」

「何もつともらしく恐いこと言っただよー!」

一気にバイオレンスな哲学になった!

「もしかして、正解はムチウチですか?」

「さらに遠ざかった!」

「ムチムチ」

「ばいーん!」

もはや突っ込みですらなかった。

僕はこんな奴に苦手意識を持っていたのか……?

なんだか過去と現在においてやりきれない思いに駆られる。

「ふ〜ん? なんだか私のいない間に面白い展開があつたみたいだ
ね、と〜う〜な〜?」

あ、朱夏サン!

「はっ!?! 朱夏サン今までどこで傍観してたんだ見ていたん
なら早く助けて僕は何か怖い者に取り憑かれて大変なことに」

「怖いだなんて心外ですね統那君。むしろ喻えるならば私は神妙な
守護霊ですよ、守護霊。エクスペクト・パトローナムと唱えてく
ればいつでも駆けつけます」

「生憎僕は吸魂鬼に襲われたことはないから絶対に呼ばないけどな
!」

あれは確か、魔法使いじゃないと見えなかったか。

「……っ、いい加減にするのは統那の方じゃない……!?!?」

「……(じくっ)」

と、僕が思わず生唾を飲むぐらい、今の朱夏には静かなる殺気がこもっていた。

……えー、と、これは、僕のせいなの、か？

「ごめんなんだが知らないけどごめん僕が悪いのか番鳥が悪いのか分からないけどごめんもしかしたら朱夏はいま全人類の怒りを背負ってるのかもしれないけどごめん！」

やられる前に、謝る。

僕にだって学習能力はあるのだ。

「謝るっていうことは、責任を取るって事？」

「……え？ えーと、多分、そうなるんじゃないかと、思われまし」

「あーもうっとおしい！」

「ひいー！」

……、あれ？

「朱夏サン、何故に手をつないでおられるので？」

折角殴られやすいようにヘタレキャラを演じたのに。

「……………うう」

「……もしも……し亀よ、亀さんよ」

「う、ううづるさいっ！ よし決めた！ 引っ張る！」

童謡（動揺）モード。

びんっ、と腕にいきなり張力がかかった。

そして僕はアスファルトの地面の上を引き摺られて

「痛い痛い！ なんていうかこの道でカーリングしても勝負にならなさそうなぐらい摩擦力あんのになんてことを 痛ってえ！？」

石ころが尖ってた ってうおお！？ ちよっと待って服破けたかもしれない！」

「途中下車無効！」

「素晴らしく応用の利かない人力車だ！ ああ！ バッグが落ちた！ ……そうだ！ こんな時こそ助けてくれ番鳥！」

「甘いですねー統那君。ここで助けてもときめきはやって来ませんよ？」

「来る来る！ めっっちゃ感謝する！」

「本当ですか？」

と言いつつその面白がっている眼差しはもしかしてあなたドサデイスト！？ と思わずにはいられなかった。

「本当本当！ バナナにずっとこけたけど尻餅ついている間に少し前に落とし穴があった事に気付けた時ぐらいに感謝する！」

まあ、僕は僕で適当に言っているだけなんだけど。

「え、なんか微妙ですね。朱夏ちゃんはどうします？」

「とりあえず、学校に着く頃には、棺桶状態にしようかなと」

「ザオリクは!？」

「その後でメガザルをやってくれるなら唱えてあげる」
「確実に死んだ!」

復活して自殺!

この上なく無駄だ。

メガンテすらさせて貰えない。

ざっ、ざっ、ざっ、と一マスずつ歩むのは僕にとってはまるで毒沼を歩いているような心地だった。そう、まるでカバディ、カバディ、カバディ……違う。

どうやら僕はインドを勘違いしている。

「そうだ! ではこうしましょう」

今度は何を血迷っているのか(絶対こいつは常に何かに血迷っている)、言うなり番鳥は両足を掴み、僕を宙ぶらりんの状態にした。

「……………」

ここまで来るともう、羞恥心とかそんな言葉で心境を言い表すのはあまりにもキツイが、あえて言えば、僕の男子高校生としての尊厳はここですっかりゼロになった。

「さあ今日も一日元気に行きましょう!」(番鳥)

「……………」(朱夏)

「……………もう、帰りたい」(僕)

そうして僕はきつとおそらく史上初の女子に運ばれての登校をしたのだった。

e
y
o
u
p
l
a
y
w
i
t
h
y
o
u
r
f
a
t
e
?
I
f
I
r
o
n
y
o
f
f
a
t
e
i
s
t
r
u
e
,
c
a
n
i
s
t
h

t
h
e
r
a
i
l
s
.
“
D
e
e
p
e
r
-
L
e
a
p
e
r
-
R
e
a
p
e
r
”
r
a
n
o
f
f
“
?
?
?
?
?
?”
w
o
u
l
d
b
e
a
n
i
m
a
t
e
.
“
F
l
a
m
e
-
S
o
u
l
”
h
a
s
s
u
r
v
i
v
e
d
.
“
B
a
c
k
s
w
o
r
d
”
i
s
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.

:
P
r
o
g
r
e
s
s
R
e
p
o
r
t
.

*
*
*
*

終章ロープブリッジ（後書き）

いやはやなんとというキャラクターを作り出してしまったのだろうか。書きやすけれど使いづらい。普通の狂っているってこんなもんなのか……？ いや、そもそも狂っているということに正解はないんであるということとは感じているのですが、同じく狂っている印象がある不知火とはやはり狂い方のベクトルが違っているようで、いまいような……まあ、その内折り合いが付くでしょう。きつと。

さて第五章ということですが、なんと大学とバイトが忙しくて連続更新（中一ヶ月）が上手く行かないのでは？ という作者の危機感に呼応するかのように彗星の如く登場した昨日……ああいや、機能！ その名も予約掲載！ マーベラスをあなたの周りにはべらせませす（駄洒落が気持ち悪い）。めっちゃ助かる。特に……

6：00 起床。メシ。

7：00 学校。メシ。

17：00 帰宅。メシ。

18：00 バイト。

23：00 再び帰宅。

という日に役に立ちました（日付変更直後に投稿する手も無くはないけど……）。

まあ、そんな中で書き上げているのでおかしい所も多々ありますが、無事に済みました。

ところでアクセス数が先月より倍になっていますね。4万。

四万十川……もとい、四万十三を超えてますね（この思いつきは何でしょうね）。

さて、来月は試験期間とまるかぶり。
予約掲載、また君のお世話になるよ。
というわけでまた来月。

序章コンフリクト(前書き)

今更にして『じょしよう』を『じょそつ』と間違えそうになったり、
コンフリクトをコンクリートと混同しそうになったり。

……まぜるな危険！

序章 コンフリクト

突然で悪いけど僕こと四手統那は今とても困っている。
窮しているとも言っ。

「だから！ なんでいちいち統那にくつついてるの!？」

「違いますよー、これは懐いているんですよ？ さながら子犬のよう」

「……………」

ちなみに今僕が沈黙で隠して言わなかったのは『実は大型犬にのしかかっている気分なんだよな』的な言葉だ。
もつとも、その気も気力もないんだけど。

「ほら、統那も疲れた顔してるし、離れて、よっ」

僕の幼馴染み・獅子島朱夏は僕からある人物をひっぺがそうとムキになっていて、孤軍奮闘している。僕はどうしようもないなりに、事態の終息のためにこっそりと朱夏を応援している。

「どつちかというど憑かれた顔してますよ？ 何に憑かれたのかは知らないですけど」

明らかにお前に憑かれたような顔してるんだろっとな　　と、さつきから僕にまわりついてるのは何をとち狂ったか、僕に惚れた(？)宣言をした番鳥優子…………嘘。番鳥優子だ。

番鳥は今日会ってからずっと、僕の腕に絡み憑いたり後ろからしがみ憑いたりして…………あれ？ ……いや、うん、もう取り憑かれているのと一緒だ。

勘弁してほしいが、あまりにも疲れてしまって（よし、言い間違えてない）僕個人の力ではもう振り切れないのが実状だ。

断じてオンナノコの柔らかさとか、ほのかに匂う香りに酔ったりはしていない……していないからな！？ 決して強攻策に出られなかったわけじゃないからな！？

……ダメだ、感嘆符から疑問符が外れない。

実際、そのことについて番鳥にちくちくつつかれたせいで（鳥なだけに……）精神的にもダメージが発生していた。

『はっはっはーただ今バーゲン期間中』

『自分を安売りするな！』

『という突っ込みを想定してのボケでしたが、実際はどうですか？

ほらほら

『ぐっ……』

『おりよ？ 反応が薄いですね……では、ごうしましょう』

『ううう……（笑：楽：怒：泣：疚〓〇：〇：3：7：1〇）』

…… どんだけ後ろめたいんだよ僕。

とにかく、おかげで大絶賛絶不調中だ。今なら猫にすら殺される自信がある。

憑かれて疲れて弱りきっている。

ちなみに僕の尊厳（なんていう高尚なものかどうかわからないけど）のために何をどうされたとかは触れない。

聞きたかったらどこかにリクエストでも出してくれば人づてに述べられるかもしれない（どっかの誰かが覚えてたら、だけど）。

「ところで私に好きと言われた統那君の気持ちは聞いていないですね。しかも一ヶ月ぐらい」

「……そんなに時間経ってたって？」

はつきり明記されてはいないけど、少なくとも番鳥の言うほどではない。今は七月の夏休みだ。僕の大好きな時期。そのはずなんだけどな……何でだろう、今は好きになれない。

「というわけで返事をお聞かせ下さい人識君」
「お前絶対に僕のこと好きじゃないだろ……」

また言いやがった。そのネタ引き摺りすぎだろ……。やばい、地の文にまで疲れが……。

「いい加減にしてくれよ……」
「おっ、それは参ったということでもいいんですね？」
「ああ参った参った……」

架空設定だけどHPがマイナス突破してる……。

「ちなみに『参った』という言葉には異性などに心奪われるという意味もあります」

「前言撤回！」

抜かった。日本語の曖昧さが頭から抜けていた。

「……むー、そこまで拒絶されますか」
「あ、悪い、そこまで考えてなくて……」
「気遣う必要ないって統那」

若干落ち込んだ番鳥を罪悪感でなだめる僕を戒める朱夏。

「見た目はそれなりに良いと思っていたんですけどね……はっ！
？まさか彼女がいるのですか!？」

「いや、いな　むがつ」
「私！　私が彼女！」

突如、朱夏が奥歯の加速装置のスイッチを入れた　というのを
連想させる動きで僕の口を塞ぎ、あらぬことを言いだした。

「っ……………むぐっ……………！」

「……………本当ですかー？」

ほらほら嘔吐くから僕の肩の上に顔を乗せている番鳥が面白そう
なものを見つけた目でお前を見ているぞ、朱夏。

それよか君の手で僕のエアウェイがジャミングを起こしてて数十
秒後にはイイ感じに死ねるんですけど。

「本本当。もう百戦錬磨の鉄壁」

「……………」

「……………」

源氏物語とかじゃなくて戦国物語とかで語られそうな彼氏と彼女
だな。

早くもメッキがはがれ馬脚を露わし暗雲が漂ってきた朱夏の無茶
振り。

そんな自滅をするなら一体何故そんな錯乱を起こしたのかと思っ
けど、言わない。

「……………な、何？　疑ってるの？」

ようやく取り繕うようにして僕の口から手を離してくれたよこの
百戦錬磨の鉄壁さん。

言っちゃ悪いから言わないけど、番鳥はおるか僕ですら疑ってい

る。

のつとおうんりいつがいどりばつとおうるそうしで。

……ゴホン。

にしても、本当に何があったんだ？　そういう描写が無いと展開的についていけないんだけど……。

「疑いたいのはやまやまなんだけどー、こつしよつかなー」

そして、言った。

「二人でデートしてみたら？」

……今回はシリアスにはならない気がする。

序章コンフリクト（後書き）

お母さんへ（読者の皆さんへ）

先立つ不幸をお許し下さい（先立つお詫びをお許し下さい）

この世界で私とジョンが一緒になれないと言うのなら（現実世界のテストと更新が一緒になってしまったので）

せめてあの世で結ばれます……アン（せめて後の方から追い上げます……作者）

まあ、ネタはあれなんですけど、全然覚えてないせいでもるっきり別物ですね（カツコの中が言いたいことなのに回りくどくてごめんなさい）。

とにかく、韻を踏めないどころか『英訳すればインステップ!?!』とか考えてしまう作者に詩の才能は無いと見て間違いないでしょう。

また……来月？（少なくとも上旬です）

飴玉スパッツ（前書き）

今回のタイトルほど真面目に考えなかったものもあるまい。

飴玉スパッツ

夏休みのまた別の日。

僕はあてどなく暇を持て余していたので、ママチャリ（決して母さんではないというのは皆さん分かっていただけのことと存じます！）を走らせ近所をうろついていた。

コンビニ（徒歩三分）で少年誌を立ち読みして、ゲームショップ（デパートの中）で物色し（冷やかし）、本屋（同じくデパート）でライトノベルを立ち読み。

ほとんど金のかからない、しかしお店に迷惑な暇の潰し方だった。……とまあ、それは細かいこと　本当、人間的に細かいことなのでともかく、と言つて置いておくとして、本題かつ問題だったのは、そこから何をするかなあ……と考えながらとりあえず何となく家に近い方を狙つてうろついていた時だ。

かなり普通の出会いだった。

「きゃっ」

「わっ」

いわゆる曲がり角でぶつかった、というやつだ。本来あるべき食パンは時間のせいか時期のせいか無かったけど。

僕は大きく衝撃を受けなかったのですが、その場で少し仰け反っただけだったが、対してぶつかった相手は小柄だったためか、軽く跳ね返って尻餅を突いた。

見た目、僕より年下、中三かそれぐらいだった。

そして、僕の目に飛び込んできたのは……スカートの中のスパッツ。

……うわ、なんだこのパターン。

まあパンツじゃないから恥ずかしくないよなよし僕はこれから立ち上がって直ぐに逃げ出そう直ちに逃げ出そう直帰（国語の辞書には載っていない単語）しよう。

とまあ僕はこの時少し動揺していたのもあり、不躰にもぶつかった相手を前にして『大丈夫ですか』の一言もなしに立ち去るという選択を取るうとした。

なんていうか、最近の若者と言われるような、もつとえばヘッドホンを付けている人の心理みたいな対応だった。

「いったあ……あ！ 酷い！ ぶつかつといて謝るのも無し!？」

視界から消え去ろうとする僕を見咎めてその女の子は声を張り上げた。

……あーあ、言われた。

ここで見ざる着飾る岩猿、とボケるわけにもいかないだろうな。

「どうも済みませんでしたスパッツ」

「は？ スパッツ？ ……、ああっ!」

……あーあ、言っちゃった。

言っておくと、夏の暑さで僕の思考は少し緩んでる。

「見たな!」

「うっ……」

スパッツを、だろう。

「聞いたな!」

「き、聞いた!？」

スパッツを!?

「触ったな!」

「触ってない!」

少なくともスパッツは。

「嗅いだな!」

「僕は変態か!?!」

スパッツを。

「味わったな!」

「空気ってうまいなあ!」

まさか、『ぱんつくった』じゃないんだし……。

追求五感活用。

……………。

ていうか、こんなのに対応する僕も僕だ。過去の僕に戻ってとつとと逃げよう。

「それではさようなら」

やっぱり暑い時はクールに振舞うに限る。

心頭滅殺すれば火もまた涼し……いや、そんなもん殺したら火葬されるって。

「ちよーつと待ったあ!」

嫌な予感から逃げる為^{フリゲ}に僕は(少なくとも駆け足という言葉では

収まらないぐらいに、足を速めたがそれも虚しく、一瞬の内に僕は捕まった。

速い。

ひったくりも泣き出すわ。

「ぐえっ！」

そして後ろから僕の襟をつかんできた。

「危うく流されるところだった！」

「こんなことで流されんな！」

空気読みすぎだ！

「人のスカートの中を見ておいて謝りもせず、に逃げる人に悪く言われる筋合いはない！」

大声でそんなことを言える程の恥知らずに言われても……というのはちよつと意地の悪い考えだろうか。

僕はどうやら非難されているようなのでそこは冷静に対応する。

「少なくともそれは僕のことじゃないな。僕は常に紳士的なジェントルマンだと言われているんだ。そんな評価をされるなんて心外以外の何物でもない」

ただし嘘で対応。

とんでもない君子の豹変ぶりだ。豹もびつくりだ。

「この人何言ってるのー!？」

その子は驚愕の声を上げた。

ホワイト・ライ、っていう単語もあるらしいけど、やっぱりこれは白々しいとしか言えない嘘だよなあ……。

ホワイトホワイト・ライ。

「とにかく、謝れ！」

「さっき謝ったはずなんだけど？」

「それとは別に、謝れ！」

皮下脂肪並みのしつこさだ（こんな表現を使ったからといって、僕がそれに苦しんでいるという意味ではない）。

少しカチンときたので、ふざけてそれをごまかすことにした。

咳払いをして、

「そうですね。怒らず誠意を込めて謝るのも紳士の務め。ここは潔く貴女に頭を下げましょう。なぜなら僕は紳士的なジェントルマンなのですから」

自分ですら気持ち悪いと評価するこのキザったい台詞（そして声が2オクターブ上がっている）。

これが、やりすぎた。

台詞の途中で石化したような、凍り付いた表情になり、

段々とその表情が崩れだして、

口が何事か聞こえないぐらいのものをもらし始めて、

組んでいた腕は緩み、何かを乞うように手をこすり合わせて、

「う、ううううう……怖いよお……」

僕を思いつきり傷つけるためか、尋常を飛び越えて怯えた。

そして蚊の鳴くような声でつぶやくのだった。

「すみません……もう悪い事しません、あなたの言うことを否定しません、スカートの中を見られたぐらいで私の尊厳は減らしません、たとえ満員電車で痴漢に遭っても訴えませんが……だからそのわけのわからないごどばづがいをやめ、でください……うわーん！」

かなり問題な発言の後、ついに泣き出してしまった。

……ぶっちゃけ僕も泣きたいんだけど。

痛み分けてことなら尚更だ。

だが、ここで僕が貰い泣きしたらかなり異様な光景になること間違いない。どうしようもなくなる。

よし、ここは奥の手だ。

まあ、奥の手と言うほど大層なものでもないけど。

「ごめん。結果的に僕が君を傷つけたのは事実だ。今も含めて、ごめん、だ」

それからしばらく黙って様子を見る。

「……くすん」

よし、落ち着いてきた。ここで……

「ほれ、飴ちゃんだ」

駄菓子屋で売ってそんな飴玉を差し出す。

「……………」

じーつ、と僕の掌、その上に転がっている、袋に入ったそれを見つめている。

……何？

僕ミスったの？

やっぱり？

「あー、やっぱいらなのかな、じゃあ」

「わーい！」

ひったくりバスターという異名がつけられそうなその手がひよいと飴玉を取っていき、それが急にガキっぽく見えた衝撃も相まって、僕はそれを半ば啞然として見ていた。

うきうきした手つきで袋を剥がしていち早く頬張った。

「んー、おいしー」

半分はボケのつもりだった、と同時に半分は本気のもりだったんだけど。

でもまあ、僕にかかればこんなもんだ！

……ゴホン。

「えっと、それじゃあ」

と、縁を切るかの如くさようならしようとしたら、

「それじゃあ私はついて行きましょう桃太郎さん」

「……は？」

えーと、意味は分かりすぎているけど脈絡が意味不明なその台詞はどういうことだ？

「おいしいものをくれる人に悪い人はいない！」

高らかに宣言した。

見苦しい現実から目を逸らさずに言おう、明らかに僕を見て喋っていた。

「そんな君に残念なお知らせだ。僕はその悪い人なんだ」

「悪い人は自分でそんなこと言わないもん！」

いや、『もん』って言われても……。僕で悪人じゃなかったら、世の中ちよつとまずいことになるぞ……？

「悪いってのはそういう『枠』とか『度』を越えるから悪人なんだけど……」

所詮悪なんてのはそんな事で定義できてしまっただけど、そう単純なものでもないだろうな……。

『あんな奴』もいたことだし、もう規格内なんて無いものと考えた方がいいだろう。

「うーん……いや。おいしいものをくれるなら悪い人でも」

明らかに良くなかったが、ここまで言われると僕にこの子を否定する根拠が無くなってくる。

そして、結局、数分後にはすっかり懐かれ、僕の後ろをついてくるようになってしまった。

教訓……人に餌を与えるのはやめましょう、ってか？

すぐ後に知ることになるのだが、この女の子は荒井雲雀あらい ぐんすけという名

前で、僕の二つ下。身軽さを表すようなショートヘアが印象的だった。

飴玉スパッツ（後書き）

ふう、テスト終了。ええ、人間試験ですとも。

という後半の虚言はともかく、まあ書きあがっていないこと。

プロットは出来上がっているけどまだそれだけ、です。

一日一話を目標にこっから仕上げるつもりですので、面白くなかったら一区切り付いてからご指摘下さい。

また明日。

公園ペナルティ（前書き）

「負けた奴は罰ゲームな」と言う人はお笑い芸人に向いているんじゃないだろうか。

少なくとも政治家にはなれないだろうなあ。

そんな事を言っても結局、戯言なんだけど。

公園ペナルティ

夏休みのまた別の日。

まあ、前回から一日たりともズレちゃいないんだけど。

「ねえねえ？ どこに？ 行くの？ ねえ？」

「だから、そんなに目をキラキラさせても僕に行き先のアテはないんだ」

一体何回このやりとりをすればいいんだ。と何回思っただろうか。下手に家に帰る訳にもいかず（こんなやつに住所を突き止められたくない）、僕は更にワンダリングを続けていた。

この状況……本当にどうすればいいんだ……！！？

「僕の年齢で誘拐犯に間違われることはまずないだろうけど……」

「？ いま何か言ったの？」

「いつまでついてくるつもりなのかなー、と言っただけどなあ……」

「うん！ 一生懸命がんばる！」

全然全く会話通じてないし。

……改めて思っけど、何なんだこの人懐っこい子犬（番鳥とは印象が大違いだ）のようなやつは。

それに、さすがにこの見た目（中三か高一）で『親御さんは？』とか聞けないよなあ……。種島じゃないんだから尚更。

公園で未だ駆け回っている子供を見ながらそんなことを思っていると……ん？

……。

えーと、何なんだろうな、アレ。

「きゃー！ やーめーてー！」

普段の雰囲気とは似つかわしくない足の速さで逃げているのは小振りなりユックを背負っている川井窓枠^{かわいまとわく}。両手で大事そうに、そして必死に抱えている風船が相変わらず印象的だった。トレードマー

クと言っていいかもしれない。

「さあさあさあさあさあさあ！ ルールは絶対だぜ！ 早くその風船を割らせろうい！」

普段の雰囲気というものが存在しないが故に普段通りとしか言い様がない変人……いや、変人……間違えた、変人……もとい、変人の不知火筑紫^{しちぬい}。もつとも今は変人より変態よりな感じと言えそうだが何のひねりもなく、怪人のように両手を広げて小学校低学年に襲いかかっていた。

「それだけはやめてー！」

「靴飛ばしに負けた分際で言い逃れ泣き落としなど通用しない！」

それが社会！ それがカンパニー！」

「カンパニーは会社だと思っ来ないでー！」

……おお、逃げ突っ込み。

ていうか、筑紫にとつての社会は靴飛ばしにシビアな社会のことなのか……嫌だよ、そんなソサイエティ。

「ふふふ……あたしはまだ本気を出していないのだ、川井窓枠……！」

アニメ風に表現すれば目尻に涙をためた状態で逃げている窓枠ちゃん（確か呼称はちゃん付けだった気がする）に大人げなく迫る筑紫はさらに言葉で追いつめようとしていた。

朱夏といい番鳥といい、僕も含めた周りにはガキが多すぎる気が……。

嗚呼、打葉、帰ってきてくれ！

……ゴホン。

話を戻す。

筑紫は必殺技のように叫ぶ。

「三倍迦束！」

「しんじようが移動してる！」

僕はカウンターで突っ込んだ。というか突っ込んでしまった。

「おりよ、デトックスだ」

走りながらどうやら僕に気づき、どうやら僕の名前のような単語を言った。

「僕は解毒作用と訳されるような単語じゃない！ 僕の名前は四手統那だ！」

「あ、統那君、助けてー！」

そんなやりとりより何よりも窓枠ちゃんが僕を呼んでいる！

大事なことだけど二度は言わない！

「今すぐにでも！」

自称よい子の味方・四手統那は窓枠ちゃんと筑紫の間に割って入り、両手でバーン、と筑紫の肩を弾き飛ばした。

……フツ、キマったぜ（悪い意味での格好付け）。

筑紫はわつとつと……と歌舞伎っぽく片足を浮かせながら後ろに三回ほど跳ねた。

「うえい！ 何をする口手統那」

「二画減らすな！」

くちでとうな。

「では……何をする口手統那」

「カタカナにするな！」

ろでとうな。

そして、

「ボケ突っ込みならぬ突っ込みボケだと!？」

二つ前の台詞は『ちからたちからなににするな』と書いてある。

「うん、これは僕の癖かもしれない」

「変人だな！」

「お前にだけは言われたくない！」

「恋人だな！」

「……………」

……なんだ、このベタな流れ。らしくないぞ、筑紫。

「うえい、間違えた。愛人だな！」

「だろうと思ったよ！」

いや、愛人は愛人で問題発言だけだ。

というか、それじゃあまるで僕が不倫しているかのような語弊がある。

語弊……。

……やば、疲弊が蘇ってくる気分……。

番鳥シヨックだ。

「アイジンって何？」

カタカナにすると点眼薬みたいだ。

「窓枠ちゃんは知らなくていいことだ！」

僕と筑紫は知ってて悪い。

「さて、^{おつな} 姫は何で我らが罰 ゲームの邪魔をする

のだという論点に戻ろう」

「僕が申し立てたい異議は『T』を抜いて老婆扱いされたことと靴飛ばしごときが闇のゲームと同等になっていること、最後にそんな話題は初めて出てきただろうということの以上三つだ！」

本当はそんなにボケを詰め込むなとも言いたいけどこれぐらいなら僕のキャパに収まっている。

「今日は調子が良いみたいだな、トナー」

「もうそれは僕のおだ名って事でいいけど……まあ何で僕がここにいるのかって言うところにいる」

と僕の後ろの気配を探ったけど、窓枠ちゃん以外に誰もいなかった。

……あれ？

「いや、とーなんかどこで何をしようとおたしは構わないけど」

「なんてことだ！」

「冗談とは言え複雑な気持ちだ。」

それにしても……どこに行ったんだ？

未だに筑紫に怯えている窓枠ちゃんをなだめながら、そんなことを思った。

公園ペナルティ（後書き）

やっぱり不知火さん書きやすいよ。細かいこと考えなくて済むし。

また明日。

探偵ビスケツト（前書き）

あの童謡の中ではビスケツトは割れていないみたいですね。増殖ですよ、増殖。

という話題が出来るぐらいに軽いなあ、この章。

探偵ピケット

夏休みのまた別の日の次の日。

「あつ、一日振りですね」

飽きもせず外を歩いていた僕にそんな台詞で話しかけてくる人がいた。

「ああ、荒井か」

飴ちゃんて釣られた、あの荒井雲雀だ。

「あつ、私のことを安い女だと思いましたがね!？」

確かに安い。

単価十円以下。

「何を言ってるんだ。君はアライだろう。ヤスイじゃないに決まっているじゃないか」

「そうでした!」

おいおい、ポンって手を打ってる場合じゃないから。

読者も『は……?』ってなるぐらい騙されやすいな、おい。

「そういうあなたは随分とモテモテみたいじゃないですか」
そして素早い切り返し。

……一本取られたっ（これこそ読者に伝わっているのだろうか？）

「……何を根拠にそんな妄想が?」

というか、そもそも僕の人間関係について話した記憶は無いんだけど……。

どこかで口を滑らせた、とか?

うーむ、もう少し固くするひつようがあるか。

「公園でみだらに遊んでいたのを見れば嫌でも嫌々分かります」

「みだらとか言うな。それとなぜ嫌を強調する」

「嫌の協調ですよ」

嫌だな、そんな協調……。

むしる嫌の三重苦だ。

「ロリコンの振りをして、本命はあっちの同級生ですか？」

「ロリコンの振りとか言うな！」

僕は歴としたロリコンだ！ あ、ライクじゃなくてラブの方だから。そこは誤解しないでほしい。

「ロリコンは否定しないのですか」

「お前は挨拶したらいきなりずけと畳みかけるんだなあ！」

上手くやれば将来出世しやすいかもな！ などというエールを送りそうになったがこれはやめておいた。

「畳なんてかけてどうしろって言うんですか、かけるのは布団に決まってるじゃないですか」

明らかに日本語の不思議に走り出した。

「僕はカップ麺にお湯をかけるほうが先に思い浮かんだけどな」

「ここで命をかけると言えば格好良かったのですが」

「抜かった！」

僕は昨日会ったばかりの君のために命を懸ける！ ……どこの熱血だよ。

上条かよ。

もつといくと、博愛主義者になりかねない。

「それで、本命はあのロリコンで百合な女の子ですか……ハードル高いですね」

「僕の身の回りにそんな奴はいない！」

筑紫のあの行動を曲解すればそうなるのも無理無いけど！

「しかしそんな四手さんの為に私は身を粉にして協力しましょう。

飴玉の恩です」

「いや、いいよ。飴玉ぐらいで……」

恩義を感じるのは勝手だけど、かえって親切の押し売りみたいになってる。

「だったら私にもっと食べ物を下さいな」

「お前の協力は決定なのか……？」

「決定的に協力的ということですよ」

「……『的』を繰り返して使ってそのうちの的を射たとか言わせるつもりじゃないよな？」

「ばれた!？」

「単純だな!」

まさか当たるとは思わなかった。

当たったとしても、むしろ『あなた何言ってるんですか？ 馬鹿にしてるんですか？ むしろ馬鹿じゃないんですか？』ぐらいの軽いカウンターパンチが来るかと思っただけ。

「さあさあ、食べ物を下さいなったら下さいな」

ねだりながら僕に向かって年頃らしく首を傾げる。

まあ、それになびいた訳じゃないけど、手持ちを披露することに決めた。

「今日はポリウームがあるぞ」

「わくわく……」

僕はその言葉を教育テレビの図工番組でしか聞いたことが無い。

そんなレアな単語を聞かされたからには、期待に応えねば。

「なんと今日の献立はあつて嬉しい無くて困らない乾パンだ」

「わーいこのしっかりした歯ごたえと氷砂糖の染み出る食感が

つてどうしてそんなもの持ってるんですか!？」

いつ開けたのかも分からないぐらいの一瞬で食べ始めてからよくそんな台詞が出てくると思う。

「夏場の空気で保存食と言われる乾パンの氷砂糖が融けるかどうか実験してただけ……まさか正午を迎える前に使ってしまうという結果になるとは思わなかった」

実験は常に誤差との戦いだと言われれば痛感させられる出来事だった。

「どうしてそんな考えになるんですか……」

と言いつつも荒井はしばらくの間ぱくぱくひょいぱくもぐもぐもぐ……と食べ続けていた。

高校生にもなって、今の消極的な教育を受けているひな鳥のよう

な学生には酷な自由研究をやっていたとは言つまい。

荒井は『うーん、飲み物、無いんだけどなあ……』という僕の心配をよそにするかのように何事も無く無事に乾パンを完食し、一息ついてから聞いてきた。

「ところで四手さんは暇人なんですか？」

「うーん、夏期休暇があるって事なら、暇人かな……」

休暇中にも関わらずわざわざ日曜と決められた予定もあるけど、それはこの子とは関係なさそうなので黙っておく。

「そうですね。まあ彼女とフラグと家庭の事情のない男子高校生なんて暇人も同然でしたね」

「それは男性差別か!？」

そっから続けて『あるいは僕を貶めたくてそんな事を言っているのか?』って聞くと自爆しそうな気がするからやめて置いた。

今週の僕はスーパー……マーケットまでの半径で行動範囲がほぼ覆いつくせるのだ。

つまり暇人。

……ゴホン。

にしても、深入りした突っ込みは良くないよねえ……なんて。

うーん、今日の僕は控えめだなあ。

本当、手が空いている。

「失言でした」荒井はかしこまった。「それはそうと、実は私ここに転校してきたんですよ」

「天功……」

「プリンプリンしたセスナじゃないです」

「そんな飛行機乗りたくねえ!」

よし、吞まれなかった!

というか、プリンセスってそんな略称じゃないし。

「ちなみにその解釈で行くと私はイリユージョンでこっちに来たことになっちゃいます」

「いや……案外本気でそう思ってた」

「私を何だと思っているんですか！」
プチ怒られた。

ちなみに僕は荒井のことをどっかでマジック集団『アライ・アライアンス』とかいうセンスの欠片もないネーミングのリーダーでもやってる人だと思っていた。もちろん冗談だ。

「つまり、転校生って言ったら……」

「言ったら……」

「ズバリ、恋愛ラブストーリーの幕開けですよ！」

「……………」

……ベタだ。

思いの外……というか思いの中に収まってるぐらい、普通。

「……何ですか？ その明後日の方向を見るようにして私を見ている目は」

どうやら僕の視線は荒井を明後日の方向に据えているらしい。

言い得て妙、か……？

……仕方ない、便乗しよう。

「確かに、僕は今二酸化炭素を見ることによって地球温暖化を目で感じていたんだ。だから明後日の視界に君がいたのも無理はない。むしろ道理でと納得するところだ」

「また四手さんが嘘つきになったー!？」

ホワイトホワイトライアー。

僕の言動がどんどん白濁していく。

ていうか我ながら発言の意味が分からん。

「という感じにスルーしようかと思っただけ……さっきの台詞からすると、荒井雲雀ルートでも作れと言っているのか？」

まあ、どうせ冗談なんだろうけど。

「福のある余りものですよ。衣食住を提供してくれるのでしたら、それ以外の事はお任せ下さい」

衣食住を満たせないやつに何ができるんだよ。

「残念ながら、居候キャラはもう足りてるから。別の方面を当たっ

てくれ」

まるつきり片那とスタンス被ってるし。

「では幼馴染みキヤラはどうですか」

「僕の記憶ではそのカテゴリは朱夏だけだ！」

「朱夏……？ 向かいにあった、獅子島という表札の人ですか？」

「ああ、そうだ って」

「……いや、ちょっと待て。」

「何でおまえが僕のうちのことを知っているんだ？」

「いえ、私これでも親が個人の探偵をやっています、周囲には人

一倍気を配るんですよ」

探偵……ねえ。

なんだかアンダーグラウンドな話になってきたか？

「ふーん……それで？」

「実は昨日私はこの辺一帯を網羅するべく歩いていて、その中に四手と書かれた表札があったのを思い出したんです」

思い出した、と言った。

つまりは、覚えている。

こいつが嘘を言っていないければ、それはさすが探偵、という文脈だろう。

僕と会ってから家を見つけたのならともかく、『四手』を見つけてから僕に会ってそれを想起するのは、まあそこらにない名字だといふのを差し引いても、普通に町を歩いている程度の感覚では難しいだろう。

「……やっぱり普通の人じゃないのか、僕の周りは。」

「どうです。見直しましたか？」

「さよならの挨拶もせずにとっかにいつちまうのを失礼と言わないなら上出来なんだろうけどな」

「あつ、それは急いでうちへ帰れという電話が入りまして、あのと四手さん立て込んでいるようでしたので失礼を承知で帰ってしまいました」

「はあ……まあ別に困らないから良いけど」

利害関係があるわけでもないし、深く追及しても無意味だろう。それこそ昨日知り合っただけの関係だ。今以上の展開をどう望むって言うんだ。

「表札と言えば……四手に獅子島という組み合わせはどうなんですようね」

思いついたかのようにして、荒井はそんな事を言った。組み合わせ。

順列。

パズルのピース。

五十音。

「……名字の組み合わせって問題になるのか？」

「いえ、そういう訳ではありません。むしろ名字は素晴らしい側面の方が大きいです。効率よく人を見ることができます」

「ふーん？」

探偵ともなると、そういう所からも人の来歴を推測できるのだろうか……。

この名字はこの地方に多い、とか。

補足的なものだろうけど。

「その点で見ると　まあ、これは私の個人的な見解なので気にする必要はありませんが　最悪ですね」

「……どういうことだ？」

いくら年下の発言とはいえ、僕はそこまで寛容にはなれない。

その雰囲気を感じたのか、荒井は慌てて付け加えた。

「あっ、二人の相性が、という意味ではなくてですね……この二つをまとめて考えた場合、周りには具合が悪い、といいますが」

……つまり、周りに悪影響を及ぼす、って？

デビルフランケンと巨大化みたいなもんか？（古い、圧倒的に古いぞ僕）

「へえ……で、僕はどうすればいいって？」

「結構冷静ですね」

「まあ、剣道を修めていた者として『切れる』ところは選べないと死ぬっていう覚悟は持っていないとまずいだらうね」

ホントの所は、剣道ってというか刀道を地で行ってるんだけど、胆力に関しては結構鍛えられたと言っていると思う。

「なるほど。それで、どうすればという話ですが……そのままいいと思います。別に二人の問題は無いです」

「だったら最悪ってのはどういうことだ？」

「うーん、ちよつとさつきは発音が悪かったかもしれませぬ。確かこういう時は……そうでした、最厄さいやくですね」

「災厄？ 災難に厄日って書く、あれか？」

「いえ、『もつとも』『やっかい』で最厄です」

「……………」

聞き慣れない、響きだった。

「最強 最凶も最恐も最狂も最兇も同じですが とは一線を描いています。ある意味では自分でその存在を隠しています。とはいえ『最強』とは次元の違うところでの話なので、だからって気にすることは無いんですけど……ううん」

難しい顔で言った後、瞑目して首を振った。

再び目を開いて、

「すみませぬ。いわゆる職業柄というのでしょうか、ちよつと気にすぎたかもしれませぬ」

「いや、名字についての考え方があるという点では参考になったから、礼を言うのかこつちかもしれぬい」

それから荒井は「では私はこの辺の地理をもう少し詳しく把握したいので、これで失礼します」と言って去っていった。

探偵ビスケツト（後書き）

つーか乾パンなんてどこに持ってるんだよお前。
つてな感じの話でした。

また明日。

孤刀イナクション(前書き)

いやー、ぶっちゃけラスボスあいつだし。

孤刀イナクシヨ

夏休みのまた別の日の次の日。

というか、同日。

「……ああ、また来たのかい。四手統那君。そろそろだとは思っていたさ」

正座して、いつかと同じように鼻間はなまはそこで待っていた。待っていた。

僕が来るのを今か今かと、くたびれたかのように。

「そもそも読者に忘れられちゃったんじゃないかと、不審がったりしながら腐心していたさ」

まあ、今更『メタな発言』などとベタなことは言うまい。

土間の一番奥まで歩いて、僕は言う。

「いつそ忘れ去られている方が読み返してくれていいと思うんですけどね」

「確かにそう考えれば悪くはない話さね。良くはないけれど、という条件付きではあるもの」

……いや、なんでその話を続けてしまったんだよ、僕。

いつも地の文での仕切り直しに使っている咳払いをしつつ、僕は再び言う。

「そう言えば今のところ登場人物の中では最年長っぽい話が出てるんですけど……」

「……………」

……。

今のは無い！

何やってんだよ僕！ 大人の女性に年齢話は禁物だつてのに！
「いやあの、すみません！ なんか昨日地球外から電磁波攻撃を受けているっていうエセ科学のオカルト番組を見てから調子がおかしいみたいで……」

「いや、最年長は多分別にいるさね」

「……あれ？ 確か一回やってた人物紹介では」

「そつちじゃないさ……ま、そんなことはともかくとしてさ、それ」
言うて。

僕の腰の高さのあたりを指した。

「そんなばらばらろくそを見せられちゃあこつちとしては推測するに及ばない憶測でも分かっちゃまうさ」

何が、と僕が問うまでもなく、

「？ 悪性主要？^{ブエクシブイル}と呼ばれるモノの仕業だとうことぐらいは、さ」と、告げた。

「……ん？ 違ったかい？ だとしたら随分とこつぱずかしい間違いをしたもんさね」

「いや……『そいつ』は名乗らなかったから、正確なところは分からない」

その点で言えば、『あいつ』は物語を良く 悪く心得ているのかもしれない。

名乗らないということは、登場していないこと。

登場しないことで、存在感を増す。

番鳥が台無しにしたとはいえ、『そいつ』の行った事実は毛ほども消えない。

質量保存の法則のような当たり前。常識。

強いて言うなら、理不尽の法則のように感じた。

番鳥が雰囲気や流れを台無しにしたというのなら、『あいつ』は

変な言い方をすれば 何もしなかった。

なにもしなかったわけではないのに、むしろやることなすことすべてがすさまじくさまたげようのないことだったのに、なんにもならなかった。

結局、成果らしい成果など、どこにも実っていない。

番鳥が仲間（敵ではない、という意味でだけ）になったことが成果だと言えそうな気もしなくもないが、別にあのタイミングでな

くとも『番鳥は僕達となんらかの関わりを持つようになったはずだ、という逆説も僕の頭にはある。』

「ふん……そうなると間違いないく『奴』なんだろうさね」

そんなことで分かるものなんだろうか。

「詰まらなさそう、という形容ばかり当てはまっただろう？」

「……確かに」

僕の主観では、そうと表現していた　いや、そう表現せざるを得なかった、というべきか。

「まあ、轟骨董の保険が適用される範囲内さ。そうと決まれば善は急げ、悪は滅びろ、さ。とつとと上がりなさ」

僕はまた、奥の間に誘こゝろわれた。

そこには、依然として変わりなく、刀が二本、飾られていた。

「……………」

一本　今見ればそれはとてもしなやかに光り輝いているように見える　は、既に呑んでしまっているのもうそれは形骸以外の何物でもないのだけど、それでもそこに何かを期待している自分に気づかずにはられない。

何かって何だよ。

「そんなに強がらなくてもいいさ。別にここで悔やんでもなんにも惨めじゃないさ」

「……お気遣いありがとうございます。でも大丈夫です。ツンデレですから」

結局、轟さんの言うように、僕は強がっていた。

そんな未熟な精神でこれから立って歩こうとしているんだから、なんて惨めなのかと思う。

「最近の若い子ってのは分からないねえ。なんだい？　その『つんでれ』ってのは」

「普通じゃない攻略対象のことですよ」

人前でイチャイチャしたくないという考え方で言えば男子の方がツンデレは多い気がする。

まあ、個人的な意見はさておき。

正座して、もう一つの刀を手に取る。

……ああ、サムライっばい。

「というか、かなり様になってると私でも評価するさね」

「誰かに教わった、というわけでもないんですけど」

「……やっぱり、おかしいねえ」

「……え？」

「逆だと思っていたのさ」

「はあ……」

まあ、伏線めいたことは考えててもしょうがない。

「それでは、抜刀させて貰いましょうか、ねっ」

しゃっ、と腰に据えた刀を抜いた。

錆び付きも無く、刃渡りも十分でない刃が露わになる。

「さすがにこつちの刃は私でも見たことがあるさ」

鞘から判断する限りでは元の長さの三分の一ぐらいだろうか、そのぐらいのところで、折られていた。

正確には折られたのかどうか分からないけど、少なくとも漫画でよくあるような別の刀に真っ二つに切られたとかいう鋭い断面ではなく、ぱきりと折られたように見えるものだった。

「そうそう、こいつの銘は分かっているのさ。というわけで自分で頑張ってくれ、さ」

「まあ、そのぐらいは自分でやりますよ」

再び、僕は比喩で刀を呑んだ。

と、そこまでは良かったが。

にべもなく、拒絶された。

孤刀イナクション（後書き）

逆に最年少の方が誰だかわからないというのはとりあえず置いてお
きましょっ！

また明日。

罹患サマーロード(前書き)

……完つ全に個人的事情です。

明日へは生きてゐるはずですよなえ……。

罹患サマーコード

夏休みのまた別の日の次の日。

帰り道。

電話中。

「あーあー、聞こえるかー。こちら四手ー。聞こえるかー打葉^{うちは}ー」

「聞こえるからそのまま続けていいぞ」

「こちらは今とても大変に平凡な状況だー。そちらはどうだー」

「こつちも、まあそうだな。いつも通りの日常的な光景が繰り返されているところだ」

「そうかそうかー。息災で何よりだー」

「お互いにな。さて本題は何だ」

「……………」

「何だ、無いのか。まあメル友よりは生に近い形で連絡を取っていることに文句は無いけどな。長時間話すと電話代が馬鹿にならない点を除けばな」

「相変わらず察しがいいですなあ。打葉先生は」

「お前も最初から一人も殺していないあたり凄いよな」

「お見落とし!?!」

「その言い間違いは既に出ているな」

「オムナイトの影響が強すぎるんですがどうすればいいですか打葉先生助けてくれ」

「今のポケモンカードを知ることだな。補足的に言っておくが、影響が強いならそんなミスはしないはずなんだがな」

「買うお金が……無い」

「俺に至ってはそつちの通貨すら偽造するしか手だてがないけどな」
「通報しました」

「お前はチャット機能で110番でもしてるのか。それとも俺のこ^ことを警察と勘違いしているのか。それともこの物語を削除させるつ^{サイト}

もりか。それとも目の前で銀行強盗でも発生したのを連絡したのか。それとも――

「打葉先生今日はいい天気ですね！」

「という逃げの一手を打つ未来を想定していたのか。それとも同じでない空の下にいる俺達を浮き彫りにする目的があつて天気の話題を持ちかけたのか。それともお前は実は異世界へと転移する術を持っていて俺をからかっているのか。それともそんなことにも気づかずに天気の話題を持ちかけたことを若干後悔しているのか。それとも俺がここまでねちっこいとは想定せずに適当にお茶を濁そうなどと考えた自分に嫌気が差しているのか。それとも――

「ま、参りました……」

「しかしこんな無意味な多弁で得意になれるわけもないしな。一方通行のお喋りが得意なオタクという人種は一体全体、他人と関わりたくないのかどうか分からない。それとも自己顕示をしたいだけなのに周りには凄い奴らばかりでそれすらさせてもらえないという現実に幻滅して抜け殻の如く生きたいのか。ネットで面と向かわず話したいのか。こんな意見にとにかく理屈をこねて反論したいのか。まあどうせ無視されるだろうが。さらに既に死にきつた名詞にしがみついているだけでも余計にみつともないな。はつきり言えば、ゲーム業界なんてのは既に閉じた回轉で、漫画もアニメもこれ以上の発展は無い。グッズなんてのは作ること自体が趣味だ。そんな業界を支え続けているオタクが死に体ではなく生き物だと誰が言えようか。まあ俺が本当に馬鹿にしているのはそんな世界にしがみついて離れない業者なんだけどな」

「……もしもーし、僕の話聞いてる？」

「なんだ、喋らないからってつきり俺がこの上なく非生産的な長口上を続けるべきだと思っていたんだが、という皮肉を言うまでもなくそれは分かっているよな」

「打葉先生が刺々しくなっている……！」

「さて、お互いに情報交換と行こうか。エシユロンに聞かれても問

題無い範囲で」

「さすがに下らなさすぎて聞いてないと思うけどなあ……まあいいや。僕から発表すると、まず打葉、おまえの女を盗ってやったぜ！」
「ああ、確か優子先輩か」

「下の名前で呼ぶような仲だと!？」

「というか、あれはお前の方が好みなんじゃないかと思ってたけどな。まさか予想通りに事が運ぶとは思わなかった。ああびっくりしてしまった」

「だったらどうしてその情報を僕に教えてくれないんだ!？」

「だってお前あの時あいつのことが嫌い　じゃないな、苦手だったんだろ？」

「そう言われると、そうでしたな!」

「忘れるぐらいの衝撃だったんだな」

「だってどうして苦手なのか僕でも詳しく分かってないんだし」

「まあそれなら分かったのは、キーワードだ」

「ほう。俺もお前に教えられるのはキーワードとその周辺事項だけだ」

「こっちのキーワード、というか情報は、沖陽菜野と、ヴェクシギール？悪性主要？の二つだけだ」

「おー成程成程。その単語は大分助けになる。面白いことになりそうだ。俺の方はだな、『ヴェスペル』と『ルークス』だ」

「……ごめん。やっぱり打葉みたいに察し良くないからそれだけじゃ分かんないわ」

「互いに戦争し合って、俺はそのヴェスペルにいる」

「テイルズをやったおまえとしては結構いい感じのポジションにいるんじゃないか？」

「全然関係ないんだけどな。まあそれはそれだ。問題はその戦争だ、ということが分かった」

「……………」

「『そっち』が狙われているのは、はっきり言えば、戦争の影響だ。」

少なくとも俺の調査と推測の結果はそう出ている」

「じゃあ、今『ここ』で起こっているのは……」

「ああ、間違いない」

「退つ引きどころか、攻め入ることすらままならない」

「戦争だ」

「戦争……」

「言い方を変えれば、血肉と流血と逆流と悪逆と憎悪と暴憎と暴力と戮力と戮辱と陵辱と陵虐と残虐と残骸と死骸と憤死と憤怒と怨霊と亡霊と滅亡と壊滅と破壊とが糾あそばえる世界だ」

「……………」

「言わなくても分かっていると思うが、『人類とは意識的な動機で同族を殺せる生き物』だ。特に戦争はそれを最も示しているだろう。そして問題は、それを変えるには、全員が等しく分け隔て無く人のために行動できないといけないという事に殆どが気づいていない事だ」

罹患サマーノールド（後書き）

ちなみにこのあと通話料がうけたに達したことで怒られてしまったりしています。

長電話ってコワイね！

また明日（生きてたら……ね？）。

裂火サイクロシザーズ（前書き）

もうお気づきかと思いますが、この章は特にサブタイトルをふざけています。

裂火サイクロシザーズ

夏休みのまた別の日の次の日。

……忙しいな、この日。

「う　らあっ！」

「はっ！」

あらかじめ言うておくけど、ケンカしているわけではない。忘れられそうな設定だけど、僕は朱夏と特訓しているのだ。

最近は、勝率も段々上がってきていて、相対的には強くなっていくことを実感できる。

かといって朱夏が弱いなんて事はまるでなくて、日増しに苛烈な攻撃が襲ってくるようになった（人型の炎の魔神が三体、とか）。

対して僕はと言うと、マイナーチェンジ。

速くなり、小細工が利くぐらいに器用になった。

器用とは、僕の使える武器の扱いに関してである。

四季崎記紀じゃないけれど、それっぽく言うならば、対刀・鋏ついでうとか剃刀・銜ていとう、削刀・鉛さくとうとかだろう（全くもって独自性がない）。

例えば鋏だけど、これが結構面白いことになった。

あくまで人として普通に、常識的に使おうとしていたからいけなかったのだ。

凶器が鋏である事件を想像して、その想像に囚われていた。

普通は刃物で殺傷力を出すためには刺突が一番効くんだけど（よい子は真似しないでネの知識）、僕にはそれが合わなかった。

僕の性別……もとい、性質を考えれば、それが全力ではないのが明らかだった。

専売特許は切る事だけだ。

というわけで、それを最大限発揮しようと思いついたのが、回転。

いや、そこそこはいけるのかもしいないけど、どのみち中途半端だ。

「じゃあ統那は何か決め台詞があるのかな？」

「やめときな、彼女に近づくと火傷するぜ？」

「キザったく決めた。」

「……………」

黙っちゃった。

うーむ。やっぱり朱夏とぶざけ合うのは限度があるのかな。

「ダメかあ。そうだなあ…………あれでいいや。うん決定。はいこの話題終了」

「どれ！？」

「こういうのは本番で言っただけだ。ほら気にせず特訓再開」
納得行かない、という態度の朱夏をなんとかスルーし、僕は戦闘に頭を切り替える。

実はまだ決まっていなかったけど、ごまかしたのだった。

これが日本人…………だと思っなよ！

汚い大人の階段を上っているような気がしないでもない。

「？閃光離火？」

どうやら僕の思考の虚を突くのが上手い朱夏サンはさつきと同じく僕の目の前で、何かを発光させた。

それだけでなく、真っ白な世界の中で炎が顔に襲いかかってきた。

叫んだらいけないと分かっているながら、僕は口を開いてしまい、そこに熱せられた空気が通る。

「油断しても、燃やす」

「怖い！」

今の状態の僕は喋るところじゃないのに！

僕は仰向けにのたうち回りながらなんとか右手を上にかざして、
「放水」した。

逆に言えば、放水ぐらいしか出来なかった。

ばらばらに崩れ去った、今の状態では。

とてもまともな機能は果たせない。

全然、研ぎ澄まされない。

そのまま軽くバケツ五杯は流しただろうか、その辺で中止して、
ようやく、息を吸う。

「……………死ぬ！」

「死ねばいいのに」

「ぐっ……………生きる！」

「じゃあ生きれば？」

……………あれ？　なんかヒドくない？

「そう思うなら何か反撃してみれば？」

ほらほら、と手をひらひらさせてみせる朱夏。

……………。

なんだろう、こっ、血が煮え滾る^{たぎ}感覚は。

これが怒りっていうものなんだろうか。

諸事情により（主人公がヒロインを傷つけるシーンである、など）
カットさせていただきます。

「な……………何？　今の」

「僕も、分からない……………」

結果的に傷跡は残らないからいいけど、今あったことについて、
二人とも理解できていなかった。

「統那が、やったんだよね？」

「そのはず、だけど……………」

「でも、今のは」

「あり得ない、だろ」

燃え上がった。

それが朱夏の仕業なら、理解できなくはない。

だけど、さっきのは、どこから見ても、僕の引き起こした現象だった。

裂火サイクロシザーズ（後書き）

下手をすると人の命に関わるので、刃物の扱いは『常識』の範囲に収めて下さい。

まさか言葉・意思が通じない人はおられないと信じていますので、注意喚起はこれぐらいにしておきます。

さあ、次の戦いで久しぶりに勝つことは出来るのか！？

また明日！（無意味なハイテンション）

逢引スタート（前書き）

うーん、タイトル通りなのだろうか？
やっぱり違ふ気がする。

逢引スタート

で、ようやく訪れた　とはいえ待ちに待ってた、というわけではないんだけど　当日。

何の日かって？

お客さん、カマトトぶっちゃあ、いけませんねえ。
めっちゃ気まずい日ですよ。

そのためにお互い話題を避けてきたつてのに、家を出てすぐの道路で遭遇してる辺りがもう、気まずい。

「……………」

「……………」

なんだ、二人ともこの日を待ちに待ってたのかー、みたいなの。

そんな1パーセントも無いような可能性を考えさせてはいけないよなあ…………。

朱夏は女子高生らしい軽やかな服装で、僕は長ズボンと半袖の上にベストを羽織っている。

ちなみに夏場でも長ズボンをはいている男子はほぼ脛毛が濃いハズだ。僕が言うんだから間違いない。

「……………」

「……………」　おはよう、いい天気」

「そう、お天道様に挨拶したの。いいなあお天道様。私もお天道様になろうかな」

「いやいやいやいや！　ごめん！　あまりの雰囲気と言葉を全て言い切れなかったんだって！　これはもう僕の一生の不覚と言っているぐらいだね！　うん！」

初手で明らかに遅れた。

…………ん？　これじゃあ僕、彼女に振り回されるダメダメ彼氏みたいじゃないか？

「改めて…………おはよう、朱夏」

「うん」

「そ、それだけか……。」

「まあ、気持ちが分からなくてもそうする道理は分かるけど。」

「なんか、恐妻家の片鱗が齡一七にして見え隠れしてるんじゃないか？」

「大丈夫だろうか、僕。いや、大丈夫じゃないよな……。」

「……おお、場面が飛んだ。」

「特に異変が起こったわけでもないからそれでも支障無いけど。」

「えっと、そんな訳で僕達は地元最寄りの駅から、少し遠出をしてみようかという計画のもと、壁の路線図を見ていた。」

「二人で黒町くろまちに行きたいって言ったから黒町でいいんじゃないの
かよ」

「そーだそーだ」

「……おかしいな。さっきまでこんなキャラじゃなかったはずなんだけど。」

「いえ、全然ダメダメです。むしろ全然メメメメです」

「メメメメなんて名詞知らねえよ」

「……おかしいな。何でこいつこんなところにいるんだろう。」

「では全然ダダダ」

「最初のバランスはどうした」

「然全メダダダ全ダダダメ然全メ然メメメ」

「バグかと思うわコラ！」

「早口で読むとどこことなく太鼓の達人っぽく聞こえた。」

「言うまでもなくY・T・氏である。」

「まあ、発起人だから居てもおかしくないんだけど。」

「話が逸れました」

「確信犯だろ、てめえ」

「やはり御把おはですよ。間抜けな響きがお二人にぴったり」

「死んでしまえ」

「常談ですよ。あつちに最近新しいデパート……だっけ？　が出来たんです。カッパルならばそんな所でいちゃつくのが冗識！」

「突っ込む気力が失せる意見だな……」

正しくは常識。いわずもがな。

ちなみに冗識という字をそれぞれ解釈すると『ムダ知識』になる。

……どうせ紛らわしいから流行んないだろうけど。

「そして観察人として、私わたしツヴァイ鳥優子が憑たいていきますの」

「上手く自分の名前をドイツ語に当てるな。それと変換ミスをやめろ」

あえてお嬢様口調には触れない。

どうせ後先考えていない設定だ。

「ではドライ鳥でどうでしょうか」

「数を増やすな」

「最終進化形は千鳥です」

「いつから漢数字に戻った」

「はい？　変なこと言いますね。日本人の名前にカタカナが入るわけないじゃないですか。あれですか？　純日本人の息子に『ジョン』って名付ける親ですか？」

「ツヴァイ鳥がそんなことを言うとは思わなかった」

「それよりいいんですか？　彼女を放っておいて」

見れば、なにやらジリジリと、焦れ焦れと、焦げ付くような（言うまでもなく焦点は僕だ）視線をひたすら僕にぶつけ続けている朱夏あまが甘メートルぐらい離れていた。

……いやいや、一画違うだけけど『甘い』なんかとは懸け離れてるし！

目からレーザー……？

「ひゅーひゅー。熱視線向けられていますよー統那君」

こんな態度を見ていると僕はこいつが死神のような振る舞いを見

せることを忘れそうになる。

危ない危ない。

それから朱夏を呼び戻して、番鳥を含む僕ら三人は電車に乗り込んで御把市へと向かっていったのだった。

逢引スタート（後書き）

零れ話一丁。

一応、『く市』の名付けに由来はあります。意味は無いですが。

そして、ストックが底を突きそう。でも頑張る。だって夏休み。

また明日。

木の实オブレイションズ（前書き）

久々に真面目に考えた気がするけどひらがな使っちゃってる……まあいいや。

語感がよければ全てよし！

木の実オブレイションズ

さて、そんなこんなで僕達は電車に揺られて十数分、目的の場所に到着するに至った。

手始めにゲーセンで遊ぶ、ということになり、手近な所にあったエアホッケーでまず勝負という運びに。

「さあ来い！ 我が二刀流、見せてくれるわっ」

「おまえオンブズマンとか言ってなかったか……？」

「そのような些事はとつくに忘れました」

「あっそ……」

「ちえいやあー！」

テンションが上がっているらしい番鳥は僕と朱夏の二人を相手取り、自分は両手に一つずつマレット（いや、マレットなんて単語、後から知ったんだけど）を持って戦うという選択を取り、奇声を上げてサーブを放つというある意味定番をやってくれた。

風圧で宙に数ミリぐらい浮いているパックが丁度僕の正面に向かって来る。

それを弾こうと少し前に力を向けると、

「うりゃっ」

朱夏に邪魔された。

……………。

いや、味方だし、結局向こうへ返したのだから邪魔という言い方はないのかもしれないけど、あからさまに僕の出番が潰されたのは覆しようのない事実だ。

その上返球は番鳥の二刀流にいとも容易くあしらわれ、見事にこちらのゴールに吸い込まれた。

「うえへへへへへー」

かなり不気味な笑い声で得点を喜んでいるが、果たして頭は浮世に留まっているのだろうか。

「油断した……！」

僕はおまえに油断したよ。

こちらに入れられたので、今度はこちらのサーブ。

「こおおおお……！」

「なんなの？ そのヴェイダー郷みたいな呼吸音」

朱夏が文句を付けてくるがこちらは無の境地だ。そんな雑音は脊髄反射でカットされた（聴覚って脊髄通ったっけ？）。

無言で一閃。

「うおうっ」

抜刀をイメージしながらのバックハンドは思いの外鋭く決まり、あと少しで入りそうな所で番鳥に阻まれはしたものの、勢い余って空中に放り出されるほどの威力を持っていた。

それは番鳥の横をくるくると飛び抜け、未だ放物線の落ち目が見えないところで、

「あだあっ!？」

人にぶつかった。

本当だったら平均的な背の高さでは当たらない高さの所にそいつの顔があったもんだから、何とも不幸な事故だった。

ぶつかった額をさすりもしないそいつの体つきはかなりケンカ向きで、肩を怒らせれば相当な効果が出そうだった。ただ、何となく中学生だろうというのは分かる、幼さの残った面立ちだった。

「何しやがる！」

最初から喧嘩腰なのでどうやらこれは相当な手練てだれだというのがよく分かる。少なくとも気質は。

「ゴメン。わざとじゃないんだ」

「わざとだったらぶっ殺してんぞ、おい」

穏やかじゃないなあ。

簡単にキレても不幸しか飛び込んでこないのに。

よしよし、ここは僕が大人になろうじゃないか。

「じゃあ、お詫びに何かその辺の自販機のドリンク一本奢るよ」

別にそのぐらいで痛む懐じゃない。

「まあーそんなぐらいで勘弁するか……ん？」

今気が付いたのか、駆け寄っていた僕の後ろに見える番鳥と朱夏を見ていた。

まさか一目惚れとかいうありがちな展開にはならないだろうけど、そいつは三秒ぐらい呆然と二人を眺め、そして僕の方へ視線を戻した。

その目は、確固たる敵意のこもったそれだった。

「てめえ！ 死ね！」

いきなり殴りかかってきた。

「何だよ！？」

受けるわけにもいかないので僕は距離を取って避ける。

「モテる奴は死ね！」

「僻みかよ！ ていうか誤解してるし！」

「男の風上に置けない奴だ！」

「妬み嫉みも同じぐらい置けないけどな！ おまえ何なんだよ！？」

「ハツハア、さっきまでの丁寧な態度はどこ行ったあ！？ 年上か年下かわかんねえツラしてややこしいんだよ！ それとも実は年上を装ってたつてか ぶへえっ！？」

なんだか挑発されてるっぽかったので一発殴ってみた。

血を出しながら吹き飛ばふなんて野暮な描写は無く、単純に彼が顔から弾き返されて尻餅を突いただけだ。

ということとR - 15じゃない、ハズ！

……ゴホン。

「な、なかなかいいモン持ってんじゃねえか……いいぜ、俺もこっからは本気で」

立ち上がってファイティングポーズを取ろうとしたその時。

「何やってるの、莫迦」

パシン、と後頭部を手の甲で叩かれ、そいつは振り向いた。そこには普通の女の子がいた。

取り立てて特徴のない容姿、どうやら同年代の知り合いらしいそのいつのケンカの仲裁に入る性格、ぱつと見ても普通で、どこかにいそうな印象を持たせる女子だった。

「うるせえ櫛しづみ、邪魔すんな！　つーか何でここにいんだよ！？」

「だからアンタは莫迦だつて言ってるのよ、榊さかき。何が自分探しの旅よ。最近出来たゲーセンで喧嘩することが自分探しだとも思ってるの？　何様のつもり？　お客様のつもり？」

パシパシパシ、と連続で自分より三角定規二つ分高い頭を叩き続けていた少女はやがてこちらを向いた。

「済みません。どうも弟が迷惑かけました。この莫迦には私からきつく言つて置きますので、これで勘弁して下さい」

言つて、ぺこりと頭を下げた。

後ろで「お前のが下だろ！」とか言っているのが気にならないぐらい礼儀正しかった。

「いやいや、こつちも全く悪くなかったとは言えないんで、さつきも言つた手前、その額に物をぶつけた代わりにお茶か何か払わせて貰えますか？」

「そうですね。ではご厚意に甘えて有り難く……あれ？　多くないですか？」

「いえ、あなたの分もですよ。こうして迷惑かけてしまったので」

「そんな、気を使わなくても良いのに……じゃあこれで気分でも落ち着かせて貰いますね。有り難う御座います。ほら、榊も謝るの」

「ちつ、わーつたよ。……ドーマスイマセンデシタ」

「済みません。意地は悪くないんですけど　底意地も悪くないんですよ？　ただ礼儀がなくなって……」

「いえいえ、気にしてませんよ」

「それでは、さようなら」

「はい、さようなら」

……という、日本人特有の回りくどい（その分思いやりを表現しているのだが）やりとりで気持ちよく始末をつけられたところで後

るを振り向くと。

「な、なぜに朱夏サンは金剛力士もビックリのオーラを放って構えておられるので……?」

しかもにこやか。

ここにここに。」

うん、スマイルは大事だよね!

「いやー、統那があんな風に気遣い出来る人だとは今の今まで知らなかったな、私」

「私も初耳ですよー。あつ、言うなら初目ですね。それとも初見?」

「……………」

「ああいう風に奢られたら悪い気はしないだろうなあ」

「そうですねえ。あの時のジェントルマンなお方は何処いすこに? 少なくともここには居なさそうですね」

……………どうやら遠回しに僕の奢りを期待しているらしい。

と言うわけで、少し早めの昼食を取ることになった。

木の実オブレイションズ（後書き）

？。

『しきみ』って本当はこの『木』に『佛』^{ほとけ}を使ったかったんだけど、例によってシフトジスさんに載ってないので断念しました（一応後書きの一番最初に置いてみたけど、正しく表示されるのかなあ……？）

という機械オんチの悩みでした。

また明日。

蹴撃チエイサー（前書き）

どーも『ちえいさー』に蹴りの雰囲気が入ってるなあ、と思ったら、完っ壁にあのビリビリのせいでした。

さあ、みんなも自販機の前に立って「ちえいさー！」だ！（法律よりも短パンを忘れずに！ おっとその前にプリーツスカートか！？）

蹴撃チエイサー

ともあれ、以降は特に問題なく、いわゆるデートは終わり、今は電車に乗って帰っている所。

まあ、あつたことと言えば、『「あーん」して見せて下さいよう』
『何でだよ。普通に』 『あーん』 『朱夏サン!?』とか、別の場面では『統那っ、今!』 『え、どれ?』 『あらー、統那君音楽センスゼロゼロですね』 『……………』 といった普通の出来事ぐらいだ。ロマンチックっぽさなんてほとんど無かった。

そんなデート、だった訳だけど、番鳥の評価は「もうしばらく様子見しますので、その時は世呂氏九よろしやく」だそうだ。
ずいぶん簡単なヨロシクだ。

まあとにかく、そんな評価を貰ったわけので今日の用事は済んだので、僕は二人に先に帰るように言って（普通は彼女を家に送るものでは、という反論もあつたがそれはむしろ弱っちい僕が送って貰いたいぐらいだとガキらしく駄々をこねて叫ぶことで封じた）、今、ある人を追っている。

ストッキングと言われれば、それは誤解も良いところだと大声で否定するけど、ストーキングと言われればそれまでだ。

そんな犯罪者扱いされかねない行動を起こしてまで誰を追っているのかというと、その人がその筋の人だからだ。

「……………」

荒井雲雀。

自称、探偵。

まあ、スキルはほとんど探偵に近いし、違いないんだろうけど。別に探偵じゃないからって僕に不都合も不利益もない。

それにしても軽快な足取りだ。

何か良いことでもあつたのか? ていうか、どこに向かっている

んだ？

「これで単に家に帰ってる途中とかだったら嫌だなあ……」
警察に見つからないことを祈るしかない。

と、信号待ちをしているところで荒井が誰かに話しかけられていた。

あれは……。

あれ？

うーむ。

アイツじゃん。

数時間前、ゲーセンで絡んできたアイツ。

どうやら遠目で判断する限り、ナンパしているようだった。なんてベタな。

荒井の反応はというと、バイバーイという感じに立ち去ろうとした。つまりフツたと言えるのだろうけど、信号が青になって歩き始めてもそいつがついてくるのであまりきっぱりと拒絶できていないわけでもないようだ。

自然、僕の足もそれを追う。

荒井は無視することに決めたらしく、すたすたと逃げているが、男もなかなかしつこくそれを追いかけている。

……これは、ひょっとするとマズい方向に傾く、のか？

そう思いながら追跡を続けている内に、ついに動きがあった。肩をつかんだ。

振り切る。逃げる。

追いかける。

追いかける。怪鳥蹴り。

主語すら省略した最低限の言葉で表現すれば、こうなる。

……それに怪鳥蹴りっつーかただの跳び蹴りだし。
怒りの怪鳥蹴り。

「てっ、めえ……さっきの……！」

「いや、ただ奇遇にもこの周辺に住んでいて奇遇にも君と住んでい

るところが近くて奇遇にもあの子との知り合いで奇遇にも現場を見かけただけの一般人ですが何か？」

「ただの一般人はあいさつ代わりに蹴つて来ねえよ！」

「普通の常識人はそこまでしつこいナンパはしないな」

「見てやがったのか!？」

「年下は見守るものだろう?」

「手え出してんじゃねえか!」

まさか、ここで足を出したとかいう小学生以下なレベルの発想はすまい(空気を読め、空気を)。

「とにかく、『彼女欲しいな』ちよつと遊んで貰うだけでもいいからナンパすつか」
『という思考は止めて、さっさと帰れ』

「……ちつ。あーあ、命拾いしたな。さっきもう釘刺されちまったからってのと、飲みモンの代金で今日の所はカンベンしてやる。次に会った時、お前だけは絶対叩きのめす」

いかにもデカい中学生の言いそうな偉い言い方だ。

「不思議と君に負ける気は中々……ね」

「ハイハイ背伸びしてる。じゃーなっ」

元気のいい捨て台詞を残してそいつは立ち去っていく。

うーん、不思議と言えば、不思議と『あいつら』とはあまり縁が無さそうだと思ったということを書いておくべきだろうか。

なんか、僕の知り合いの知り合い、ぐらゐの関係な気がしてならないんだけど……。

「ありがとうございました四手さん。かつく良かったです」

距離を置いていた荒井が戻ってきていた。

「……何? その『かつく良かったです』って」

「かつく良かったはかつく良かったですよ。変なこと言いましたか?」

「もしかして……格好良かった、とか?」

「そうです」

「何でそんなややこしいことを……」

「そっちの方が可愛いじゃないですか」

……完全に何かの制作者側の理由だぞ、それ。

「遠目で確実な判断は出来なかったんだけど、あれってナンパだったのか？」

「そうですね。『ヘイ彼女！俺とお茶しない？』なんて話しかけてきていましたから間違いないですよ」

なんと！

「おまえが食い物で釣られないなんて……！」

「驚くところはそこですか！？」

そこしかないだろう。

ベタな台詞？ なんだそりゃ。知らん。

そんなものに構ってられるほど暇じゃないんだ。

「しかし、私と四手さんってよく会いますね。……はっ、もしかしてこれが運命の赤い血塗られた糸！？」

妙に危険な修飾語が混じってる。

「何で僕とおまえが殺し愛する関係になってるんだ」

「あっ、『殺し合い』と『愛する』をかけているんですね！面白いです」

「解説すんな！それにそれはあまり面白くないから！」

「そうなんですか？」と荒井は言う。「話を戻しますけど、十分に私は四手さんのことは好きですよ。もちろんライクの意味で、です」

「どこの話を戻せば僕のことをライクなのかディスプレイなのかに戻るんだ……」

なんつーか、懐いているっていう点では、片那と近いタイプだよな。二人で一緒にいたら遊び出すんじゃないか？

と、片那について触れた時点で、ここでの話は次への展開を見せることになる。

蹴撃チエイサー（後書き）

『榊？ 誰そいつ？』ってな感じで統那の記憶には残ってないですよ。

それと、何とかこの章は仕上がった……今日が休みで良かったね。

また明日。

形無バックソード（前書き）

まあ、あえて無粋な真似はすまい……。。

形無バックソード

帰宅。

……大分久しぶりに家の描写が出来る。

玄関で靴を脱ぎ、そのまま洗面所で手荒いうがいを済ませ、廊下を進み階段を上がり、自分の部屋に戻り、最終的な金銭的ダメージを確認し……。

いつもの光景でないことを、確認する。

不審。

自分の部屋を出て、隣の部屋の扉を開けて、階段を降りて、リビングへ突き進み、ダイニングを一周し、キッチンを確認して、母さんと顔を合わせて、トイレと風呂の方の気配の無いのをいよいよ怪しく思い、最後にあいつの居そうな所を当たる。

いた。

「よう、僕の息子」プレスチャイルド

「キャラ作りは置いとけ。話がある」

「なんだい、反抗期？ 高校生にもなつて？ 遅れてるなあ」

「うるせえ。真つ当にゆとり教育受けた奴は反抗期なんてねーんだよ。それぐらい知つとけ」

「へえ、それは知らなかったな。いつの間にか学校は奴隷製造工場になっていたんだね。言い方悪いけど」

「そんなことよりだ。片那はどこに行った」

「刀？ そんな物騒な物、家には置いてないなあ」

「しらばつくれるな。僕の隣の部屋を使っていた片那だ」

「ああ、片那ちゃん？ あー、娘は昼間ドクターに引き取り手が現れて、連れて行っちゃった」

連れて行つた。

連れて行つた？

「はあ！？ 何でそんないきなり」

「そついきり立つなよ僕の息子。プレスチャイルド物事にはタイミングってもんがあるだろう？ 今日この日、こういう結末をたどるのは決まっていたことなんだよ」

僕にはこいつの言葉が、およそ人の言う言葉とは思えなかった。「なんだよその理屈……じゃあ何で僕にはその事を教えなかったんだよ？」

あらかじめ教えておけよ。
どうして予告無しなんだよ。

「それで君が納得するんだったら、僕はこんな幕の落としかたはしなかっただろうね」

「……………」
だからって、これは無いだろう。
別れの挨拶すら、無しかよ。

もう、痕跡すら無いじゃねえか。
何も残っていなかったぞ。

「重ねて言うよ、物事にタイミングは必ずある」
タイミングって何だよ。

順序はどうした。
順番は守れよ。

「生まれるとき、泣くとき、触れ合うとき、育つとき、知る、あるいは受け継ぐとき、出会うとき、次へ繋ぐとき、生き抜くとき、別れるとき、そして死ぬとき。全部、必ずあるんだ。今日の午後、片那ちゃんがいなくなるのはきつと当然の流れだったんだよ」

納得行かない。
こんな、何でもないかのような別れなんて。

「…………さてと、さっき言ったタイミングだけど、あれの内、もしどれかがないというのなら、そいつは人じゃない。ただの無駄だ。人生ってのは、そういうことだよ。蟻のように運んで寝て食うだけでもなければ、猿のように出世をすることも、鳥のようにマイホームを建てることでも、犬のように趣味に邁進することでもないんだ。

放蕩なんて論外だ」

そんな話はどうでもいい。

てめーの人生観なんて今聞いているだけ時間の無駄だ。

既に無駄にした時間ならそこにあつたじゃねーか。

「まあ、簡単に言えば、『他人の役に立って、その結果自分を満足』させられればなんだっていいんだ。僕は研究者だけど、実は会社の意向には全く従っていない。僕が従っているのは、それによって金銭面ではない所で助かる人がいるかどうか、だけだ。それが結果的に利益になったりしているけど、そこで囚われちゃいけない。そんな栄光は捨てて、次へ向かう。まだ困っている人はいるからね。僕の人生なんてのは、その繰り返しだよ」

「……その話が、今どんな意味を持っているんだ？」

僕が聞きたいのはそんな話じゃない。

僕が聞きたいのは僕の納得できる話だ。

「さあね。人の説教じみた話を聞くのにいちいち理由を求める子供ガキのような若人わかしゅには分からないだろうね。悲しいけど」

「……ああそう」

もついいい。

なら勝手にさせて貰う。

「あー疲れた。たまには真面目に生きてるところを見せないと親つてのはやっつてらんないよね」

息子の前でそう言うこと言うな。

「そうそう、片那……刀と言えば、だけど」

「……？」

「僕なりの解釈を覚えておくと、『形無かたな』とも書けるって事は、分かるかな？」

「それぐらい、想像はついてるけど」

「いや、ついていないね。見れば分かるんだよ。この益暗ボンクラ」

「なっ……!!」

「何を手を抜いているんだ？ 本気出したときに誰かに上回られる

のがそんなに怖いのか？ 最初から出来ないと決めつけているのか？
それとも自信が無いのか？ それともまさかとは思いが、やる気が
ないなんて最低最悪な罪に満ちた言葉を吐くつもりは無いだろう
ね？ まさか『鎖で心を縛り付けられている』訳でもあるまいに」
……何だ？

こいつは何を言っている？

「おもちゃを壊されたぐらいで腹を立てるなよ。また組み直せばい
いんだ。そもそも刀なんて消耗品だろう？ マシガン数発で折れ
るんだから。そのために、僕は『形無』を付け加えたんだ。それを
無駄にするなよ」

「……まさか、知ってるのか？」

「あれ、まだ僕の事、誰かから聞いてなかったのかい？」

「いや、興味無かったし……」

ファーザーペアレント

「あつちやー。これじゃあ僕が父親として形無しだね。ある意味こ
れがセオリーなのかもしれないけど。まあいいや。とにかく、精一
杯生きろよ。これが父親からの簡単なアドバイスだ」

形無バックソード（後書き）

しかし後書きはそんなの関係ねえ！（無粋なギャグ）

伝家の宝刀、予約掲載発動！（とはいえその判断が付く人はそんなに居ないでしょうが……）

さて、作者はというと、ギリギリスのように趣味に生きているという自堕落三昧。

まあ、見事な反面教師ですな。

ここで、連想ゲーム。

反面教師。

反面漁師（消費者のことじゃねえか）。

仮面教師（これは似たようなのがいたな……）

仮免教師（教育実習生……？）。

暗黒面教師（これはよくニュースで見るし、普通だな）。

つまんなくなってきた所で、また明日。

終章メタルブライド(前書き)

まあ、何となくカッコいいし。

終章メタルブラッド

僕にとって衝撃的だった日がようやく終わり、次の日。

僕は家にいる状況に耐えられないがままにして外出して、その矢先にある人物に遭遇した。

「うむ、紛れもなく四手統那じゃないか」

「おまえ僕と誰かを間違えたのか？」

「正直なところ、今日の前で私と話している相手が本当に四手統那なのかどうか、今一自信がないと言えば、本当になる」

「ややこしいこと言うんじゃないか！」

夜天浪雅。
やてん るしゅが

ジャージ趣味。

着る物を選び、それなりにお洒落でもしたらコケティッシュに見えるのだからうけど（ちなみに僕はコケティッシュを苔の生えたティッシュのことだと本気で勘違いしていた）、もったいないことにそんなことは全くしていない。

まあ、だから身持ちが堅いのかもしいけれど。

それと、なんとなく、僕の知っている中では和風な美しさが一番似合うと思う（次点は朱夏で、その次は筑紫）。

「……よしよし」

ぼんぼん、と僕は抱擁されて……。

「って何でだよ！ 何で僕はおまえに抱きしめられて頭を撫でられているんだ!？」

「無言で私の胸に顔を埋めるぐらいだから、何か悲しいことがあったんだろうなと思ったのだが」

なんだ、逆だったのか……って!？」

「はっ!？」 待て待て、僕は他人にそんな事をするぐらいの変態レベルになっただけなのか!？」

無意識かよ!

無意識に僕はこいつの胸を求めていたとでも言つのか！？
いよいよもつて僕も変態か！？

言葉だけでは説明の付かないぐらいの！

「大丈夫だ。こんなのは羞恥には入らない」

「いやいやなんでそんなに冷静なんだよ！？」

物語の主人公が変態かジェントルマンかという瀬戸際に！

「だから言つただろう。私はいつでも受け入れる準備が出来ている
と」

「本気なのかよ……」

本気だと信じてしまふ冷静さだ。

「たとえ変態でも」

「僕は変態になりたくはないんだ！」

クラスの委員長の机をペロペロ舐め回したりしない。

あれを変態と言つんだ。

黒猫。

ジェリクルキヤット。

……違うな。そもそも畑違いだし。

そういえば、あれってストーリーを飲み込んだ上で見るもんだよ
な。

「まあジェントルマンということにしておこうか……で、何があつ
た？ おねえさんに相談してみなさい」

「……そういえば、浪雅は知り合いだったっけか……桐那片那つて
覚えてるか？」

「ああ、よく肩車して遊んでた」

「遊んでたのかよ……。その片那が居なくなった」

「居なくなった……。とはいえ知っていたんだらう？」

「いや、予告無し」

「いやな、そういう意味ではなくてな……別れる、というのは普通
は誰にでもやってくるものだらう？ 何を当たり前のことで悩んで
いるんだ？」

「……え？」

まさか、浪雅の口からそんな意見が出るとは思わなかった。

……いや、浪雅だからこそ、そんなさばさばした考えが自然と出てくるのかもしれない。

「それを言うなら私だってそうだぞ？ その内君の前から急に居なくなるかもしれないし、君がどこか遠くへ行ってしまうのかもしれない。それぐらいは簡単に考えついておかないから後になって引きずる。今みたいにな」

「けど、その考えって……虚しくないか？」

「空しい……な。確かに、そうかもしれないな。そこまで割り切っているのは老成してからの事だろう。かく言う私だって少なからず片那が居なくなったことには一種の憂いと言える感情があるのを感じる。こういうのは、難しいんだ」

「……なんか今日はお前のこと見直した」

「そうか。それはありがたいな」

「何だか字数調整のために出てきたような気もするけど、ありがとう！」

「いやいや、ご近所としてそんなのは当然のことだ」

「というわけで、お金を貸してはくれませんか？」

「ふっ、大学生の金銭事情を甘く見るな。高校生は親と同級生に借りるものだ」

まあ今回のオチはそんな所として。

その後。

ちようど、独りになったときだった。

周りには誰も何も無いと思っていた。

そんなところに、あいつらは現れる。

再び僕を戦いの渦へ巻き込むように。

初めから狙っていたかのようにして。それらはためらい無く、やってくる。これは誰にとつて都合のいい展開か。そんな疑問は考えるまでもないけど。僕は戦い始めないといけなくなつた。

あきもと みすい
阿木本未遂。

よしだ ききょう
吉田桔梗。

「なーんかいきなりいるんだけど。どーします?。」

「いきなりいるってことは、いきなり殺せつてことだろう。しかし、全然だ。」

「ふーん、かーかつていいんだ。」

「ああ、別に死にはしない。だが、必ずだ。」

「てーか、武器とか持つてそうなんだけど。こーわいよ。」

「おいおい、ここより安全な場所なんてのは向こうにはないんだぜ。まあ、必ずしもだが。」

「そーいえば、せーんぱいは戦わないんですか?。」

「それは俺が決めることではない。が、絶対だ。」

「むーずかしいなあ。そーんじゃ、行きますか。」

下手な予告を残して、続く。

終章メタルブラッド（後書き）

というわけでワラあり波ありの……違う。笑いあり涙ありの（これも違う？ お客さん、勘弁してくださいよ）第六章でした。

ああ……ついにリズムが崩れてしまった。まあ、神尾じゃないからダメージはそんなに無いけど（リズムに乗るぜ！）。

まあ未練は程々にしておいて、と。

新キャラが、最後のを含めて五人。

……多いつちゅーねん。

もうええつちゅーねん。

どつきまわしたる。

いてもーたれ。

本当にこれが関西弁かどうかは知りませんが、まあ覚えきれないの何のって。

まあ荒井ちゃんだけ覚えてもらえればそれでいいです。

ちなみに吉田桔梗なんていうちょっと面白ネーム（何が面白いかって、簡単に作れるところが）は実際に使ってる人がいたら申し訳ない、と思いつながら使わせてもらいました（念の為検索したら案の定ゲームに使われてるし……）。

途中で風邪もひきましたが、無事に終わって何よりです。
また来月。

序章ドリーム（前書き）

全く夢の無い小説なのにドリームとかどついつ事よ。

それはそうと、作者は見ていた夢が覚えられずに「ちくしょう！」と喚くクチです。

序章ドリーム

そろそろ、僕こと四手統那しゅとうなの前座染みた前置きにも慣れたという
かむしる飽きたかもしれないが、我慢して付き合っあって欲しい。小津
じゃあ無いけど、これが僕おれなりの愛だ。

それで今回僕がそしよ旭上に載せるのは、想像がついた人もいるだろう
むしろ大半かもしねなくて恐縮おそなんだけど 荒井雲雀あらいひばりである。
歳下。

僕でも餌付け出来る。

自称、そして事実上の探偵。

そんな感じの人物だということは、まあ流れで知っていることと
思う。

だけど。

中学生かと思いきや一つ歳下だったとか。
食べ物に釣られやすい単純な性質だとか。
特に最年少記録を更新しない探偵だとか。

はつきり言って。

彼女の立ち位置を考えてみればそんなものはどうでも良くて、倒
立しようが直立しようが、人目が付いてもその位置には微塵の変化
も無いのだろう。

どうしようもない事実を言っいてしまえば、荒井雲雀は、どこまで
も過去に縛られ続けた存在なのだ。

過去の因縁を引き摺り、今に至り、未来を築く。

『過去は全く関係無い。未来からやってくるものを待てばいいんだ』
という思想よりは現実に近いけど、しかし、こと荒井雲雀に関して
言えば、事の良い悪いを別にしても、因習的な固執と評価したくな
るぐらいの、縛りを感じざるを得ない。

自己をとことん薄める。

従うべき対象を求める。

見つけたモノを崇める。
己の中でソレを清める。
そこから善悪を定める。
善には躊躇わず竦める。
悪からは迷わず掠める。
普段から自分を高める。
日常的に自分を撓める。
恒常に自分を止める。
正体は限界まで潜める。
上書きの役割を決める。
目的ならば全て絡める。
可能ならば敵を沈める。
必要ならば更に殺める。
無理ならば己を痛める。
とにかく残虐を極める。
そして出来事を収める。
永遠に繰り返し始める。
荒井雲雀のベクトルとは、そういうものを言う。
良くも悪くも、ストイック。
彼女の前にはレールがあるのだが、どういう訳か、彼女の後ろは
轍と轢死体が変わっているのだ。
一体入力から出力の間にどんな係数がかかっているのだろうか、
とは考えたくない。悪い意味で正義的な宗教に引っかかるのとは訳
が違う。

完全にオリジナルな信仰。

事実上、指導者不在の新興宗教。

自ら、自ずから創り出す蟻地獄に、嵌る。

そんな恐ろしい存在と平気で言葉を交わすなんてのは僕みたいな
優と劣を間違えるような人にしか出来ないのかもしれない。

だからこうして仲介してみようと試みているのであって、理解さ

れなくてもそれはそれで、元から無駄な試みだったんだからしょうがない、という事なのだと思う。もつとも、感覚的に自分が誰かの代替になれない以上、逆説として他人のことを理解していない人なんていないと言える気がするんだけど。

……いや、僕の思想なんかどうでもいいんだ。

そんなことより夢の話をしようじゃないか。

将来の夢はなんとなく林業に従事してみようかなと思っていて、これは前にもどこかで触れたように思う。

今の夢は、愉快なうっはうはライフ。文句は言わせない。

では過去の夢は？ となると不思議なことに、思い出せないのだ。何しろ物心ついたのなんで中学生の頃だし（僕みたいな社会不適合は大概遅いんだ）。まあ、早すぎるよりはマシだと思うことにしておこう。

その代わり、断片的な記憶　つまり、夢　を探ることでこの話題を埋めてみようと思う。

当然、地べたを這いつくばっていた赤ん坊の記憶は流石にない。

だからバブー、なんてリアルに発音するのか検証出来なかったのが悔やまれる。惜しいなあ……。次に幼稚園の時だが、確かに朱夏あやかと遊んだ記憶はあるし、疎遠になったのも明らかだ。けどそれについての詳しい情報を、僕は知らない（なにせ物心が無いんだし）。ただ、付け加えるとすれば。

鳴原羽兔なるはひうさぎ

桜土真緒さくらつしまま

この二つの名前と顔も、幼いままだけど、浮かぶのだ。

僕は鳴原とよく遊び、朱夏は桜土と一緒にいて、四人でつるむこともそれなりにあったと思う。

ただ、それが最後まで続かなかったのも、憶えている。

そして、続かなかったのが、続いた。

友達は、続かなかった。

もう、重なりすぎてよく分からない。

至る所で人生の歯車がクルクルと、狂狂と回り続ける。

という具合に、ここからしばらく僕は尋常じゃなく早すぎる反抗期　なにせ物心が付くより早い　を迎えていて、実際に子供の限度を超えたことばかり毎日のように行なっていた記憶がある。

ナイフを持つようになったのもこの頃だ。

そんな死んでばっかりの小学校時代（時代という言葉に言い知れない不遜な響きを感じるのは僕だけだろうか）に、筑紫つくしに出会い、救われて、おおよそ今と同じような人格になった。

小学校で人格形成を完了させた僕は、中学校に入って、頭の良い人とするんですいた方が僕も頭が良い風に見られるんじゃないかという打算としか言いようがない理由で打葉うちばに話しかけた結果、意外と馬が合い、友達になった。この頃からか、僕はようやくまともに物を考えるようになり、自然と人工の区別がつくようになった。

その辺で思い出深いのは、過去や未来はほとんど人工物だというのは、みんな知ってたんだろうけど、何で誰も教えてくれなかったんだという疑問だ。それを先生に聞いたら、困った顔をされた（常識に照らし合わせれば変人と見られかねない行動がどれだけ恥ずかしい事かをこの時は深く考えていなかった）。やっぱり僕は社会不適合なんだとつくづく感じたという点で、この時の先生は印象深い。

特に生徒を理解しようとしないう所なんか、先生としてあるべき、また模範的とすら言える姿だった。おこがましくも、当時僕の先生に対する評価はかなり鰻上りだった。

いわゆる中二病だったんだと、今は思う。まあ、筑紫がいたから昔みたいに見えないナイフをぶん回すような真似は必要な時しかやらなかったけど。

何でこんな話をするのか、というのは続きを読んでいけばきつと分かると思う。

序章ドリーム（後書き）

プチ警告ですが、

下手すると（また）更新が滞るかもしれません。

戦闘シーンという要請のため、とすれば残酷と取られる表現があるかもしれませんが、（誤解を恐れず言えば）作者は『みんなに優しい』というものが嫌いなので、年齢制限はかけません。勿論アダルトな表現を避けるぐらいは弁えているつもりですが。

あと、意図的に読みにくい箇所が出るので、速読はおやめ下さい。

ワガママばかりですみません。それでも楽しんでいただけたらこれ以上の喜びはありません。

と、真面目ぶつても内容はふざけているので気楽に読んで頂ければと思います。

また明日。

曲解スタンダード（前書き）

作者の私生活も急転直下。

このタイミングを逃すと今日中に投稿できなくなってしまうそうだったという緊急事態。

という訳でボケは無し。

曲解スタンダード

いきなりで悪いんだけど、現在僕は見知らぬ人物二人に遭遇している。

向かって左、性別女。

一体何のつもりなのか、道端にも関わらず、一般的な大きさ、形の抱き枕（うしぎまくら）に頬を押し付けながらこっちを見ている。

右、性別男。

ほぼ白いカッターシャツに白いネクタイ、大体白いスラックス、それらを覆う概ね白衣と言える物。さらには白髪。肌も日焼けしていない。さながら医者のような格好、と言つにも語弊がありそうだが、とりあえず、形は医者のものである。

まあ、ただ。

どくどくと。

びくびくと。

ぼたぼたと。

どろどろと。

ぐさつと。

だらりと。

右手になにやら古めかしい本を持っている。

本と、既に赤黒い手が、真紅の液体にどンドン上書きされてゆく。その源泉である五指の付け根にはそれぞれ、真つ直ぐに尖った針（いばし）金……千本　ナルトで見たことあるやつだ　が一本どころではなく、複数刺さっていた。

まるで関節で千本を束ねているようで、さらにそれが本をも貫いているのを見てようやく僕は痛みを想像し、忌避を覚えるのだった。「さーってつと。やーつと者語に登城できた所で盲し訳するつもりも難いんだけどさーあ？　永ーい遠に寝むってーえ？」

……ヤバイ。

ヤバイヤバイヤバイ!

別に食べ物美味しかった訳じゃない。

ただ本能で『関わってはいけない』のだと感じたのが思考に繋がっただけだ。

それと封陣が展開されるのは、同時だった。

ネガの風景とも違う、暗くて無機質な世界が白い輪郭を伴って訪れる。

そこに、二つの色が見える。

縹と、桔梗。

単純に濃淡で言えば、縹の方が淡い色をしている。

「えーい」

と、言い終わる前に。

さっきまで抱えられていた抱き枕が放物線を描かずにこちらに飛んできた。

それを僕は反射的に切り払おうとしたのだが、それは敵わなかった。

より正確を期すならば、切ることはできたが払うことはできなかった。

真正面からぬつと迫り来る寝具を片手で切った瞬間の手応えに、僕は目を見開いて驚いた。

……重い!

先んじた手の動きに巻き込まれるようにして頭部と胴体に二つの衝撃が突き抜ける。

「事―故紹介がまだまだだったねー? 童はねー……あつ、違った。渡しはね、阿木本末遂。こーんな素晴らしい名前を漬けて苦れた漁師んは転したからあ鉈の手を患わせる琴は薙い空ね」

今すぐにも逃げ出したい心境だった。

だけど、おそらくここで逃げてても無駄なような、そんな気がする。

そして蛇足だが、これ以上無駄なルビは振らないと、読者のみんなにも覚悟して貰おう。

こんな奴の事、僕はこれ以上分かりたくないんだから。

「……ああ、俺もまだだったな。しかし、おそらくだろう。吉田桔梗だ、以前宜しからず。どうせ、ほとんどだろうけどな。俺の事なんてのはこの手ぐらいにどうでもいいから、忘れてしまえ。楽しく楽して生きたいのならな。まあ、貴様の場合は必ずなんだが」
だらだらと。

手をぶらぶら振って血を撒き散らす。

まともな心、ではない。

これが、強靱な精神なのか、判断はつかない。

痛みから遠ざかりたいという、人間の弱さが全く感じられない。

そもそも何物なのかすら分からないこいつらを強弱で語ってしま
って良いのだろうか？

僕はいつの間にか意図せず騙っていないだろうか？

……どういう事だ、この共役不可能な存在は！

僕とこいつらは同じヒトなのか？

人なのか？ 他人なのか？

赤の他人なのか？ 真つ赤な他人なのか！？

分からない。

分からない分からない分からない。

分かんねえ！

出会ってすぐに分かってしまうことが、それが分からない！

僕とこいつらは決して分かり合えないと、どうして分かる！

諦めるな、諦めるな、諦めるな、諦めるな！

何か、糸口が、あるはずだ。

もしくは切り口が。

「あーれ？ 生絵を炒っただけなのに、騙っちゃったよ？」

「確かに可笑しいな。こちらは礼儀に則って先に名乗ったと言っ
に。ただ必然だ。なあ四手統那よ」

「……………！？……………?!?!?!?」

もはや僕は言語を放棄したと言ってもよかった。

それ以上は思考もできず、分からないなら一引いて切ればいいんだとか妙な論理の残滓に従って抱き枕をまずずたずたにしてそのまま隙だらけに阿木本に切りかかり

「こー我鱈あ、崇いて名折せえ、これ飲酒うう」

骨なんて軽く壊れるんじゃないかという鉄拳を、ほとんど自分から突っ込んで行った頭に貰った　んだっけ、か？

「やーっほー。置きたあ？」

……あれ？

ここ、どこだ？

こいつ、誰だ？

僕は何をしていたんだ？

「まーっ坂ー。未遂ちゃんだよ？　多分。崇いただけで気後を倭刷れたなんて、さ見知り琴逝わないで？　じーやあ、鬼おじさんとおばさんごっこを使用よ。渡しが鬼で、あ錠が鬼を対峙する桃太郎ヒトコと鬼に転される民間人の独り散薬ねー」

『見知らぬ誰か』は、そんな事を言っつて、封陣の闇に溶け込んで消えた。

僕が前後関係を思い出したのは、それから十分な時間をかけてからだった。

曲解スタンダード（後書き）

まあ、時間があればそれだけで持て余すんですけどね。本当、鬱に
すらなれないダメな作者でいけない。

両断アーマー（前書き）

多分一番バトル成分が多い物になりつつあるとだけ言っておきます。

両断アーマー

「……くそっ、畜生、ちくしょう！」

全力で一軒家の連なる道路を走り抜ける。

どうせこの空間で動く車なんて無いんだからと、車道に遠慮することも無い。そもそも人の目が無いんだから、どんなことをしようと咎められる道理が無い。

さて、今の僕は殴られた衝撃で飛ばされた記憶をおおよそ取り戻した直後の状態だったりする。故に少しばかり沸点を超えて感情が昂ぶっていた。

「僕にだってなあ、一応のプライドってもんがあるんだよ……！
そこんトコを分かってんのかなあ未遂ちゃんは」

……ゴホン。

訂正。案外余裕が生まれていた。

というか、ちゃん付けで名前を呼ぶほど親しくないし、一人忘れてる。

さて。

鬼ごっこ、とあいつは言っていたが、どういつつもりなのか。

まさかいきなり攻撃をしかけておいて遊びたいという事ではないだろうし、退治するとか殺されるとか言っていたのを鑑みるに、単純に戦うだけなのだろうか。

とすれば、僕が狙われた理由は何だろうか。

何がしかの特別な価値が僕にあるとも思えないんだけど……。

「打葉が絡んでいたり、するのか……？」

まさか、と否定したくなるんだけど、今の所それが一番順当である、と考える僕がそこにはいた。

連絡を取ってみたいけど、ここは封陣の中だ。

そうだった連絡はできないと知っているので、断念する。

今まで端折って説明していなかったような気がするけど（したか

もしれないけど）、封陣を何の虚飾も無しに説明すれば、普段の現実から『浮き出たモノが現れる』空間の事だ（聞いた話だから確証を持って語れる事じゃないけど）。

これがどんな結果を産むか。

色採や、命彩が表立つ。

これは簡単な論理。

じゃあ、何でそんなものが生まれたのか。

残念だけど僕は知らない。けれど、推測はできる。

隠れるため。

色採は現実の世界でもその能力を発揮できるのだが、そんな事をすればどうなるか。

見知らぬ誰かに見つかり、その知り合いに騒がれ、大勢の人に探され、辿り着いた者に問い詰められ、誰にともなく追い詰められ、現実によって殺される。

僕なんかが適当に考えた筋書きだけど、大体合っているだろう。そもそも現実から離れようとした者の集まりである色採に名誉欲が無い以上、色採の誰も、目立つ行為は避けるのは当然だろう。

大体、僕にしたって『何でも切れるカッター人間』なんて触れ込みで有名になりたくなんかない。

まったく、馬鹿馬鹿しい。

……話が逸れた。

そういう訳で『現実味しか帯びていない携帯電話』はこの空間では、あっても無いような物として扱われる。『現実から浮いた僕の所持品』としての機能は持ち合わせているだろうけど、『何の変哲もない電波』は、実在はしても、外部へ現れないのだ。

「隠れるためとは、よく言ったもんだよなあ……」

GPS機能とかで追跡されちゃあ、たまったもんじゃない。

「何から隠れると？ 俺にも分かるように説明しろ。十、数え終える前にだ」

振り向く 前に回した腕で切る。

僕の周りにそんな話し方をする友達はいない。なら敵に決まっている。

「九」
振り向いた視線の先には、無事なままの姿で僕よりかなり高い背の、甲冑（実物を見るのは初めてだ）に身を包んだ 声から判断するに 男が堂々とそびえていた。

「八」
男は初速ゼロから踏み込み一つで最高速に達し、僕の見えない所でいつの間にか抜いた剣を右側に携えて突いた。正確に眼球を捉えた突きがあと数ミリ（あくまで感覚的に、だけど）に迫ったところで僕は左手を内側から払う。

「七」
交差する視線の外で刃が（僕のは手刀だけ）拮抗する。

「六、五」
「何からって言ったなら、俗世からなんだけど……要求は満たせた？」
「ふん。最初から言えば良いものを」

競り合っていた剣が離れ、腰に提げられた鞘に戻り、柄から手が離れ、最後に自然体へと移行する。

しかしそれだけでは終わるはずもなかった。
僕が気を抜いたその一瞬だけで。

「むんっ！」
全く反りの無い剣でそんなことができるのか、そいつは創作の世界でかなりの強さを誇る抜刀術を僕に、直に披露してくれやがった。

四手／統那。

……まったく、表現に困ることをしてくれろ。

胸からまっぶたつ おっと、これより先はRー15指定。

「相手が俺で良かったな。痛みを感じる間も無くだ。間も無く死ぬことができるのだから」

……なんの理由も無くそれを遺言にさせるには僕は良心が出来すぎていただけ、さすがに侮辱に近い寝言を言われたら、相応にやり返してやるうと気合も入る。

視点が、地べたから一気に元の高さに戻る。

さながら、そんなことはまるで無かったかのように。

右手を鋭く研ぎ澄ませる。

「知らない人のために解説しておく」

驚愕に瞳孔を広げた男の正面を右下から斜めに切り上げると、傷口から噴き出した紅いモノが腕いっぱいにかかり、染みる。

「僕を切ることに、意味は無い」

「……成程、尋常では無いな」

男は出血に構わず、切っ先を構え直す。

血に染まった右手で顔をかざすようにすると、何だか僕が悪役っ

ぽく見える。

……まあ、それはどうでもいい。

後はもう一度切ってあれを発動すれば

……イイダロウ、コノ条件八好都合ダ。チカラヲ課シテヤル

声かした。

両断アーマー（後書き）

さあこっからがよくわかんなくなってくるんだよなあ……。
読者が頑張ってくれと作者も頑張るといっかなりマイナスなベク
トルですが、引き続き宜しく願います。
また明日。

裂火プリムストーン（前書き）

日の目を見ない、深奥の物。

概してそれは、共通して、普通ではない。

裂火プリムストーン

声がした。

多分、僕の頭の中で。

今までの展開とか、僕が戦っている事とかそんなのとは全く関係なく。

完全に自分の都合しか考えていないようなソレは。

目の前の敵の事も僕の事も考えない。

その結果。

バキッ。

「……っ!!」

戸惑った僕が敵の剣で、頭部を思いつ切り殴られた。

切られたのではなく、きちんとダメージの通る方での、攻撃。

「……どうやら貴様の場合、有効な攻撃はこれのようだな」

吹っ飛びそうなくらいに重かった。

衝撃に真っ向から対立したら、首が壊れかねない一撃。

だけど僕は、下がらなかった。

「……ほう、いい根性だな。今のを踏み止まるか」

違う。

まさか雑魚相手に発揮する根性なんて僕は持っていない。

原因は分かるが理屈が全く分からない。

頭を二度三度と振る。

意識をはっきりさせるためでもあるし疑問を振り払うためでもあったけど、効果は半分しか得られなかった。

怪我の程度は明らかに向こうの方が酷いのに裏では逆転されているような気さえしてくる。

「いいのか？ 放っておくと三十秒ぐらいで全て回復してしまうぞ」

男の言う通りだった。

甲冑の下で治癒が始まっているのか既に出血が治まりかけている。小間しやうまのアレと似たような物か。

「いいんだよ。今僕が課せられて、そして枷られているのはきつと逃げられない』って事だから、あと十秒もあれば終わるし」

多分言葉の半分も理解していないであろう男の目が甲冑の下ですと細くなったように見えた。

「何……?」

「さつきやろうとして、できなかった事を、今から始めよう」

底無しの、闇にも似た僕の不穏な気配を感じ取ったのが、僕の刃の被害者は逃げる事を選択　できない。

「俺の足が……すくんだだと……っ!」

一応あたりは取っておいたけど……そういう事か。

オーケイ、把握した。

逃げられず、逃げれない。

最近は聞かないけど、文字通りのデスマッチか。

「大変お安く仕上がってて申し訳ないんだけど、ここらで一丁僕も必殺技っていうのをかましてみようかと思うんだ」

「何を……する気だ」

第一段階は、既に終了している。

返り血を浴びた右手を、だらりと下げる。

空気に触れる、紅。

血の乾きが、刃に訴える。

乾きは、災いをもたらす。

災いは今、降りかかる。

「……、やめろ」

「?連続殺刃?」

冷徹な響きが、僕自身を落とし込む。

業火の熱が、刃を昇華する。

「俺はそんな死に方はしたくないだからやめろおおおおお!!」

「? 火装煮煉?」

血が滾る。

血が盛る。

血が迸る。

再度切りつけた瞬間『それ』は体を巡る繋がりによって持ち主の全身に広がり、一息で、背景と変わらぬ消し炭の色に染め上げた。

乾き切つては、声も出ない。

熱を飛ばすように手をビツと鋭く振る。

……これはさすがに格好付けだな。

「朱夏みたいな派手さは全く無いけど、威力は十分過ぎるな……」

歌舞伎者とまでは言わないけど、悪役の怪人を倒した時に出る爆発の爽快感に近い物はある。

……ここで誤解して欲しくないのは、僕は別に爽快感を得た訳では無いという事だ。純粹にやった事は本当なんだし、相手を殺す、背筋の凍る感覚は未だに現実のものとは思えない。

死という事象には嫌と言うほど触れているはずなのに。

ホウ? ナカナカイイ素質ヲ持ツテイルジャナイカ

「何だよ……またか……」

痛くは無いが、額を押さえてみる。

この歳で悪魔に取り憑かれたとかそういう妄想には浸りたくないんだけど……!

仕方が無いダロウ。今ハマト無イ自由デ以テ不自由ヲ究メル事が出来ルノダカラ

そのいかがわしい片言と台詞の前後に一行空けるのを止める！
……何で対話してんだよ、僕。言葉に出さなかっただけマシだけ
じ。

はっ、だりい性格してんなあお前も

「キャラまで変えた!？」

喋ってしまった。

それはともかく、ほんとに何モンだよ、これ。
名乗らなかつたら門左衛門もんざえもんって名付けるぞ。

何で近松のオツチャンの名前と一緒にされなきゃなんねーん
だよ。もしそんな事したら十秒に一回咳いてやるぞ

いや、脳内ツイッターとかどんだけ痛いんだよ。

ほら、そんな事言ってるからどんどん足が痛くなって……足が痛
くなる？

かつ、てめーみてーな生意気臭いガキに付き合ってるっての
はこりゃ相当以上な親切だな。親を切るって書いてカインド、もし
くはグッドウイルだつーんだから多分、英語ってのは相当野蛮な
文化なんじゃねーの？ で？ 何か文句は出ないのか？

「ぐっ……ぬうあああつ」

頭の中の声だけが、ノイズキャンセリングされたように響く(…
…もしかしたら古いかも)。

そして僕は動くどころではなかった。

足が膝上十センチまで、沈んでいた。

おい、どうい事だ！

ぎやははははは！ こりゃーどう診断しても直訳新陳代謝症
候群の典型的な死因だな！ 葬式も要らねー！ このまま死に埋め
という言葉について深く、語ったり合おーぜ！

……いやいやいや！ 答えになってねえし、意味分からねえし！
さっさと教える！

なんだよーノリ悪いな、マジ詰まんねーな……腹は括った

んだろ。次は捨てるんだよ。贅肉を

いや、僕太つてないし。

察しも悪いいのな。どうせ読者に詰まんねー自己主張でもしてんだろーけどよー。……ハイハイわーっかりましたよ。ヒントは……かったりーからやっぱヤメた

……言葉も出ねえ程おまえの事が嫌いになりそうだ。

というか、何を捨てるんだよ。生憎僕は断捨離とかには詳しくないんだってのに。

それが何なのかわかんねーけど、まず関係ねーわな。っーかそろそろ肩が埋まつてるぞ

そいつの言う通りだった。

「というか、呼吸が……！」

完全に読者を置き去りにしたようなこいつの意図はハッキリしないが（ハッキリさせるつもりも無いが）、もう僕も置き去りにされているようなもんだ。

そして。

誰も見ていないのが災いし、ここに至り僕は、挫折した。

ああそうなんだ。僕つてのはここまでの存在なんだな。そうか、なら。

もういいや。

こいつの正体に関しては大体の見当が付いているけど、いいや。捨てるって言っし、

物も、記憶も、権利も、誇りも、経歴も、遊びも、豊かさも、関係も、身体も、意識も 武器も全部、

取り合えず捨てた。

／／／

目を覚ました。

ここは誰？ 僕は何処？

……いや、なんつーかさ、お前、馬鹿じゃねえ？ 壊滅的が過ぎるつーか……あれか？ いーちゃんか？ それとも殺人鬼か？

「……何だ、死ななかつたのか」

死ねば良いのに、僕。

結局、全部手元に戻ってきたよ。

問題はそこじゃねー。自殺志願の為にいるんじゃないか。からお前さー、そういう事はもう少し考えてやれよ

そんな難しい事、現代の若者は出来ないから。

いんや、どー考えてもお前のは異常だ。薄皮一枚の下にどんな本性隠してんだ……？ どうしたらそんな簡単に

逆に考えようよ。ここまで深く入り込んだのはおまえだけなんだから、もっと堂々と誇ればいいんだ。

お前、どんだけ不誠実なんだよ。嘘の建築士に嘘の設計図に嘘の土地に嘘の建築……しかも今も嘘の改築が続いていやがる。いつかは倒れるぞ？ 分かってんのか？

本当は知ってるんだよね。

どうにもならない事が世の中にはいっぱいあるって。

だったら生きてる意味なんて無いんじゃないかって思うのは、そんなに許されない考え方かなあ？

僕なんて生きてても死んでも同じなんじゃないか、と思うのは、

一時の気の迷いで片付けてしまっていたのかな？

そんなのは僕にとってはどうでもいいんだけど、他人はそう思っているのかどうか分からないから僕が殺す事に罪悪感を覚えても、自殺にはそれほど抵抗が無いんだよね。自殺の始末にかかるお金の面で両親が困るのは立場的に困るけどね。

結論としては僕は嘔吐きだから　つまり、いつでも自分を殺しているから、君のその捨てるという試験に関しては本気を出さなければいつでもパス出来るんだよね。

それが嘘なら平和な毎日を送れるんじゃないのか……？

それじゃあ、嘘の時間は終わり。また普通の、全力で空回りな四手統那に戻るよ。

………わーったよ。負けだ。力を貸してやる。名前は恥ずかしいから教えないけどな

………いいの？　こんなご都合主義で？

知るかよ。実はあと二つ試験はあるけどそれはお前の異常に免じておく。だが忘れるなよ。夢ってのは、頭の中にしか無いんだからな

………何を当たり前の事を。

僕は夢を見たなら、やりたい事が沢山あるんだ。その僕が夢について考えた事が無いとでも？

夢を見たならまず僕は

ここから本調子に戻るまで、しばらくの時間を要したので、そこはカット。

数時間後、また僕は戦いに巻き込まれる事になる。

裂火プリムストーン（後書き）

この辺は変なテンションで掻き揚げた、のでおかしい事になっているのは重々承知しております。

最近は衝動買いが多くて軽くですが悩んでいます。

という訳で、また明日。

……縦書きのPDFだとこれの前後書きがつつとおしいんだろつな
あ……。

挟撃キックアップ

再び当てど無く彷徨う僕。

「まあ、今更こういうシチュエーションが怖い、とは言わないけど……どんだけ広いんだ？」

走っても走っても境界は見えず、市内全体を覆っているにしても広すぎるんじゃないかと思わなくもないけど、そういえばそもそも市内全域を把握している訳ではないのだ、僕は。

だから、やむなく風潰しに市内と思われる場所を探して行くしかないのだ。

地の利なんてのは全く無かった。

既にさっきの戦闘から二時間は経過していた。手持ちの携帯で確認したから間違い無い。

歩きに速度を変更したからか、疲労は無かった。

このぐらいではエネルギーが尽きないのかもしれない。

「本当にそうなのか……？」

そんなに都合が良くないのだろうか。

何か、大事な物を見落としてはいないだろうか。

「いや。こんな所まで不安がっていたってしょうがないだろ……」

さっきは敵以外の方面から足を掬われかけたからしょうがないのかもしれないけど、心配性も度が過ぎるとつとおいしいだけだし。

読者に嫌われない工夫は必要か。

しかしなあ、今のトレンド（何処の、とは言わないけど）が未だにシンジ君みたいなのを引き摺っているのが問題なんだよなあ。

どの道平凡な主人公が平凡で弱い人間のままだったなんて現実みたいなのは無いのに、そんなあり得ない存在にシンパシーを抱くなんて代償行為をしたって裏切られるだけだよなあ……。

まあ僕に限って言えばこんなひねくれ者だから誰も共感しないだろうけど。

あ、これこそ好感度ダウンか……？

今のでお気に入り登録人数が五人ぐらい減ったんじゃないか？

いやいや、不吉な予想はやめよう。どうせ今の僕はマグマ溜まり……マグマ黙りみたいな彼らにはなれないんだから、そんなことを言ってもしょうがない。

しかし、彼らのようにあそこまでストレスを溜めるのは並大抵のことじゃないということだけは認めてもいい。

あれこそが、個人の攻撃力を殺害すら可能にする程に発揮すると言っていていいだろう。

さあ、好感度の話が続けよ

「うわっ!？」

続きはWebで!

ってこれWebだけど、どう続くんだけ?

……いやまあ、続くんだけ。好感度の話が続かないだけで。

「去ね」

「ここから」

黒衣を身に纏った、木の枝のように細い二人組が、覆面の下からくぐもった声を発する。

そいつらは僕の真正面から不意を打って手に持った武器 苦無くぬい

を躊躇い無く急所に向かって二つ同時に飛ばしてきたその瞬間だけ姿を晒し、また隠れた。

「いかにも……だなあ」

真正面に留まらないのは、外国のヒーローものみたいで（登場の時に口上があるのは日本の特徴なんだとか）褒められた所だとは思うけど、忍者……なあ。

ベタ過ぎねえ？

「なんか想像の圏内だし、拍子抜け具合で言えば表紙抜けな雑誌並だよなあ……」

脳内変換ミスも調子がいい気なもんだ。

これなら何も使わなくても小丈夫。

大丈夫とはとても言い難いのは当前、僕の頭なんだろうなあ……。

……ゴホ、ガッホゲホッ！

咳払いすらまともにできないとは……これはどうも本格的に

「動くな」

「其処そこを」

いや、よそう。

そんな事は、考えてはいけない。

命令を無視し、鋭くその場から飛び出す。

今度は何かゴツゴツした球体の形が空を裂いて斜め上空から

軌道を遡れば数階建てのビルの屋上から さっきまで僕がいた場

に飛来する。

形状を認めた瞬間、一目散に僕は背を向けとんずらし、兼ねてから盾にしようと決めていた看板（コンビニだとかファストフード店にあるタイプのやつ）の後ろに屈む。

直後、追いつめるように、無味な爆音と押し広がる爆風、そして手榴弾の破壊力の源である破片が全方位にばら撒かれた。

「確かに忍者って、なんちゃってなくらい何でも有りだけどさあ…

…」

まだ小言を言うか、僕は。

そこまでして侮辱をしたいのか。

「」

「」

土煙（と言っても黒い背景に白い粉が舞い上がっているようにしか見えないんだけど）も晴れないのにその中に着地する影が二つ。それらは一つのひび割れた看板を見据え我先に いや、我同時に駆けつけて左右から挟み撃ちにかける。

その姿を、眼下に収めた僕。

「な！」

「に？」

つまり、その上に僕はいた。

「どうしてだろうか、僕には忍が……いや、君達はくノ一か。そんなに憧れられる理由が分からない」

さらに言えば、正確には『いた』ではなく、『落下中』だった。既に着地の為の、そして襲撃の為の姿勢は整え終え、僕は重力に従って乱暴なぐらいに脚を振り落とす。

狙われた片方は相棒の方へ走り、こちらに背を向けたまま何をするかと思えば相棒がそいつを越えてあつという間に跳んで来た。一人の手に足をかける、二人一組での壁越えの要領か。

案外普通のテクだが、そこは異常な世界に身を置く者、速度が異常だった。

空中での剣戟　　やっぱり僕は素手で、さらに相手は苦無というこの状況が剣戟なのかは果てしなく怪しいけど　　による交差の後、威力を逸らした僕ですら体勢を崩して真横に吹っ飛んでいるのに、相手は今の僕の何倍もの高さに身を置き、そこから苦無を連続で飛ばし続けてきた。

仰向けの体でそれらを金属音と共に払いのけ、若干背伸びして買った感のある、だばだば気味の靴を両方とも上空の影に向かって蹴飛ばす。それが攻撃を止めるのに功を奏している隙に猫のように仰向けからうつ伏せに空中で向きを変える。

今度は下からの投擲に襲われるが（前のタイミングで打っていたら味方に当たらないとも限らない）、腕の振りで予測は何とかできた。同様に捌いている内に着地。

余韻に浸る間も無く地面にいた方が、反りの無い忍者刀を構えて突撃。刃に合わせて弾く事で防御している中で反撃を試みてももの、片手間の攻撃で倒せる程、甘くない。

フェイントには引っかけからず、フェイタルな攻撃は紙一重で掠める。

どこが勝負時なのかを心得ている。だが　　その時、殺気を背後に感じ取り、とっさの判断でしゃがみ込んだ。というよりも、ほとんど座り込んだに近かった。

……攻撃は、来なかった。

覆面の奥で、ニヤリと笑われたような気がした。
殺気だけを、ぶつけられたのだと気付いた。

今まで対峙していたそいつが全体重を込めて刀を突き下ろす。

「 終われ！」

「 すぐに！」

刀は僕の眼前十センチ、七センチ、五センチ、五センチ、五センチ、二十センチ……と、外れた。

目の前のくノ一……いや、死体は、二時間前の僕と同じく、離れ離れになっていた。

ただ、違いとして決定的だったのは、元に戻るか、戻らないか。それだけだった。

手は、使っていない。

手しか使えない、とは一言も言っていない。

「 、お前、今」

「ああ、命令しない方が残ったのか……。積極的に個人個人を差別する僕にとって順列組み合わせの順劣つていうのは結構重要な事ださ、今は、動詞を使えない、つまり他人との関係性において不利な君の方が劣つているとすれば、これはいい事なのだろうかと決めかけているんだ」

という意地悪の前に僕が何をしたのかを説明すると、単純に、頭を後ろに持っていきながら、揚げ足の勢いで真つ二つに切ったのだった。

追加で靴下が残念な事になったが、背に腹は代えられない。

向こうの方がダメージが大きいんだから、ここで嘆いたら、釣り合いが取れないだろう。

にしても片手の逆立ちが崩れない内に足を届かせるとか、我ながら恐ろしいバネを持っているものだ。ここまで来ると、僕がまだ人間の枠で戦っているのが信じられなくなりそうだ。

相棒を失った哀しみに同情する道理も無いままに、二人目を切り

捨てる。

「……やっぱり、一番劣っている僕が残るのが一番いい結果なんだろうね」

忍者の相手も、非情でなければ務まらないのか。

第二戦、勝者、僕。

挟撃キックアップ（後書き）

流石にこれは……失敗だろうと思う訳です。
いつか書き改めるかもしれませぬ。

今日の一言、というか寸劇。

「趣味は？」

「それを探すこと」

つまんねー！

また明日！

集団ワイルドファイア（前書き）

「私はあなたを助けにきました」

「じゃあ自殺するのを助けてくれる？」

集団ワイルドファイア

「これは……さすがに」

さっきの立ち回りの余裕はどこかに消えたのだろう、僕は今、圧倒的に怯^{ひる}んでいる。

僕は無双のキャラクターじゃあ無いんだけどなあ……！

一体今までどこに隠れていたのか、ざっと気配を探るだけでも百は下らないんじゃないかという数の、敵に遭遇した。

全員、どこか軍隊っぽい服装だった。

先の戦闘が終わって、靴を回収してから五分も経っていない。

「……ズルくない？」

答える者は、誰もいなかった。

いいさ、どうせ僕は友達が少ないんだからこのぐらいのネグレクト、何でもない！

……ゴホン。

ふざけている場合じゃない。

勝てないって。

どうするんだよ。

一対少数とか小数なら戦えるけど（小数は当たり前だろう）多数には勝てない。

そうか、これが民主主義の限界か。おまえらは僕に共産にしろと言っのか……違っつて。多数決の話じゃないから。

うーん、大して面白くもない。

……はあ。

この辺で、腹を括るか。

「『今はまだ構想段階だからできないけど』、それを敗北の言い訳にするのは止めておこう」

歩みを徐々に加速させ、囲いの一点を切り崩しにかかる。

僕の視線に反応したか、一人目は取り出していた拳銃を三步詰め

る間に二発発射したが、ぎりぎりの所で掠ったに止まり、あえなく切られた。

返す刀と言うか二の太刀と言うか、続け様に横にいた二人目を切り伏せる。

背中を丸めた姿勢で一旦落ち着く。

三人目は後ろから走ってきてコンバットナイフを逆手に持ち上から僕の肩か背を突き刺しにかかってきた。それを見るや僕は躊躇無く身体を捻りながら懐に飛び込み、紅を散らせる。

被さりそうになる体を跳ね除け、それを誰かに押し付け別の方向に、四人目五人目と切つてゆく。

六人目を見据えて駆け出そうと踏み込みをかけると、まだ大勢で囲んでいるにも関わらず横合いからアサルトライフルの銃口が覗いた。

反射的に膝を抜いて予測された軌道から逃げた五分の一秒後、弾丸が通り過ぎ、敵の味方に当たる。

撃った奴は無視し、当たった味方に僕とは反対に意識を逸らした七人目を真正面から縦に割る。

「……おい」

そこから空気が変わったのを感じた。

殺気のもつた威圧に射抜かれてそっちへ首を振ると、一人の男が二つの脚でしっかりと立ち、誘うように、しかし陰しく睨んでいた。

生まれた一瞬の空白を縫って　まるであいつを連想するような

衝撃が胸の辺りを貫く。

「がっ、はあっ……!？」

ダアン……!!　という音が後から聞こえて、ようやくそれが超音速のライフル弾なんだと悟る。

場所は……あれか……。

未だに五パーセントの数も削っていないだろうに、この怪我は良

くない。

「どうやって切り抜ける……!？」

まず目の前にいる勝機があるまで動こうとしなかった奴を切り裂きその後ろで退屈そうにしている裏で怪しげな性癖を隠し持っている変質者をスルーしたように見せかけて手首ごと拳銃を奪って乱射して戦局を乱すとおそろくさっきの威圧の持ち主がかかって来るから無視して他の奴らを切りながらライフルの使い手を追撃　できれば世話は無い。

吐血。

意図せず、足が止まる。

足元しか、見えない。

それを逃さず、ブーツの蹴り上げが、顔にめり込み、反動で足を軸にしたレバーのように身体が浮く。

二発、三発と、仰向けに倒れる身体に弾丸が胴体に穴を開けた。地面に頭が当たる。

瞬間。

視界が閃いた。

別段、僕が何かした訳ではない。ぎりぎり自力で回復可能なライオンをさまよっているだけだ。

自分の息遣いと五ヶ所の痛みと止む事の無い思考だけが、神経を刺激する。

しかし、それ以上の痛みはやって来なかった。

「……………」

視界に被さる物は、何も無い。ただ、黒い空が見えるだけだった。顔を横に転がす事で何とか状況の把握を図ると、そこにあったのは、無残にも（どの口が言うのか）煙を燻らせて倒れている、死体の山。

その向こうに、人が立っていた。

何故か逆光になっていて正体は分からなかったが、決して誰かのピンチに現れるヒーローのような体格ではなく、むしろ子供のように見えるぐらいに小さく見えた。

それは、僕に視線を向ける事も無く、再び閃きと共に消え去った。

集団ワイルドファイア（後書き）

少なめー。

コメントも控えめに戻してみようかな。

また明日。

錐プレッシャー（前書き）

「お前を殺して私も死ぬ！」

「待ってくれ、なら遺産の話を見せてくれ」

錐プレッシャー

どのぐらいぶっ倒れていたんだろつか。

少し寝てしまったからどうだろつか……三時間少々、か……。

傷は……粗方、塞がったらしい。

あー、うわあ、顔痛え……。

鼻取れてねえよな……？

「っ！ ……がっふお！」

喀血。
かっけつ

溜まっていたのか、喉の奥からの血の匂いが強い。

撃たれた所も疼くが、総合的に刺激が一番強く感じられたのは鼻だった。

それでも動けない程じゃあ、ない。

息を、吸い込む　と同時に、僕の上にある顔を見返す。

見返すことはそいつは僕を見ているって事だ。

「……………」

「……………」

えー、と。

「何でここにいるんだよ」

「お菓子な事を言いますねー統那君。甘々なスイートポテトを食べる為に決まっているじゃないですか」

「今は誤変換タイプのポケは禁止だ……」
つがどろけい
番鳥優子がそこにいた。

／／／／

「まあぶっちゃけてしまおうですよ？　私は『死』に引き寄せられる体質でして、たまにサスペンスドラマの第一発見者になる事があるんですよ」

「芸能界から消える」

監督が迷惑してるぞ。

「あっ、あなたは大御所大道芸人のし　　っと、名前イジりは別の人のネタでしたか」

「そうだ。系統は分けないとややこしい事になるんだぞ。」

「では名も無き大御所大道芸人さん」

「あえてスルーしたがそんなやつはこの場にはいない!!」

「略して大人」

「どう突っ込んでいいか分からねえよ」

黙ってやり過ぎそうかと思っただぞ。

「それで大人の四手統那君は、大学受験の事を全く考えていない私を引き寄せておいて一体二体三体四体何をやっているんですか？」

「一体全体、な」

「二体全体何をやっているんですか？」

「三文字目のそれは何だ!？」

「『の』。五十音のナ行第五音。音節は子音nと母音oから成りま
す」

「冒頭の三文字目じゃない!」

しかも字下げまで含んでの三文字目。

「いいじゃないですか。IQサプリームたいで」

「いや、あんな『今の問題分かったの、それは良かったね』で終わる番組の事はどうでも良くて……」

「もしかして見ていたんですか統那君？」

「い、いや決してそんな事は無い」

「あれー？　怪しいですね。さてはああいう頭の体操は苦手ですね
？」

「多胡輝の方は得意なんだぞ!」

「いや、そんな所でムキになるとどの道賢くはないと思っただ
よね」

……あれ？

「……今、何か台詞回しが変わらなかつたか？」

「見下してもイイかなって直感がビビッと来たから、つい」

「確かに歳上の先輩にですます体を使わせている事に違和感が無いでも無かつたが！」

「むしろ統那君を攻略するには歳上の魅力を発揮する方が有効ではないかと気付いたから……」

「は……？」

「こ、こうりやく？」

「何の事だろうね？」

「まさか、地の文でカマトトぶっているか言わないよね？」

「言わない言わない！　口が食虫植物になっても言わない！」

「もはや死活問題になりそうな口だ。というか言葉を話せるのかも怪しい。」

「ハエトリグチ。」

「結局、全は教えてくれないのか……」

「シフトJISで使える事しか判明していない。」

「……分かった所で大した意味も無さそうだし、まあこの議論はここで終わっても良いだろう。」

「しかし、統那君はアレですか、引き寄せる体質ですか。色々と」

「色々……」

「そう、色々と色目を使って」

「そんな目は使っていない！」

「むしろおまえが使っているんじゃないか？」

「しかし、」

「増やすな」

「しかし、戦いという事であれば、私が大体の危険から守ってあげられるから、少なくとも命の心配はしなくていいよん」

「って言われても、おま……先輩が戦っているの見たこと無いし、安心できない」

「呼び方を変えたのは、無言の圧力を感じたからだ。」

無言ではあるがしかし、きちんと首筋に工作で使われそうな錐が据えられているので見事なまでに圧力としか言い様が無いんだけど。敗北主義の僕には埃の如き誇りしか無い　うん、二点。ただし、万点満点の。

二番煎じどころじゃねえよ。

「私も私が戦っているの見たこと無いからお揃いだねっ」

「そりゃあ客観的には見ていないだろうけどな」

「大丈夫だって。私の名前を見れば分かるでしょ？」

「いやまあ、僕は分かるけどさあ……」

読者に名前の意味の特定を要求するのはむつかしいんじゃないか？

「ならいいじゃない」

他人の事を蔑ろにしてどこがいいんだ。

「本来なら私は今ごろ幽かすかに消え去っているような存在なんだから、素直に今こうして存在している事を喜べばいいじゃない」

まあ、それはそうなんだけれど……。

何か納得いかないんだよなあ。

名前を超越している辺りが。

まあ、それは番鳥が狂っているという事で方を付けておくのが、

当面の納得としてはいいのかもしれない。

本音を言えば、名前の第一印象に関しては番鳥優子が現時点で一

番恐ろしい。次点は惜しい所で、打葉だ。

二人　人と呼ぶ事にいささか以上の抵抗があるのだけど　に

比べれば僕なんてどれだけ無意味なものなんだろうか。

それは解説しなければ分からないのかもしれないけれど、敢えて語って『効かせる』類のものでは無いと思っているので、僕がこれについて話す事は無い。

／／／／

さあ、お待たせした。

閑話休題を挟んで、僕達はついにあの二人に追い付く事ができた。もつとも、それは負けの確定した、ほとんど無意味な戦いだったのだけだ。

錐プレッシャー（後書き）

口が裂けても言わない、っていうのは口裂け女に対して何かメッセージを発しているのでしょうか。

また明日……とは確約できそうに無いです。すみません。

無粋キラー（前書き）

粹な人殺しっていうのも大分おかしな話ですが。

無粋キラ

そいつは道のだ真ん中で状況をもともせず、横向きに丸まりながら眠っていた（なんか数ヶ月以上前に二人とか言った気がするけど、ストーリー上の要請で無しになっただらしい）。

死んでいるように全く動きが無いのに、確実に死んでいない事が分かる。そんな寝姿だった。

「……………」

僕がどうしたものかと逡巡していると、横から番鳥がちゃっちやかと出てきて、何処から取り出したのか、一部だけ丸く切り取られた木製の板をそいつの 阿木本末遂の 頭の下部位にあてがい、

「ぎろぎろていーんぬ！！」
飛ばした。

……………もう、R15指定になってもいいや……………。

僕はそんな形だけの礼儀に付き合ってもらえる程お人好しじゃない。

「身も蓋も無い殺し方すんな！」

「やっぱりダメ？」

「物語的にダメだろ！」

その前に人としてどうかしている、とは言えなかった。

もし、人である事を放棄している、と聞いてしまったらどんな顔をすればいいのか。

「って言っても、多分『これ』、そんな事じゃ死なないだろうけどね。私が言うんだから間違いない」

「……………首を切っても死なないって、」
僕じゃん。

まあこの物語に関して言えば、切られて死んだ人ってそんなにいないんだよなあ……………。

「死なないって分かってたら、案外何でも出来るのよん」

なんか自信満々に言ってる。

「それとこれとは話が別だろう……」

首切りを正当化させてはいけないだろう。

僕は身を誤るつもりはない。

「さーて、そろそろ起きるんじゃないかな？」

僕が目を向ければ、そこには映像化したら間違いない無くスプラッタに分類されるだろう風景は既に無くて、一人、阿木本未遂が半眼でこちらを見ていた。

「非ーとの睡眠を蛇魔したの葉どこの同一人物？」

「そんな寝ぼけた台詞を聞かされたら衝撃的な目覚めを提供した側としては何とも浮かばれないねっ、統那君」

「僕を巻き込むな」

犯人は僕じゃない。

「あーっ、刀七くん、夜つと追い詰いて北んだね　あ、舞ってて、

芽に松脂まつやにがちよつと」

「書き損じでただでさえ分かりにくいのに更に変な言い間違いを混ぜるな！　目が大変な事になってる！」

脂違い。

目に溜まるのは涙と鼻く　だけだ（美しい国、ニッポン！）。

「こらこら、あんまりうるさく言うんだったら断頭台に連れて行く

ゾ

「おまえが言うつと冗談にならない！」

「もう一回寝むつて依異？」

「話が進まなくなるからやめろ！」

「いやあ、統那君は突っ込みに忙しいね」

「おまえらがボケるからだ！」

危つくいつもの文量の半分を費やしかけた。いや、もう既に費やしたかもしれない。

「剃ーれ邪あ、お濁つこの攻犯戦を、恥めようよ」

……おお、順応早い。

「鬼退治は趣味じゃないんだけど、やるしかないか……」

それどころか、相手はパジャマ姿で戦意がかなり削がれるんだけど、やはりそれでもやるしかない。

「動一うぞ、お先に欠かっけてきて依異よ」

「それじゃ……遠慮無く！」

ここで深く考えても意味はほとんど無いと思いながら僕は突攻した。

あと三步でいけるだろうか。

と思っていたが、当ては外れた。

結果からすれば、届かなかったというのが一番的確なのだろうか。

「『似一の舞為す獣状』」

そこから少しの間、僕には何が起こったのか分からなかった。

真っ直ぐに切りかかっていた筈なのに、気が付いたら腹に鉄拳の衝撃を貰って逆ジェットコースターの風景を味わっていた。

「有ーれだ米、反写真刑についての元氣融はまだないん頼ね」

塀にぶつかり僕はダメージで身体が熱くなっていくのを自覚しながらようやく制御を取り戻し、地に落ち着いた。

何だか前にも吹っ飛ばされた様な気がするけど全然慣れない。もしかしてジャメヴだろうか。

「だ〜か〜ら〜な〜に〜い〜、っ〜、て〜る〜の〜か〜わ〜か〜ら〜な〜、いん〜だ〜っ、〜、て〜」

所々に声に出したくない日本語があっただけど、それらを気にせず描写すれば、番鳥が『』の数だけ、五寸釘を金属バット以上に大きくしたような鉄杭を無闇矢鱈に投げつけた、のだ。

しかもそれら全てが向こう一面に圧力を掛けるように一斉に刺さろうとしていた。

しかし阿木本は顔色一つ変えない。

「夫ーっと、笹ったらど臼るの？ 鬼仏存解在で売った得させ手もら紆余？」

既に未知の言語だった。

そんなどうでもよろしいことはともかく。
その時、あんまりな光景に僕は固まった。

「なっ……」

「いやいやいやはや、味な真似するねー」

占めて十九本、頭頂、片目、肩、胸に一本ずつ、四肢それぞれと腹にはらばらと三本ずつ。

さあて、どうなってんだろうね。想像もしたくない（ていうか、今更か）。

そんなのを僕は今見せつけられているわけだ。

「むう、現時点で最強の武器をぶつけてみたんだけど、やっぱりレプリカじゃ唯一無二の仕様には遠く及ぶべくもないか」

番鳥はさしてその態に傷付いた様子もなくマイペースに立ち向かい続ける。

「うーむ。仕方ない。……統那君、ちょっと贗作使うから失礼」

何だって？　と思つて、発声するまでの間にそれは行動に移された。

「一から四まで　を行い十全とせん、って感じでいいかな？」

合図と一緒に番鳥の手に現れたのは、緑青色の刀身に、形の崩れた波を湛えたような紋様を浮かべた

「敢えて和えるなら、？村雨・錆（びつ）？といったところでしょうねえ、統那君」

……いや、知らないし。

無粋キラー（後書き）

申し訳は、あるって言えばあるんですが、学業です。

学業が苦行です。当たり前です。

取り合えず、今の自分の状態なら、適当な間隔での更新が出来そう
だという判断で、再開致しました。

まあ、思い切ってこの章は諦めながらやっていきます。

これから更新の度にカレンダーとつき合わせて、その適当な法則に
気づいた方だけ、次の更新が分かるはずです。もし分かっても、感
想欄には書かないで下さい。他の人にはばれてしまいますので。

また明日、とは二度と言わない、かも。

偽物ブラッドスマイス(前書き)

ブラックゴーストの格好よさには脱帽。

偽物ブラッドスマイス

しばらく、壮絶な光景が続いた。

それは僕なんかが出る幕の無いぐらいの水飛沫と血飛沫の飛び交う殺し合いで、刀で阿木本の一部を切り落とす代わりに粉骨の一撃が番鳥の何かを抉り、そのまま足を踏み止まらせればその上から踏み砕かれ立つ力をほぼ失う。が、水が防護と助力と痛覚の軽減を与え、力任せに刀を下に突き刺した地点から湧昇流と表現したい程の瀑布が現れ獰猛に敵を呑み込み、文字通り波に乗りながら番鳥は行き着く所まで追いつがり、斬りかかり、水流が引いた跡地の上で阿木本が骨まで切らせて刃を片手で止めた、という所で僕の理解はようやく追いついた。

若干、二秒も経っていない。

それまでの戦闘の流れが速すぎる。

「ようう約使まえ頼。間、い炊くもか行くもな生け捕ね」

「Oh！ アイアムノットニホンゴワカラナイネ！」

「その文章も大概分からねえ！」

こいつら一ミリでも真面目にやる気あるのか！？

戦闘は思い切りのいい、思い切り比べ物にならないものだったのに、会話だけが台無しだ。

片方は言語が分からないし（喻えるなら、最低の活版印刷術を使ったような言葉遣い）、もう一方は存在が出鱈目で意味不明。まともなのは僕だけか（僕が一般的かどうかに関しては議論の余地も無く否定される様な気がしてならないけど）。

ただ、戦いは至極真面目に繰り広げられ、続けられる。

水が迸る。

優雅さなんて欠片も無く、荒々しさも微塵と感ぜさせない。手と骨に捕まっている部分を水で滑らせて引き切り、手の束縛から刃を抜け出させた。その勢いは強過ぎたのか、刀を引き抜いた番鳥の腕

はそのままそれと一緒に後ろに持っていかれる。

そこを見逃さずに、阿木本は目を光らせ、爆発した様な勢いに自分の拳を乗せて間合いを詰めにかかる。

しかし、その隙はフェイクだった。

番鳥は恐ろしく冷めた瞳で見つめながら、真横にまで持ってきた刀を握る手に力を込めた。すると峰から水を噴き出しながら刃は弧を描き、番鳥を軸に透明な半円が、重力に捕まるまでの束の間、現れた。

一瞬だけの間だけど、優雅な、間の無い拳動がカウンターとして、阿木本を二つに割った。

上体が、落ちる。

「にゃー、しかしきりが無いね。きりきり無いだよ。まったくまったく、マイナス十全とはこの事だよ。不十分ではなく負十分。さながらプラス思考だけどマイナス志向であるである、みたいな心地良い気持ち悪さだよ」

「完全に球磨川に毒されてるな……」

原作でそんな事言っていないと思うけど。

さて、インターバルは終了。

「違態なあ。しん堕ら下にも取らな隠だよ？ 腑痛は」

そんな事を言いながら、彼女はちゃっかり元に戻っているのだが、今は僕の^{ハッム}出る幕では無い。

番鳥が代わりに阿木本に告げる。

「悪役は死んでも死に切れないから悪いんだ　という流言飛語を信じるようではこれからの情報社会で奴隷になりかねないよ」

「氣味の言う言は間際ら恣意……嫌、ま嫌わ恣意ね。都又取ちゃん」

「れれれ？　名字は教えていないと思っただけど？」

……つがいどりつて発音してたのかよ、あれ。

「こー紛い言葉とうてもいいんだよ。たぐでんとか、ぱんたぐでんかづいでいるがないがみだいにね」

こいつ、さらに読者に厳しくなりやがった。

絶対に商業化できねえ。

「まあ、非実在青少年にプライバシーなんてものは実在しないから私は何も文句は無いけどさ、一応気になる所だよ、統那君」

「そこで僕に振るのは何か意味があるのか!？」

「だっていまさ、君って実在するしない以前に、存在感が怪しくなっているから」

「本人が一番気にしていることを!」

今は空気がみただけど、出番はあるから!

僕の出番、来るから!

「物語に関わっていないながら二千文字ぐらい戦闘に関われないうつのはさ、恥だよ」

「そんな基準僕は知らない!」

「でもそんな無能で弱々しい統那君がみんな大好きなんだよね」

「そういう言われ方だともものすごく死にたくなる!」

マザコン気味の僕ですら、周囲の全てがそんな慈愛の眼差しだったら惨めになる。

……いやいやいや、誰がマザコンだよ!?

いくら地の文だからって言っていていいことと悪いことがあるぞ!?

「さーあて、寂者は報って老いて、渡した血はた他界をさ異界仕様よ、根?」

弱い上に寂しいという称号が付けられた僕は相当に惨めなのだろうか。

瀬戸内さんに慰めて欲しい。でも源氏物語も持っていない僕に、そんな資格は無いのだろうと勝手に諦めておく。

面目無い僕が両手に何も持たずに所在なさをアピールしているのを尻目に番鳥は刀を引っ張るように阿木本に襲い掛かろうとして、

突然死した。

「……なに？」

何だ？ 直前の文末の文字は。

いくらなんでも言っていることと悪いことがある。

落ち着け、順序立てて説明しろ……。

突然。

突然の、次の一文字だ。

あいつがいきなり前のめりに突っ伏しただけで、まさか『死んだ』とか、そんな不穏当な言葉が出てくる訳が無いだろ、そうだろ？

……ダメだ、頭が上手く働かない。

冴えない。

いや、それはいつものことが……。

本当に、冴えない。

「やーっ時いたかぁ。街に全かいが悪種」

「何を、した？」

不信の表情を隠さないのに、そんな台詞が出てくること自体不謹慎でしかないのだけれど、聞かずにはいられなかった。

「べーつに、なに文字で否いよ？ みどころ眠っているだけにみ彫るけ警ね」

「だから……僕も、何言ってるのか、分かんねえ……って……」

突然死が誤植だと気付いた時には既に僕は自分を支えることができなくなっていた。

意識が、ぐるぐると、混濁する。

眠るように、僕は落ちた。

偽物ブラッドスマイス(後書き)

鈍牛の如く進んでおります。
また次の更新で。

再生ウェイクアップ(前書き)

「殺される前に、やり残した事はあるか」
「あと五分だけ寝させて」

再生ウェイクアツプ

……あーあ、ダメじゃん。折角直りかけてたのに。

そーだぜ。何やってんだよ。バグが残っちまったじゃねえか。

私なんか、組み合わせるとひどい事になるんだから、絶対に明言したらダメなんだからね。

俺なんか、一発ネタだしよ。今の所。

まっ、使い物になるから取り合えず良いんじゃない？

それよりもまず、死なれたら無意味だけどな。

だから、さっさと起きろ

／／／／

何だか妙な痺れと共に意識が回復し、真っ黒だけど真っ暗でない、変な空が視界を埋める。

「……………っ!？」

弾けるように上体を起こし、次に姿勢を改めて周囲を警戒する。

何でこの状況で僕は寝ていたんだ？

我ながらどうという神経だ。

とっとう僕は笑えないレベルにまで至ってしまったというのだから、
うか。

いい加減死んでもおかしく無いぞ？

……。

でもなあ、寝ずの番とか、寝込みへの奇襲に対抗できるなんて器用な真似、僕はできない人間だから、これは諦めるしかないか？

それとも、こんな状態で寝るなんて、もつての外な事をやれるの
だろうか、僕が。

まさか、

「実はこれが胡蝶の夢で

」

という、ハッピーな妄想は次の瞬間儂くも打ち砕かれた。

「お目覚めでございますか、ご主人」

……やっぱり僕はまだ妄想の中にいるんじゃないか？

打ち砕かれたのは、僕の常識ではないだろうか。

しおんいろ
紫苑色。

「……何やってんの？ 荒井」

荒井、雲雀。

いかにもスポーツ系の、飛び回りそうなくらいに元気な中学生…

…ではなく、実は一つ下。

探偵。

餌に弱い。

その荒井が、立て膝を突いて僕の方を向いて……いなくて、目線を下げている。

「いえ、最近の従者はこういった言葉遣いかと存じ上げておりますが、何か気に障られましたか？」

いや、全然障ってないけどさ、でもそれは気持ちの上だけの話で……。

「どついう風の、吹き回し？」

「そう言われましても……ここは？ そういう場所？ なのではないのですか？」

そういう場所？

「よく分かんないけど……つまり、お前がここでメイドごっこを演じるのはあくまで仕様、ということの良いのか？」

「メイドもごっこも心外ですが、ご主人がそう言われるのなら私に異存はあつてはなりません」

何だそのルール。

無駄に僕に精神に悪いぞ。

さて、そろそろ読者の疑問に沿わねば。

しばらく休載してただでさえ状況が悪いというのに、これ以上の引き延ばしは自殺行為としばらくは心得ておかないと見捨てられてしまう。

「Q1・あなたは色採ですか？」

「A1・いいえ、命彩です」

へえ。

……へえー！

心底驚く。

びっくりする。

しかし、あつけらかなとしてるなあ、こいつ。

「Q2・あなたの目的は何ですか？」

「A2・私の目的はあなたの保護です。言い換えれば、あなたに降りかかる万難を排するのが優先事項です」

わあ、安心する。

「Q3・それは誰に命令されたのですか？」

「A3・あえて言うならば、恩義に、という事になります
誰なんだろうな。

「Q4・回答の真意が掴めないのですが？」

「A4・仕様です」

ハイスペックだなあ。

……まあ、この辺でいいだろう。

「Q5・最後に、あなたの格好を自分の言葉で説明してもらえないでしょうか」

「A5・はい、私の格好はカッコイイ武道着です。上も然る事ながら下のイチゴ柄が個人的には最高です」

「誰も下着の話をしるとは言っていない！」

ちなみに上の白に藍色の袴という、ある意味普通の装いだ。

しかし下着とはミスマッチしている（見えないけど、脳内補完が既に僕の中だけで変な世界を作り上げてしまっている）。

「ご主人の好みはその方向であると、私はリサーチ済みです」

「そんな文脈はどこにも無かったぞ!？」

ただひたすらにひた隠しにしてきたというのに!

「A6. はい、私の得意分野は調査活動です」

「もうそのフォーマットは終わってるから!」

「そうですか。ではこれから如何いたしますか?」

「ここで僕はこの主従関係にツツコミを入れるべきだろうか。……

いや、もう手遅れだろう、きっと。

はあ。

しかし居心地悪いなあ。

僕はトレンドとか、腹の底では大嫌いだから、どうしてもこの辺のベタな設定はちよつと……。

じゃあお前の好みは何なんだよと聞かれると、ちよつと答えにくい。

「じゃあ状況の把握からさせてくれ」

敢えて開き直って、立場を有効利用する。

「かしこまりました。まずは何から聞かれますか?」

「番鳥はどうなった?」

「彼女も私が介抱しましたのでまず生存は間違いないと思われませんが、狂ったようにして何処かへ跳び去ってしまったかもしれません」

ものすごくあり得そうな行動だと思っただけだろうか。

狂っているなりに、敵を追っているような気がする。

いや、死を追っている、のか。

「どうして僕は寝ていた?」

「その案件は阿木本末遂の話をするのが早道ですのでそちらからお話します。彼女はいわゆる、睡眠で戦うスタイルを取っています」

……確かにあいつ、パジャマ着てたけど、本当にそのまんまか。

「睡眠で戦うというのは、人を眠らせたり、自分を眠らせる事で自分を有利な状況に持ち込んで、最後には永遠の眠りに陥れるという事です。何とも月並みな能力ですが、多少強い　つまり、弱いという事ですが　ご主人と違って、本物ですね。その力によって、

「ご主人は今まで眠らされていた訳です」

的確に『多少』を使われたが虚しくなるのでスルー。

「はあ、それで立て続けに敵が襲ってきたりした訳だ」

「そうですね、普通の夢と違って『見ている人の思い通りにならない』ので、かなりの確率で目覚めないうまま亡くなるようです」

なんだそれ。

「……………」

……………えっと、僕は死にかけてたということでもいいのか？

何気に恐ろしい説明を混ぜるな、こいつ（怖くて確認できない）。

「私がいればそれは無効に出来るのでその点に関してご主人が心配する必要はありません」

そして、しばらく黙り込んだ。

……………ああ、質問してたんだったか。

これも仕様、か。

「今、敵はどこにいるんだ？」

「おそらくすぐに現れるでしょう」

果たして、その予想は当たった。

「おー菓子いなー、ここ出刃っち理事んだと革新していたんだけど」

「生憎、運は悪いんでね」

「うーん、酔尚に灰汁畔問王余」

「そこまでくると、デタラメに中国語を話してるみたいに見えるから止めるよ」

悪運って言葉。

「ほーら、渡し伝怒S寶」

「ついに旧字体に手を染めたか……………」

しかしアルファベットはそのままという無駄な親切心がついてきた。

「さーて、凝れ遣見よう放すのも免全出汁札里頃仕上王よ」
「面倒だったんだ……。」

音声はそんなにおかしな事言っていないんだけど、最下級に読み難い。

「ああ、始める前に、お前に少し言っておかないと」
「なー二？」

「ありがとう。怪我の功名って本当にあるみたいだ」
「お礼は言っておかないと。」

「？ー」
「未だに分からないといった顔の阿木本。」

「今に、思い知らせてやる。」

「何とか？形？になったよ。あの形容し難い存在に崩された、僕の刀が」

「まあ、完全じゃないんだけど。」

再生ウェイクアップ（後書き）

誰も突っ込まなかったけど、配色ミスでした（2 / 2 4 現在）。

夢幻オブリヴィオン（前書き）

眠れぬ森の美女。

夢幻オブリヴィオン

見た目には、何の変化も無い。

しかし、？それ？は既に装備されている。

「あー、増加。層異う異も亜るか」

ちよつと淡泊な反応。

……なんかしくじる予感。

「もう少し驚いた反応をしてくれても罰は当たらないだろ？」

「なーら、遣るだけ遣って見たら？ 病者は都バス言を煤める依」

「その減らず口がいつまで持つかなあ！？」

／／／／

その数分後。

どかつ、と地面に背中から打ち付けられて僕はマゾヒズムに目覚

め……ない！

しかし、痛ってえなあ……。

まるで敵わなかったと言つか、通用しなかった。

当たってすらいないし、この間の小間まの事を考えると、致命傷を

負わせるというのは、途方も無い任務に思える。

「法一螺、滑て夢忌み」

「……何だよ、それは」

助言に従って素直に描写を飛ばして見たが、正解だったかもしれ
ない。

「墓一場傾いで症？ 気味のご憂げ騎馬飢餓内ん頼？」

偉そうに、得意げに話している間（しかし能力をバラす真似はし
ない）、僕は隙を窺い、見た目には分からない程度に口内を動か
した。

「……！」

口から複数、剃刀の刃を吹き出す。

いつか話したかもしれない技、？銜くわ？……と、名付けたが結局の所は含み針の発展なので、あくまで小技の一つだ。まあそんな小技でも、悪足掻きぐらいは出来るだろう。

さて、この攻撃の利点は、始点が読めないという一点に尽きるのだが、

「汚―棚いなあ。墮疫が吐いたら初る菅薙っちゃう邪ん」

やはり悪足掻きでしか無いのか、予め分かっていたようにかわされてしまう。

……何だろう、この無力感。

「行動が……読めるのか？」

「嫉―って炒るんだよ。魅た殻」

阿木本は、当然のように言った。

一体何を見たんだと、問いかけるまでもなく言葉が帰ってくる……
…というのは変な表現だろうか。

「裏―ら疚しいよね。喪つて膿まれた塞悩に目汲まれてるって」

その字面だと何だか僕が不幸みたいだ。

そして、阿木本はさっきの反撃を警戒して鳩尾を踏んづけて僕の動きを押さえつけながらも、目をつむって片手で顔を一部だけ隠して何やら考え事をしているようだった。

勿論その間も僕は身じろぎして拘束を逃れようと悪戦苦闘するのだけど、いかんせん武術の心得の無い僕ではそれは無理な相談だというもんだ。

しかしもう一つ、僕にはできる事があつたはずなのに何故だかこの時に限ってはそれを実行する事に、どうしても思い至らなかつたのだつた。

判断力が、暗に明らかに、都合の悪いように鈍っていた。

「くそっ……どけよ！」

返事は、阿木本の方からは聞こえなかつた。

代わりに、もっと拙ますい状況に発展……衰退した。

……流石にそろそろオリジナリティを發揮した方が良いのか？
パロディは程々にするか？

……ゴホン。

さて、拙い状況になったという事だが、簡単に言えば敵の増援だ。そしておそらく、味方はやられたかもしれない。

「おいおい、どけよだと？ 何を言っているんだ。退いて欲しいのならまずは自分が退くべきなのは人間にあらざる者としては常識なのは知らないだろう？ だが確実に？？だろうがな」

もう一つの通じないモノ、吉田桔梗が会った時より血色を悪くして現れた……って。

「何でこの場面で登場しておいて死にかけてるんだよ！」

口は回ってるのに血は回っていないとか、シャレにならねえ！

おまえはクールな敵キャラじゃないのか！？

「異な事を言うな。主人公の前に現れて無事に済む敵役などという惨めでそれはそれで因果応報な形式しか用意されていないものを引き受けるのは、単なる愚か者だろう。しかしそんなものはほぼ？？だろうがな」

「じゃあお前は、何のための敵役なんだよ？」

言葉の意味を汲んだ上で、尋ねる（当然、ふざけはふざけ、真面目は真面目だ）。

少し会話をすると分かってくるが、どうもこいつの話し方は天邪鬼で、しかも最後の方で言葉が削除されるという、かなりややこしいものだった。

この時、僕はもつと警戒すべきだったのかもしれない。

大変なものを、気付き逃していた。

「強いて弱めるならば、悪よりも正義の方が世界の為だろう。俺は正義の味方ではない。世界の味方だ。しかし将来？？ただけだな」
こいつがここに来てるとなると……あいつらは失敗したのか？

無礼を承知で表現すれば 存在が失敗の極みのような番鳥はともかく、生き様が失敗の極みのような荒井もこいつを止められなか

「つた、つていうのか？」

「そんな目で見るとならいならこんな目で見よ（嘲笑）。俺は唯の唯一の？最終定理^{コンパス}？なんだぜ。忘れるなよ？ただ、それも永劫に??なんだけどな」

そして、続ける。

「知らせない方がいい知らせだが、敢えなく知らせよう。お前はこ
の阿木本末遂により、全ての技を失った。結局??だろうがな」

夢幻オブリヴィオン（後書き）

あの二つはまた別の機会に……。。

苛虐ロス(前書き)

間に合った！。

苛虐ロス

今、何と言った？

「だまくらかしてゴカイサれるのもイヤだからきちんとセツメイス
るよ」

音声は全く変わっていない阿木本が無残な口調で告げる。

心底どうでもいい、とでも言いたげな。

「カソウニレンは、アブないからシマってモラう」

「うっ」

「ゼツケイサンザンは、イホウだからキンシする」

「うっ」

「コイグチリクホウは、ヒドいからムコウにする」

「うっ」

「ハッサンハツチョウは、コワいからヤめてよね」

「うっ」

「タイカシチリンは、コジンテキにヒテイしとく」

「うっ」

「コウケツドクショウは、メンドウだしおシマイ」

「うっ」

「アトはワタシのリカイをハズれてるからシらないよ」

「うっ」

そして最後に、ぱちん、と。

人を催眠にかけるのと同じ感じで指を鳴らし、阿木本は僕の上か
らようやく退いた。

いや、そんな描写をしている場合ではない。

多分誰もこの展開についていけない。

その穴埋めが先だ。

されたのは、必殺技の封印。

既に『今の状態』になってしまった僕にはその事実しか、思い出

せない。

何とか残ったものもあるけど、全て『戦う以前』の技だ。

つまり、僕の攻撃力は翼を？^もがれた鳥の様に飛躍的に弱まったと言える。

そんな僕に、何ができるのだろうか。そう、何も出来ない（『反語』なんていう猿真似アピールはもう飽きただろう）。

才能なんて、僕には無いのか。

「そうだ。お前には人の役に立たないという素晴らしい才能がある。その事を自覚すれば、お前はそこから一生抜け出せないかもしれないが、それは俺の知っている事であり、知った事では無い」

そして、吉田はどこまでも無表情に僕を殺そうとしていた。

阿木本のそれまでの戦いとは全く以て関係無く、今思いついたかのように、その血塗れの手を僕に差し伸べる。

「畜生……」

「餓鬼のお前に言われるとは、落ちたものだ」

僕は、ぼんやりとした意識と記憶でそれを眺めていた。

夢の内容の記憶は、どうしようもなく薄れていく。

その『言葉』を利用したのは分かるが、あまりにも出鱈目だ。

同じく『言葉』に依存する『強さを持つだけに、尚の事、その出鱈目さが身に染みる。

どうにもならないこのぼんやりした感覚まで現してしまう、虚構の現実には、戸惑う。

これで僕自身が強くなる可能性は閉ざされた事になる、様なのだが……。

……いや、受け入れられないだけで、選ぶ道を迷っている訳ではない。

「いくつか残してくれるとは……ありがたいね」

くそ、声に全然覇気が籠もらない。

切ったところで、結果は同じだろう。

流石に何度も同じ事を繰り返すのは愚だろう。

「れーいにはおよばないよ。もうきみはけいかいにけいかいするこ
となくたたかわれることになるんだから」

さつき『同じく』という表現こそ使ったが、僕はいつらと完全
に分かり合えないという事が分かってしまうので、やはり言葉の問
題は依然としてそこにあるようで、やはり馴染めない。

そこで吉田が周囲への侮辱の態度を続けながら、唐突に口を開い
た（……何だよ『周囲への侮辱』って）。

「そうか。一気に『ひらがな』まで警戒がいらなくなったのか……」
だからどうしたんだ、と素直に思う。

そしてこちらを向いて吉田は言った。

「喜べ。お前はほとんどの俺達に友達以下の何かだとすら思われな
くなるぐらいに使えない、人でも物でもない何かに匹敵するぐらい
の役立たずに、努力せずになれたんだ。そう、最後まで??だがな」
これ以下無い侮蔑を受けて、へらへらしていたら、僕はどうかし
ている。

比較級でも最上級でもなく、最低と同じに、語られる。

腕が震え、真っ白な停止状態の思考で立ち上がってようやく、僕
は自分が怒ったのだと分かった。

きつと膂力に任せただろう。

気付けば吉田を跳ね除けていた。

「ふざける……なあっ！」

何の迷いも無ければ考えも無い、ただ切るだけが目的の突貫。そ
れは狙いを度外視して僕は吉田を『切り抜け』た。

「……まあ、やる気だけあるのは誰かが認めてやるだろうな。誰か
にやる気があればの話だがな。俺には『やる気がない』と言っただけ
の気力しか無いから、まあ、残念と言うのも億劫だな」

吉田は鮮血で既に白衣と呼べなくなっていた物をさらに汚し
むしろ更に赤く清めると言った方が正確かもしれない。て、気だ
るそつにぎらぎらと、辺りを睨んでいた。

……こいつも切断耐性がついてるとかいうからくりなのかよ。

その目が僕を捉えて、突き放す。

「しかしだ。『ふざけるな』と言ったか？　もしかして『死ぬ』と言ったか？　それを、真面目と死体の区別の付かない俺に言うのか？　俺に言わせなくとも、真面目は既に死んでいるだろう？　死んでいないとしたら世界が死んでいるのではなからうか。普通の世界に生まれた者は真面目であってはならないのはいくら馬鹿なお前でも分かるだろう？　まあ、それで俺が生や存在にこだわっていると誤解される事が俺の計算であって、それが露見した今この話題を終了してしまっってはいけない。申し訳無い事をした。まあ、今回の俺はどうでもいいか」

僕は文脈を繋げるような回答が出来ない。

「畜生……」

「ふん、餓鬼が」

また言われた。

でも、良く考えれば当然の返しだ。

「そーしてわたしがなくなる」

と、彼女自身が言い終わる前に僕は殴られて再び地面に頭を打ち付けられた。

出る物が出る所に出る様にさえ感じた。

「ぐうっ……っ！」

「おいおい、ぐうの音も出ない程になっていないじゃないか。程々にしてやるなよ。可哀想だろう」

「そーうだね。もういちどだけです」

「いや、一度と言わず、二度三度とやれよ。それぐらいの事は望まれてるんだよ」

僕はこの時点で　というか、ついに　こいつらとの相互理解という綺麗事を諦めた。

逆に言えば、まだ分かり合おうとしていたのだが……まあ、週刊少年ジャンプじゃないんだから、そのぐらいの綺麗じゃない事はあってもいいはずだ。

だけど、

「きゃひゃひゃひゃー、っと」

「ここで残念なお知らせがあります」

「命を運ぶギアは今ここから終点まで狂い続ける事を、私はこれぐらい誓いません！ きゃひゃひゃひゃー！」

こういうタイミングで味方が戻ってくるのは予想できた事だから、ご都合とは言わない。きつと。

戦力としては優秀な番鳥だがその足取りを掴んで確実に合流できるスキルを持つているのが荒井しかいなかったので、そっちに行かせて先に始末して貰う方がよっぽど有益だと判断したのだった。

そして僕は時間を稼ぎ二人がくるのを待つという戦術だったのだ（結局裏目に出て終わっただけ）。

元タリスクをとったのが僕だったというだけの話だ。

まあ、裏目に出ただけ。

「ふん。俺に空すかされた程度のキャラクターがよくもまあこのこぬくぬくとやって来れたなと感心するが、関心は無いな」

それは人を人として扱わない 人を扱ったことも無いのだろうけど 台詞だったが、二人も黙ってはいなかった。

「感心も関心も私には不要です。そんな事で揺らぎ蠢く虫の如き評価は、不要です。必要なのは、私とは無縁の何か。普通の命彩には興味はありません。さっさと帰る事を勧めます」

「ところできゃひゃひゃひゃーって笑い方どう思う？ ありきたりなようすでいてONPEICEでしか採用されないんじゃないかと私は思っではいるんだけど」

それどころか、僕に出来ない事をやってのけていた。

僕にはそれがひどく羨ましい。

強い芯が、そこにはあった。

電光ホールドアップ(前書き)

死を忘れる！

電光ホールドアップ

濁々(だくだく)

「さて、俺と不毛な戦いをするのは誰だ？」

泥々(どろどろ)

「それとも、あれと眠くなるような戦いをするのは誰だ？」

と、吉田は針を数本ずつ抜き捨てながら、こっちを見もせず
に問いかける。

問いに反応したのは荒井だった。

ただし、返事をするためではない。

「お二方、私から提案があります」

「……何だ？」

「畏まりっ」

畏るな。

「私がああ奇怪極まりない天邪鬼を遠ざけている間に、あの危険極まりない睡魔をお願いします」

「……勝算はあるのか？」

向こうには聞こえないようにしながら、会話を続ける。

ただまあ、後ろで「るんたったく、るんたったく、らんばらるむの、みどりげえーじ」の、ばかやる、「とうるさいのがいて、クールとは程遠い光景になってしまっているのだが。

折角でつかいチェインソーが使えるとワクワクしてたのに、性能で裏切られたのはさすがの僕も、堪えた。

……ゴホン。

「いえ、既にこちらの敗北は決定しています」

僕は荒井を見たまま瞠目していた。

……敗北？

「ご主人、落ち着きましょう。『いやいや何言ってるの？ 自分から振った話題でどうして落ち着けとか言ってるの？』という突っ込

みが喉まで出かかっている事は全然考慮していませんでしたが、落ち着きましよう」

僕は、しばらく固まった。

「……ははははは！ 僕を誰だと思っているんだい？ 自称切れ者だよ？」

凶星とは、まさに今の僕の事だった。

スマートもんだよ？ カットマンだよ？

「……すみません。今の言葉の最初の五文字をもう一度お願いします。よく聞こえなかったので」

荒井はそれこそ自分に言い聞かせるようにして落ち着こうとしていた。

「ははははは」

そして、その自制は徐々に強まっているように見え、

「漢字変換してみてください貰えますか？」

「母母は」

「……畏まりました」

何やら吹っ切れた様に（『切り』ネタを取られた！）ふうっ、と
いうため息が一つ。

「あのさあ荒井、何か誤解してそうだから言っておくけどさ、僕はあいつらに敵わないとか、そんなのはどうでもいいんだよ」

「！？」

荒井は驚いていた。

僕はそれに驚いた。

……うん、簡潔に驚かれると、今までの僕がいかにもふざけた行いをしてきたかというのが窺い知れる。

「いえ、これはその場の空気に合わせた演技ですが、確かに意表は突かれました」

どう反応すれば良いんだ、これは。

成程、つまり荒井はクラスの中にわずかに混ざっている『つまりないやつ』みたいなキャラクターなのか。

クラスの面白い奴が絡めないからといじめの対象にする、あのキヤラクターなのか。

女子高生の身分でそれは、かなり曲げないと辛いだろうな……。ただ、曲げるのは自分ばかりとは限らないけど。

人間関係を曲げれば、生き方なんてほとんどやりたいたいようになっ
てしまうものだ。

「そこで問題になるのが『人間関係を曲げるような生き方が果たして立派な生き方なのだろうか』という、ほとんどの人間が達成出来ない、問いですらない問いだ。ま、普通は??だろうかな」

「!?!」

月並みに、驚いてしまう。

こいつ、考えを読んだのか?

「『いや、地の文を読んだのさ』という答えを期待しようとも、無駄だ。俺が読むのは空気だけだ。本当は??なんだけどな」

……なん「そこから先の底に嵌ってはいけません、ご主人」。

……いやあ、

「おいおい勘弁してくれよー。荒井にまで読まれたら僕のプライバシーはどこに行くんだ?」

しかし……危なかった。

先に進もう。

「どこにもありません。それが偽らざるを得ない真実です」

「どつちだよ!?!」

久々に突っ込みを入れた気がする。

「暴露せざるを得ない嘘です」

「嘘を暴露してどうする」

情報を鵜呑みにするブロガーみたいだな……いや、別に誰とかいうのを知ってるわけじゃないけど。

たまに不知火がデマを流す事ぐらいしか知らない(あいつはブログを書いていて、何故か僕の苗字を名乗っている)。

「というようにお分かりだと思いますが、あの男に立ち向かうのは、

「ご主人では無理です。戦いにもならないでしょう」
確かに僕には強すぎるかもしれない、というのは、僕だけが感じている。

周りに分かるのは、僕が吉田に対して弱すぎるといふ事だけだ。そして彼とぶつかれば僕はきつと、二度と立ち上がれないぐらいに砕かれてしまうだろう。

でも、僕が弱すぎるといふのは打葉辺りなら知っているのかもしれない。あいつはそういうやつだ。

「さあ、来い。話が終わつたのなら、いつでも、いつまでも受け付けて突っぱねてやろう」

「いーかげん、わたしのでばんもほしいしね」

「そうですね」

間髪入れず、荒井は弾けるように いや、もつと迅い！

「足労はサービスしますが、多少の息^{そくろ}労は失礼致仕方ないですね」

「ちっ、」

光った、と気づいた時には移動を完了させて、悪態をつく吉田の、その胴体を弾丸みたいな速度で蹴っ飛ばす動作を終えていた。

ピン、という甲高い音だけがやけに鋭く響く。

「それではご主人、失礼します」

そして荒井は束の間の発光を残して、消えた。

……光か、雷か。

意識を眼前に戻す。

「さーて、わたしたちもやろうか」

残された事に何の感慨も無いらしく、阿木本は僕を見て言った。

それに対し、僕は真つ当に的外れな言葉で応じる。

「なにになに？ 『私達も野郎か』？ そんな馬鹿な。この小説は男

女比がラノベ的には普通の物語の筈なだけどなあ」

さながら、牡蠣^{かき}が温暖化の影響を受けるように、自然な事だ。

「そーいことをいつてるんじゃないかってえ、」

行け！

「こつこつという事を行っているのかなぁん？」

死神の声が、聞こえる。

背後からやって来る気配に阿木本が振り向いたが、間に合わない。その本来の用途に適って、番鳥の鎌はしつかりと、狙った者の首を、再び刎ねた（U-15の良い子は『刎ねた』なんて読めないからオツケー。めでたしめでたし）。

これで、少年誌で漫画化するなら大久保先生というのはこの物語の鉄板になっただろうか。

「これでよし、という訳で傷心のおねえさんを慰めるのだ、統那君」
「傷心なんてどこにも見えない！」

「傷心の呵責を感じるわ……」

「そんなアクティブな傷心は無い！」

悪意の跋扈はつこならそこら中にあるけど。

「あーのさー、もうあきたんだけど、このぞんびじょうたい」

説明するまでもなく、阿木本は形の一切を元に戻した状態で……
テンションをものすごい下げていた。

「てーいとかそろそろわたしかいふくりよくについてかたるべきときがやってきたのかな？」

「……いや、もうみんな分かっているとと思うから。言わぬが花だろう、
つていう気遣いで喋ってないだけ」

「気遣いの気遣いって迷惑だよな」

「後ろ、うるさい！」

真実を語るな！

僕が気遣つてるとか、思うなよ（！？）

「……なんかこのままひきのばしてもしょうがないきがしてきたね。それなら、わたしがかそくしてあげるよ。そのついでにおもしろいのうりよくをみせてあげるね」

すう……はあ、と呼吸を済ませて、まとう空気をがらりと変えようと、表情を殺戮した。

冷え切りも煮え切りもしない、物理的すぎる表情だった。

「巫山戯ないで喋ってみれば、私の通り名は？ハットナイトウォーカー夢遊病魔？という面
倒の極まりが無いもので、使っていた技は？ヴァニテイ空即是色？と？色即是
空？テイなんだけど、更に？ヴァニテイ夢幻抱締？も使うと良い感じだね」
そう言っつて、番鳥の方を見て、こう言った。

「『番鳥優子の武器貸借能力』は、二度と起きない」

電光ホールドアップ（後書き）

と、前書きで述べる前に作者の存在が忘れられたりしてゐる。

不壊グリーヴ

それは、起こった。

「こーろしはしないよ？ わたしたちにんげんにそんなけんりがあるわけないんだからね」

隣で、どさつと崩れる音した。

番鳥がさつきまでの元気を失って、後ろ向きに倒れていた。

特に何かの攻撃が見えた訳でも、聞こえた訳でも触れた訳でもない。ただ、強いショックを受けて意識を失っているようだった。

即効、だった。

殺していないとは言うが、傍目には全然見分けが付かないし、そもそもこいつを信用するだけの理由が僕には無い。

「おい、番鳥！ しつかりしろよ！」

だから僕は駆け寄って番鳥を確かめた。

息をしていなかった。

神の加護はなかった。

まさか。

まだ、認める訳にはいかない。

心臓はどうだ。

……。

「動いてねえぞ……おい」

「あれ？ しよつくでしんじやった？ まあいいや。きみたちみたいなのひとごろしは、わたしはみとめるわけにはいかないよ」

軸なんて知った事じゃないと言うその態度、言葉は今の僕にとっではどうでも良くて、ただ、仲間が死んだという認識で頭がいっぱいだった。

そして、

僕はついにキレた。

もう、何と云い繕っていいのかも分からないけど、ここでどうにかしないと僕は僕でいられなくなってしまいそうで、何かによって死んでしまいそうな感覚に囚われての、憤りだった。

見るに、堪えない。

「……僕から『何か』を取り除いたのも、そういう理屈か」

正直、お喋りとかどうでもいい。

言葉を弄するのはもう終わりだ。

「……やっぱり、駄目だ」

「なーにが？ わたしはまちがったことをしてるけどまちがったことはいってないとおもうよ？」

首を傾げて、さも毒気の無い人物を演出している、ように見える。偽善者ではない、悪者のように見える。

見えるだけ。

見えないものは、もっと酷なのだと、気付く。

「そうじゃ、ない」

無理なんだ。

僕には。

「きつと一生かかっても、僕はおまえに、同情しないだろう」

それに、分かって貰うのも無理だろう。

この抛り所のない心、を。

何も信じられない気持ち。

「……はー、なにをいうのかとおもえば、そんなこと」

僕の精一杯の我慢も、やっぱり分かって貰えない。

善人という、欺瞞には付き合い切れない。

ぶった切ってしまいそうだ。

「阿木本未遂」

「なーに？」

その平和そうな顔を、やめろ。

「僕は、初めて自分の衝動に従って人を殺してしまおうと、思うん

だ

左手で、目を隠した。

まるで、泣くのを堪えるように。

「……ヘーえ。おもしろい」

ふざけてる。

面白いのは、人生だけだ。

「ところで阿木本。おまえには僕の手の内は一切分かっているんだ
つたよな」

「そーうだね。ふぞくひんもふくめてね」

「一振りだけ、まだ実際には見せていないのがあるんだ」

二つぐらいは見せた。

でも、読まれては意味が無かった。

「だーけど、つかいこなせないんじゃないの？」

阿木本の指摘は正しい。あれは確かに僕の手には余る。

夢の中で出会ったあいつは武器としての刀ではなくもつと別の、
刀の姿を模した何かだろう。

善意、とか。

正義、とか。

「そーう、僕の制御の及ばない刀だ。あれは」

しかし、力は貸すと言ったのだ。

この救いのない状況で、僕が僕を諦めないために、あれは必ずそ
うするはずだ。

なら、それに身を委ねるのも悪くない。

「覚悟しろよ、阿木本」

それまで被せていた手を払い、言う。

「散々と有言不実行を積み重ねる『僕』とは違ってなあ、『俺』
は有言半実行の二刀流だ。優しくしねえぞ？」

「……そーういうこと、か」

Wait a minutes...

こんにちは。

ウィルスの侵入：完了

セキュリティ：解放されています

迷惑メール：吸収済

ファイアウォール：行方不明

始めまして。俺は名無しです。

……さて。

「尾―模試ろい異にな薦ね。刃角まで空け私ちやうなんて」

残った情報で知ってはいるがこいつが今回の俺の敵らしい。

まあやんごとなき事情により急遽語り部代行を務める事になった俺だがいきなりのシチュエーションが女の相手とはついてない。

救いのないのはどっちだよとでも突っ込んでやりてえがこれまた困った事に相手が居ない。

居合いなら出来るがどうにも上手くない言葉遊びに終始してしま
うなあ。だめだこりゃ。

……はっどうやら俺はまだ寝呆けているらしいな。読点が飛ん
でる。

そろそろ、直すか。

「蛇―真草いから、夜つ梁練てくんない？」

阿木本（この阿って阿修羅の阿みたいだな）……だったか、そい
つがパジャマ姿で襲い掛かってくるっつー、字面の上では表現の自
由を侵害されかねない事を行っているんだが、一体俺の何を察した
らそういう行動に出るのかさっぱり分からねえんだ。

俺には持ち主の願いに沿った事しかできねえようになってんだ。

悪意も敵意もあつたもんじゃねえ。

なんたって俺は、魔弾の反対だからな。それなりには償わせて貰
うぜ。

「つーかよお、何言ってるのかくらいは分かるように言ってくれよ」

俺って頭悪いから正しいものしか判断出来ねえんだよなー、とか思ってみたり。

まあとにかく俺はその攻撃を気前良くカウンター気味に拳でぶち壊して阿木本の内臓つばいものを一つ二つ機能停止に追い込んだりした訳だ。

「いーつつつたたたたああああいいいいいいいい!!」

「あーもう畜生。俺の一挙手一投足は全てが重くなれるというのはまだまだ常識じゃーねーのか。まあ、そりゃーそーだよな。名乗ってなきやー広まるはずもねー」

こんな感じでババアでもねー女を路上で転がして何が楽しいんだか知らないが(年食ったからって転がすつもりもねーが)俺はそれをさらに踏み抜いた。

当然コンクリートには尋常じゃーねーヒビが走った。

いやー昔なら地を割るとか描写するんだが今は便利な時代になつたもんだ……いや、違わねーな。

とか適当にも程がある事を考えていたら踏み抜いた奴が元に戻り始めたから、つい気持ち悪くなつてそのまま置いていた足を内側でバタバタと往復させちまった。

人の身体が俺の足元で踊ってる。

「……………!!……………ッ!」

効果音の方が大きくて声が聞き取れねー。

いやさあほらよだつてもよー、あいつ死なねーんだもんよー。怖いに決まってるだろ。何で殺すと決めた相手に容赦しなきゃならねーんだ……と、言い訳を考えながらそんな事をやっていたらなんか輪っかが切れてどっかに飛んでった。

「そういえば俺はこんな事ばっかしてるから折られたんだつっけか。反省してねーな、全然」

ついつい戦国時代を思い出しちまうけど、弱者の手に渡ったのが

運の尽きで、今のと似たような事したらついに時代に乗り遅れちまったばかりに思い出はそんなにねー。

あの頃は全員狂気に浸かってたから多少は構わないんだが今はこれすらとんでもねーのか。

残酷なまでに優しい時代だな。

俺のは厳しい善意だけだな。

「さあ立ち上がるなよ命彩。騎士道に背いて俺はお前を殺し、武士道に背いて俺はお前の名を汚す」

死命ディシジョン(前書き)

安心しろ。お前の脚本などない。だからお前は自由に動けるはずなのだ。

それなのにお前ときたら、自分が主役だと思い込んでいるばかりに……。

死命ディシジョン

「なーに……尚怪我す、つて?」

まだ立ち上がるよ、コイツ。

そんなもつて鳥肌立ちまくってるよ俺。精神衛生とか凄げー穢されまくってるし。

「深い意味は全くねーよ。お前の死に様を誰にも見せずに知らしめるだけだ」

「いー下限に竹刀と垂れにも離乖されないよ?」

はっ、言ってる。

読者ごときに理解されたらお終いなんだよ。

俺の善意が通用するやつなんざほとんどいねーよ。

俺の助けが要る奴は俺なんか要らねーんだよ。

「とーは癒え、刺すがに綿しも減回がちかいから、あそんでられないよ。もう、ねてちょうだい?」

……つてそんな構えられてもな。

限界なのはお前のキャラだ。

そして阿木本は俺が「いいぜ、かかってきな」と言い始める前にかかってきた。

「せーいっ!」

「っ……!」

よけるのが面倒だったのもあるが、まあ仕方なしに右の頬を差し出した。

まー痛いのは俺じゃーないし痛がるのは尚の事俺じゃーない。

俺がするのはこいつを殺す事だけだ。

それ以外はアウトオブ眼中だし、アウトオブオーダーだ。

「っー、くあああつ!」

「痛みから、逃げんなよ?」

殴った刹那の後に拳が誰かさんのせいではとりと切られた。

誰だろうな、リストカットなんて半端ねー真似をするのは。
少なくとも俺じゃーない。

本当だつて、信じてくれよ。

俺の嘘を、信じてくれよ。

「……………」

阿木本は手首を押さえながら退こうとしたが俺はそんなのを許すほど寛容なタチとして作られてはいない。

「どうした？　俺を寝かしつけるっつー気概は最初っからねーとは思っていたけどな、本当にねーのか？」

「うーうううう……君は、誰？」

「やつとまともに口を利くよーになつたな……といっても俺は知つたこつちゃねーけどな」

分かつてると思うが俺は人間未満みたいなものだからな。眠気とは無縁なんだよ。

だから俺みたいいな人でなしが普段から持ち主を支配するような事があつたら代償行為に走るんだけどさー（具体的には『連続殺人器』になるとかな）、そのパターンだと大体が凄まじく早死にするっつー難点があるから半端な奴には力を貸せないから参るぜ。

「そーこまでの刃核、とは重畳かつた……」

そこに来て四手統那。こいつは気持ち悪いぐれーに半端ねー。

あの時何よりも先に諦める事を選んだこいつは、人為に刃向かう事はあつても流れには逆らわない。

つまり空気に敏感に反応してしまつ。

アツい展開ならテンションをアゲるし死ぬ雰囲気にも包まれたら真っ先に死ぬ。

逆に他人の期待にはほとんど応えられない。

どこまでも正直な気分屋だ。

主義も主張もあつたもんじゃねえ。

そもそも、本人に自覚があるかどうか知らねーが、答えを見つけない気が無い。

グレーゾーンに浸かり切っている。

「俺は周りを逸脱した精神強度を持つ奴の味方をする、？異端子？としての役割しかねー。だから、普通の人間の三分の一も使ってるお前はどこまでも俺の敵に近けーな。そして、あいつは、俺の助けだけじゃー足りねー程に、弱すぎるんだよ」

俺の力ぐらいじゃー驕れもしねー。

まだまだ、艱難辛苦を乗り切れねー。

「……そう。だったら、私には、最初から勝てる相手じゃ、無かつたね。そんなに大人数で相手をされちゃったら」

「どうやら、こいつの怖さについてようやく納得してくれたいらしい。だからって、そこで『そうだよお前は出オチだ』と言ってやる親切心は俺にはねー。まー、昔に持ち主の親を切った事は、残念ながらあるんだよなー。でもそれって親切心じゃねーしなー。」

こいつが切るのは、親しくないやつだけだからな。

「さあ、もうキャラクターも無くしたし、一思いにやってちょうだい？」

「ああ、任せる」

俺が首筋に手を当てたその時。

「ひっひっひっひっ……私を差し置いて殺人事件なんて起こるとでも思っているのかなーあ？」

死ーん、と冗談のような無音が全身に浸透する。

俺というか……僕のだな。僕の皮膚とやらが粟立った。

まあ案の定そいつが目覚めていた。

番鳥優子。

亡霊の如く。

いやーかつけー。

真っ黒い襦袢ほろと真っ白く禍々しい、刃と柄それぞれが七尺以上はありそうな……えーと大体二メートル以上か？ そんな感じの装飾と長さの鎌。

それ以外何も見えねー。

そこだけ真つ暗だ。

正体不明。

正体朦朧。

いやまー俺にやー関係ねーが。

「おいおい……これは俺の手柄だぞ。他人に結果を押し付けられるか」

俺は一応託された気持ちを通してみようとしたり。

しかしこの女（の頭を覆っている物）は首を振った。

「そんな勝手は、私の勝手の前には通じない、とかね」

おそらく死に体の相手も感じちやいるだろうが、こいつの存在を認識するだけで、おぞましいものが全身を駆け巡っている。

細胞の一つ一つが、冷ややかに握られているような。

ぞくぞくするが、続々しない感覚だ。

台詞に『とかね』って無理に付け足しても深刻過ぎる語調は誤魔化せねーのな。すげー。

文章の上で嘔吐きやがった。

俺が軽薄で重厚なのと同じぐらいの矛盾だ。

「いいのー？ 流石に貴女に殺されない自信はまだあるけど？ それとも、出番が欲しいのかな？」

んでコイツ（えー……読者には悪いがもう名前忘れたわ。とても申し訳なく思っている。とても、とってもだ）もコイツでよくこんな得体の知れないのと喋る気になるな。

「正直私はもう出番は要らないから、こうしてしまう事で、ネタを切らしてしまおうかと、ちょっとね」

僕の脚は、^{すく}竦んだ。

「意味が分かんないな？ 能力は奪ったはずだけど？」

いやーお前はすげーよ。

死を恐れないってのは考えない事だと初めて知ったぜ。

「化けの皮を剥がれた今、私はどんな姿をしているんだろうっねっ
全身の素肌に氷面が擦り付けられたように、幻覚した。」

「そんな事聞いて、どうするの?」

さて? 僕? の記憶から引っ張り出していこうか。

「どーもその統那君の目には、私は真紅色を放っていて、目に悪い事この上なさそうんだけど、それで私はピーンと来ましたとさ」
今の番鳥優子の色は。

「哀川潤、ってキャラクターは知らないよね?」

「……うん」

あ、テンポ崩れた。

ていうか、俺邪魔だな。

「まあいいや。全く別の作品んだけど、一つだけ、ぴったり共感できるものがあつたんだ」

「何?」

「? 死色の真紅?」

「……」

……。

「……… やっぱ言わねー方が良かったんじゃないの?」

あつてはならない沈黙っつーか。

そろそろ本気^{シリアス}出せよ。

「……まあとにかく、だ。私はもう死色だから」

己の能力を消した相手に向かって。

「死ぬべき時に、死ぬ」

番鳥は言った。

そんで言われた阿木本は……当然だが死んだ。

拭い去る事の出来ない、番鳥の本質によって。

その死の様は眠りに落ちたように安らかだった、と付け加えてお

終章ミゼラブル

そこから先の事はするすると抜けるように進んだので、簡単に述べるだけにしておく。

阿木本末遂は、死んだ。

誰のせいでもない。

少なくとも、番鳥のせいではない。

「私の役割は、臨終の場に臨む事だから」と言っていたんだから多分そうなんだろう。

個人的には、釈然としないけど。

まあ、そんな事もある。

そして、吉田が現れて、言葉も少なな足下の死体を巻き込んで、
？渦？みたいなものに吸い込まれて消えた。

荒井の名誉の為だけに言うけど、吉田は「もう少し時間稼ぎが出来なかつたら、俺も危うい所だったな。まあ近い内に？？んだけどな」と言っていたから、相手が強かつたのだろう。

荒井が戻って来た　正しくは僕たちが向こうに行った　のは、封陣が解けてからの事だった。

「何だか後付けの説明みたいになっちゃいますけど、探偵って謳ったのは嘘です」

二回目に会った時のような調子で、説明を始めた。

曰く、荒井は根無し草で、放浪する　せざるを得なかった

命彩で、たまに同郷の者と協力したりしながら生きていたらしい。

それと……これはあまり言いたくないんだけど、僕に仕えるというのは、最初にぶつかって出会うその直前に決め込んだ、とか。

……いや、宮城で生まれたお米じゃなくて、むしろ逆みたいなんだってさ。

前が見えなくなるぐらいに、可哀想だった。

そうやって、僕を形容した。

本当に、何とも言い難い台詞だ。

どう反応したらいいものか、迷う。

そりゃそうだろう？

今までに「助けない訳にはいかない」って、年下の異性に言われる男の不憫さとか考えた事ある？

僕はこの瞬間までそれを考えなかった事をシミュレートしなかった事を多少なりとも、悔いた。

そんな事が起こりうることも知らなかったから無理なんだって分かっているけど、後悔した。

実際さ、

凹むし。

鬱になるし。

泣きそうになるし。

僕には疫病神でも憑いてるのか。

意外とダメージがでかい。

まあ、探偵と詐称するぐらいの荒井の観察眼に引っかけたんだから、僕はそんなにも憐憫極まりないのだろう。

それはもう、それなりに。

まあそんな訳で、僕に従者ができてしまった訳で。

取り扱いには注意しなければならぬ。

人一人分の責任を囚らずもまた背負ってしまったんだから。

……重いなあ。

キツくないけど、重いなあ。

なんかもういっぱいいっぱいだ。

厄介事が積み掛けてくる。

どうするべきか……と考える振りだけしておこう。

うーん。

久し振りに朱夏や筑紫と話でもして落ち着きたいなあ。

まあ、今回はこの辺で。

《Awake from Nightmare! Bad Night
ht》

Seven Swords is continuous
ance

終章ミゼラブル（後書き）

……長かった。

休止を挟んで半年以上費やした……。

何とか後ろの方は持ち直したのですが、前半（休止前）の出来は、我ながらヒドいものだ、と言わざるを得ません。いや、ホントに笑えません（と韻を踏んだらいけないでしょうに）。さて、七章でした。

どうしてコレに年齢制限を設けなかったのか、今となっては不思議でなりません（正直、残酷な表現で傷付くような人は、この作品のそういう「ニオイ」がした時点で避けられるハズ）。

今後の展開（終点までの道程）をどうするかは、決めていませんが、やり抜く事は確かです。

それよりも、まだ見捨てられていない事に感謝しています。とりあえず、今回はこの辺で。

……もう少し、ラブコメとか混ぜるべき？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1507j/>

灰色のバックソード

2011年5月6日17時32分発行